

俺が開けた扉は全てダ  
ンジョンになる件

っぴ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※元ヒキニートが美少女姫と共にダンジョン、ガチャ、死に戻り、そしてちよつとエツチに。

突如主人公マサトの前にピンク髪の美少女姫が現れ、メイドとして仕えてくれると言う。

ニートになぜメイドが必要なのか……だがマサトはこの時既に厄介な能力を与えられていた。

ダンジョン・オープナーの能力、それは扉など「開けた」所をダンジョンへ繋げてしまう力。

この能力を解除するにはダンジョンを突破し、ピンク髪の姫を元の世界に送り届けねばならない。

姫と協力し、時にはケンカし、そしてセクハラなんかもしたりしてダンジョンを突破してゆく。

愉快にダンジョン攻略するマサトとピンク髪のお姫様を、どうか見守ってやってください。

※小説家になろう様でも連載しています。タイトルだけ変えてあります

# 目次

# 1 「姫が我が家にやってきた」

1

# 2 「遥かなるトイレ路」

9

# 3 「お前の世界、滅亡の危機迫り過ぎ

じゃね？」

18

# 4 「投げやりステータス」

28

# 5 「おおきく振りかぶって」

35

# 6 「俺の妹がこんなにお姫様なはずが

ない」

43

# 7 「捨てちゃうおじさん」

56

# 8 「自動販売機にお礼を」

64

# 9 「俺達、頑張ったよな」

73

# 10 「排出率に気をつけろ！」

83

# 11 「髪は長〜い友」

90

# 12 「可愛さとキュートさを前面に押

し出して！」

100

# 13 「ぴよんな事から」

107

# 14 「犬が二足歩行なら、こっちは一本

足打法だ！」

115

# 15 「違います！ サテュロスです！」

124

# 16 「千夜一夜物語（恥ずかしい）」

135

# 17 「ほめて無いんだけどね？」

- 141 # 1 8 「総額おいくらハウマツチ」
- 150 # 1 9 「君の罨」
- # 2 0 「空も飛べるはず」
- # 2 1 「ゆるふわ人生設計」
- 178 # 2 2 「魔法の巻物、一枚ふわわり」
- 188
- 198 # 2 3 「これぞかの有名な奥義、『縮地』だ」
- 207 # 2 4 「耐震プリンセス」
- 214 # 2 5 「強制スクロールなのである」
- 218 # 2 6 「王国の全力を挙げて奪還しますわ」
- 223 # 2 7 「意外とノリノリな姫である」
- 233 # 2 8 「爽やかスマイル、歯をキラリ」
- 241 # 2 9 「剣は万能の武器となる！（バットです）」
- 248 # 3 0 「美は見られる事で素晴らしさが増すのだ」
- 256 # 3 1 「いや無理だろ、人間の男なら」
- 269 # 3 2 「鉄は熱くして打て」
- 278

- # 3 3 「そんな怖い考えはやめよう？」  
286
- # 3 4 「逃げ戦なら百選練磨である！」  
294
- # 3 5 「勇ましくて素敵だと思います」  
304
- # 3 6 「ゲームで勝負だ！」  
315
- # 3 7 「ゴールデンタイム・ババア」  
327
- # 3 8 「俺の暮らしがラグナロク」  
336
- # 3 9 「俺たちは天使じゃない！」  
345
- # 4 0 「アバンギャルドなセンスをして  
おるのう」  
357
- # 4 1 「バタフライ・過剰エフェクト」  
365
- # 4 2 「アフロですわ」  
376
- # 4 3 「注文の多いレスト・ルーム」  
384
- # 4 4 「一姫ガチャ成りて、万毛枯る」  
412
- # 4 5 「とてもお似合いのタイツだと思  
いますわ」  
424
- # 4 6 「初乗り運賃730円」  
441
- # 4 7 「確かあのヒゲはカイゼル髭って

- 言うんだっけ」—— 450
- # 4 8 「魔法時代の幕開けだ！」 466
- # 4 9 「甘きカaramelの芳香に風ぎなき  
い！」—— 486
- # 5 0 「聖なるサラダ油」—— 513
- # 5 1 「この世界の牛は空を飛ぶのです  
ね」—— 525
- # 5 2 「喜んで頂けるのなら水着もなん  
のその」—— 539
- # 5 3 「綺麗なバラには禿げ上がる」 551
- # 5 4 「死神少女を食べたい(ダメな方の  
意味で)」—— 562
- # 5 5 「強いて言うならランジェリー」 574
- # 5 6 「労働にはちゃんと対価が支払わ  
れないとな」—— 585
- # 5 7 「こちらの桜色ドレスを着て頂き  
ましょう！」—— 601
- # 5 8 「ふつ、そっちは残像だ!とかやり  
たいよな」—— 616
- # 5 9 「すっかり私のトリコなのですわ」 633
- # 6 0 「俺の知ってるツンデレと違う」 646

# 6 1 「お前がパパになるんだよ！」

664

# 6 2 「これはスライムですか？はいそれはスライムです」

674

# 6 3 「タクシー乗るだけでレベルアップ」

685

# 6 4 「ティッシュもつぶん、もふぶんふん」

698

# 6 5 「これを勝利の方程式と名付けよう」

712

# 6 6 「ここだけツンデレ地帯よ！」

725

# 6 7 「お嫁に行けない体にされてし

まったのですわ」

738

# 6 8 「今度は限定ガチャだそうですね

！」

758

# 6 9 「賭けましょう！ 私の毛根を！」

」

774

# 7 0 「回せ！ コマネズミのように！」

」

787

# 特別編 「決戦！ 銀世界のトナカイ・レ

インジャーズ！」

798



# # 1 「姫が我が家にやってきた」

ヒキニートの朝は遅い。

出勤する家族と顔を合わせたくないし。

マサト、それが俺の名だ。

それより今、大変な事になっている。

突然、部屋の中に侵入者が出現したんだ！

しかも、すつごく可愛いピンクの髪の毛の子だ！

だが、ヒキニートの聖域に足を踏み入れる奴は、誰であれ怒鳴り散らして追い返してやる！

「お、お前……どこから入って来た……のですか？」

言つてやつたぜ！

……いや、全然ダメだなこれ。

しかしこの女の子、何か光り輝いてる。

後光なの？ 後光が射してるの？

しかも浮いてた。

足を踏み入れてませんでした。

女の子は長いピンクの髪を揺らして首をかしげる。

俺の目を見据えて透き通った声で語りかけてきた。

「私の姿が見えるの、ですか？」

「き、聞いているのはこっち！ 質問に質問で返しちゃ駄目……ですよ」

くっ、家族以外には強気に出れない。

部屋の内側ですらこんな有様だ。

よもや、ここまで俺の人間強度が落ちているとは。

白いドレスに身を包んだ女の子は、優しそうに微笑んだ。

「私はファルフナーズと申します。貴方様にメイドとして仕えるべく、魔法の世界から

やって参りました」

「……ふぁい!？」

一体何を言ってるんだ、この子は!？」

ファルフナーズと名乗ったピンクの髪の女の子は満面の笑顔になり、俺の手を両手で

包むように握った。

暖かい……そして、柔らかい。

ついでに良い香りもする。

心臓が飛び跳ねるように踊った。

「貴方様のお名前をお伺いしても？」

「え、ああ、マサトだけど……」

ちよつと恥ずかしそうに微笑むその仕草に裏表があるとは思えない。

顔立ちも日本人に近くて……いや、これは多分、かなり若いのか。

俺よりかなり年下かもしれない。

いや、でも細い体つきの割に、肩出しドレスから覗く凄い豊満な……その胸。

超国際級。眼福。感謝。超ハッピー！

「マサト様、お話を。ご説明させて頂いても良いでしょうか？」

「あつ、はい！ どうぞどうぞ」

俺の視線に気付いた彼女が、苦笑しながら両手で胸を押さえるようにして隠して言う。

「私の国トリピュロンでは王族の血を引く女性が特別な巫女となるために様々な修行を受けなければなりません。その神聖なる修練のひとつが異世界で出会った人に仕え帰還のアストラル探索を……」

「ふあー……」

「……」

「……」

俺とファルフナーズはきよとんとした顔でお互いを見詰め合ってしまった。

彼女が何を言ってるか分からない。

彼女はなぜ俺が理解できないのかが分からない。

「ああっ、失礼をしました。申し訳ありませんっ 私はトリピュロン王国の姫の一人、

ファルフナーズと申しまして……」

「あ、うん。そこだけは分かる」

そんな国は聞いたこと無いけれども。

お姫様だったのか……確かにひらひらで真っ白なドレスは高価そうだが。

「王族の姫は神々の御力を授かり、巫女と呼ばれる特別な階位に就かなければなりません」

「はあ、大変ですなあ」

「そのためには、いくつもの試練を受けねばならず、修行のためにこの世界に訪れました」

「この世界？」

「はい。トリピュロン王国とこの世界はアストラルを隔てた別の次元階層に存在しているそうです」

「んー、分からない。アストラルって何なの？」

「ええと、私もまだ勉強中の身でして、上手くお伝えする事が難しいのですが。宇宙と宇宙を隔てる空間のようなもの、だそうですわ」

「正確には理解できないけど、イメージは何となく伝わったかなあ。用は別の世界から来たって事か」

ヤバイ。

ややこしいぞ。

何が目的だかさっぱり分からない。

俺に仕える、って言うってたけど、その姫の修行と関係あるのかな？

ところで……

「そろそろ手、離してもいいんじゃないかな」

「え……あつ！ 私ったら。非礼のほど、お詫び申しあげます」

ファルファーズは顔を赤らめてうつむいてしまった。

手を組んでモジモジと押し黙っている。

こんな可憐な少女が実在しているとは。

いや、別の世界だか宇宙って言うてるから、実在してたのとは少々違うかもしれない。

「ともかく込み入った話のようだから、まずはお茶でも出すよ」

俺にしては最高に気が利いてる。

招かれざる客とは言え、この可憐な美少女にお茶のひとつも出してやらねば。

部屋の扉を開けるためにドアノブに手をかけた所でファルフナーズの声がする。

「あつ、マサト様」

扉を開けながらファルフナーズの方へ振り返る。

「ん？」

「お気をつけ下さい。マサト様は今——」

廊下から生温くてカビ臭い風が漂ってくる。

その異臭に顔をしかめて廊下へ振り替え直すと……

扉の外は見知らぬ空間だった。

「なん……だ、これ？」

「マサト様は今、ダンジョン・オープナーの力を宿してしまっています。迂闊に扉を開け

ませんよう」

ダンジョン・オープナー!?

廊下が全く別の空間に変わってしまったぞ！

いや、このカビ臭くて暗い石畳の通路がずっと続いている！  
廊下が変わったんじゃないやなくて、扉が別の所へ繋がっているのか！

ブギョルルル！

通路の奥から赤い光がちらつき、ケダモノのような声が響いた。

「うわっ！ 何だこの音!?!」

「ゴ布林です！ マサト様、扉を今すぐ閉めてくださいますせ！」

赤い光は生き物の目か！

ゴ布林って！

ゲームのモンスター、あのゴ布林か!?

咆哮がいくつも重なりどんどん大きくなる。

赤い光も大きくなって来てるのは、これこっちへ走ってきてるのか！

緑色の人が飛び掛ってくる！

こわっ！

「う、うわああっ！」

バタン！

慌ててもつれる手で扉を閉めた。

途端に空気を切り裂くような大音量の咆哮がピタリと止んだ。

足がすぐくんでその場にへたり込んでしまう。

「何だったんだ、今のは」

「マサト様は私と出会った事で、ダンジョン・オープナーの力を宿してしまったのです。

マサト様が開ける扉は、全てダンジョンへと繋がってしまうのですわ」

「は!?! 俺が扉を開けると、どこでもあのカビた石畳の廊下に出るの!?!」

「その通りですわ。出る場所は様々ですが、必ずアストラルの仮想空間化したダンジヨ

ンへ——」

ファルフナーズの言葉の後半は俺の耳に届いていなかった。

扉を開けたら全部ダンジョンだって？

じゃあ俺は今日からどうやって外に出ればいいんだ。

いや、ヒキニートだから外には出れなくてもいいが……それよりも

風呂は!?

トイレはどうすればいいんだ!



## #2 「遙かなるトイレ路」

いかん、いかんぞ。

考えたらいいよ催して来た。

何がつて、もちろんトイレだよ。

WCだよ。廁だよ。お手洗いだよ！

こういうのつて、意識すると余計に行きたくなるよな。

「ファルフナーズさん、実は緊急事態で……」

「どうされましたか、マサト様!？」

「トイレいきたい」

「まあっ！」

馬鹿にされるか、呆れられるかと思つたがファルフナーズは口に手を当て、驚愕きよ  
うがくの表情だ。

「それはいけませんわ。ささ、すぐにおトイレへ」

「ああ、だから済まないが、ここの扉を開けてくれる?」

ファルフナーズはすぐさま扉に駆け寄つて開けてくれる。

ヒキニートである俺の聖域を守る扉は内側からいともたやすく開けられた。当たり前前だけどね。

「気が付きませんが、申し訳ありません。これからマサト様のメイドとしてお仕えさせて頂くのに」

頭を下げて詫びてくる。

全身からあふれる天真爛漫でんしんらんまんさ、まごう事なきお姫様だ。

思わず見とれてしまった。

こんな美少女で、しかも姫様が俺にメイドとして仕えたいと言つて来るとはなあ。

つて、まずい！

堤防が決壊寸前だ！

廊下の突き当たり、トイレまでダツシユ！

ドタドタ

いざ安らぎの地、トイレへ。

おいでませ安息エリア。

間に合つて良かった〜

ガチャツ

「ガオオオオン！」

「うわあああ！」

バタン！

「ファルフナーズ！ ファルフナーズー！」

「はい、どうされましたかマサト様」

「トイレッ！ トイレから頭が3つもある巨大な黒犬が！」

「まあ、物騒なトイレなのですわ。マサトさまのお屋敷は」

「違う！ トイレの扉がダンジョンに！」

「そうでしたわ。今お開けいたしますわ。こちらでよろしいのですか？」

何てこった……！

今の俺はトイレの扉ひとつ、自分で開ける事が出来ないのか。

部屋の扉だけじゃなくドアノブが付いている物は全て駄目なようだ。

これは障子や襖ふすまもきつとアウトだろうな。

見ろよ、この光景を。

絶世の美少女だぞ。

お姫様がトイレの扉を開けてくれて、笑顔でさあどうぞと手で指し示している

ぞ。

これぞ、夢にまで見……る、ものか。

こんな光景！

「それでファルフナーズ、あのな」

「はい？」

「狭い。トイレの中まで一緒に来なくていい」

「まあ、失礼致しました。でもそれでは御済みになった後に再び扉を開ける事が……」

「声かけるから。声かけたら外から開けてくれればいいから」

「なるほど、でございますわ」

ファルフナーズは手をポンと打ち鳴らした。

天然か。

しかし、今は小のほうだからまだ良いが――

大はどうしよう。

トイレの外で待つてる美少女に、俺の特盛子孫が爆誕するサウンドを総天然で聞かせねばならぬのか。

悪夢だ。

あんな穢れも知らないようなお嬢様に、俺の最低最悪のノイズを聞かせろと。

神は何と過酷な運命を俺と彼女に背負わせたのか。

そんな馬鹿げた言葉を頭の中で、本気で考えつつピンクのタオル地に包まれた便座カ

バーを上げた。

「ゴアアアツ！」

パタンツ

「ファルフナアーズツ！」

「ちゃんとおりますよー」

「ちつがーう！ 夜中に怖くてトイレに着いて来て貰った子供じゃない！ 便座！ 便座がー！」

「便座がどうかなさったのですか？」

「便座カバーを開けたら八つ叉の大蛇が！」

「ははあ、聞いたことがございます。ヒュドラと呼ばれるモンスターですわ」

「言いたいのはそこじゃない。便座カバーを開けたらダンジョンだったんだよ！」

トイレの中に入って来たファルフナーズは、まあ、と口に手を当てて驚いていた。

ビックリしたのは俺の方だよ！ あと一歩遅かったら、俺の股間が蛇のエサだよ！

「とほほ。扉だけじゃなく、フタの類も開けられないのか……」

「私と出会ってしまったばかりに。本当に申し訳ありません」

白いドレスのお姫様に便座カバーを開けてもらう。

そんなシュールな光景を眺めて途方に暮れかけた。

「では、私は外で……」と、会釈して退出するファルフナーズの背中を見送って、大きく溜息をひとつ。

やっとこれで安心して用を足せる。

やれやれだよ、とひとりごちながらズボンのファスナーを降ろし（開けた）。

「キシヤアアア！」

シュツ！

「ふあ、ファルフナーズさあ〜ん！」

もう半泣き。

一体どうなっちゃったの、俺。

「どうされましたか、マサト様？ お一人でのトイレは未経験でしたか？」

「そんなお姫様じやあるまいし……うん、でもまあ似たようなものか……俺の股間から金のオットセイがね」

「まあ！ 幸運を呼ぶと言われるゴールデン・シールでございますね」

へえ、そうなんだーと涙声で応じつつ無理矢理笑顔を作った。

股間からオットセイとかシヤレにもならない。

ファスナーの説明をして開けて貰う。

常識的に考えればこんな美少女にファスナーを下げてもらうなんて、嬉しいご褒美イベントのはずだ。

だが俺はと言えば、もうどうにでもしてくれという気分で涙目になっていたので股間はピクリとも反応しなかった。

煩惱どころの話じゃない。

自前のオットセイも寒さに縮こまっております。

顔を赤らめてファルフナーズがつぶやいている。

「ま、まさか殿方のアソコがあんな事になっていただなんて……」

「とにかく、もう分かった。理解した。俺は変な呪いにかかっている、君の頼みを聞かずに元に戻る方法が無いんだな？」

「おおよそのところ、その通りでございますわ」

今の俺はファルフナーズの介護

——そう、これはもう介護と呼ぶべき事態だ——

無しにはトイレで小すら出来ないんだって。

お茶を飲もうとしてペットボトルのキャップを回すと、砂がドバドバと噴出してき

た。

ファルフナーズがそれはサンドマンというモンスターだと解説している。

うん、全身砂まみれ。

その光景を無言で見つめて完全に諦めが付き、覚悟ができあがった。

ファルフナーズの願いを断ったら最後、俺は文字通り部屋から一步も出られなくなってしまう。

ヒキニートらしい、どころかトイレにも行けない水も飲めないでは、三日でこっちがミイラのモンスターだ。

「だからファルフナーズが俺にメイドとして仕える必要があるわけだ」

「はい、そして私自身はダンジョンへの扉を開く事も、直接戦う力もありません。マサト様にお任せさせて頂き、導いて頂く他ないのでございます」

なるほど、持ちつ持たれつという形になるのか。

布団に逃げ込んで現実逃避したいが、多分布団をめくったらそこもダンジョンに違いない。

好むと好まざるとに関わらず、生きるためにはダンジョンを探索するしかなくなってしまうようだ。

「……じゃあ、もう一度詳しい話を聞こうか。今度は本気で」



「はい、精一杯仕えさせて頂きたく存じます」

暖めたコンビニ弁当のフタを開けた途端、ダンジョンに飲み込まれていく。その光景を唾然と見つめながら、俺はファルフナーズに話しかけた。

俺をこんな体にしたのが、神様だか神官だか知らないが……

絶対に会ってぶっ飛ばしてやる！

### #3 「お前の世界、滅亡の危機迫り過ぎじゃね？」

「よし、じゃあダンジョンだ」

「はいっ！ マサト様」

あれからいくつか説明を聞いたが、正直さっぱり分からない。

魔法の王国からやってきたお姫様の修行という事だけは理解できた。

俺の部屋のフスマをダンジョンの入り口と定め、覚悟を決めた。

右手には押入れから取り出した金属バット（少年野球用）。

こうなったら、さっさとこのお姫様を送り届けて、元の体に戻してもらえない！

いざ！

フスマをスラッ！

プギョルルルルッ！

スパーンッ！

「近い！ 近いよー！」

「目の前でしたわ……」

うっかり開けっ放しにしたら、こっちの世界に凶悪モンスターが解き放たれちゃうよ

!

俺はその場で、米軍の特殊部隊が俺の家を包囲して爆弾を投下するシーンまで妄想した。

「ファルフナーズさん」

「はい。マサト様」

「無理です。ムリムリ」

「同感ですわ……」

「第一、何でアイツら常に殺気立ってるの? 常時襲い掛かるのがデフォオなの?」

「ゴブリンは人間の子供程の大きさですが、凶暴性と残忍性だけはどんなモンスターにも負けませんわ」

「しかも常に複数いるんだよなあー」

「いましたわね……」

ファルフナーズをチラ見して、まあ万が一と思つて聞いてみる。

「実はファルフナーズは武術とか剣の腕に覚えがあるとか……?」

「申し訳ございません。私は姫巫女としての修行しか経験が無くて」

「姫巫女の技つてどんなの? 魔法っぽいの?」

「雨を降らせたり止ませたり、土壌を豊かにしたり、疫病を抑えたり……それから」

「もういいです」

「すみません……」

「よし、作戦だ。名付けてリセット・マラソン作戦」

「はい……よろしければ、どんな作戦かお聞きしても？」

「うむ。連続でこのフスマを開け閉めする。狙い目はモンスターが居ない通路かゴブリンが1匹の所だ」

「なるほど！ マサト様、それは名案でございますわ」

小柄なゴブリンと一対一なら俺の金属バットで何とかなるかもしれない。

「よし、いくぜー！」

「はいっ！」

スラッ！ ドラゴン！ パタンッ！

スラッ！ 鉄の牛！ 「ゴルゴンですわ」 パタンッ！

スラッ！ 炎の人！ 「ファイヤーゴレム」 パタン！

スラッ！ 黒い角人！ 「メジャーデーモン」 パタンッ！

スラッ！ 不定形の人 「不貞にして不定、不安定なる旧神」 パタンッ！

「えっ 神!？」

「はい」

「情報聞けば良かった」

「交信を試みると、高次元の意思エネルギーを浴びて発狂させられるそうですわ」

「しなくて良かった」

「はい」

スラッ! 髪の毛が蛇の女 「メデューサです」 パタンッ!

スラッ! 一つ目巨人 「サイクロプスですわ」 パタン!

スラッ! 虹色に煌く鱗! 「おそらくリヴァイアサンの体表と……」 パタン!

スラッ! 宇宙だ! 「空間情報生命体メタトロン」 パタン!

スラッ! メカ軍隊!! 「不死なる旅団ブリゲードです」 パタン!

スラッ! 金属惑星! 「暴走せし魔神星ビッグクランチ」 パタン!

…

「まともな敵がいなーい!」

「伝説の勇者が束にならないと勝てない相手ばかりですわ……」

「つて、言うか。お前の世界、滅亡の危機迫り過ぎじゃねえ?」

「そうでしょうか」

雨乞いしてる場合じゃ無い気がするぞ。

「どうやら……同じ場所を開けていると、高レベルモンスターの居る場所を引き当てやすいようだ」

「なるほど！ 素晴らしきご慧眼ですわ！」

絶世の美少女ではあるが、この際褒められても一銭にもなりやしない。

フスマはもうダメだろうから、今度は部屋の入り口の扉だ。

ガチャッ！

プギョルルッ！

「来た！ ゴブリン一匹い！ いくぜファルフナーズ！」

「かしこまりました！」

「くたばれー！ うおおお！」

カーン！

俺の金属バットが小さいゴブリンの棍棒で防がれる。

意外に、というか俺と同じくらい力が強くて押し切れない！

「くっ！ ファルフナーズ！ 援護を！ コイツをぶん殴れ！」

「はっ、はいー！ えいっ！ えいっ！」

ファルフナーズが貸し与えた木製のバット（少年野球用）でゴブリンを殴打する。

キュイン！ キュイン！

変な電子音じみた怪音波が響いて、ファルフナーズが殴った場所の空間が歪むような映像になる。

「いけません！ 私ではゴブリンに干渉できないようです！」

そんな感じの音だったよ！

それどころか、ゴブリンにはファルフナーズが目映っていないかのように視線すら向けていない。

直感的に分かった。

ファルフナーズがダンジョンでは何も出来ないか、扉を開ける程度の限定的な行動だけなんだ、と。

「そ、それよりも、もう腕の力が……ッ！」

こんな小柄なゴブリンにスタミナすら勝てない！

流石ニートの俺！

プギョールル！

ゴブリンの叫びと共に金属バットを跳ね飛ばされて、手から離してしまう。

慌ててそれを拾おうと転げると、後頭部に爆発的な痛みが――

……

……

…

「うっ ひくっ ぐすっ マサト様、マサト様あ」

目を覚ました。

ベッドの上に布団も被らず横たわっている。

「うう……ファルフナーズが助けてくれたのか」

「いえ、マサト様はお亡くなりになりました。ベッドの上で自動的に蘇生なさったのです」

涙で鼻声になるファルフナーズが教えてくれた。

マジカー

後頭部あたりを殴られて意識が飛んだからさっぱり分からない。

「マサト様は後頭部をゴブリンの棍棒で強打されて意識を失いました」

「お、おう……やはりそうだったか」



「その後もゴブリンはマサト様の頭部を殴り続けて、しまいにはグシャツと……」  
「ふあ、ファルフナーズさん？」

「マサト様の頭からはみ出した××をゴブリンが美味しそうに音を立ててすすり……それだけでは足りないのか服を破ってお腹の所へ牙を」

「ストップ！ ストップ！ それ以上俺の解体踊り食いショーの実況は聞きたくない！」

ファルフナーズにティツシユ箱を手渡してやりながら考えた。

「くっそー 俺の実力じゃあゴブリン一匹にすら勝てないのか」

「私のためにこんな目に……真に申し訳ありません」

「だが、生き返られるのは幸いだ。あれで何もかも終わりだったら浮かばれねえ」

かと言って樂觀的はなれない。

あの痛みは覚えているからな。

もつと生殺し風の死に方だったらと思うと、やはり二度はゴメンだ。

「金属バット以上の攻撃手段が要るな。銃が理想だが……入手方法が無い」

俺がニートじゃなければ海外へ行つて銃を入手してそこで……

いや、ダメだファルフナーズを連れていく手段が無いや。

エアガンを違法に強化改造したものをネットで、と言うのはどうか。

いや、それにも結構な大金を積みまねば、か。

無い知恵を必死に巡らせて考える。

いつそ家族に正直に話して参戦してもらおうとか。

非情な手段だが店とかの扉からダンジョンを開いて囿おとりとして知らない人を

……

いやいや足が付く。

囿なら野良犬とかでも十分かもしれない。

「あ、マサト様」

「ん?」

「私、攻撃魔法が使えます」

「……」

「……」

「先に言えよおおおーッ!」

俺の魂からの叫びは近所中に響いた。

## #4 「投げやりステータス」

「ざつき魔法使えないって言ってたような？」

「あつ、申し訳ありません。正確には使えるようになってました。ですわ」

「なるほど……今なったのか、今気付いたのかのどちらか、なんだな」

「はい……」

ん？

ファルフナーズが虚空を見つめている。

フェレンゲルシュターデン現象かな？

パントマイムみたいに手も動かしている。

「何やってんの？」

「はい……何だか目の前に光る文字が浮かび上がって、そこに私が攻撃魔法を使える、と」

「ほほー、他に何が書いてあんの？」

「ええと、上にステータス画面という文字が」

おおー！ 良いじゃん！

「それでそれで、どんな事が書いてあんの？」

「はい……私の名前と詳細な情報が」

「読んでくれ」

「えっ」

「ん？」

「いえ、その……」

「んん？」

「は、恥ずか……しい、です」

「ははあー、プライバシーか！」

「あーもー、そりゃあ是非とも知りたいねえ。」

「んん、ゴホン。ファルフナーズ君、私は君の主人だな」

「はい」

「君はこのダンジョン攻略の鍵なんだ」

「はい……」

「俺の国にはこんな格言がある」

「はい？」

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず。情報こそが力だ、という意味だ」

「はいー……」

「分かったら、そのステータス画面に書いてある事を読み上げてくれたまえ。一字一句漏らさず、な」

「そ、そんなあー」

ファルフナーズは羞恥のあまり両手で顔を覆ってしまふ。

…

俺は腕を組んだまま微動だにせず、ファルフナーズを見つめてプレッシャーを与え  
る。

耳まで真っ赤になったファルフナーズは震える声で仕方なく読み上げ始めた。

「ふあ、ファルフナーズ・トリピュロン……じゅ、16歳です」

「ふむ」

ほう、16歳だったか。

やはり絶世の美少女とは言え、ちよつと幼い顔立ちなんだな。

「し、身長143cm……た、たいじゅ……」

「ふむふむ」

「マサト様、お許しくださいませ……」

「んんー、そーれは困ったなー。詳しい情報が分からないとなー」

とは言え、恥ずかしがるファルフナーズの可愛い姿も堪能したし。  
このあたりが潮時か。

なあと、続きはいつでも楽しめる。

「ごめんごめん、冗談だよ。ちよつと意地悪過ぎたな。許してくれ」  
ほつと胸をなでおろすファルフナーズだった。

「じゃあ差し障りの無い情報、主に戦闘なんかに関する情報を頼むよ」  
「了解しましたわ」

可愛らしい咳払いをひとつ。

耳に心地よい甘い声でステータス画面とやらを読みあげ始めた。

「ええと、特性【オブジェクト化】：モンスターに干渉出来ず、干渉される事も無い、と  
あります」

「やはりか」

「職業：【プリンセスメイド】：姫巫女になるための修行中の身分。主と定められた者に絶  
対服従」

「ほっほーう」

絶対服従なのか。

なんて素晴らしい響きなんだ！

これは色々と捗るな！

「レベル1、見習いメイド」

「なるほど」

「スキル、攻撃魔法〔炎の矢〕 1回／1日、絶対命中、矢の形になった炎が敵を貫く、だ  
そうです」

「いいね。絶対命中とは有難い。1日1回だけとは言え、貴重な攻撃手段だ」

「今のところは以上です」

「分かった。ありがとう」

ファルフナーズがステータス画面を片付けようとパントマイムで虚空を右にずらす。

なんで俺には見えないんだ。

「あらっ？」

「どしたー？」

「マサト様の画面も出てきました」

「まじか！ 読んでくれ！」

「え……よろしいのですか？」

「ん？ いいよ？」



別に俺の体重やらスリーサイズなんて恥ずかしくもない。

まあお姫様育ちのファルフナーズには分からないだろうが。

「マサト・オコノギ 20歳 身長161cm 体重81kg」

「うんうん」

「特性【駄目人間】やる事成すこと全て駄目」

「やかましい」

「ひやいつ！ す、すみません……」

「あ、いや、ファルフナーズに言ったんじゃあ無いんだ」

誰だ、このステータス画面を書いた奴、発明した奴は。

出会ったら一発殴ってやらなきや気がすまねえ。

「職業：【ヒキニート】：うまくすればプロ趣味人になれるかもよ？ 頑張ってみれば？」

「なんで語り口調で半疑問系なんだよ」

「レベル1、はじめてのダンジョン」

「はじダン。早くも死んだけどな」

「技量点1+1（金属バット）：小学生並」

「金属バット込みで小学生並かよ！」

「体力点2：やや硬い豆腐程度」

「豆腐メンタルじゃなくて体が豆腐並みなのかよ……」

ふざけてんなー、このステータス画面。

くっそー、体力の衰えを認めざるを得ない。

「んで？」

「はい？ 何でございましょう？」

「いや、続きを」

「以上ですわ」

「えっ、スキルとか攻撃技とか、何かそれっぽいのは無いの？」

「ええ、特に記入されておりませんが……」

ファルフナーズがしきりに画面を右へ左へとスライドさせて確かめている。

小首を傾げてるあたり、本当に何も追記されてないようだ。

「えらくシンプル。むしろ手抜きみたいなステータスだな！」

能力値が技量点と体力点の2種のみだなんて……どんなバランスしてんだ？

## #5 「おおきく振りかぶって」

「よし、じゃあ【炎の矢】を使ってみよう」

「はいっ！ マサト様」

「作戦は基本通り、またリセット・マラソン戦法でゴブリン1匹の所を探す」

「はい」

「そこで俺がゴブリンと取っ組み合いになるだろうから、後ろから炎の矢を使ってくれ」  
「了解しましたわ」

ファルフナーズが鼻息も荒くフンスと勇ましいポーズを

……いや、駄目だ可愛いだけだ。

やっぱりお姫様に荒事は似合わないな。

口元に笑みを浮かべ眉を釣り上げるその表情は、控え目に言ってもドヤ顔。  
漂うポンコツ臭。

不安だなあ……

廊下に出て、居間、トイレ、風呂、玄関とローテーションで開けて行く事にした。

同じ所を開け続けると高レベルモンスターに遭遇しやすいみたいだから。

「いくぞー！」

「精一杯、頑張りますわっ！」

幾度かドアを開けた所でゴブリンを発見した！

「よし、ゴブリンだ。こちらに気付いたぞー！」

俺は金属バットを握ってダンジョンの中に踊りこむ。

「つしゃあー！ オラアー！ かかってこいやー！」

おおきく振りかぶって

……！

……！

ぶおんっ！

まさかの空振りストライク！

ゴブリンがジャンプで俺のフルスイングを避けやがった！

いかん、バランスが！

ゴブリンがプギョーと叫んで俺に棍棒を振り下ろす。

その一撃は俺が振りぬけた金属バットに運良く当たって威力が削がれた。

とは言え、脇腹に痛撃を食らう！

吐きそう。

だが、こらえろ！

「ファルフナーズ今だ！」

ゴブリンが俺にトドメを刺そうと再びジャンプ攻撃。

小柄なくせに凄い跳躍だ。

だが、その滞空時間が命取りだぜ！

勝ちをもたらった！

「ええと……天に召します我が主のお恵みによって……今日も日々の糧を得る事を

……」

「ながーい！ 長いよー！」

しかもそれ食事の前のお祈りじゃないのか!?

「矢でしょ！ 炎の矢！」

糧とか違うだろ！

「と、とにかく【炎の矢】！」

『とにかく』って言った！ 今『とにかく』って！」

省略できるのかよ！

最初からやってよ！

その瞬間、俺は見た。

ファルフナーズの綺麗なピンクの髪が舞い上がるのを。

そして彼女の前に炎が生まれたかと思うと、瞬く間に光が通路一杯に広がった。

それはあまりに高温のため白く光る炎の矢じりだった。

「えっ、ちよまつ、大き過ぎない、それ!？」

「マサト様！ お避けくださいー!」

「いやいや、無理だから。通路一杯だから——」

それが俺の今回の遺言になった。

……

……

……

「えぐっ、ぐすん、ひっく、マサト様あ……」

「うん、おはよう。やっぱりベッド上ですな」

「……」

「……」

「な」

「……な？」

「なんであんなに大きいんだよ！」

「ひいっ！」

「大きい事は良い事だ、って良くねえよ！ 程があるだろ！」

「ごめんなさい。ごめんなさいですわ」

「矢じりだけで俺の身長分あつたわ！」

「申し訳ございませんっ！」

「……」まで怒鳴って、ようやく落ち着きを取り戻せた。

「よもや友軍誤爆フレンドリーファイヤーで死ぬとは……」

「本当に何と謝れば良いのか。言葉もございません」

「俺も悪かった。勝手に普通サイズの矢だと思ひ込んでたからな」

「先に試し撃ちをするべきでしたわ」

「んー、一日一回の大技だからな。それも納得の威力だったわけだが」

「恐ろしい炎でしたわ」

俺からしたら光が広がっただけで、痛みとか熱とか感じる間もなく燃やされたんだけどな。

しきりに俺を棍棒で殴打するゴブリンの顔しか覚えとらんわ。

「頼もしいような。頼もすぎて使うたびに俺が死ぬような……」

「困ってしまいますね」

あつ、他人事みたいに言いやがって。

「ともかく、炎の矢ならゴブリンは楽勝で倒せたんだよな？」

「はい。マサト様もろとも骨まで灰に」

……最高に灰って奴だ。

駄洒落か。

『ぎゅーん ぱばらぱつぱ、つぱつぱー！ ぱばらぱつぱすぽぽーん てれーん！』

「何の音楽だ？ 今は音楽を聴きたい気分じゃ……」

「あの、私じゃありませんわ。むしろマサト様自身から音が」

「ほあつ？」

体をはたはたと叩いて確かめる。

俺スマホなんて身に付けてたっけ？

いや、机の上に置いてあるな。



そもそもヒキニートだからスマホを身に着けて持ち歩くクセが着いてない。

あつ！ ひよつとして！

良い予感を抱いてウキウキしてきた。

「よし、ファルフナーズ。俺のステータス画面を読み上げてくれ」

「はい、かしこまりましたわ」

ファルフナーズが右から中央へと虚空を移動させるパントマイム。

ひよつとして消せないのか、それ。

「はて……特に変わりは無いようです」

「あつれーえ？ 絶対にレベルアップだと思ったのに」

「あつ、失礼致しましたわ！ 変化が見受けられました」

「おお！ どこだ!? どこが変わった!？」

「ここです、技量点が上がっております」

「ほつほう、レベルアップとは別に技量点上がる事があるのか」

「こう変わりましたわ。 技量点1+2（良い金属バット）：小学生高学年並み」

……

…

「強くなったの金属バットかよ！ 俺じゃないのかよ！」

「ひいっ！ ごめんなさいー！」

「金属バット何もしてないじゃん!? 俺と一緒に焼かれただけのクセに！」

「た、確かに、ですわ……」

くっそー、このダンジョンとシステムを設計した奴は2発殴る。

決めたからな！

強くはなったはずなのに、素直に喜べない！

## # 6 「俺の妹がこんなにお姫様なはずがない」

「さて、金属バットが俺の生命線になってしまった」

「マサト様に実にお似合いですわ」

……いや、ファルフナーズに他意は無いのはわかる。

俺とて2度の死線をくぐり抜け——られ無かったのだが、まあいい。  
気にしない。

「だがあれだ。攻撃だけじゃ駄目だって事が分かった」

「と、申しますと?」

「防御だよ。ディフェンスだよ。まずは落ち着いて一本、防具を入手せねば」

「なるほどですわ! 流石マサト様」

……いや、うん。

ファルフナーズに悪気は無いんだ。

馬鹿でもない。

世間を知らないだけなのだ。

「だが防具をつけて、また今度は防具が俺より成長したらプライドがズタズタになる気

もする」

でもこの際プライドはいつか。

いくら生き返りができるからって、やっぱ死にまくるのはちよつとな。

俺が認識してない、未知のペナルティがある可能性も捨てきれ無い。

「よし、防御になりそうな装備を揃えよう。やっぱリスポーツ用品がいいか」

財布を開けてみると……2千円と小銭。

何か買える手持ちじゃないな。

するとネットで中古品探しか。

俺は思案にふけていた。

……

…

ガチャ バタン！

ん？ なんだ？

「おう、帰ったぞ。マサト生きてるか」

!!

しまった、忘れていた！

もう家族が帰ってくる時間だったのか！

「まずい、ファルフナーズ隠れろ！」

「えっ、あつ、はいっ！」

辺りをおろおろ見回すファルフナーズ。

「……マサト様、ど、どこへ隠れればよろしいですか？」

隠れる場所がない！

押入れは俺のオタクグッズでぎゅうぎゅうだ。

ベッドの下か、ドアの脇か…!?

ええい駄目だ。

「必殺！ ダンジョンオーブナー！」

押入れのフスマをスラッ！

「飛び込め！ ファルフナーズ！」

「えっ!? マサト様、ご冗談ですわよね？」

「冗談じゃない、大マジだ！」

ファルフナーズの背中を押してダンジョンへ押し込める。

「い、いやーっ！ マサト様、お許しを！ いやあああ！」

「うるさい！ 今見つかったら大変な事になるだろ！」

「お慈悲を！ マサト様、ダンジョンからゴブリンが！ いやー！」

「お前は敵に認識されないから大丈夫だ！ 安心して隠れてろ！」

「い、嫌です！ ゴブリンと一緒に暗い通路なんて嫌ですわ！ どうか堪忍してくださいましー！」

「うるせー！ 非常事態だ！ 早く、早くっ！」

「いやあああああ！ ゴブリンが目の前に！ ゴブリンの臭い息があああ！」

プギョルルル！

ガチャ！

「おう、マサト。今日はえらい騒がしいな。引き籠もりやめる気になったか？」

「うわっ！ オヤジ！ いきなり開けるなっていつも言ってるだろ！」

お、終わったかもしれない……

せめてもの抵抗でファルフナーズを俺の背中に隠す。

「お、オヤジこれはな……」

「なんだ兄妹喧嘩か？ お前らはホント仲良いな」

……

…

「はい？」

「えぐつ、ひつく、マサト様、ご無体過ぎます……」

「ちゃんと妹には謝っておけよ？ でないと引き籠もりから家無しにジヨブチエンジさせんぞ」

「え、あ、うん……」

……

……

…

「——つまり、俺がダンジョン・オープナーの能力を知らずの内に宿したように」

「はい……恐らくは」

「俺の家族は、ファルフナーズを家族だと認識するように記憶を改ざんされる訳か」  
「私もそこまでは聞かされておりませんでしたわ」

「つて言うか、不死身の死に戻りの事も後から教えてくれたよね。」

「まあ、下手に隠したりしなくて良かったのは助かる」

「ゴブリンがトラウマになってしまいましたわ……恐ろしい」  
ほっと胸を撫で下ろし一息ついている間に母親も帰宅した。

父親の呼び声が聞こえる。

「マサト達ー、メシだぞー」

「マサト様、お呼び立てですわよ？ いかれませんか？」

「いや俺ヒキニートだから。この部屋からは滅多に出ないのだ」

「では私もこちらに」

「いや、お前は行って食って来いよ」

「そんな、私はマサト様のメイドですわ。第一、こちらの世界の作法を何一つ学んでおりません」

ぐっ、仕方無い。

あまり我を通せる状況ではないか。

「おお、マサトが食卓に顔を出すとはな！ 良い傾向だ」

「……別に。気が向いただけ」

父親は大きく何度も頷いている。

母親は目の端を拭いている。



涙ぐんだのだろう。

ファルフナーズが俺の椅子を引き座らせてくれる。

「……サンキュ」

「いえ、私はマサト様のメイドとして仕えさせて頂く身」

「なんだあ？ さつきケンカしてたのに、もうイチヤイチャか？」

「うっせ」

「ん？ ファルフナーズも座りなよ。食べらんないだろ」

「いえ、私はマサト様の給仕を……」

「いやいや、給仕も何もコンビニ弁当だ。フタだけ開けてくれれば後は良いよ」

「はい、では……」

ファルフナーズがうやうやしくコンビニ弁当のフタを開けようとする。

「あつ、そこはテープで止まってるからな。それを剥がしてからだ」

「テープとは、この透明の封印ですね？ 何か特別な術式を施されたお食事なのでし  
うか」

んー説明するのめんどい。

パスパス。

4人での食事が始まる。

やはりと言うべきか、ファルフナーズは箸を使えない。

一応教えてみたが無理だった。

箸立てにあるスプーンとフォークを使わせる。

「オヤジ、娘の名前言えるか？」

イタズラで問うてみる。

「ふあ、ファルフ……ナーズ？」

「なんで疑問形なんだよ」

「うるさい、ど忘れする事くらいあんだろ」

「漢字で書ける？」

ファアの漢字もファルの漢字も存在しないからな。

当て字しか無いんだぜ。

「カタカナでいいじゃないか」

『『いいじゃないか』って……』

「そもそも何でそんな名前をつけようとしたんだ？」

「と、父さんは実はロシア人とのハーフだな」

あかん、バグってきてる。

アンタ出身秋田だろ。

そしてファルフナーズはロシア名じゃねえ。

「マサト様、あまり軽々しく突つかれますと……」

「そうだな。これ以上バグられても困るし」

ファルフナーズは幕の内弁当のオカズを一つスプーンで持ち上げるたびに嬌声をあげている。

何がそんなに嬉しいのやら。

まあお気に召したようで何よりか。

「そうだ、オヤジ。実は欲しいものがあつて……」

「なるほど、久しぶりに食卓に顔を出した目的はそれか。何だ、言ってみろ」

「プロテクターの類なんだが」

「野球か。それともスノボか？ まさかバイクじゃあ無いよな」

「スノボやバイクにもプロテクターがあるのか」

「知らなかったのか。って事は野球のだな。ついにマサトが表に出る日が来るのか」

「いや、そういう訳じゃ……」

「ん？ じゃあ何目当てだ？」

む、まずった。

暴漢がファルフナーズを付け狙ってる、とでも返すか？

「い、いや。そうだ。野球がキツカケになるかな、なんて」  
「よし分かった。すぐコンビニで下ろして来てやる」

妙な空気になった。

母親は涙が止まらなくなってるみたいだし。

やべーな。

こりや本当に野球をやらなくちゃ駄目かもしれん。

もうちよつと下調べをしてから切り出すべきだったか。

俺としては剣道の防具を想定していたのだが。

父親はものの10分でコンビニを往復し、俺に10万円をポンと渡してくれた。

すまねえオヤジ。

ヒキニートを辞めるつもりは無いが、今は生きるか死ぬかのレベルなんだ。

というか、2回死んだ。

許して。

……

……

微妙な空気となった晩餐会からさつきと逃げ出した。

「よし、今日はもう休んで明日、店が開く時間に駅前のスポーツ用品店に行くか」

「はい、お供しますわ」

うっ、不安だ。

ヒキニートとは言え、コンビニやオタク系ショップには通っていたから出歩く事自体は問題無いが。

ファルフナーズを連れて歩かねばならないんだった。

でなければ店の扉を開けられない。

まあ何とかなるさ。

今はそのための気力を補充する時だぜ！

「さて、就寝前のバスタイムだ！」

「はい、いってらっしゃいませ」

「んん？ ファルフナーズ、何を言ってるんだ。お前が居ないと俺は風呂の扉を開けられないんだぞ」

「失念しておりましたわ。申し訳ございません」

着替えを持って風呂場へゴー！

ウツキウキだぜ。

「さて、服を脱がせてもらおうかな！」

「ええっ!?!」

「トイレでズボンのジッパーを下ろしたらダンジョンだったからな！」  
「そ、そうでしたわ……」

ファルフナーズは手を組んでモジモジとしながら視線を逸らす。  
これこれ、この反応が見たかった。

「で、では、失礼して……」

「お？ おお」

本当に脱がせてくれるみたいだ。

あー 役得。

ダンジョン・オープンナー、悪い事ばかりでもないな！

正直、開ける動作が危ないだけだから、服を脱ぐのは大丈夫なはずだけだな。  
ボタンを外す所はちよつと危険な気がするが、脱ぐ動作自体は問題無い。

いや、万が一があるからな！

仕方無いね！

あー 癒される。

こーゆー甘い一時があつてこそ、死亡イベントを乗り越えられるのだ。  
すっぽんぽんになって、タオル一枚を腰に巻いた状態になった。

ファルフナーズが風呂場の扉を開けてくれる。

「では、私は脱衣所で控えておりますので……」

「いやいや、フアルフナーズも入るんだよ」

……

…

「ええっ!? そそそ、そのような事、わわわわたくしゆわ……」

噛んでるなー

「だって仕方無いんだ。この水道、蛇口は『開ける、開く』ものだから!」

魅惑のバスタイム、はじまるぜ!

## #7 「捨てちやうおじさん」

「よし、お湯だ！ 蛇口をひねってお湯を出すんだ」

「こ、これを回せば良いのですか？」

「うむ！ だが、そのままではファルファーズが水びたしだ」

「ううつ……」

「俺はそれでも構わんが、脱がなくて良いのか？」

「まつ、マサト様あゝ」

水に濡れて透けたドレスが体に張り付き魅惑のボディラインを露わに……想像だけで萌える。

だが

……ま、これ以上は可哀相か。

「今日はこの辺で勘弁してあげよう」

「じよ、冗談でしたか……マサト様もお人が悪いですわ」

「今日は、だけどね」

「ひーん」



「まあ、ともかくこちらの風呂用具の使い方を教えなければならぬからな」

「左様でございませしたか……私はもうてつきり……」

てつきり、何だろう？

シャンプーやらリンスやら、シャワールの出し方止め方と次々と教えていく。

「はー……こちらの世界のお風呂はまた随分と素敵ですわ」

「ところで、ファルフナーズはお姫様らしいけど、一人でお風呂入ったことあるの？」

「それが恥ずかしながら、今日が初めての経験でして」

「大丈夫か？ このシャンプーとか、目に入ったら滲みるぞく？」

シャンプーを眺めて息を呑むファルフナーズ。

「さあ選べ。一人で目に滲み滲み地獄を味わうか、恥ずかしくても俺と入るか」

冴えてる！ 俺！

スケベ根性は俺の知能をブーストする。

いや、俺だけじゃない。

人類はこうやって発展してきたに違いないのだ。

偉大な俺、スケベ心。

お姫様は俺とシャンプーを交互に見つめる。

「止むを得ません。き、決めましたわ……！」

おお!?

これは……??

「お母様！ お母様ー！ 本日はお風呂をぐー一緒にしませんかー?」

ですよー

ファルフナーズが一枚上手だった。

上手く2 択しかない、誘導できたと思っただのになー

イタズラのツケでたつぷり一時間以上待たされるハメになった。  
タオル一枚腰に巻いたままの姿で。

「あれっ、服が違う。そんなピンクのドレスもあつたのか」

「はい、着替えましたわ」

「どこに服を隠し持ってたんだ?」

「こちらに……」

腰元をそこそこそとやっていると、にゆるりと言った感じで前の白いドレスが出てきた。

「うおっ？ 何か今、腰から生えるように出てきたぞ？」

「はい、アイテムバッグでございますわ。マサト様は所持しておりませんか？」

「んなもん無いわ。要はドラえもんの四次元ポケットか」

「ドラ……？ いえ、ドラゴンでは無く、スピリットの霊体構造を利用した言わばサブマテリアル化だそうで——」

「あー分からん分からん。知っても仕方ない」

「これは失礼を」

「で、それって何でも入るの？ 大きな物とか生物とか」

「私のは良い物をしつらえて頂きましたからサイズと重量はかなり大きな物まで可能ですわ」

「ほほー、具体的にはどのくらい？」

「合算で大きさはマサト様の部屋くらい、重量は全部で大人15人分くらいまでです」

「6畳半、1トンって所か。便利だなー」

「生き物の中に入れる事は可能ですが、強制的に霊体化されるので生存の為の術式無しでは即死してしまいます」

「逆に殺菌とかできそうだな」

「サツキン……？ 私を解雇されるのですか!？」

「へ？」

「あら？」

何だか会話が通じなかった。

まいつか。

「つまり、荷物持ちとして優秀な事は分かった」

「いえ、あのー……」

「何？」

「既に私の生活用具で一杯でして」

「どんだけ荷物持ってきてんだよ！」

「ベッドにソファにクロゼットなどが……」

お姫様サイズのかー

俺の部屋にそれを出す余地も無さそうだ。

「よし、片っ端から捨てよう！」

「そ、そんなあー！」

ファルフナーズが身を引いて体をよじり、頭をふるふると振って拒否する。

「このクソ狭い家に、お姫様専用の家具を展開するスペースなぞ無い！」

「で、ですが、これは私にとって大切なものでー！」

「いや、むしろ売ろう！ 異国風家具としてプレミアが付くかもしれない」

「どうかご容赦を。私の思い出の品なのです」

あらー、じゃあ仕方ないか。

まあ異国どころか異世界に単身赴任じゃあ心細くもなるうもんだ。

家から出ないヒキニートの俺からしたら恐ろしい経験にも見える。

「仕方無い。その代わり家具は外に出すなよ。絶対家が壊れるから」

「あ、ありがとうございます！ マサト様の寛大なお心に感謝を」

「細かい身の回りの品とかは出してもらおう。ダンジョンで少しでも荷物を持ってもら

いたいから」

「あ、はい。了解しましたわ」

……

まー、出るわ出るわ。

どんだけ着替えたいんだよって位、服を次から次へと。

化粧品やらブラシやら俺の知らないコスメグッズもあれやこれや。

途端にファルフナーズの手が止まってこちらをチラチラ見ながらモジモジとし始め

た。

ピンと来た。

ここからがお楽しみだ。

「どうした？ 続けて」

「あつ、あのう……私も一応、女の身ですので、殿方にお見せしづらい品もございます」

「ほーう？ 例えば？」

「あつ、しつ、下着とか……です。 はい」

「俺は気にしないよ？ 続けて？」

「マツ、マサト様あくー！」

腕組みして沈黙を支配する。

不動の構えでファルフナーズの羞恥に身をよじる仕草を堪能だ。

「こつ、これでご勘弁くださいっ！」

でつかいカボチャパンツを突き出すファルフナーズ。

ドロワーズとか言う、パンツの上から履くやつだなー

これがそんなに恥ずかしいのか？

ファルフナーズが両手で顔をふさいで固まってしまったので今回はここまでだ。

考えてみれば、腰にタオルを巻いただけの格好だった。

くしやみをひとつ。

ドロワーズをファルフナーズの肩に被せ「体を冷やすんじゃないぞ」と、意味不明な言葉を残し風呂へ向かう俺だった。

なぜか雰囲気の流れされたのか、ファルフナーズは涙目でお礼を言っていた。騙されやすいお姫様をからかうのも程ほどにしないとなー

……

…

「あ、ファルフナーズさあ〜ん？ お風呂の扉開けてもらえますー？」

イタズラのツケか、風邪をひいた。

バッドステータス。

## #8 「自動販売機にお礼を」

—— 翌日

「よし、店だ」

「はいっ！ 地球での初お出かけ、楽しみですわ」

「遊びじゃないんだぞー」

「そうでしたわ。マサト様、申し訳ありません」

「よしよし、ファルフナーズが何かしでかさないか、それだけが心配だからな」

玄関のドアを開けてもらい、いぎヒキニートが買い物へ。

もはやヒキではないな。

俺も成長したもんだ。

「マサト様！ 鉄の牛、ゴルゴンの群れが！」

「ありや車だ。馬の代わりに燃料で走る馬車の次世代機」

「あ、あれがこの世界の馬車……恐ろしいですわ」

「旧神とかドラゴン見て平然としてるお前がそれを言うか」



…

「巨大な塔が目白押しですわ。この都市は防衛要塞なのですか？」

「ただのマンションだな。土地が狭いから昔の長屋は縦にも伸びるようになったのさ」

「この塔が大邸宅マンションですか！ まさしく荘園ですわ」

「和製英語化した言葉は誤解が生じるな…：集合住宅だよ」

…

「マサト様、このモルタルの柱と黒いロープは」

「電柱と電線だな。電気という動力の配備網だ」

「まあ、では私でもあれに触れば電気のでパワーが…：」

「死ぬだけだな。人間の体は強力な電気を受け止められん」

「で、でもあの鳥達は平気ですわ」

「触っても大丈夫なようにカバーしてあるから黒いんだよ」

「ほっ、鳥達が電気ので巨大なドラゴンに変身してしまうのかと…：」

「んなアホな」

…

「あちーな。何か飲むか。ファルフナーズはどれがいい？」

「この赤い箱から飲料が買えるのですか？ では、このレモンの絵がある可愛いのを」

「ガス入りだけど大丈夫か？」

「ガスとは何でございましょう？」

「炭酸。シユワシユワする奴」

「まあ、エールなどの発泡酒ですわね」

「アルコールは入ってないけどなー ほれ。そのベンチに座って休もう」

「ありがとうございます。まあ！ こんなに冷えているなんて」

なぜか自販機に深々と頭を下げてお礼を言ってる。

「自販機に中の人なんて居ないぞ」

∴

ファルフナーズにとって、こっちの世界は驚きに満ちているみたいだ。

今のところ騒ぎになるような事は起こしてない。

と、言うか注目すら浴びていない。

おかしい。

ピンクの髪のお姫様が街中を歩いていても呼び止められないなんて。

これは俺の家族同様、それが当たり前というようにバグらされているのだろうか。

「マサト様、人が増えてきましたわ」

「駅前だからなー ちようど電車の時間なんだろうさ」

「駅馬車ですか？」

「似たようなもんだー 電気で動く連結駅馬車って所だなー」

「マンシヨンの塔も増えてきて、これならドラゴンの群れが襲ってきても耐えられそうですわ」

「ゴジラー一匹で壊滅するのがお約束だなー」

「お、あそこだ。『クボタ・スポーツ用品店』」

「あつ マサト様、その透明扉は私が」

「ええつ、自動ドアも駄目なのか!？」

だが遅かった。

フイーン

くぱあ

シャキーン！ うおおおん！

「うわあ！」

「い、急いでお閉めあそばせ！」

：

「危ねー！ なんだ今の全身刃の塊。ロボットか!？」

「ザ・ブレイド、妖刀が集まったクリーチャーですわ」

「くそー、改めて己の身に降りかかった災難を思い知らされたぜ。気を抜けば死ぬ」

「重ね重ね申し訳ございません」

いや、まあ、その分セクハラしてるし。

死んでも復活できるし文句を言えた義理でもないのだが。

店内に入ると剥げ散らかした頭のエプロン親父が威勢を飛ばす。

「いらっしやい！ ハマタン装備店へようこそ！」

「ハマ……？ ここのクボタ・スポーツ用品店じゃないの？」

「今日はどんな装備をお探しでい？」

装備って……

いかん

この親父もバグってるくさいぞ。

「あの……プロテクターの類を」

「よし来た。工房の好みはあるかい？ ミズノ？ アシックス？ ゼット？」

工房って……まあいいや。

「できるだけ頑丈なのが良いです」

「じゃあこれだ、審判用だが肩までガードしてくれるスグレモノだ」

おお、確かにこれは凄い。

胸部と肩を覆うプラスチック的なハード素材とジャケット型のメッシュ素材で胴体を覆ってくれる。

「よし、これにしよう」

「まいどありっ！ すぐに装備していくかい？」

「するか！ これで街中練り歩いたら職質されるわ！」

「装備しないと効果は出ないから気をつけて」

アホか。

完全にバグってやがる。

「今着ている装備は買い取るかい？」

「全裸にプロテクター一丁なんて即逮捕されるわ！」

そもそもスポーツ用品店が古着の買い取りをするものか。

完全に「ぶきとぼうぐのみせ」になっちゃってるな！

「レッグガードとマスクも欲しいんだけど」

「よし来た。でもここら辺には強い敵は出ないよ」

「出て来てたまるか！」

「でもお客さん、レベル低いから用心しなよ?」

じやかましい。

第一俺のレベルが見て分かるのか。

「ねえ、ここはクボタ・スポーツ用品店だよね?」

「ハマタン、砂漠の地に吹く熱砂の風の事だ。海辺に吹く風はシロツコという」

受け答えが成立してない……

遠い目をしてロマンがある風に語られても、正直困る。

「他に売り買いする品はあるかい?」

「じゃあ……これいくらになる?」

物は試し、とファルフナーズの肩を掴んでズイツと。

「それを売るなんて とんでもない!」

「ですよー」

「ま、マサト様っ!」

「冗談冗談。ファルフナーズと離れたらダンジョン・オープナーの能力も消えるかな、な  
んて」

ぷりぷりと怒って俺の背中をポコポコと叩く姿が無駄に可愛い。

…

「また来なよ。生きてたらな！ 良い装備を拾ったら売りに来てくれ！」  
ダンジョンにスポーツ用品は落ちてないと思うぞ。  
銃刀法に引っかけなくても知らないからな。

帰りはちよつと贅沢してタクシーを拾った。

ファルフナーズに車と言う物を体験させたかったから。

「乗りな。どこへでも一瞬で送ってやるぜ」

中年のおっさんが白い歯をむき出しにして親指を立ててる。

い、いかん。

このドライバーもバグってる!?

「イーヤツホーウ！ どけどけど！ 轢き殺すぞ！」

絶叫とクラクションを振りまきながらアクセルを踏む踏む。

あつ！ 今、信号無視しやがった！

ファルフナーズが悲鳴を上げる！

「降りる！ ここでもいい！ こんなタクシーに乗ってられるか！」

「お客さん、それは死亡フラグですぜ！」

違うと思う。

むしろこのまま乗ってるほうが死ねるわ！

クレイジーなタクシーに金払ってまで乗りたくもない。

「わ、私、二度とこのタクシーという車には乗りたくありませんわ……」

ファルフナーズが車にトラウマを背負った。

カーブしたときの加重が決定打。



## #9 「俺達、頑張ったよな」

「よし、ステータス画面だ」

「かしこまりました」

買ってきたプロテクター類を全て装備した。

これでファルフナーズに見えるステータス画面を確認して貰う。

「わっ、強くなってますわ。マサト様」

「んーんー、そうだろそうだろ」

「技量点1+2（良い金属バット）+2（プロテクター・マスクとレガース）：中学生並み、となってます」

「これで中学生並みなのか……まあいい、戦力倍増だ」

ファルフナーズも喜んでくれてパチパチと拍手をしてくれる。

良い気分だ。

「あらっ？ 特性の文字も書き換わっておりますわ」

「ほー！ 読んでみて読んでみて」

ファルフナーズがチラッと俺の目を見る。

ああ、これはまたくだらない事が書いてあるな。

「特性【物質社会の申し子】：形から入るタイプ。物に使われちゃ駄目でしょ」  
「うっせ」

「す、すみませんっ」

「いや、ファルフナーズに言ったんじゃない」

「ファルフナーズも炎の矢はチャージ完了してるな？」

「はい、いつでもどうぞ」

「今度は最初から省略してすぐ出すんだぞ？」

「心得ました！」

「じゃあ行くぜ！ リセマラ作戦からだ」

「頑張りましょうね」

フスマをスラリ！ トリケラトプス？

「石化能力のカーバンクルです」 パタン

玄関のドアをガチャ！ 浮かぶドクロ

「リッチの上位アンデッド、ドルージュです」 パタン！

今の引き戸をガラッ！ 巨大な像が乗った戦馬車

「破壊神ジャガーノートです」 ピシヤリ！

風呂場の扉をパカッ！ 足と鼻がたくさんある象

「古代象ボーデンドルーカーです」 パタリ！

トイレのドアをパタッ！ でっかい細胞！

「ゼラチナスキューブです！」

「おっ？ スライムの類か？ これイケるんじゃないの」

「危険すぎます！ 食細胞を伸ばして強酸で溶かされてしまいます」

パタン！

「今日は引きが悪いなあ」

「左様ですわね……」

「同じ家の中だから駄目なんかなあ。もう少しやってみて、駄目なら別の場所へ移動だ」

「はい、かしこまりました」

居間の押入れをスラッ！

「おっ、ゴブリンきぞこれ！」

「でも2匹ですわ、離れた所に」

「だが行くしかねえ！ オラアッ！」

手前側のゴブリンに叫びつつ金属バット攻撃！

カァン！

防いでできた棍棒ごとゴブリンを打ち倒した。

「いけるぜ！ さすが『良い』金属バット！」

だがゴブリンは倒れただけで、まだ生きてる。

地面に叩きつけられてヨロヨロしてるうちにトドメを刺さねば！

「ファルフナーズ！ 前に出て向かって来るもう一匹に『炎の矢』だ！」

「ま、前は怖いです！」

「それじゃあ俺がまた死んじやうでしょ！」

「だ、だってー！」

倒れたゴブリンを金属バットで滅多打ちにしながら叫ぶ。

打撃系武器だから致命傷を与え辛い！

「早く！ もう距離がねえ！」

「ゴ布林怖いです！ ゴ布林とても臭いです！」

バカン！

金属バットがゴブリンの頭部にめり込んで絶命させた！

「もう一匹もやるしかないか！」

プギョルルルル！

しめた！

ゴブリンが飛び上がってくれた！

掬い上げるようなホームラン狙いのフルスイングを食らえ！

ゴキーン！

ゴブリンの棍棒と金属バットが打ち合う。

よし、初撃をかわしただけでも大儲けだ。

正面からの一対一なら、もう勝てる！

「さんざん怖がらせてくれたな！　だが、今からお前らは俺の経験値だ！」

ゴブリンを一匹倒せた事で俺には余裕ができた。

さあ、初の完封勝利と参りましょうかねえ！

「マサト様、いつ、いつきまあす！」

「えっ!?!　何を」

振り返った俺が見たものは白い光。

……に見えるほど白熱した炎の矢じり。

「ちよ待つ！ 待てつて！」

ポアーツ！

全てが消えるその直前、俺とゴブリンは堅い握手をして互いの健闘を讃え合った。

「ピュギョ！ プギョギョー」

「ああ……俺達、頑張ったよな」

……

……

……

ベッドの上で3度目の復活を果たした。

「ひんっ、くすんっ、マサト様あ……」

「ファルフナーズさん」

「生き返ってくださり、ありがとうございますー」

「いや、君に殺されたんだけどね？」

「だってマサト様が【炎の矢】を撃てとー」

「俺の前に出て、と言ったよね？」

「ご、ゴブリンは苦手ですて……」

「状況変わったんだから、確認とってから撃ってね？」

頭ごなしに怒鳴って叱り付けた所だが。

ヒキニートだった俺にもわかる。

いや、俺だからわかるが、ここで怒りをぶつけては絶対萎縮される。

我慢しろ、俺。

褒めて伸ばすんだ、俺。

ああ駄目だ、やはり一言、嫌味でも言わなきや腹の虫が――

『ぎゅーん ばばらばつばつばー！ ばばらばつばすぼぼーん てれーん！』

「おわっ!? 何だ何だ!？」

「また、マサト様の体から音楽が」

「つて事はレベルアップか!」

「い、今確認致します」

∴

「マサト様、おめでとうございます! レベルが2になっていますわ!」

「ギター！ 技量点と体力点はどうなった!? 上がってる?」

「はい、技量点が2、体力点は4になっていきますわ!」

「よっしゃあ! 俺様、強さ倍増!」

おめでどう、俺!

最高だな! 俺!!

今日が俺様の、独立記念日だ!!!

ワー!!

心の中の観客がスタンディングオベーションで喝采を送ってくる。

ついに俺の時代がやって来たのだ。

「ははは、金属バット、貴様にはもうデカイツラあさせねえぜ。何てったって俺様もレベル2だからな!」

「あ、あの……マサト様」

「んん? どうしたファルフナーズ、このレベル2のマサト様に何かあるのね? レベ

ル2の俺様に」

「その……金属バットさんも強くなってまして、技量点+3の素敵な金属バット、と

……」



「……」

「……」

無言で金属バットを床に置き、平伏した。

「これからもよろしくお願いします」

…

「あらっ、そういえばマサト様」

「んん？ この金属バットさんの次に強い俺に何か？」

「……」

「いや、気にしないで続けてくれ」

「あ、はい。技量点の下に防御点、と言う表示ができてまして、防具はそちらに移動して  
ます」

「ほほー。レベルが上がって、ステータスの種類が増えたのか。で、どんな具合に？」

「まとめますと、まず技量点2+3（素敵な金属バット）：高校生並み」

「うむうむ」

「次に防御点2+2（高いプロテクター）+1（マスクとレガース）：高校生並み」

「なるほど」

「そして最後に体力点4、以上で……あら」

「どしたー？」

「その下にコインのようなマークと一緒に『ガチャ解禁』と書いてありますわ  
「んんっ！」

キタコレ！

魅惑のガチャが！

俺様のビクトリーロードが開かれるのだ！

## #10 「排出率に気をつけろ！」

「よしガチャだ」

「はい……？ これはどんな物でございますか？」

「一種のギャンブルだ。対価を支払い、ランダムな何かを得る」

「なるほど、でございます」

「大半はハズレだがアタリだと凄いアイテムがゲットできるはずだ」

「悪魔のような儀式でございますわ」

あながち間違つてない。

世の中、ガチャで人生狂わす人だっているのだ。

「そのコインのマークに触れてみてくれ。何か説明が出てくるはずだ」

「かしこまりました……まあ、本当『毛根ガチャ』という文字が——」

「はい、解散！」

「ええええ！」

……

……

…

「……あの、マサト様」

「ん？ 何かねファルフナーズ君、金属バットさんの次に強い俺に何か？」

「よろしければ、無知蒙昧なる私に説明をして頂けませんでしょうか」

「………ッ！ 仕方無い。説明しよう」

「要するに俺の毛根を代償に捧げて、何か冒険に役立つアイテムや装備をもらおうというシステムだ」

「まあ、殿方でしたら髪の毛くらい医者に見てもらおう手間が減つてよろしいのでは」

「医者？」

「はい？」

「なんかまた翻訳ミスかな？」

「ファルフナーズ、髪の毛じゃない。毛根だ」

「はあ………何か差がありますので？」

「大有りだ。髪の毛は次々生えてくるが、毛根は髪の毛の根っこ。一度死んだら二度と髪が生えない」

「まあ！ つまり……禿——」

「言うな。みなまで言うな」

「これは失礼しましたわ」

「俺も20歳を迎えた男、まだまだフツサフサだがこれは一生モンの話だ」

「お、恐ろしい事態ですわ」

「これがファルフナーズの髪だったら遠慮なく全ぶつぱするんだが」

「マツ、マサト様——」

「あれ？ 姫巫女って髪の毛全部剃らないの？」

「剃りませんわ！ マサト様の世界の巫女は剃ってしまわれるのですか？」

「いや、巫女じゃなくて一部の僧侶の話だけだな」

「なんと無慈悲な……確かにトリピュロンでも男僧は剃髪する宗派もありますが」

「じゃあファルフナーズの代から女性の巫女も全員剃髪するって事で」

「わっ、私の一存では決められませんっ！」

……

…

「おやりになりませんのですか？ このガチャという物ですが」

「悪い未来しか見えてこないからなあ」

無視を決め込んではいるが、ファルフナーズがチラチラとこちらを見てる。畜生、興味津々でたまらないって顔だ。

だが俺は心を鬼にしなれば。

なぜなら髪の毛の性質は遺伝による所が大きい。

そしてマイ・ダディは……禿——いや、とても薄いのだ。

だから俺もいまから気をつけている。

丁寧に毛根をいたわり、少しでも母親の血筋が濃いことを祈るのみだ。

「でも説明文に初回特典無料、とありますが」

…

「分かった、一回だけな？」

ま、無料なら仕方ないよね？

俺の意思が弱いわけじゃないからね！

タダより安いものは無いのさ。

「一応、説明文を一通り読んでからにしよう」

「はい。毛根ガチャ、毛根を300本捧げる毎に1回引ける。」

「ふむふむ」

「排出される品物はグレードの低い順に、コモン・アンコモン・レア・ベリーレア・スーパーレアとなっており、☆の数で1〜5と表される事もある」

「現在の最高レア（スーパーレア☆5）は伝説の勇者剣無限ソード」

「まあ絶対出ないだろうな」

「ええと、剣でありながら無限に伸びて狙いを絶対外さない必中の剣、だそうですわ」

「フーン……排出比率の設定は書いてある？」

「いえ、記述は以上で他には書いてありませんわ」

「そっか、まあ確率が分かるほど引いたら完全に禿げ上がるからな」

「よし、初回特典無料、回してくれ！」

「かしこまりましたわ！」

ファルファーズが人差し指で空中に触れる。

突如俺の頭上が光り、現れた謎のドラムが回転し始めている。

ピタッ！

『コモン』

平べったい板のようなものが俺の頭上に降り注ぐ！

「危ねっ！」

身をよじって回避した。

もつとゆっくり出せよ！

「ほらなー？ ガチャなんて良いモノがそうそう出るわけないんだ」

「残念ですわ」

「で、これ何だ？ ただの扉に見えるが」

「あつ 説明文が見えます。ええと、コモンアイテム：どこでも扉——」

「ただのドアじゃねえか！ 何か特殊な能力でもあるのか、ファルフナーズ開けてみたくれ」

「はい。……普通のドアですわ」

「ニトリかドイトで普通に買える代物だな」

「あつ、アイテムの追加詳細説明文がありますわ」

「お？ 何だー？」

「重量0、サイズ変更可能なダンジョン・オープナー必携の便利アイテム、だそうですわ」  
「ふーん……あ、ホントだ。軽いし両端を持って引つ張ったり狭めたりするとサイズが変わる」

最小で週刊誌程度の大きさにまでなるようだ。

「便利っちゃあ便利だけど……まあリセマラ作戦の時に歩き回る手間が少し減る程度だ」



な」

「思ってたより地味でしたわ」

「ガチャなんてそんなもんさ」

「また次がありますわ！」

「ねーよ」

ガチャ業者の回し者か!?

実は俺の毛根を狙うヘア・アサシンなのか!?

用心せねば、用心。

「まあ！ マサト様！」

「何だ！」

「ラッキーチャンス、次回ベリーレア以上確定、だそうですわ！」

その手に乗るか！

……

……

……

「い、一回だけな？」

## #11 「髪は長〜い友」

「よし、ベリーレア確定ガチャだ」

「かしこまりました！」

いや、だつてさー

ベリーレア以上確定なんだぜ。

これはもう仕方無いでしょ。

冒険をさ、円滑にさ、進めるためにさ。

俺の意思が弱いわけじゃ無い！

……よね？

「ははは！ 回せファルフナーズ！ 我らの栄光を導くのだ！」

「いきますわー！」

うっ！

後頭部に強烈な痺れに近い痛みが！

これが毛根の死滅する感覚か。

さらば、マイ毛根300本！

愛しい君達よ、先に天国で待っていてくれ。

ドウルルルル！

光り輝くドラムが出現し回る。

ピコーン！

子供の天使が二人ベルを鳴らしながら降りてきてファンファーレを奏でる！

リーチアクシヨンって奴か！

期待度アツプ！

「さあ来い！ 伝説の超絶素敵ソード！」

『スーパレア』

パパラパーン！

「きつ、来たあああああ！ つしやあ！ おらあ！」

ふわりっ

「あれ？ 剣じゃない。服だ!？」

白いドレスのような服が

「おめでとうございます、マサト様！」

「お、おう……でも、これ何だ？ ただのドレスに見えるぞ」

「では、説明文を参照いたしますね」

「頼んだ」

「名称、プリンセス・ドレスアーマー」

「……」

「……」

「お前用じゃねーか！」

「ひいっ！ すっ、すみません」

「くっそー、俺の大事な毛根フレンズが300本も犠牲になったと言うのに」

「ふ、ふれんず……ですか？」

「お前の国じゃ知らんがな。この国じゃあ髪は長い友と書くんだぞ」

「そうでしたの……」

「マイ・フレンズ、スリー・ハンドレッド、さらばだ……すまぬ。お前達の犠牲を無駄に  
してしまった」

両手を合わせ、祈りを捧げる。

お前達のためにも、俺は必ずこの試練を乗り越えてみせる！

…

「俺の大事なフレンズへの弔いは終わった」

「は、はあ……」

あつ、こいつ。

何を大げさな、つて表情に出てる。

くつそー、女性にはこの危機感、分からないんだな。

50年後を見てろよ。

「それで、そのプリンセス・ドレスアーマーにはどんな説明文が？」

「あつ、今読み上げますわ」

「プリンセス・ドレスアーマー：戦う姫のためにしつらえたドレス。その戦闘力を大幅に上げてくれる。男でも着れるから、恥ずかしくないなら試してみたら？ カッコワラ

イ」

「煽りよる」

着れるか！

どう見てもお姫様な白いドレスに胸部にだけ白銀の装甲が付いたものだ。

特にスカート裾が短く、白いレースのガーターベルトとハイニーソがセットで……俺が着た日には、それはそれは酷い光景になるだろう。

「はい、ファルフナーズにあげる」

「こ、こんな丈の短い服は恥ずかしいですわ」

「俺の友300が犠牲になってまで出した品だ、着よう？」

「えええ……これは流石に」

「着よう？」

「うう……マサト様あ」

「ね、着て？」

「く……ッ、はい……」

「しゃあ！」

根負けさせてやったぜ。

このエロ可愛いぴっちりドレス！

せめて俺の目を楽しませてもらわにやあ、毛根達が報われないぜ！

「さあ着替えだ」

「かしこまりましたわ……」

……

…

「あの、マサト様」

「何？」

「そこで見つめられていると、着替えられないのですが」

「私は一向に構わんツ！」

「私が構うのですー！　せめて、せめて後ろを向いてくださいますせ」

「いや、俺は困難から目を背ける事なぞできぬ」

「……」

「……」

はっ！　と気付いたファルフナーズが素早く部屋の外へ出てしまった。

ボタン！

しまった

俺は扉を開けられない。

無力！

圧倒的、無力！

俺はなんて無力なんだ！

…

おずおずと扉からこちらを顔を覗かせるファルフナーズを見て決心した。次に着替えさせるときは扉を背にしよう。

俺は固く誓った。

プリンセス・ドレスは想像以上にファルフナーズに似合っている。

「グレートだ！ ファルフナーズ、良く似合ってるぞ」

「こ、これは太ももが丸見えで……いえ、太ももどころか」

「いや、大丈夫だろ」

「そうでしょうか」

あぐらをかいて座っている俺は踏ん返り返る。

「ま、ま、マサト様、ななな、なぜ急に床に寝転がるのですか!？」

「いや、一戦して疲れてさー」

ファルフナーズもぺたんと床に座り込む。

いいね、いいね。

白いニーソの女の子の足は最高だな。

「あ、トイレ行きたくなかった。ファルフナーズ、扉開けてくれー」

「……マサト様が先にお立ちください」



「おつ、メイドが主人より後に立つ、だとオ!?」

「あつ、あまり意地悪をおっしやらないでくださいませー」

意地悪じゃない!

スケベ根性だ!

「わかったわかった」

トイレで便座を上げてもらう時に少し見えた。

ついでにズボンのジッパーを下ろして貰うときにも北半球がぼつちりだ。

さすがスーパーレアの服だな。

ドレスなのに胸元がバツチリ開いていてくれる。

これで胸部装甲さえ無ければ最高だったのに。

……

…

「まあマサト様、この服には追加能力がありましたわ!」

「えっ、どんなの?」

「ファルフナーズがステータス画面を操作しながら言った。

俺にはその画面が見えない。

ファルフナーズが虚空へ向かってパントマイムしているようにしか見えない。

「ええと、【魔法の盾】：対象1体に一定量のダメージを吸収するバリアを張る、だそうですわ」

「マジ!? 凄いじゃん。さすがスーパーレア服」

と、言う事は……これは組み合わせでイイ感じのコンボが成立するの؟!?

「ファルフナーズ、その服を着ても基本の【炎の矢】は消えてないよな?」

「あ、はい。まだ夕方ですのでチャージはされておりませんが、表示はそのままです」「いいねいいね。つまりその【魔法の盾】で俺を守りつつ、【炎の矢】で敵を——」

「それです! 流石はマサト様ですわ!」

「褒めろ、もつと褒めろ」

「素晴らしい頭脳ですわ、マサト様」

ぱたぱたと拍手して喜んでくれるファルフナーズだった。

「まあ、ファルフナーズが前に出てくれば本当は要らない戦法なんだけどね?」

「それは言いつこ無しですわ、マサト様」

開き直りやがった。

照れ顔で誤魔化す仕草が可愛いから許す。

俺に仕えるメイドと言っても所詮はお姫様だ。

勇ましく戦ってくれるなんて思ってたないさ。

メシが不味いとかベッドが硬いなんて言わないだけで御の字つてもんだ。

「その【魔法の盾】もチャージ回数は1日1回か？」

「はい、その通りでございますわ」

「オーケー、じゃあ次の挑戦は【炎の矢】がチャージされる明日に、だな」

「了解致しましたわ。では、時間のあるうちに今一度、毛根ガチャなどを――」

「回しません」

人の毛を何だと思っていやがる。

#12 「可愛さとキュートさを前面に押し出して！」

「よし、【魔法の盾】【炎の矢】コンボ作戦だ」

「はい！ 頑張りますわ」

俺は手に握った〈魔法の回復薬〉を見つめる。

どこから手に入れたかは聞くな。

グッバイ、マイ毛根フレンズ300。

靖国で会おう。

ファルフナーズの方を振り返ると、サツと目線を逸らされた。

いや、別に怒ってないから。

……そんなには、な。

「今回はゴブリン以外でも頑張ってみようと思うんだが、敵の大体の強さって分かるの？」

「ええ、大まかにでしたら私にでも分かれますわ」

「分かりやすく一瞬で俺に伝えられる？」

「でしたら、目安となるレベルではいかがでしょう？ 例えばゴブリンがレベル1で――

」

「いいね。モンスター見たらレベル素早く教えてくれる？」

「かしこまりました」

「よし！ いこう！」

「はいっ！」

部屋の押入れをスラッ！ 青白い巨人

「フロストジャイアント。レベル50」 スタンツ！

トイレのドアをパカン！ 石像の通路？

「ガーゴイルです。レベル20」 パタン。

玄関の扉をガチャリ！ 巨大な蛇？

「ワイアームです。レベル70」 バタン！

風呂場の扉をパタン！ 灰色の肌した大男

「トロールです。レベル8」

「これだ！ 行くぞ！」

「トロールは再生能力があつて多少のダメージでは怯みません！ お気をつけて！」

「オーケー！ 【魔法の盾】と【炎の矢】、速攻よろしく！」

「こちらへ駆け出てくるトロール。」

うわっ、思ったよりデケえ！  
とにかく1撃避けなければ。

回避専念だ！

俺も2mほど前進してトロルの攻撃に備える。

トロルが武器にしている枯れ木の棍棒は俺の胴体ほどもある。

ブロックすれば吹き飛ばされるか潰されるかだ。

見ろ、見ろ、見ろ。

トロルが振りかぶった！

「ガアーツー！」

ここだ！ 右へ！

ドカツ！

トロルの棍棒が石畳の床を殴る。

回避成功！

だが勢いよく飛びのいたせいで壁に体をぶつけてしまった。

「【魔法の盾】！」

俺の体に青白い膜のようなものがかかる。

よし、あと1撃避ければ――

ぶおんっ！

「うおっ!？」

振り下ろした棍棒をそのままに、左手の拳だけで俺を裏拳で殴ってきた！

咄嗟にしゃがんで、いや、床にへたり込んで回避。

体勢は崩れたが、これで俺の勝ちだ！

「【炎の矢】——！」

トロールが最後の抵抗で俺を握りつぶすために両手で掴んだ。

へへっ！ もう遅いんだぜ！

蒸発して消えな！

——あれ!? 凄い熱い！

全てが白く染まる中、魔法の盾がパリンと割れる音を聞いた。

ような気がした。

……

…

「ひっく、えっえっ、ぐすん、マサト様ー！」

見慣れた天井。

ベッドの上。

4度目の蘇生を果たした。

「うん……まあ、あれだ」

「はひ……ぐしゅ」

「【魔法の盾】より【炎の矢】の威力が遥かに上って事だわな」

「そのようです……」

「桁違いの威力だよ！ 熱いと思ったらもう死んだよ！」

「ひいっ！ すみませんすみません！」

「ひよつとして【炎の矢】は禁断の業なのではないか……初級魔法みたいな名前しやがって」

「使用を控えたほうが良いのでしょうか？」

「いやー、あれが無かったらまだゴブリン複数にすら勝てるかどうか」

「そうですわね……」



「もうちよつとこう、威力を加減できないのー？」

「ど、どのようになれば調節できますでしょうか？」

「え？ うーん……そうだな、勇ましく『ほのおのやー！』って言わないで可愛く言ってみる、とか？」

「可愛らしく、ですか？」

「そうそう、メイドとはいえお姫様なんだから可愛らしく女子力全開で、ほら」

「……マサト様は姫にどんなイメージを抱いてらっしゃるのですか」

あつ、微妙に呆れたという表情が漏れてるぞ。

「可愛さとキュートさを前面に押し出して、さあどうぞ」

「あつ、えつと……ほつ、ほのーのやつ」

「いいねいいね、その調子でもつとコケティッシュに！」

「ほーのーおーのーやあーっん（ハート）」

「グウーッド！ これなら行ける！ いけるよ！」

「……多分、無理だと思いますわ」

ファルフナーズ真顔。

「でつすよねー」

「……」

「……」

一応、翌日試してみた。

5回目の復活を果たすハメになった。

威力は増したそうだ。

## # 13 「びよんな事から」

『ぎゅーん ぱぱらぱっぱ、 っぱっぱー！ ぱぱらぱっぱすほほーん てれーん！』

「よし、レベルアップだ！」

「おめでとうございます、マサト様！」

5 回目の復活でベッドの上から起き上がる俺。

恥じらい詠唱作戦は全くの無駄ではなかったな。

「きちんと確認しておくかー。ステータス画面全部読み上げてくれる？」

「はい、お任せくださいませ」

「マサト・オコノギ 20 歳 身長 161cm 体重 80kg」

「む、1kg 痩せたな。苦勞してるからなー」

「特性【ニート】引き籠もりは卒業したけど表ははまだビクビク」

「うっせー」

「ひんっ、すみません」

「いや、ファルフナーズに言ったんじゃない」

「レベル3、ダンジョン童貞卒業」

「じゃかましい。だが生還した試しが無いのも確かだ……」

「命中点4+4（凄い金属バット）：大人並み」

「む、ステータスが変わった!? しかもバットさんがまた俺より強く……」

「打撃点3+4（凄い金属バット）：大人並み」

「技術点が命中と打撃に分かれたのか」

「防御点3+3（素敵なプロテクター）+2（良いマスクとレガース）：大人並み」

「防具も強くなってるな。よしよし」

「体力点6：サンドバッグ並み」

「それはタフなのか!？」

「持ち物：＜魔法の回復薬＞1個」

「貴重なフレンズと引き換えの品だ。大事に使おう」

「あとは毛根ガチャのマークだけです。 ……あら？」

「どうした？」

「マークがピカピカ光って——」

「よし、閉じなさい」

「え、でも」

「悪い予感しかしない」

「でも私、気になります！ えいつ」

「ああっ！」

「……！！ ——くっくっ！」

聞こえない聞こえない。

俺は耳を塞いだからな！

「あーあー聞こえないーい！」

諦めたファルフナーズは肩で大きく溜息をつき、口を動かさなくなった。ホツと一息だ。

何かある度に回してたらあつという間に禿げ上がるからな。

許せファルフナーズ。

ファルフナーズは正座してそっぽを向いてむくれ顔だ。

俺は両耳を塞いでいた手を離す。

あんまりキツく抑えてたせいで、耳がキーンとしてきた。

ファルフナーズが目を開けてチラツとこちらを向く。

「…………レベルアツプ特典、レア以上確定」

ボソツと呟いた。

くっ、コイツ！

聞かないようにしてたのに。

この姫メイドは！

どうやらセクハラが少々足りんようだな。

次のチャンスがあったら、ねちっこくしてやるからな！

…………

…………

…

「いい、一回くらいなら良いかな」

「流石マサト様ですわ！ 太っ腹！」

ああ、流されやすい俺を許して。

意気揚々とファルフナーズが虚空のボタンを押す！

「きつと良いものが出ますわ」

「だと良いな」

後頭部をさすりながら毛根フレンズ達との別れを惜しむ。  
生まれ変わってもきつと一緒になろう。

ドウルルル！

パパーン！

「来た！ 天使リーチアクション来た！ 高レア確定ッ！」

「期待度アップですわね！」

ドンツ！

『スーパーレア』

「イヤッホウ！ アイブ ゴンナ ドウ イット！」

「おめでとうございます！」

空中からふわりと降りてきたのは……

モール？

「幸運のうさぎヘアバンド、だそうですね」

「……」

「……？」

「またお前用じゃねーかッ！」

「ひいいんっ！ そ、そうなんですかー？」

何？ 釣りなの？

俺用の装備は見せ球の無限ソードだけなの？

実は当たりくじが無いって夜店のあれと同じ奴か!?



「ええと、装備すると魔法の使用回数が増える、だそうですわ」

「完全にファルフナーズ用だなー」

「で、でも私にこんな浮ついた装備はちよつと……」

「まあ流石にそれを無理に付ける、とは言わないよ」

「マサト様にしては消極的ですよわね？」

「だって……」

「……？」

「1日に2回死ぬ事になるし」

「か、必ず死ぬと決まったわけでは——」

「いやいや、俺の後ろから範囲攻撃してたら必ず巻き添えでオーバーキルだから」

「気をつけて使うようにしますわ」

「そーね」

す。  
ややブルーになった俺の気分を晴らそうとしたのか、ファルフナーズが陽気な声を出す。

「ほ、ほらっ、マサト様！ 似合いますか？」

もっふもふのウサ耳をつけたファルファナーズ。

確かにとても似合う……特に白いミニスカのプリンセス・ドレスとの相性が良い。

「語尾に……」

「はい？」

「語尾にびよん、と付けるんだ。それが正しい作法だ」

「絶対ウソですわ……びよん」

聞こえてるぞ。

びよん

## #14 「犬が二足歩行なら、こっちは一本足打法だ！」

「よし、使用回数が1回増えたし、本日2度目のアタックだ」

「かしこまりました。びよん」

「……」

「……びよん」

いや、意外と可愛いな。

しばらくそのままにいるのも良いか。

「よし、敵のレベルしつかり教えてくれよ！」

「かしこまりびよん！」

ちよつとおかしいが許す。

どこでも扉をカチャツ！ 幽霊？

「スピリット、レベル70です、びよん」

パタン

押し入れをスラリ！ 巨大な灰色トカゲ

「バジリスクです、目を合わせないでびよん！ レベルは80、びよん」

スパン

自室の扉をガチャリ！ 目玉のでかいの

「アイ・タイラント！ レベルは120ぴよん！」

バタン

廊下に出て居間の引き戸をスラリ！ 大きいウサギ？

「お、こいつ弱そう」

「ヴオーパル・ラビット、レベル70ぴよん」

スパン！

トイレの扉をカチャ！ 犬人間

「コボルド、レベル3ぴよん」

「チャーンズ！ いくぜ！」

「頑張りますですわ、ぴよん！」

オオーン！

コボルドが2匹こちらへ走ってくる。

あつ、犬人間のクセに2足歩行とは生意気な！

「【魔法の盾】を今のうちに！」

「はいぴよん！」

……ちよつとうつとおしいかも知れない。

まあいいや。

そつちが二足歩行なら、こっちは一本足打法だ！

半身に構えてフルスイングの準備。

出会い頭に一発叩き込んでやらあ。

「【魔法の盾】びよん！」

これで安心だぜ。

両脇からコボルドがなまくら剣で殴りかかってくる！

一撃は覚悟、フルスイングだ！

バカーン！

ぼよんっ！

左側のコボルドに脇腹から快打！

右側のコボルドから一撃をもらうも【魔法の盾】が防ぎきった。

思い切り振り抜いたので、体勢を立て直すまでもう一撃食らう。

だがまだ【魔法の盾】は抜けない。

チャンス！

振りかぶってコボルドの頭に面打！

ギャワン!

犬そのものの悲鳴をあげてよろけるコボルドをそのまま滅多打ち。

二匹目も完全に倒した。

もちろん一匹目も動かない。

「やった! 初勝利だ!」

「マサト様、おめでとうございます!」

【魔法の盾】の力があつたとは言え、純粋な近接戦での初勝利を収めた。

元ヒキニートの俺でもやれば出来るんだ!

……おや?

「何かコボルドの死体が光りながら消えていくぞ」

「アストラル体に戻るのです。このモンスターはアストラルの狭間で生み出された仮想生命ですから」

「ふうん……良く分かんが、本物じゃないって事か」

「そう言う事ですわ。あ、ぴよ、ぴよん」

苦笑した。

「いや、ぴよん付けはもう良いよ」

「ほっ……意外と疲れましたびよ……じゃない、ましたわ」

「お、コインと装備が残った」

「銅貨ですわ。トリピュロン王国のものです」

「へえ、初戦果ってわけだな。もらっておくか」

「何かに使えるのでしょうか」

「ひよつとしたら話の通じるモンスターが金銭交渉に応じるかも知れないからな」

「なるほどですわ」

「こっちのポロポロの剣と服は……やめておくか」

あのバッグったスポーツ用品店、何だっけ？

……ハマたん？

の、店主なら買い取ってくれる可能性はあるが。

これをアイテムバッグに入れるのを嫌がるに違いないからな、ファルフナーズは。

…

「じゃあ初めての探索、と参りましょうか」

「こ、怖いですわ……」

ジメジメとした通路は石を組み合わせたダンジョンだ。

暗い割には意外と見える。

明け方の太陽が昇る少し前って感じた。

警戒しながら50mほど直進すると、アーチ型の木の扉に突き当たった。

「一本道だったな。さて、扉の向こうは通路か部屋か」

「お気をつけ下さいませ、マサト様」

「もちろんだ。モンスターが出たら、またレベル教授頼むぞ」

「かしこまりました」

扉に耳を当て中の音を探る。

何やら弦楽器じみたピンポパンと心地良い高い音が聞こえた。

「楽器の音が聞こえる。これは話を通じるタイプのモンスターかも知れない」

「お気をつけ下さい。それだけに罠を張っている可能性がありますので」

無言で頷きを返す。

確かにその通りだ。

慎重にドアを開けよう。

ガチャリ、ギギギ……

素早く身を伏せる！

巨大な蛾の巣!!

「ジャイアント・モス、レベル25ですぴよ……ですわ」



意外と気に入ったんじゃないか、ぴよん付け。

ギツ、バタンツ！

「あれ？ 確か楽器の音がしたんだけどなあ」

「マサト様、ひよつとしてですが、マサト様自身が扉を開けたからではないでしょうか？」

「あ、そつか。ダンジョン内でもダンジョン・オープナーの力で更に別のダンジョンに、つて事か」

「ご明察の通りですわ」

「じゃあ悪いがファルフナーズ、開けてみてくれるか」

「かしこまりました」

ファルフナーズが一生懸命に扉を開ける。

腕力無いなー

流石お姫様。

ギツギツギツ……

ポロン、ポポン

「下半身が鹿の男達だ。……うつ、何か力が抜ける」

なぜか疲労感に似た体の重さを感じて腰が落ちた。

「サテュロスですわ！ レベル9、楽器で魔法の音楽を操る好色な半獣半人ですわ！」  
「ぐっ、じゃあこの力が抜けるのは、その音楽のせいか……だるう……」

「マサト様、しっかりしてくださいませ！」

そうは言われましても。

何かもう眠いような。

どうせ復活できるし、楽に殺してくれるならこのままでも……

5匹のサテュロス達が鹿みたいな獣の足でステップを踏みながら近づいてくる。

「マサト様、このままではやられてしまいますわ！ 彼らはとても残忍です！」

うえ、ロクな殺し方してこない可能性があるな。

「起きて下さいませ！ このままではマサト様が残忍にグチヨグチヨのベロベロに！」

××が○○に！」

やめて、生々しい予告やめて。

やばいぞ、何とかしなくちゃ。

何とか……でも体が重い。

こっちは力が入らない。

相手の技を止めるか、弱点を突くしか無い。

音楽を止め……

半獣半人……

好色……

そうだ！

## #15 「違います！ サテュロスです！」

「よし！ ファルフナーズ、お前のスカートをめくれ！」

「はい!?!」

「サテュロスの弱点、好色さを利用するんだ」

「ななな、何をおっしゃるのですか、マサト様！」

「は、早く……音楽を止めないと、体に力が入らない」

「そんなはしたない事できませんわ！」

「頼む……無残な殺され方は嫌だ……」

「……………ッ！」

へたり込む俺。

ジワジワと迫り来るサテュロスと倒れる俺を交互に見やるファルフナーズ。

ドレスのスカートの裾に震える手を添えた。

「こっ、これもマサト様のためーえー！」

ファアサツ！

ご開帳!

今日のパンツは桜色!

部分レースで少し透けている所もセクシー!

白ニーソとガーターベルトのコーディネートも最高だ!

元気でたあ!

ズ。  
スカートの裾を捲り上げたポーズのまま、目を瞑り顔を右にそむけるファルフナー

ふるふると羞恥に震えながらも耐える姿もまたいじらしい。

「ど、どうですか、マサト様」

「素晴らしい。最高に綺麗だ、ファルフナーズ」

「ちっ、違います! サテュロスです!」

「そうだった」

サテュロスのほうを振り返ると、ニヤニヤ笑いながらハープを引き続けている。  
あれ？

好色な生物がこのファルフナーズの神々しい姿を見て無反応とは……

……

…

「あ、そっか」

「??」

「悪い。お前の姿、モンスターには見えないんだった」

「はッ!? あ、あ、あ、ああ……ッ!」

涙目のまま震え声のファルフナーズ。

「い、いやああーんッ!」

【炎の矢】が全てを消し去った。

見飽きた天井。

6度目の復活。

「ぐすつ、マサト様のバカあ〜!」

あ、はい。

すんません。

一時間、口をきいてくれなかった。

ファルフナーズがぶりぶり頬を膨らませて虚空を指差す。

まだ怒ってるのかー

だが、こちらをジト目でチラ見してくる。

ははあ……

恥ずかしい思いをさせた代わりに、ガチャを回せつて言いたいんだな。

うくん……

まあ、今回は仕方ないか。

「じゃあ、1回だけな?」

ポチッ

後頭部に電流が走るような痛み！

あああ！

さらば、マイ毛根フレンズ！

ドウルル、デン！

『コモン』

「うおっ、またドアか」

扉が俺の真上に降り注ぐのを飛びのいて回避した。

「必ず俺の真上に落ちてくるのは、殺す気満々って事か!？」

くっそー、ハズレアイテムにももっとバリエーション用意しておけよな。

…

あれ、まだムスツとした顔のまま人差し指を立ててるぞ。

「おいおい、1回で十分だろ」

「……」

ぶくっとなら顔を膨らませる。



こりや相当ご立腹ですなー

ゴリつとガチャを回してぶくつとスネる。

駄洒落か。

「あ、あと一回だけな?」

「とおー! ですわ」

ドウルルル、デン!

『アンコモン』

「ぐぬ、またハズレかあ」

ぱらり、と紙切れ一枚だけ降って来た。

「なんだこれ?」

「魔法の巻物でございますわ」

∴

「ええと、アイテム説明文によりますと……武器エンチャントの巻物だそうで」

「エンチャント?」

「魔法を付与して強化する事ですわ」

「オーケー、捨てよう」

「何ゆえですの!?!」

「金属バットさんがまた俺より強くなってしまう!」

……

…

「ゴホン、じよ、冗談だよ」

「……」

半信半疑、って目で見つめられた。

「で? どうやって使えばいいんだ?」

「巻物を強化したい装備に張りつける、のだそうですわ」

「ふうん、ほらよ」

ぺちっ

金属バットさんに向かってぞんざいに巻物を張りつけた。

ボウッ! と音をあげながら巻物が青白く燃え上がる。

「うおっ、びびった!」

指の先を火傷したじゃないか!

「まあ大変ですわ」

「水で冷やさない——と!」

ぱくっ

「ふあ、ファルフナーズ!」

反射的にか、ファルフナーズが俺の手を握りその火傷した指を咥えた。自身の唾液を俺の火傷した指に塗るかのように唇で優しく包んでくる。

その暖かくぬめる感触に陶然ととしつつ魅入ってしまう。

俺の視線に気付いて唇を離すまで、どれくらいの時間だったか。

ほんの3分も経ってないはずなのに。

一生の思い出になった。

自分の行為に急激に羞恥心を覚え、ファルフナーズが視線を外し手を離れた。

「ま、まあっ、申し訳ありませんっ! 私ったら、はしたない事を——」

「あ、いや、なんだ。ありがとう……」

……

∴  
妙な空気になった。

天使が舞うような沈黙に包まれる。

いかん、こう言うのは苦手だ。

「あー、その、済まなかったな。悪気は無かったんだが」

無かったんだが、スケベ心はあったな。

「もう気にしておりませんわ。ガチャも2回まわして頂きましたし。ふふっ」

誤魔化すように笑って許してくれた。

俺の毛根達よ、君たちの犠牲は正しく報われたのだ。

「あ、でもやつぱり後1回だけ……」

「勘弁してくれー!」

甘酸っぱい!

胸がわさわさするっ。

∴

「それで、金属バットさんはどうなった?」

「あ、はい、では今、ステータス画面を確認致しますわ」

ファルフナーズが自分にだけ見えるステータス画面を操作する。

俺から見たら虚空に向かってパントマイムをしているようにしか見えない。

「まあ、銘が付きましたわ」

「めい? 銘って何ぞ?」

「武器などの道具に刻まれる固有の名前、あるいは修飾語ですわ」

「ほほー、銘が刻まれるとどんな効果が?」

「その銘に相応ふさわしい道具になりますわ」

「マジか、楽しみだ。金属バットさんにどんな銘が付いた?」

「はい、【知的な】素晴らしい金属バット、命中点6、打撃点6となりました——」

「……」

「……」

「バットが知的になっても意味が無ええええええ!」

「ひいつ、す、すみませんっ」

「いや……ファルフナーズに言ったんじゃあ無い」

「よくよく見れば何とも知性あふれるお姿に……」

んなバカな。

銘なんて生意気な。

しかも地味にまた強くなってるし

「ははは、バットなんて振り回してボールを叩くだけのモンさ。知的なんてちゃんちゃら可笑しい」

『無礼な。我の力は使う者の能力次第だ』

∴

「ファルフナーズ、今何か言った？」

「いえ、私ではなくその——」

『我だ。バットである。全く、我が主ながら残念な頭脳だ』

∴∴∴

∴

ば、バットが………！

「しやあああべったあああ！」

## # 16 「千夜一夜物語（恥ずかしい）」

「よ、よし、医者に行こう。俺の頭がおかしくなったらしい」

「マサト様、落ち着いてくださいませ。確かに私の耳にも聞こえましたわ」

『姫の言う通りだ。そもそも我が主の頭がおかしいのは元からだ』

「バットが、金属バットさんが一丁前に俺をデイスつてるぞ……」

「これが銘の効果、ですわ」

『然り。エンチャントの効果を得て、遂に私は自我を得た』

「じ、自我……?」

「エゴ・ウエポンですわ。トリピュロン王国にも知性ある道具の伝承はいくつも存在し

ますわ」

「マジかよ。すげーな」

「私も目にするのは初めてございますわ。実在したのですね」

『さあ我が主、我に相応しい名を付けるが良い』

「もう銘はあるんだろ」

「銘は道具としての名前に付くもの。名は持ち主と道具で認め合う契約の名前ですわ」

装備名と通称、みたいなモンかな……？  
よくわからん。

「そもそも銘だとか名付けだとかして、何か意味あんの？」

「確か、持ち主との絆が深まり更に強力な武器に——」

窓からバットを、ぽいっ

「あああああ！ マサト様、なんて事を！」

『主、時に落ち着け。話し合おう』

「うっせー、必死に頑張ってるのは俺なのに、何で金属バットさんばかり強くなるんだ  
！」

ファルフナーズが駆け出して、庭へ金属バットさんを取りに行く。

「もうー マサト様ったらー」

おや、メイドっぽい言葉を言うようになったじゃないか。

すると俺の今の態度はワガママ貴族か。

いや、もうだつてさー。

やってられない、つつーの。

マジで。



部屋に戻ったファルフナーズが金属バットさんを壁に立てかける。

『我が主よ。私の力は主次第、いや、我自体が主の一部なのだ』

「意味わかんねー」

『手足のようなものだ。いくら器用でも、己の手に嫉妬する者はおるまい？』

「ま、まあな……」

『私は主の影、主無くしては存在自体が消ゆる。ただの金属バットに戻ってしまうのだ』

「サーバーと端末、みたいな関係って事か」

『然り。私の知性は別の角度から見た主の人格、と解釈すれば良いのだ』

「俺はそんな変なしゃべり方しねーけどな」

『私の知性は最も良く使われていた時代の主の希望を根源にしている故』

「俺、そんな変な野球少年だったっけ？」

『いやいや、その後の頃の……』

「チャンバラごっこ時代か」

言われてみれば、金属バットを振り回してチャンバラしてた記憶がある。

一人で。

ゴザルゴザルと武士気取り。

「なお恥ずかしいわ！」

ああああ！

床に倒れこんで顔を手で覆い足をバタつかせて羞恥心に耐えた。

そんな根源的な黒歴史がコイツの人格ベースになっているとは！

「よし、やっぱり捨てよう」

部屋の隅へ、ぽいっ

『主、落ち着け。全力で落ち着いてくれ』

「そ、そうですわマサト様……誰しも子供時代はひょうきんなもので……ふふっ」

「うわあああ！」

「まっ、マサト様あ！ ごめんなさい、ごめんなさい！」

発作的に扉を開けて飛び出そうとした。

ファルフナーズが抱き付いて俺を引き留める。

扉の向こうにはダンジョンが広がっていた。

「くっ、この屈辱から逃げる事もかなわないとは」

「お許しくださいませ、マサト様」

「耳まで真つ赤だ！ メイドが主人を笑うとはなー！」

「ああ、本当に申し訳ありません。どんな事でも致しますからお許しを」

と、言つてファルフナーズは口に手を当てる。

言質、頂きました。

ニヤリ

「悪い顔なさつてますわ、マサト様。どうかお手柔らかに……」

言いながら早くもスカート裾や胸元を気にしはじめている。

「今日の俺は一味違うぜ。この俺が味わつた恥辱を倍にしてファルフナーズも味わうのだ」

「ま、マサト様あくし！」

「そう、ファルフナーズがこれまでに経験した最も恥ずかしい思い出を教えてもらおうか」

「でしたら先ほどの……」

「いや、あの程度では駄目だな。これは俺が満足するまで続く」

「ひ、ひいーん！」

……

…

ファルフナーズの恥ずかしい話は夜更けまで続いた。

トリピュロン王国の文化に少し詳しくなった。

「では……私が7歳の頃、巫巫女とは魔法で巫女に変身して、魔法のステッキで人々を癒す魔法を使うものだと思いついて——」

「ほうほう、既に面白いな。続きは？」

「あの、それで……」

「ん？ 続けて？」

「サ、サインの練習などを」

「わはははは！ 書いて！ そのサイン書いて！」

…

翌日、昼まで顔を合わそうとしてくれなかった。

…

「さあ、ダンジョンいこうぜ。歌って踊れて目から七色のビームが出る魔法のプリンセス」

「いやあ——！」

顔を手で覆って30分固まられた。

「おあいこ。」

# #17 「ほめて無いんだけどね？」

「よし、ダンジョンだ」

「……」

「悪かった。もう言わない。許せファルフナーズ」

「……マサト様のバカあ」

可愛いスネ方だ。

恥ずかしい話をお互いに明かしあったのだ。

俺のほうが根掘り葉掘り聞きだした気もするが。

思い出として都合よく美化してしまうぜ。

『ダンジョンも良いが、我が主よ、我に名付けをだな……』

「忘れてた。でもピンと来る名前が無いから、もう少し考えさせてくれ」

『やれやれだ』

どんな名前にしてやろうか。

バットン將軍、撲殺バットン齋、バットばつ丸……

名前で性格か何か変わるのかね。

「マサト様、ダンジョンに集中してくださいませ」

おっと、そうだそうだ。

出会い頭に死にたくはないぜ。

「じゃあいつものようにリセマラ作戦だ」

「かしこまりましたわ」

どこでも扉をガチャ

あれ？

「モンスターが居ない」

「まあ本当ですわ」

慎重に入場して辺りを見回す。

やはり何も居ない。

ちよつといつものカビ臭い感じとは違う匂いだが。

「あれ？ この剣と服は先日のコボルドの遺品か？」

「確かに見覚えが……」

先に進むと、やはり見覚えのあるアーチ状の扉に当たった。

ただしポロポロに焼け焦げて崩落している。

部屋の中が丸見えだ。

「完全に同じ所だな。コゲ臭いのが何よりの証拠」

『激しい戦いであつたな』

「いや、お前何もしてねーから」

『酷い』

「木の扉がこれだけ焼け崩れるなんて、ファルフナーズの『炎の矢』、威力強すぎ」

「それほどでもございませんわ」

「いや、褒めて無いんだけどね?」

また頬をぶくつと膨らませてそっぽを向いた。

何だこの可愛い生き物。

その内、押し倒してしまえうだ。

部屋に入ると消し炭状態の遺体が複数あつた。

ちよつ、ま……

じゃあこのうち一つは俺の……!?

考えないようにしよう。

部屋の向こう側の壁にも同じような扉がある。

そちらは消し炭になっていないのが不思議だ。

扉に近づいて調べてみよう。

ジャリッ

「あつ！ ファルフナーズお前、俺を踏んだな！」

「えつ、ええつ!? どういう事でございますか？」

成仏してくれ、前の俺の体。

だから少しづつ痩せていくんだな……くわばらくわばら

「死ねば皆仏、という言葉が俺の国にあるが……」

「……はい!？」

「6回死んでる俺は、既に神なのかもしれない」

『我が主よ、発想が飛躍するにも程があると思うのだが』

「今日のマスオ様は一段と訳が分かりませんわ」

「つて、普段から訳分からんと思ってるって事だな」

睨むようにファルフナーズの方へ振り向く。

ついつと目を逸してすつとぼけられた。

にやろう、帰ったら見てろよ。

小声で悪態をつきながら扉に触れる。

「きやあつ！」



「どうしたファルフナーズ?!」

「いえ、突然目の前に〈第一階層クリア!〉という文字が」

「ファルフナーズにだけ見えるステータス画面か」

「いきなりでしたので驚きましたわ……心の臓が止まってしまいかと」

「心臓マツサージなら任せてくれ」

わきわきと差し出した手をペチンと叩かれた。

「もう! マサト様ったら! それより第一階層突破おめでとうございます」

「おお、そうだった。もつと褒めてくれ!」

『これも我の力あつての事』

「お前さつきと言う事逆じゃねーか」

だが、なるほど。

扉に触れたことで第一階層とやらを突破したと認識されたのか。

前回は相打ちだったからな。

「いやー、ようやく達成感を得られたな。というか、ここ階層制だったのか」

「あつ! マサト様、階層突破ボーナスがあるそうですわ」

「ほほー、何をくれるんだらうな。武器か? 次の姫か?」

「まあ、私が居りますのに、次の姫なんて来るはずがありませんわ!」

「いやいや、どんどんメンバーが増えて戦力増強、みたいな展開とか素敵じゃん？」  
『我が増えたではないか』

床に転がす、カランコローン

『酷すぎる』

「もつとこう！ 美少女に囲まれてキャッキャウフフ的な、さー！」

「フケツですわ、マサト様……」

呆れ顔のジト目でにらまれてしまった。

階層突破に浮かれて、己を解き放ち過ぎてしまったかー

「そ、それより突破ボーナスって何なんだ？」

「そうでしたわ。では、えいっ」

ファルフナーズが虚空に向かって人差し指を突き出す。

俺には見えないステータス画面のボタンをタッチしたのだ。

カラン、コローン

鐘の音と共に、子供天使が2人出てくる。

2人で四角いタワー型PC並みの大きさの箱を投下――

いや、投げつけてきた！

ゴッ！

片足で飛びのいて、シエーのようなポーズで何とか回避した。

「殺す気か！ お前ら本当は悪魔だな」

転がしておいた金属バットさんを拾ってジャンプ攻撃。

くそっ、逃げられた。

「次にあいつ等が出てきたら速攻で一発殴りつけよう……」

「マサト様、子供相手ですから手加減を」

「できるかー！ いくら俺が復活できるからってあんまりだ」

『殺伐とした天使である』

まあ本物の天使とは限らない。

ただの映像的エフェクトである可能性もあるけどな。

「んで、これは何の箱だろう？ 落とされて壊れてないかな」

「ただ今、説明文を読み上げますわ」

「頼んだー」

「ええと……何でも両替機、正式名称エクストラ・エクステンジャー・エックス。通称

ゼクセクス、だそうです」

「無駄に洗練された無駄なネーミング・センスだな。両替機で良い、両替機で」

「かしこまりましたわ。両替機と呼ぶ事にしますわ」

「両替機と言うからには……よし、この銅貨を換金してみよう。何になるかな？」  
「銀貨になると思いますが」

前にコボルドを倒したドロップ品の銅貨を取り出す。

40枚ほどあった。

重くて邪魔臭かつたんだよなー

四角い箱型の両替機は上部に漏斗（ろうと）のような部分がある。

胴体部にはディスプレイ画面のような部分もあり「ヘイラツシエイ」って書いてある。  
何語だ。

下はスロットマシンの出口みたいになっている。

ここから換金されたコインが出てくるんだろう。

「銅貨投入！ わはは、貴重な銀貨になれい！」

チャリチャリと音を立てながら銅貨は両替機に飲み込まれた。

おや？

ディスプレイ画面に表示が。

『銅貨46FFZを換金します。 1) 銀貨4枚 2) 3320円』

なっ!!

「すげえ！ この両替機、円にも換金してくれるのか！」

「ただの両替機ではなく、魔法の両替機なのですな」

「これはマジでボーナスアイテムだなー よし、もちろん円だ！」

デイスプレイの円の所に触れる。

『毎度有難うございました』

下から千円札4枚と貨幣で320円が！

「今日から俺は大金持ちになるかもしれない！」

「おめでとうございます、マサト様」

『我が主に相応しい財源を得たな』

だが……

いや、でも。

でも、だよ？

どうかされましたか？ マサト様

「これってさー……」

通貨偽造の犯罪じゃね？

## #18 「総額おいくらハウマツチ」

「よし、お金を鑑定だ」

「はいっ」

ファルフナーズに紙幣と貨幣を手渡す。

小首をかしげるお姫様。

ツヤのあるピンク髪がさらりと肩から流れ落ちる。

「マサト様、私お金の真贋しんがんは分かりかねますわ」

「なんだ、無理かー。メイドなら出来ると思っただのに」

「マサト様の世界のメイドは優秀ですのね……」

「ははは、そんなまさか」

ポカーンとした表情になるファルフナーズだった。

「あら、マサト様、やはりこのお金は本物だそうですね」

「んん？ どこで判別できた？」

「両替機のアイテム説明の文章に、転移魔法で物質同士を入れ替えているので金銭が不

当に生産される事は無い、と」

「うわ、難しっ。分かりやすく頼む」

「はい、今の換金ですと、どこかで誰かのお金がマサト様の銅貨と入れ替わったので、この紙のお金とコインは両替機が魔法で作り出した訳では無いのですわ」

「分かったような、分からないような……まあ本物なら良いや」

『本物だ。その千円札の番号は唯一のものだ』

くっ、バットに紙幣の真贋を教わる曰が来るとは！

「ま、まあ偽造品でなければ、細かい事は良いよ」

ピーン！

突然気が付いた。

「ファルフナーズ、さつき〈何でも両替機〉って言ったよな？」

「はい、仰せの通り正式名称が〈何でも両替機〉ですわ」

「オーケー、じゃあコインや紙幣じゃなくても換金してくれるかも知れない」

「まあ！ そんな所にお気づきになるとは、流石マサト様ですわ」

『意地汚さの賜物だな』

「ほほう、いいだろう。ならば、まずはお前から換金してやるぜ！」

『主、落ち着け。死ぬほど落ち着け』

落ち着いてるさ。

キンキンに頭が冴え渡っている。

「換金のボタンさえ押さなければ交換される事は無かった。

つまり、物の価値を計るだけならタダってわけだ！」

金属バットさんを両替機の上に乗せる。

出た出た。

『【知的な】素晴らしい金属バット を換金します。 1) 金貨100000枚 2) 1億

円』

「おっしやあ！ 大金持ち確定！」

「マサト様！ 落ち着いて！ 落ち着いてくださいまし！」

『なんたる屈辱』

「くくく、分かっているな、金属バットさん。俺がこのディスプレイに触れればお前は1

億円だ！」

今、金属バットさんの命は俺の指先にかかっているのだ！

『主、話し合おう。我々には会話が必要だ』



「冗談だ。売らない売らない。お前がどれだけ希少か知りたかったただけだ」

「ははは、誰に主導権があるか思い知らせたぜ。」

「我ながら悪い性格をしている。」

「じゃあ罪滅ぼしに、俺自身を……お値段公開！」

両替機の上の漏斗に俺の手を載せる。

どうせ銅貨3枚とか言ってくるんだろうな、ここは。

お約束お約束。

そこでクスリしてもらってめでたしめでたし。

『マサト・オコノギ を換金します。 1) 金貨70枚 2) 691074円』

「——よし、この両替機壊そう」

「マサト様!? どうか冷静に」

「落ち着いてるぜ。たかが両替機のクセにおちよくりやがって」

「それほど悪いお値段でも無いように見えますが……」

「値段の問題じゃない。これは語呂合わせでロクデナシと言ってるんだよ」

「ま、まあ……」

『主にしては勘が良い』

ファルフナーズは下を向いて震えている。笑いを堪えているのがバレバレだ。

「くっ、ファルフナーズ、笑っていられるのも今のうちだ。次はお前の番だ！」  
「えっ!?! いっ、いやあああ!」

ファルフナーズのか細い手を握って両替機の上にぺたっ!

「み、見ないでええええ!」

「わはは! さあお姫様の時価総額おいくらハウマッチ!」

『お金で買えない価値がある。プライスレス。でも、換金できるものはこの両替機で』

ガンッ!

蹴っ飛ばしてやる、蹴っ飛ばしてやる。

「汚された思いですわ……マサト様、あんまり過ぎます」

「悪い悪い。どうせお姫様だから国1個分の値段は出してくれるはずだと思って」  
許せませんわ、と連呼しながらファルフナーズがポコポコ叩いてくる。

もうちよつと肩側を頼むぜ。

「さて、じゃあ通路にあったポロボロのゴブリン剣と服も試してみるか」

歩きながらも俺の背中をポコポコ叩き続けるファルフナーズが可愛い。

…

意外、あんなボロボロだというのに全部で銅貨10枚になった。

『銅貨10FFZ を換金します 1) 銀貨1枚 2) 700円』

「銅貨の質によって目減りするのな。換金率がバラつく」

「はい。なかには混ぜ物をして水増し偽装する犯罪組織もありますので」

「ふーん……あれ？ そう言えば、このFFZって何だ？」

「さ、さあ……私には分かりかねますわー オホホホー」

ん？

ファルフナーズの言動がおかしいぞ？

これはウソをついてる声だぜえ〜

「ファルフナーズ、隠し事をするとは許せないな」

「何のことだか、さっぱりなのですわー」

両手の指先同士をちよこちよこと合わせながら目を背ける。

流石、純粹無垢なお姫様。

ウソがつかない。

「ファルフナーズ、俺の目を見て、正直に答えよう？」

「……くくう。実は……」  
「実は？」

「私が生まれた時に、貨幣鑄造ちゆうぞう技術が進歩しまして」

「ふむふむ」

「大層お喜びくださったお父様が、記念にと……」

「ほうほう？」

いや、もう分かったけどね。

笑いを堪えねば。

「新しい王国の貨幣単位を私の名前から、ふあ、ふあ……ファルフナーゼニーと——」

「ぶふーッ！」

我慢できねえ！

お金の単位が自分の名前とは!!

「がはは！ 自分の名前がお金に!! 街中で連呼されまくり!!」

「ひどいですわ！ ひどいですわー！」

ファルフナーズが顔を真っ赤にしながらぺちぺちと叩いてくる。

びゃーびゃーと涙目で。

「マサト様のおバカバカ！ 私がとても恥ずかしい思いをしていますのに！ してますのに！」

「わ、悪かった。つく、笑わないからそれ以上何も言うな」

必死に笑いを堪えて平静を保とうとするが――

「親戚の叔父様叔母様が訪れる度に、ご利益ご利益と頭を撫でられる私の気持ちが一！」  
「ぶふーッ！」

俺を笑い死にさせたいのか。

これ以上は勘弁してくれー

お姫様、愛されすぎ。

## #19 「君の罨」

「よし、第2階層にチャレンジだ」

「マサト様のおバカ、マサト様のおバカー」

人の話を聞けって。

……と、言っても無理か。

大笑いしてしまったからな。

なだめるのに30分ほど費やした。

って、どう見てもまだなだめきれない。

帰ったらガチャ回される事になった。

ああ、この探索が永遠に終わらなければ良いのに。

「さあファルフナーズ、次の階層への扉を開けてくれ」

「……マサト様のおバカ、ですわ」

ごめんて。

扉をくぐると昇り階段だった。

一段一段を慎重に昇る。

「なあー ファルフナーズー、もう許してくれよー」

「とてもとても辱められましたわ。ですが一時忘れまますので、ダンジョンに集中してくださいませ」

一時的に、か。

よし、こうなつたらダンジョン攻略に夢中にさせよう。

それで忘れてもらおうしかない。

階段を何十段か昇ると再び同じようなアーチ状の扉に出くわした。

「さて、俺とファルフナーズ、どちらが開けるべきなんだろう」

「私からでしょうか。マサト様がお開けになると、どこに繋がるか分かりませんから」

「そだなー じゃあファルフナーズ頼んだ」

「かしこまりましたわ」

ギ、ギ、ギイ……

ゆっくりと開いた扉の向こうは――

「別のダンジョンか？ 壁と床の材質が全然違うし、じめじめした感じとすえた匂いが無い」

「本当ですわ」

「モンスターが見当たらないな。こりやラッキー」

ピンツ

ヒュヒュンツ！

「ん？ 足に何か……」

「きゃあつ！」

カンツ！ カンツ！

べちべちっ

「いててっ！ 後頭部に何か当たったぞ」

「矢！ 矢ですわ！」

「何が嫌だった？」

「違いますわ！ 弓矢の矢が私に！」

ファルフナーズが指差した足元には確かに矢が転がっていた。

彼女の無敵バリアー的なモノに弾かれて、俺の後頭部に跳ね返ったのか。

「何て恐ろしいのでしょうか」

「お前は無敵なんだから気にしなくていいのに」



「そういう問題ではありませんわ！ 本当に怖かったのですから」

「むしろお前から跳ね返った矢で、後頭部すりむいた俺のほうが痛かったのに。プロテクター類は全部前面からの防御しか出来ないんだからな」

…

「ん……？」

「どうかされました？ マサト様」

「こ、後頭部に擦り傷、だど!？」

「それが何か……」

「俺の貴重な毛根フレンズさん達が！」

「は、はあ……」

「そうだ、これがあった！」

「魔法の回復薬！ 急いでこれを——」

「マサト様、落ち着きください！」

「キュポン！」

「ニユルニユル」

「謎の触手がごんにちわ。」

「あああ！ 瓶の蓋を〈開けて〉しまった……済まない、俺の毛根達」

俺が何かを開ければ、そこは小さくてもダンジョンの入り口。

それがダンジョン・オープナーの能力だという事を忘れていた。

貴重な回復薬はニユルニユル触手を癒して潰えた……

崩れ落ちるように床に手を着いてしまう。

「もう駄目だ。この世の終わりだあ……」

「マサト様、嘆くのは戻ってからですわ」

戻ったらガチャ回されてもつと酷い事になるんだけどね？

主に君のせいだ。

だがファルフナーズの言う事は最もだ。

今の俺に振り返るなんて贅沢は許されていない。

「何よりマサト様、ダンジョンで追った傷であれば毛根と言えど死亡と復活時に戻るのでは？」

「あそつか、それもそうだな。でも、万が一で毛根だけは復活しない、くらいの意地悪をされてそうだがな」

「それでしたら、何度も焼け死んでおられますし、そもそも最初に頭部を破壊——」

「言うな。皆まで言うな」

…

「よし、更に慎重に進むぞ。どうやら2層目からは罨も張り巡らされているようだからな」

「かしこまりましたわ！」

『良い心がけだ。主にしては』

にやろう、一言余計なんだよ。

カチツ

「まあ、今何か私の足元で」

ぶおんっ！

「巨大岩石だ！ 避けるろ！」

壁に張り付いて姿勢を低くする！

「えっ？ 巨大がん——」

「ああっ！ ファルフナーズーツ！」

ファルフナーズが岩石に弾き飛ばされた！

振り子の玉のように俺の身長より大きい岩石が突然飛来したのだ。

ひと往復すると、振り子岩石は霧のようになんとも消えてしまった。

「ファ、ファルフナーズも消えてしまった……」

ででうででうででう

「何だこの音、うおっ!？」

ダンジョンの床からファルフナーズが「生えてきた」。

「……」

「……」

「おかえり」

「ただいま、ですわ」

「残機いくつ?」

「はい!？」

「お前マジで無敵だな。痛くないの?」

「全く。岩と壁に挟まれたと思っただ途端、床からせり上がりつつ来ましたわ……」

『怪我が無くて何よりである』

「と、ともかくファルフナーズも十分注意してくれよ。いざと言うときはぐれたりしたら事だからな」

「申し訳ありません。重々気をつけますわ」

…

カチツ、バタン！

「ん!? ファ、ファルフナーズ！」

「マーサトー様ああー！」

床が跳ね戸のように開いて、ファルフナーズが深遠に吸い込まれていった。

ででうででうででう

「……」

「……」

「おかえり」

「ただいま戻りましたわ」

…

「おっと、ここにトラップを発動させる鉄線が張つてある。絶対足を引つ掛けるなよ？」  
「分かりましたわ」

「きゃっ！」

石畳のつなぎ目につまづくファルフナーズ。

もちろん倒れた先には鉄線が。

もう助ける気にならない。

ゴオッ！

天井の石畳が丸ごと一瞬で降りてきてファルフナーズを押し潰した。

ででうででうででう

「……」

「……申し訳ありませんですわ」

「おかえり」

「ただいま、ですわ」

「天井つて昨日食べたじゃん？」

「は、はい……!? それが何でしょうか？」

「あれ、同じ海老の天ぷらが2個乗ってたじゃん？」

「ええ、大変美味でございましたわ」

「その事から、同じボケを繰り返す事を天井って言うんだよ」

「……」

……

…

「……今日からお前のあだ名は天井プリンセスな」

「ひいーん」

サクサク引つかかるからな。

罨に。

## #20 「空も飛べるはず」

「よし、ちよつとさー」

「はい？」

「ファルフナーズが1人で先まで歩いて行って、全部のトラップ引っ掛けて来いよー」

「そ、そんな恐ろしい事、無理ですわ！」

「この期に及んでまだ怖いとか言うか！ 無敵の天井プリンセスめ」

「怖いものは怖いのです！ マサト様こそ不死身のダンジョン・オープナーでございませわ！」

「いや、俺がトラップで死んでダンジョン入り直したら、罠も全部復活するだろう」

「くうっ……確かにその通りですわ」

まあ温室育ちのお姫様に、あまり無理強いもできないかー

よし、ハハハはひとつ。

中腰になってファルフナーズに背中を向ける。

「さあ、おぶされファルフナーズ」



「なにゆえですの!？」

「お前は歩くトラップ発動機だ。ならば俺が背負ってしまえば良い」

合法スキンシップ。

ばっちこーい!

「そ、そんな……私、流石に恥ずかしいですわ」

「駄目かあゝま、いいや。重くて疲れそうだし」

「重くありませんわ」

「いやいや、いくら痩せ型小柄な女の子と言ってもね？」

「重くありませんわ!」

「あ、うん。軽いね。軽い軽い。」

「重くありませんわったら!」

「はい。軽いです。背負ったら空も飛べそう」

異世界でも女性に体重の話は厳禁。

ひとつ賢くなった。

∴

「ホームセンターで台車かカートを買ってくるべきか」

「台車？ カート？ ……それはどんな物ですか？」

「荷物乗せる手押し車だ。まあ乳母車代わりだな」

「ますますもつて恥ずかしいですわ！」

「ははは、どつちがメイドか分からんな」

「第一、荷車で運ばれても罨を回避できませんわ」

「それもそうだなー 単に絵面が面白いと思っただけだしな」

頬をぶくつと膨らませてポコポコ叩かれた。

王様ー、お宅の娘さん、最近暴力的ですよー

その内ダンジョン慣れして野生化するに違いない。

…

カチッ

「また踏んだな」

「本当に申し訳ございません…」

これはアレだな。

俺のダンジョン・オープナーの能力みたいに、呪いに近い何かかも。

あまり気負わせないようにしてやらないと、またトラウマになっってしまうかもなー

「あんま気にすんな。それより罨はどこだ」

「向こうから何か音が聞こえますわ」

何やら地鳴りのような低い音がだんだん大きくなる。

ヴーン、ヴーン

虫の羽ばたきに似たこれは……

「アラームですわ！　すぐにモンスターが現れます！」

『主、我を構えて敵に備えようぞ』

「よし、ファルフナーズ【魔法の盾】を頼む！　次にいつでも【炎の矢】を出せるようにな！」

「かしこまりましたわ！」

ドストドスツ

鈍い足音が聞こえてきた。

「あの姿は確か——」

【魔法の盾】を発動させたファルフナーズが叫ぶ。

「トロールですわ！　レベルは8！　複数いますわ！」

「複数か！　ここは後退からの撤退だ。追いつかれるようなら【炎の矢】を頼む！」

『否、我が主よ。敵はどうやら2匹、ここは応戦の一手だ』

「無理だろ！ 2匹は勝てねえ」

『我を、主の力を信じよ』

「お前の事はともかく……」

『む？』

「自分の力が信じられたら二トなんかやってねえ！」

『確かに。これは愚問』

「金属バットさま！ そこで丸め込まれないで下さいまし！」

だが……これは迎撃しかないか。

ファルフナーズの足が致命的に遅い。

トロールを警戒して後ろ向きに走ってる俺より遅い。

両手を肩まで上げて走っている。

絵に描いたようなお譲様走りだ。

しかも戻るにしても踏み逃した罠が残っている可能性もある。

立ち止まって金属バットさんを構える。

「よし、このあたりで迎え撃つぞ！」

『ようやく我の出番か。武者震いを禁じえぬ』

「はひ……はい……はあつはあ、分かりました……わ」

息も絶え絶えだな。

もうトロルとの距離は20mも離れていない。

「ファルフナーズ！ 【魔法の盾】が切れたら再度魔法をかけ直してくれ！」

「はひ……かしこまり……ましたわ……でも、少し……息を整える時間を……」

トロルが2匹並んで俺に殴りかかってきた。

「ファルフナーズ！ 早く！」

「はひ……ただいま……」

「バカン！ ドゴツ！」

「ファルフナーズさん！ こっちが大変ですよー！」

「はふはふ」

ドカドカッ！

「ファルフナーズ様ーッ！」

「ああ、汗だくですわ」

ドスッ！ ガスッ！

ブチイッ！

こいつらムカつく!

マジギレだ!

「ああ! もう! うるせえトルルだ! 好き放題。パカスカパカスカ殴りやがって!」

怒りの秘技、金のスマッシュ!

ドムツ! ぐにゃあ!

一匹が内股になりうずくまりやがった。

ざまあ!

「こっちは取り込み中なんだ! てめーらもモンスターなら少しはターン待ちくらいしろ!」

床に突っ伏して後頭部丸出しのトルルにとどめの1撃。

バカーン!

もう一匹が必死に丸太を振り回してくる。

懲りない奴だ。

「痛て痛てっ! ファルフナーズ! まだかよ!」

「はっ、はい。ただ今」

ああもう!

邪魔臭い!

「狭い通路で暑苦しいんだよツ！」

邪道小手砕き！

バキン！

トロルの右手首を粉碎。

丸太を手放し膝を付いて呻き声を上げ始めた。

ざまあみやがれ。

さあ、これで安心して……

「いい加減にファルフ——どうした、真顔で？」

「いえ、その……勝ちましてございますわ」

「……」

「……」

トロルは2匹ともうずくまって唸るだけで反撃能力を失っている。

「……お、ホントだ。勝てたな」

「素晴らしいですわ！ おめでとうございます、マサト様！」

『だから言ったであろう。我と己の力を信じよ、と』

「はは、何だかんだで少しは強くなってたんだなあ」

『姫の魔法と私の尽力あつての賜物である』

「うっせー、お前の力は俺のもの、俺の力は俺のもの」

『とんだガキ大将である』

2匹目のトロルにトドメを刺して勝利は確定した。

トロルは光となつて消える。

棍棒代わりの丸太2本とボロ服、そして銀貨が10枚ちよつと残つた。

「銀貨きた！ お楽しみの換金タイムだ！」

「ただ今、アイテムバッグから両替機を出しますわ」

全て換金すると、10920円となつた。

「ついに万券ゲットだぜ！」

「おめでとうございますわ」

ファルフナーズもパタパタと拍手して喜んでくれる。

ああ、感動だ。

この俺が戦いに勝つて、お金を――

「待てよ？ つまりこれは、俺が稼いだという事に」

『我らの助力もあつての事だがな』

「言わばこれは労働！ ジョブ！ 仕事！ 職業！」



「そうとも言えますわね」

「つまり俺はもう無職じゃない！金を稼げる男になったんだ！」

『職業戦士、という事であるな』

感無量だ。

額に汗水、を通り越して何度も死にまくりながらだが。

ついにここまで辿り着いたのだ。

「いやー、金が稼げるとなれば、案外ダンジョン・オープナーの能力も悪くないな！」

『物は考えよう、主にしては良い発想転換だ』

「うっせー、このおしゃべりバットめ。ははは」

「むしろ、今まで無職だったのでございますね……薄々勘付いておりましたが」

ファルプナーズがニートの意味を理解した。

## #21 「ゆるふわ人生設計」

「よし、探索続行だ」

「やる気に満ち満ちておられますわ」

「そうだろ、そうだろ。職業戦士である俺に任せたまえ」

『あくまで姫を送り届けるまでの、言わば臨時職業だな』

「……」

「……あの、マサト様？」

「そうだな。無理は良くない。今日はこの辺にしておくか」

「はい!? マサト様、突然どうされたのですか?」

『我には分かる。主は今、皮算用をしたのだ。程々に日銭を稼げるなら牛歩で探索を進めよう、と』

「マ、マサト様ッ!」

「な、何の事かな? この金属片が言う事を真に受けるのかね、ファルフナーズ君」

ちつ、金属バットさんめ。

俺のぬるま湯&バラ色人生設計をばらしやがって。

ああ、ファルフナーズが疑惑のジト目で睨にらんんでいる。

「や、やつぱりもうちよつと探索を進めようかなー、なんて……」

「よろしくお願い致しますわ」

あー、何か足取りが重い。

やる気出ないなー

今日はもう十分働いたんじゃねえかな。

『姫、これは駄目だな。主の士気が完全に無くなっている』

「困りましたわ……」

聞こえてるぞ。

だが、そうは言うがな。

ニートである俺が初めてありついた、いわば商売だ。

この時代に短時間で1万円稼げる方法とあらば、手放したくなくなるのは当然の道理。

ファルフナーズには悪いが、じっくりぬるま湯ペースで進めさせてもらうぜ。

「あ、そうですわマサト様」

ファルフナーズがポンと手を打つ。

「んー？ なーにー？」

「私がトリピュロン王国に帰還した際には、マサト様に報奨金が支払われます」

「ほほー、つまり退職金か」

「私の国では並みの家族なら、一生遊んで暮らせるはずの額ですが」

「マジか。金貨でいくらだ」

「金貨でなら10万枚程かと……」

ほほう。

銀貨が10枚ちよつとを換金して1万円だったから……

銅貨との比率を考えれば、金貨は1枚1万円かそれ以上。

両替機の換金で8掛けくらいになるとしても——

「さあ！ 1秒でも早くクリアしよう！ 時間は有限だ！」

『浅ましい』

「ま、まあそれでやる気を出して頂けるなら……」

ファルフナーズは苦笑している。

浅ましかろうが何だろうが良いのだ。

庶民にや庶民の暮らしと経済があるのだ。

快適なニート人生を歩めるのであれば、早くクリアすればするほど良い！

「目指せ超アリー・リタイア！」

『リタイアも何も、始めずに終わろうと言う計画の気もするのである』

「うっせー、俺の人生設計に口出しするなんて、お前は俺の奥さんか」

『似たようなモノである。バットは主の相棒であるからして』

「即離婚だ、んなモン」

『酷い』

さあ行こう、輝かしき人生のビクトリーロードを！

∴

「む、あれは……また扉か」

「結構な距離を歩きましたから、第2階層の終端でしょうか」

「かも知れない。直線1kmは歩いたからな」

山ほどのトラップに引っかかりながら、だが。

言うとならフナルズがしゅんとするから黙っていよう。

「本来なら死にまくりのデストラップ・ロードをフナルズが一手に引き受けてくれたからな。物は考えようで幸運だったわけか」

「複雑な心境でございますわ……」

ただ、ファルフナーズは俺の後ろを歩いて全てのトラップを発動させていたが、黙っておいてあげよう。

「よし、扉を開けてくれ、ファルフナーズ」

「かしこまり——」

カチッ

「げえっ！　ここでトラップかよ！」

「ひいん！　申し訳ありません！」

ヴーン！　ヴーン！

「警報アラームか！」

まずいな。敵の種類を確かめてる暇も無い！

「ファルフナーズ、ここは一度下がって——」

——俺は見た。

ファルフナーズに降り注ぐ緑がかったゲル状の物体を。

ドブツ

ファルフナーズはその液体を頭から被り、首から下まですっぽり覆われた！

「なーっ!？」

「ひッ——!？」

『主！ これはかの有名なスライムだ！』

「今すぐ剥がして——」

『待て主、触れてはいかん。これは触れた物を全て溶かし同化する強酸の生き物だ』

くっ！

ファルフナーズだから何とも無いが、俺が触れたら溶かされるのか！

『ゼラチナス・キューブと同様。我のような魔法武器で切り刻むか、後は焼くしかない』

「くっそー！」

しかもファルフナーズは驚愕と恐怖で固まって引きつけを起こしている。

ドゴンツ！

「ツ!？」

破壊音に振り返ると、木の扉が縦に真っ二つに壊された。

『トロールだ。3匹いる』

壊された扉からトロルが3匹見える。

その隙間から反対側に同じような扉も。

「ちいつ！ 敵とトラップの合わせ技が第2層のボス試練つてわけか！」

『まあ、そうなるな』

やるしかない。

ファルフナーズがタイミングよく正気に戻って「魔法の盾」をかけ直してくれば良いが。

だがここは冷静な俺、もう初心者じゃないんだぜ。

ファルフナーズとスライムの脇をすり抜け、後ろへと下がる。

「これが正解だ！ スライムを盾にしてしまえばトロルには狭すぎて3匹同時には襲つてこれない！」

『良く見たな、主。正直感服せざるを得ない』

目論見どおり、トロルはスライムの危険さを知ってるようで、それ以上進むのに躊躇始めた。

ダンジョンのモンスターにファルフナーズは映らない。

トロルの目には変な形でスライムが直立してるように映っているはずだ。



「さあ、一匹ずつ通路の隅っこを通って来な！ 順番に殴り倒してやるぜ！」  
ここで最大の誤算。

あつという間にファルフナーズが正気に戻った。

「——ッ、ひいいい！ マ、マサト様あ！」

「耐えろファルフナーズ！ 今トロルを倒してやるから！」

「ヌルヌルが！ トロルが——ッ！」

「落ち着けてば！」

「い、やあああああ！ 【炎の矢】 ああああ！」

「ああッ！ コイツ！ ドサクサに紛れて【炎の矢】て言いやがった！」

一瞬だけ赤く、そして白い光に包まれる。

だが今回だけは大丈夫だ！

俺はファルナーズの後ろにいる。

そのままぶちかまし、て……!?!

『主、駄目だなこれは』

ゴオオン！

俺は振り向いて飛びのいたが……

むしろ爆心地から離れた分、全身を焼かれる苦しみをまざまざと味わった。

「アーーッ！」

……

…

「ううっ……ひんっ……ぐしゅっ、マサト様のおバカーっ！」

「——バックファイヤと爆風があんなに広がったとは」

『迂闊うかつであった。あの威力を我が先に教えておくべきだった』

7度目の復活をベッドの上で迎えた。

あの魔法は絶対【炎の矢】なんてモノじゃない。

もつとこう、地獄の爆弾とかインドラの矢とか、そーゆー禁断の業的な威力だ。

「確かに言っておいて欲しかったよ。矢そのものよりも爆風のほうが凄かった、だなん

て……」

2層目ボスルーム、  
またも引き分けてクリア。

## #22 「魔法の巻物、一枚ふわり」

『ぎゅーん ぱばらぱっぱ、 っぱっぱー！ ぱばらぱっぱすぽぽーん てれーん！』

「よし、レベルアップだ」

「ぐすん、マサト様のいけず。おめでどうございますわ。くすんっ」

褒めるかけなすか泣くかのどれかにして。

『ぎゅーん ぱばらぱっぱ、 っぱっぱー！ ぱばらぱっぱすぽぽーん てれーん！』

「うおっ、2回鳴った」

『相打ちだったとは言え、第2層を一気に突破しているからであろう』

「素晴らしいですわ。いけずなマサト様のおバカー ずびっ」

訳が分からん。

ティッシュ箱をファルフナーズに差し出す。

死に戻ったら、まずファルフナーズにティッシュ箱を差し出すのが恒例の儀式になっ

てきた。

「よし、ファルフナーズ。ステータス画面を確認よろしく」

「はひ、了解しましたわ。くすん」

ダメージ引き摺ってるなー

今回は無理もないか。

スライム頭からも被りだからなー

「頑張れファルフナーズ！」

意味も無く応援してみる。

「ファイト、オー！　ですわ」

涙を振り切り笑顔を作ってみせた。

……案外ノリが良いな。

この分なら大丈夫だ。

まあ、ただステータス画面を確認するだけの事なんだが。

ファルフナーズがステータス画面を読み上げ始める。

俺自身が見ることができればいいんだけどなー

「マサト・オコノギ 20歳 慎重161cm 体重79kg」

「また痩せた……嬉しいような、先行き不安なような」

『まだまだ適正体重には程遠いであろう』

「うっせうっせ」

「特性【臨時戦士】のらりくらりで日銭稼ぎとは良いご身分ですね」

「うっせー！」

「ひんっ！」

「あいや、ファルフナーズに言ったんじゃない」

「レベル5、ダンジョン放浪者」

「放浪者って……あれな人みたいで嫌だなあ」

「命中点6＋10（【知的な】パワフル金属バット）：オリンピック級」

「はっはー！ ついにオリンピック級か！ メジャーリーグ行き確定だなー！」

『少年野球用の我がメジャーの基準を満たしてとは思えぬが』

「打撃点6＋10（【知的な】パワフル金属バット）：オリンピック級」

「いい……：ような、金属バットさんの成長率の高さに嫉妬するような……」

『我とて主以外に使われれば、ただの子供用バットに過ぎぬ』

「ま、そーゆー事にしておこう」

「防御点6＋6（素敵なプロテクター）＋3（素敵なマスクとレガース）：名人級」

「こつちも地味が上がってきてるな。よしよし」

「体力点12：超頑丈なサンドバッグ並み」

「何が何でも意地でもサンドバッグで例えたいのか!？」

「まあ、マサト様、また新たな項目が追加されていますわ」

「ほほー？ 新しい能力値か。どんなの？」

「幸運値：99（ハッピー人生）」

「おー！ ようやく俺にも取り得が出来たのか！ しかも超幸運！」

「マサト様、おめでとうございますわ」

「よし、ちよつくら宝くじ買ってくるか」

「宝くじとは何でございましょう？」

「あー……説明が意外と面倒になるな。まあガチャでお金を当てる感じだ」

「納得致しました。そして戻ったらガチャを回させて頂く約束を思い出しましたわ」

しまったヤブヘビ！

あー俺の馬鹿。

くっくっくっそ！

「ステータス画面は以上でございますわ」

「分かった。ありがとう。良い感じになってきたなー、順調順調」

「この調子で進んでいきたいですわね」

ボスルームは2回とも引き分け突破だけだな。

第3階層でどんなダンジョンと敵になるやら。

…  
ん？

「ファルフナーズが虚空に向かって怒っている。

何やら目の前をパンパンと叩いてるようだ。

「ファルフナーズ、どうしたん？」

「あつ、いえつ、何でもありませんわー！　オホホー」

またウソをついてる言葉遣いだ。

問い詰めよう。

「ファルフナーズ、メイドが主に隠し事はいかなあ」

「メ、メイドにだって秘密の1つくらいありますわ」

「分かってるぞ？　ステータス画面に何か変な事が書いてあるんだろう？」

「存じませんデスワ」

「さあ読み上げるんだ。ゆっくり、はっきりとした発音で」

「……マサト様の意地悪う」

口を尖らせて文句を言われてしまった。

だがその程度では俺のアルカイツク・スマイルは突破できないぜ。

作り笑顔のまま沈黙。



口だけ笑って目は穏やかに。

穏やかな目でも瞳だけは笑っていない。

「ひーん、わかりましたわ……実は」

「うんうん、実は？」

よし楽勝。

「私にも一つ、ステータス項目が」

「ほほー、どんなの？ いくつ？」

「ここ、幸運値で……その、数値が……0です……はい」

「ソウデスカ」

笑うな。

堪えろ。

ここで笑ったら絶対スネる。

うん、無理。

「わーははは！ 幸運がゼロ！ 不幸なプリンセス！ 薄幸じゃなくてステータ斯的に

不幸！ ひー！」

「いやあああ！ マサト様のおバカバカバカバカ！ 不幸じゃありませんわ！ 不幸じゃありませんわったら！」

ファルフナーズが両手で顔を塞ぎながら肩ごと首をふるふると左右に振り回して恥辱に耐える。

「もう頭に来ましたわ！ 遠慮なく回させて頂きますわ！」

「ひっひっふう、あー腹がよじれそう。回すって何を……」

ファルフナーズが虚空に向かって指を――

「わーっ！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 悪かった！ 謝る！ 許して！」

「今更謝っても遅いのですわ！」

ポチッ

ビリリリッ！

後頭部に引きつるような刺激が！

「うわあああ！ 何て事をおおお！」

ドウルルル、デデドン！

『コモン』

まずい！ コモンはドアが降ってくる可能性！

やっぱりだ！

どこでも扉が猛スピードで降って来た。

ガッ！

ギリギリで回避した。

毛根達だけじゃなく、俺自身が殺されそうだ。

「ふーっ、危ねー。ファルフナーズ、許可無しに回すのは酷すぎ——」

ポチッ

「なあー！ツツ!?」

バリバリッ！

「い、今、後頭部から駄目な感じの痛みが！ ちょっとヤバいぞ、シャレにならんで！」

ドウルルル、ゴアアドン！

『コモン』

ポトツ

魔法の回復薬。

慌ててキヤツチ成功。

落としたら割れそうだしな。

いや、そんな事よりだ。

「ファルフナーズ、2回も回すなよ！ 酷すぎるにも程があるぞ！」  
「レベルアップのボーナスで2回とも半額でしたわ」

言うだけ言つて、そっぽを向いてぷくつと頬を膨らませる。  
ちーくしよー、可愛いからつて何でも許されると思うなよ。

「第一、トラップに掛かつての事だから不可抗力だろー？」

「私を置き去りにして逃げようと思いましたわ」

「ちっ、違うぞ！ 逃げようとしたんじゃないわなくてスライムを利用して——」  
ポチッ

「あああーッ!!」

後頭部に高圧電流を浴びたような痛み！

高圧電流浴びたら痛みどころじゃないけど！

ドウルルル、デデドン！

『アンコモン』

魔法の巻物、一枚ふわり。

「俺の……毛……根……」

ガクリ

シヨツクの余り気を失った。

……

…

ボンボン

ああ……優しく起こしてくれる。

そうだ、ファルフナーズ、ようやく機嫌を直してくれたのか。

ん……？ 何その棒？

「マサト様、いい加減起きて頂けませんと、箒がけの邪魔ですわ」

酷い。

## #23 「これぞかの有名な奥義、『縮地』だ」

「よし、ガチャですわ」

「おまつ、それ俺の台詞だし。それにガチャはさつき散々回しただろオ！」

口を尖らせて抗議の表情をするファルフナーズ。

腰元あたりで手を。パタパタさせている。

あれは我が俣を承知で無理を通したい、おねだり少女のリアクションだ。

こいつ……ガチャの楽しさに目覚めやがったな。

そりゃ代金が俺の毛根で、回すのはファルフナーズだからな。

リスク無しでクジを引いてるなら中毒になるのも早いだろう。

由々しき事態だ。

無意識のうちに後頭部を撫でてしまった。

……明らかに薄い。

そう、この物寂しい感じの事を何と表現したっけか。

寂寥感せきりようかんだ。

実り少ない晩秋から厳しく長い冬を孤独に耐えねばならぬ。

ああ、我がニート人生はこれからだと言うのに。

「ともかく駄目っ！」

「えー、ですわ」

「駄目ったら駄目！」

「マサト様、お願い、ですわ」

「可愛く言っても駄目！ セクシーに言うなら少し考える」

「そんなはしたない真似は出来かねますわ！」

せつかく俺が腰に手を当てて尻を突き出すポーズで実演したのに。

お姫様はサービス精神が足りないんだよなー

「ほらこう、腰をクイッククイッと」

「……」

「……」

「と、ともかく！ 昼飯食ったらもう一度第2階層だ。クリアボーナスもらって第3層を偵察しよう」

「かしこまりましたわ。その後でガチャですわね」

「ないわー」

だが俺は見た。

昼食前にくつろいでいると、その脇でファルフナーズが虚空に向かって指を出したり引つ込めたりしているのを。

何て恐ろしい。

あれはガチャのボタンを押すイメージ・トレーニングに他ならない。

「とおー！　ですわ」

それは死神の呼び声に聞こえた。

次にあの声が響いた時、俺の毛根達が冥土へ旅立つのだ。

∴

「食ったし、行くか」

「食休みも大切ですわ。先にガチャなぞを——」

「回しません」

「そんなあー」

困ったね。

せつかくトリ……何とか王国に連れ帰っても、ギャンブル依存症でお返ししたら……  
何て文句言われるか分かったもんじゃやない。

今のファルフナーズが国政を握ったら、3日で革命が起きるな。



…

渋るファルフナーズを立たせるのは簡単だ。

「仕方無い。ファルフナーズがやる気になるまで、ごろ寝しておくか」

ごろんと床に寝そべる。

そう。

ファルフナーズの着ている戦闘服、プリンセス・ドレスアーマーはとても丈が短い。

視線を下に。

健康的な太ももが白いニーソに包まれているその光景は素晴らしい。

俺の視線に気付いたファルフナーズが裾を引っ張って抵抗する。

もう少し、もう少し回り込めば太ももの合間の僅かな隙間、いわば非武装地域だ。

魅惑のパンツ前線へと辿り着ける。

ズリッ　ズリッ……

手の指先と足の指先だけのミリ単位の動作で、人に知られる事無く移動する。

これぞかの有名な奥義、「縮地」だ。

俺はたった今、縮地を体得する境地へと至ったのだ！

まだ見ぬ天国へと、桃源郷を目指すべし。

さもありなん。ファルフナーズがそれに気付いた。最初から気付かれてただけなのだが。

ファルフナーズが人差し指を立て、虚空を指した。

「マサト様、それ以上妙な動きをされますと……」

回します、ガチャを。

省略されたその一言を俺は正確に理解した。

くそつ、向こうは俺の毛根達を人質に取っているのだ。

戦いは膠着状態になった。

天国の花園を見れなかったのは悔しいが、元より目的はファルフナーズを立たせる事だ。

「よし、ファルフナーズ。今回は引き分けた。さあダンジョンへ行こう」

「了解しましたわ……マサト様、先にお立ちくださいませ」

武装無き平和など有り得ないのだった。

どっちが先に立ち上がるかで5分間、再度膠着。

：

通路は全ての罫を発動させきったようで、安全に進む事ができた。

「そう言えば、ファルフナーズが全ての罫を発動させてしまったのは幸運値のせいだったんだろうな」

「なるほどです、が……嬉しくない事実ですわ」

「きつとあの数値はレベルアップで公開されただけで、元からそう設定してあったに違いない」

「その割にはマサト様が幸運な場面が無かったような」

「こいつ、言っではならぬ事を。」

いや、いいけどさ。

俺も思ってたし。

もつとも切ないのは、幸運値込みでこの現状だったら……

むう、駄目だな。

ネガティブに染まっては昔に逆戻りだ。

まだパンツの事で頭をいっぱいにしてたほうがマシだ。

「パンツ、パンツ」

「はっ！」

『主よ……』

いかん！ つい口にしてしまった。

ファルフナーズの視線が痛い。  
そんな目で俺を見ないで。

「これはブルーになりかけた気分を晴らすおまじないみたいなので……」  
「左様でございますか」

ジト目で俺を睨みつつ、人差し指を立てている。

防犯ブザーじゃないんだぞ、ガチャは。

焼け崩れた扉を蹴倒してボス部屋の中に入る。

やはり一層目と同じように反対側には無傷の扉があった。

「じゃあファルフナーズ、扉に触れてくれ。突破ボーンスをもらおう」

「かしこまりましたわ」

…

「出ましたわ。第2階層突破ボーンスが頂けます」

「よし、前回は両替機を投げつけられて攻撃されたからな。今回は準備万端で反撃してやるぜ」

カラン、コローン

鐘の音と共に、例の子供天使が2人出てくる。

おや？　今回は手ぶらにみえるぞ。

何か投げつけてきたら、打ち返してやろうと構えてたのに。

子供天使達はニヤリと笑ったかと思うと額に両手を当てた。

キュピイイーン！

天使の額から閃光がほとばしる！

「ぎゃーっ！」

「マツ、マサト様ーっ！」

謎のビームに撃たれた！

全身が痺れて……目がチカチカして痛い！

ぐう、動けない。

「天使め……飛び道具とは卑怯だ……ぜ……」

きやつきやと笑い声をあげながら、天使が天井へと消えていくのを見送るしかなかった。

「なんだったんだ……今回はハズレなのか？ 突破ボーナスもランダムなんだろうか」

「いえ、お待ちくださいませマサト様。スキルと言うものがマサト様のステータス画面に増えておりますわ」

「スキル！ ついに来た！ こういうのを待つてんだよ。どんなのか、説明文読んでくれ！」

「かしこまりましたわ。ええと…【痛覚軽減：ペイン・ダンパー】常時発動。ダメージを受けた際に感じる痛みを軽くしてくれる。防御点と耐久点に+4ボーナス。やったね！ これでいっぱい死ねるよ、だそうですわ」

「常に一言多いな」

「も、申し訳ありません」

「いや、ファルフナーズに言ったんじゃあない」

「このステータス画面を書いているのは、あるいはシステムを作ったのは本当に誰なんだ。」

3発は殴ってやらなければ俺の気がおさまらないぜ。

「だが、ついにまともなスキルを得たぜ！ しかも今の俺に相性最高のスキルだ！」

「おめでとうございます、マサト様。これで死を恐れず戦えるようになりますわ」

「ファルフナーズさん」

「はい？」

「今のところ死亡回数7回中6回までが、君の【炎の矢】なんだけどね？」

「それは言わない約束ですわ」

そんな約束はしていない。

## # 2 4 「耐震プリンセス」

「よし、第3階層だ」

「はい！ この所、大変順調ですわ」

「そうだろそうだろ。もっと褒めて」

「流石マサト様ですわ」

無邪気にはたはたと拍手までしてくれるファルフナーズだ。

気分が良いので、帰ったらプリンでも食べさせてあげよう。

確か冷蔵庫に賞味期限が3日オーバーしたヤツがあつたはず。

「さあ扉を開けてくれ。今度はどんなダンジョンだ？」

第2層の扉をくぐり、階段を昇る。

ファルフナーズが第3層の入り口を開けると――

「割と普通だ。通路に明かりが点いてる」

「それに」覧下さい、マサト様。奥のほうに像が2体ありますわ」

これまでの地下通路のような感じは無くなった。

巨大な建物の内部という雰囲気だ。

100mほど歩くと像の目の前に辿り着く。

2体の全身鎧に剣を構えた、2mを越える像が向かい合わせに立っている。

「立派な鉄の鎧ですわ、剣を構えております」

「ははあ、もう分かったぞ」

「何をでしょう？ 宜しければ私にもお教え頂けませんか？」

「もちろん。このパターンは2つに1つだ」

「と、申しますと……？」

「1つ、これは動く鎧のモンスター。もう1つはここを通ろうとすると剣が振り下ろされる罠だ」

『我が主の言う事が正しいであろう。我もそう考える』

「流石ですわ、マサト様。本日は冴えに冴え渡っておりますわ」

「んー、そうだろうそうだろう」

「では、像への対処法は……？」

「やっぱり、先手を打ってぶち壊すに限る」

『同感である』

「じゃあブツ叩くぜ！ 派手に行くぞ、金属バットさん！」



『応である。存分に参られよ』

勢いをつけて……おりや！

ガアアアーン！

金属同士のぶつかり合う派手な音が通路に鳴り響く。

ぶおんっ！

「うわおっ！」

鉄の鎧像の剣が振り下ろされた！

「下がれ！」

素早く後ろに飛びのく。

「えっ!? あっ！ は、はいっ！」

ファルナーズが3呼吸は遅れて。パタパタと歩いてくる。

台無しだよ。 台無し。

だが像は振り下ろした剣をまた構え直しただけで、それ以降は全く動かなくなる。

「やっぱりだ。魔法か何かで反応を見ていて、刺激があればこのように剣を振るわけだ」

『そのようである』

「はあく、今日のマサト様は本当に人が変わったように冴えておりますわ」

いや、感心してるんだらうけどさ。

普段の俺をややデイスってるよ、それ。

「よし、罨であるという結論が得られた。こちらから殴ったダメージはどんなんだ？」

『かなり手応えはあったが破壊には至ってないようだ』

殴りつけた腰元を確認すると、べっこりとへこんで歪んでいる。

だが壊れてはいない。

「かなり頑丈だな。こりゃ簡単には壊せないぞ」

『屈辱である』

「ま、全身をぶつ壊す必要は無いさ。要は稼動部の右手を叩き折ってしまえば良いだけ

だ」

『我が主よ……何か知恵の実のようなものでも食したのか？』

「褒めるなら素直に褒めろよな」

『これは失敬。ともかく感服した』

さあ鎧の右手首を集中攻撃だ！

…

10回ほども全力で殴りつけると、鎧像の右手首がポロリと落ちた。

手首と握られた剣が床に落ちてガランガランと派手な音を立てる。

「お、終わりましたのでございますか?」

ファルフナーズは金属の打ち合う耳障りな騒音に目と耳を塞いでいた。

どうも、この手の音が苦手なんだろうな。

「終わったぞ。これで安全に通れる。もう少し進んでみるか」

「かしこまりましたわ」

ぶおんっ!

キューーンッ!

「なっ!?!」

「マ、マサト様っっ」

「ファルフナーズさん、何やってんの」

「いえ、その……何と申しますか」

像は向かい合わせで2体あった。

片方を壊したのだから、通路のそちら側を歩けば良いモノを。

俺の脇にいたまま真っ直ぐ歩き出したため、壊してない像の剣に殴られたのだ。

抜けちゃいけない所が抜けているお姫様だ。

「まあ、お前は無敵だから助かった。先に進むぞー」

「お、お待ちくださいマサト様ー」

ファルフナーズがその場で手をパタパタと前に振っている。

「どしたー？」

「う、動けないのでございます！ 床と剣に挟まれているようでしてー」

「……」

「……」

なるほど……

剣は振り下ろされきっていない。

まだファルフナーズに振り下ろす力が加わり続けているのか！

「なあ、ファルフナーズ。俺の国、日本は地震が多い国でな」

「い、今、その事とこの状況に何の関連性がございませうので……？」

「多少の地震でも家具が倒れないように、天井とタンスや棚なんかの間に程好い長さの支え棒をつがえたりするんだが……」

「お待ちください、マサト様。それ以上は……お許しください」

「……」

「……」

「今日からお前のあだ名は『つつかえ棒プリンセス』な  
「いやぁーん！」

## #25 「強制スクロールなのである」

「よし、じゃあ通路の先を見てくるからファルフナーズはそこで待っていてくれ」

「そんなあ！ マサト様、置いてかないでくださいまし！」

「無理無理、下手に手を出したら俺まで危ない」

「怖いです！ 置いていかれるのはとても怖いです！」

「いやいや、ちよつと先を見てそれからつつかえ棒を部屋から取って来るから」

「置き去りは嫌ですわ！ マサト様あゝ」

「すぐ、すぐ戻ってくるから、な？」

「嫌ですわ！ 嫌ですわつたら！」

「うーむ……これは困ったな」

『主よ、やはり何とかして姫を助け出すしかないのでは？』

「そうは言うがな、迂闊にファルフナーズを引っ張り出そうとしたら、俺の手首がポロリ

だぞ」

『代わりのつつかえ棒が必要なのである』

「マ、マサト様が私をここに置いていくと言うのでしたら……」

ファルフナーズが両手を前に突き出す。

「まずい、あれは【炎の矢】の構えだ。

「置いてかない！ 置いてかないよ！ だからその手を下ろすんだ。」

怖えー。

確かに死に戻りすれば2人とも部屋にワープするが、何かある度に自爆させられたらたまらん。

命を大事に、だぜ。

「さて、どうしたもんか」

『下から主が我を使つて持ち上げてみる、というのはどうか』

「なるほど。少しでも押さえつけてる力が弱まれば、ファルフナーズが動けるかもしれない」

『試す価値はあろう』

重量挙げのポーズで両の手に金属バットさんの端と端を握る。

剣に対して垂直に金属バットさんを当て……持ち上げる！

「ふんぬーっ！」

分かつちやいたが、ビクともしない。

「ど……どうだー。ファルフナーズ、動けるか？」

「無理でございますわ。うんとも寸とも」

「ぐぎぎぎ、全力全開フルパワー！」

ただし元二ートの。

「駄目ですわ。お助けくださいませー」

ぐにより

「げえっ！ 金属バットさんが折れ曲がった！」

くの字に、ブーメランのように折れてしまった！

『我、金属バットは中身がウレタン故……瞬間的な衝撃に対しては強いのだが』

「へえ、空洞じゃないんだー。豆知識だな」

…

「俺のせいで金属バットさんが犠牲に……ありがとな相棒。また来世で会おう」

『勝手に殺さないで頂きたい。元より血肉無き身、折れ曲がった程度で変わり無し』

「わ、私のせいで……金属バットさん様お許しください」

「修理に出さないと駄目だなー」

「あのマサト様、僭越かとは思いますが、その件はともかく先に私のほうを……」



「おお、そうだった。もうひとつ試してみるべき事があった」

『今日の主は冴え渡りすぎなのである』

「どんな方法を試されるのですか？ マサト様」

「押しも駄目なら引いてみな、って言葉があつてな。金属バットさん、折れ曲がつたいでだ。修理前にもうちよつと乱暴にさせてもらうぜ」

『存分に。使われてこそその道具也』

「ファルフナーズ！ ちよつと荒つぽくいくぜ！ 怖かつたら目えつぶつてな！」

大きく振りかぶつて、折れ曲がつた金属バットさんで鎧像の剣の先端を叩きつける！

そう、上から！

ガンガンガン！

「ひいひい！ マサト様、一体何をー!?」

「第2層でお前は壁にめり込んで、再度近くに湧き上がつて来た！ つまり、だ！」

「ひんっ！ 同じ事をしようとしてるのですね!?!」

「その通り、だが床にめり込むには逆に鉄像のパワーが足りてない！ だから！ そおいー！」

「マサト様！ 毛ほども衝撃を感じないのでありますが、必死なマサト様の顔が怖いですわ！」

「毛と顔の事は言うなー！ お前の足がすでに床に潜り込んでいる！ あと一息だ！」

ガンガンガン!

折れ曲がった金属バットさんで、ファルフナーズの頭に乗った剣の先っぽを打ち付けている。

事情を知らない第三者が見たら、俺の姿は明らかに狂人だな。

何の儀式だよ、これ。

ぶおんっ!

意外。

いきなり剣が上に持ち上がった!

「なんだ!?! どうした!?!」

『分かったぞ、主よ。姫が床にめり込み始めたせいで、剣が振り下ろされきつたのだ。振り下ろされれば、次は……』

「なるほど、再び振り下ろすために元の構え位置に戻るってわけか」

『然り』

「じゃあ、このままだと……」

『うむ。再び、な』

キュインツ!

再び鉄像の剣が振り下ろされ、ファルフナーズを打ち付ける。

もちろん無敵だから衝撃すら全く感じてないのだが……

「マ、マサト様、この状況は一体……」

酷い光景さ。

キーンッ！

鉄の像が剣を振り下ろしてはファルフナーズを打ちつけ、振り下ろしてはファルフナーズを打ちつけ……

その度にバリアの役割をしているらしい青白い光が、剣とファルフナーズの間でポワと浮かぶ。

「あの、そろそろ助けて頂きたいのですが……」

「そうは言うがな。ファルフナーズも膝まで床にめり込んでるし。ますます迂闊に手が出せない」

キーンッ！

「何とかしてくださいましー！」

「セルフサービスで何とかならない？」

キーンッ！

「足が動かさせませんわー！」

「俺が手を出したらバツサリいきそうだしなー」

キーンッ！

「お、良く見ると打ち付ける衝撃で、少しずつ床に沈んで行ってるぞ！ あと少しだ！

頑張れファルナーズ！」

「釘になつて槌で打たれているですわ……」

キーンッ！

『いや、主よ』

「ん？ なんだ？」

キーンッ！

『この場合、むしろ頑張るのは鉄の像殿ではないだろうか』

「確かに。頑張れ！ 鉄の像！ ファルナーズをワープさせるんだ！」

キーンッ！

「酷すぎますわ……」

「自業自得だけどな」

キーンッ！

『ワープと言うより強制スクロールなのである』

「あー、マリオのあれな。ついでに最終階層までのワープとかしねえかな」

キーンッ！

「……昨日寝る前に、俺が子供の頃遊んだっていうゲームやらせてあげたじゃん？」

「マサト様、それ以上はお止めくださいまし」

キーンッ！

「もぐら叩きゲーム。面白がってたよな？」

「どうかそれ以上は堪忍してくださいませ」

キーンッ！

「プリンセス叩きゲーム」

「言わないでとお願いしましたのに！」

キーンッ！

「待てよ……？ ファルフナーズの足が埋まって動けないと言う事は……」

『主が悪い顔になっているのである』

キーンッ！

「床に寝そべってファルフナーズの太ももから上を——」

「きゃあああ！ マサト様！ 私が困っている時になんて破廉恥を！」

キーンッ！

「腿ももまでめり込んでから駄目だな。もうちよつと早く気付いていれよなあー」  
「後で山ほどガチャを回させて頂く事にしましたわ」

キーンッ！

「おつ、吸い込まれ始めた！　いつてらっしやーい」

「どこへでございますかあああー！」

ででうででうででう

「おかえり」

「……ただいま、ですわ」

ファルフナーズが俺の真後ろから離れなくなった。

ゲームの仲間キャラみたいに。

びつたり追尾。

俺が落とし穴に落ちても、一緒に飛び込んでくれるかな？

## #26 「王国の全力を挙げて奪還しますわ」

「よし、通路の先を確認だけして、修理に戻ろう」

「かしこまりましたわ」

ファルフナーズが頭を撫でながら応じる。

「叩かれまくった所、痛い？」

「いえ、痛みどころか衝撃すら……でも何となく頭皮が心配で」

「スライムに飲まれても大丈夫だったんだし、心配し過ぎだよ」

「ふふっ、そうですね。マサト様の頭皮でもあるまいし」

「……」

「……大変な失言でしたわ」

膝から崩れ落ちて、床に手を着いてうなだれた。

立ち上がる気力も無くなった……

「マサト様！ 申し訳ありませんですわ。どうかお立ちになってくださいませ」

「あ、ああ……大丈夫さ。まだ、まだ俺はやれる。やれるんだ」

多くの毛根ともが去った後の虚しさよ。

だが行かねばならぬ。

華麗なるニート人生を迎えるために。

おやつも食べたくなってきたし。

∴

先ほどの鉄像があつたのは入り口から100mほどの場所だ。

そこから更に100mほど歩くと、T字路に差し掛かった。

「さて、右か左か」

「どちらもまた遠くに剣を構えた鉄の像が見えますわ」

「なるほどなー 第1階層はモンスターのみ、第2階層はトラップが追加、そして第3階

層は迷宮が追加か」

『いよいよダンジョンと呼ぶに相応ふさわしくなってきたのである』

「次は紙とペンと定規を持ってこよう」

「流石マサト様ですわ」

方眼紙も買っておこうかな？

∴

「ただいまーつと」

『無事戻ったのである』



「確かに！ これ初の生還だ！」

「毎回全滅でしたものね……」

君が全滅させてるんだけどね？

「では、生還お祝いと言う事でガチャを……」

「回しません」

「えー、ですわ！ 先ほどは散々な目に合わされましたのに！」

「あれは自業自得だと思ふのだが」

「そんなあ！ マサト様には思いやりの心は無いのでございますか！」

「あるけど、毛根と引き換えにする程のもんじゃあ……」

「……とおー！ ですわ！」

「あああー！」

後頭部に走る鋭い刺激！

思わず仰け反って抑えるも、何の意味も成さない。

ドウルルル デデドン！

『アンコモン』

またも巻物、一枚ひらり

「くうう……許可してないガチャを回すなよなー！」

「心の衝動を抑えきれないのでございますわ」

くそー

ガチャを勝手に回させないための対策が必要だ。

早急にだ。

『主よ。気を落とすな。薄くなったら鬚まげを結えば良いのだ』

「ないわー 現代でチョンマゲとかないわー そもそも後頭部が禿げてきてるんだからマゲも何も無い」

「ではハズレでしたのでもう一度……」

「待て。その理屈はおかしい」

「でもでも、回したいのですわー」

「ははは、プリンセス。その代金は俺の毛根なのだよ」

上目遣いで可愛くねだっても駄目駄目。

残念かな。俺はセクシー派寄りなのだ。

「さて、おやつでも食べて今日は終わりにしよう。金属バットさんを修理してくれる所をネットで探さないとな」

「ぶー、ですわ。後で絶対もう一度回させて頂きますわ」

ほつ、ガチャよりおやつの方が興味が勝ったみたいだ。

子供か。

ちよつとお姫様らしさが抜けてきたな。

我が家、あるいは俺に順応してきたせいだろうか。

「まあまあ、冷蔵庫にプリンがある。それでも食べて気分を変えよう」

「プリン、とはどんな食べ物でございましょう?」

「あれ、トリ何とか王国にプリンは無いのか。牛乳と卵黄と砂糖でカスタードのお菓子  
なんだけど」

「水牛や山羊の乳はございますが、ウシというのは……」

「なるほど。牛や鶏の家畜化と品種改良が遅いのか」

「大変興味深い話ですわ」

牛が? プリンが?

…

皿に盛ったプリンを持ち上げて、ファルファーズが見つめている。

「これがプリンでございますか」

「うむ、その小さいスプーンですくって食べるのだ。柔らかくて滑りやすいから気をつ  
けるんだぞ」

「つるつるして何だかとても楽しくなってきましたわ」

「口に含んでそのつるつる、ふわふわの感触を味わうのだ」

ぱくっ

「んんっ！ ひよれはふりゆふりゆとふひふひへー」

「お姫様、はしたないですよ。食べてからしゃべれー」

ファルフナーズは頬を抑えてにこやかな表情になっている。

凄いなプリン。

異世界のお姫様がご満悦だ。

目がキラツキラに輝いてる。

突破ボーナスの天使みたいに目からビームでも出すんじゃないだろうか。

「これまでに無い美味ですわー！」

「そうだろ、そうだろー」

「つるんと口に入ったかと思うと蕩とろけて、ふわっふわなのに濃厚な甘味とコクが押し寄せてくるのですわ！」

「大体そんな感じだ」

グルメ表現にさっぱり知識が無い俺はコクとか言われても分からん。

ご満悦ならそれで良し。

「特にこの上にかかった黒いソース！ 香ばしさと更に強い甘味が——」

え、まだ続くの!? 長くない?

何だか良く分からない例えを交えて絶賛しまくっている。

妙なる? 天上にたなびく?? 馥郁ふくいく???

何それ、本当に日本語?

ファルフナーズの地元語じゃないのかな。

「ともかく食べ食べ。ぬるくなると味が落ちるぞ」

「はい! こんな豪華で素晴らしいデザートをありがとうございます、マサト様!」

特売98円です。

どこの世界でも若い女性は甘い物に目が無いのかね。

思えばファルフナーズが来てからこっち、おやつらしき物を食べてなかった。

そりゃ痩せもするか。

「じゃあ明日は金属バットさんの修理ついでに、おやつを買い足すでしょうか」

「大賛成ですわ! むしろこれから参りましょう」

「ははは、そこまで気に入ったのか。まあ明日まで待て待て」

「楽しみでたまりませんわ」

まあそのコンビニまで歩いて10分だけだな。

元ニートは無駄な外出を好まない。

「ところでマサト様、その残った1つは……」

ちつ、気付かれた。

そう

プリンは3つで1セットと相場が決まっている。

「良く聞けファルフナーズ。いいか？ 俺は主でお前はメイドだ」

「ずるいですわ！ 私ももつと頂きたいのですのに！」

1つの約束されし黄金丘プリンをめぐるって、聖なる戦争が始まった。

「だめー。これは俺が買ったヤツだもんねー。悔しかったら自分で買うのだ」

「半分ずつにして頂きたいですわ！」

「おっ？ このメイド、主人の食べ物を奪うつもりかー」

「トリピュロン王国の全力を挙げて奪還しますわ」

「プリン1つに戦争も辞さぬとは……！」

「乙女の執念は国をも動かすのです」

「謀反じゃー！ ものども出合え出合え」

「既に金属バットさん様は私が確保いたしましたわ！」

いつの間にかテーブルの足に立てかけてあつた金属バットさんを胸に抱いている。美少女姫の胸に押し当てられてられるとは、うらやましい。

いや、そうじゃない。

「くっ！ 人質、いやバット質とは卑怯な」

「政事を成す者は綺麗ごとだけでは国を維持できないのです」

『割とどうでも良いのだが』

「一丁前に政治を語るか！ 出家して姫巫女になる小娘がー」

「悪しからずですわ。 姫巫女になつても出家の必要は無いのです」

「何だと…!? 宗教と権力の癒着が堂々で行われるなど、許されるはずが無い！」

「トリピュロン王国ではそれが当たり前ですわー」

「くっ、俺が王国に行った暁には政教分離を訴えてやるからな！」

「その隙に頂きます！ ですわ」

しまった。

訳の分からない扇動演説アジテーションに夢中になつてしまった。

「お、俺のプリン〜」

「兵法は拙速を尊ぶ、のですわ」

「畜生、ハイホーだかヒーホーだか知らんが、難しい言葉使いやがつて。」

「ごめんあそばせですわー うふふつ」

ファルフナーズも訳の分からない言葉で誤魔化しつつプリンを頬張る。

ま、これでいいんだ。

目的はガチャから気を逸らせる事だったからな。

98円の3分の2のお値段で、俺の毛根達300本の命が救われたのだ。

俺の勝ちい！

毛根は生やすより抜けるのを防げ。

ファルフナーズの弱点は掴んだ。

ガチャを回されそうになったら、カウンターで甘い物だ。

ふっくらプリンセスにして帰還させてやる。

受け取り拒否されたらどうしよう？



## #27 「意外とノリノリな姫である」

「よし、金属バットさんを修理に出そう」

「お出かけ、楽しみですわ」

ファルフナーズが腰元のアイテム・バッグをこそごそし始めた。  
服をいくつも取り出し始める。

……

…

「あの、ファルフナーズさん？」

廊下に追い出された俺は自室をノックする。

自分の部屋に入るのにノックが必要になるなんて！

「はあくい、もう少しお待ちくださいませ〜 こちらのの方が良いかしら」

「もうお昼になっちゃったんですけどー 午前中丸潰れなんですけどー」

鼻歌まじりの陽気な返事がかえって来る。

そりゃ良い天気でお出かけ日和かもじゃないけど。

俺が見た限りどれも綺麗なドレスだ、以外の感想は言えない程度の差しか無いのだ

が。

あれは何なのだろうな？

「困ったな。金属バットさんが修理できるかどうかも、まだ分からないのに」

ネットで調べた限りでは、どうも金属バットは修理するものではないようだ。

だが、それはあくまでも野球用としてのもの。

俺は戦闘用だからな。

掛け合ってみる価値はある。

「なーあー ファルフナーズ。まーだー？」

「ふ、服は決まりましたわ。後、靴とメイクと……」

ぐへえー

『主も、もう少し身だしなみに気を使うのだ』

「何だよ、お前は俺のかーちゃんかよ」

∴

死ぬほど急かしてようやく外へ連れ出す事に成功した。

「まだ顔を作っておりませんのに」

「何だよ、顔作るって。変装とかするののか？」

『メイクする事をそう言うのだ』

「し、知ってたし？ ちょっとツツコミを入れてみたかっただけだし？」

面倒な言い回しするなよなー

日本人じゃないんだから。

「だいぶ出発が遅れたな。タクシーでも……」

「車は駄目ですわ！」

「じゃあバスで……」

「かのような恐ろしい物に乗ってはいけませんわ！」

トラウマ背負ってしまったか。

仕方無い。歩くしかないか。

パッパーツ！

車のクラクションだ。

「よう、兄ちゃん。乗りな。安くしとくぜ」

こないだのタクシーのおっさんだ……

まだバグったままなのか。

ファルフナーズが立ちくらみを起こした。

「大丈夫か。ファルフナーズ、傷は浅いぞ」

「わ、私の遺言で……タクシーなるものだけは駄目、と……」

ファルフナーズの肩を支えつつ、手でタクシーのおっさんを追い払う。  
しっしっ

「分かった分かった。車は乗らないから。休むか？ 歩けるか？」

「大丈夫ですわ。先を急ぎましょう」

ファルフナーズがよろよろと歩き出すのを支えてやつてるのだが……  
タクシーのおっさんが徐行速度で着いてくる。

「おっさん、今回はいいから。向こう行ってくれ」

「おっさんじゃあ無え。俺の事は暮井寺卓志くれいじ たくしと呼びな。個人タクシー  
だぜ」

聞いてないです。俺ですらカタカナなのに生意気な。

パイプか葉巻でも吹かしださない内に退散だ。

「よし、休憩がてらにそのファミレスに入ろう。飯もまだだし」

「お気遣いに感謝致しますわ、マサト様」

「兄ちゃん、またいつでも呼びな！ 電話番号は——」

結構でございます。

下手に親しくなったら、ダンジョンにまで着いて来そうだ。

……いや、それはそれで良いかもな？

トロールの群れをタクシーで蹴散らす姿を想像してちよつと愉快になった。  
いややっぱ駄目だろ。

タクシーでモンスターを蹴散らしながら金属バットでヒヤツハーとか。  
どんな反理想郷ディストピアだ。

『それはそれで』

あつ、こいつ。

俺の心を読んだな!?

顔に出てたかな……

…

「さあこのメニューの中から好きな物を選ぶんだ」

「ではこちらのコースを」

いや、それコースじゃないから。

そんなパスタばかり5品も6品も食べられないだろ。

「では……このプリン・ア・ラ・モードなるものを」

「先に飯にしなさい」

「ひーん」

子供か。

そんなにプリンがお気に召したか。

「仕方無い。俺が決めてやろう。このミートソースパスタでいいな」

「マサト様のお勧めならば喜んで。では食前酒は……」

「オーノー！ お姫様、日本じゃあお酒は20歳からって決まってるんだ」

「まあ、そうでしたの」

『ダメ、絶対』

それまた別のモノ。

って言うか金属バットさんは表でしゃべらないで欲しいのだが。

しかし何も考えずに抜き身で、しかも折れ曲がつてる金属バットさんを持つて来てるのだが。

誰も変な目で見てこないのは、やはり周囲の人も謎の力でバグらされてるのだろう。

そもそもピンクの髪でお姫様ドレス姿のファルフナーズが注目を浴びてない。

白い手袋に宝冠までしてるのだから、普通は注目の的だと思っただが。

やっば、何か認識を阻害するようなバグなんだろうなー

無難にドリンクバーを2つ注文してコーラを注いでファルフナーズに渡す。

「黒！ 真っ黒ですわ！ これは毒です！」

「いやいや、普通の炭酸ジュースだから」

「褐色の泡まで噴き出して……ああ、王国のお父様お母様、ファルフナーズは志半ばにし  
て——」

「いいから飲めー 飲み放題だからな」

「あつ、はあーい」

『意外とノリノリな姫である』

姫様がお姫様ノリノリってどんな悪ふざけなんだか。

あ、吹き出した。

むせてる、むせてる。

炭酸強かったかな？

「けほんつ、ドレスが台無しですわ……」

「なーに、大丈夫だ。洗濯機なら、洗濯機なら何とかしてくれる」

そんな高価そうなドレスを洗濯機でどうにか出来る気はしないけど。

紙ナプキンを手渡してやりながら、もう数枚のナプキンでテーブルを拭く。

「……噴水姫」

「もー！ マサト様はいつも私が何かしでかす度にー！」

手を出して叩こうとするも、テーブル越しだから届かない。

ははは、距離の防壁だぜ。

本当はむせこんだ時に、鼻からびよろりと鼻水が出た事を言おうと思っただが、これ言ったらガチギレされそうだからな。

鼻汁姫、びよろり。



## #28 「爽やかスマイル、歯をキラリ」

「よし、みーとそーすを頂くのですわ！」

「最近俺の口癖移ってきてるよね」

「まあ！ このソースの香ばしく何と深みのある事でしよう——」

始まった。

喜んでいるから良いんだけど、一口だけでよくあれだけ言葉が紡ぎ出せるもんだな。

「あ、まだかかります？」

「ええ、後3分ほど。そしてこの小麦粉が原料のパスタという形状がまた——」

一口10分か……スローフードここに極まれり、だなー

長生きするよ。

ファルフナーズが2口目を食べた時には俺は全部食べ終わっていた。

女つて食べるの遅いよなー

：

「やばい。腹がタプンタプンだ」

『ドリンクバーを飲みすぎなのである』

「ふふつ、マサト様のお腹を突つくと何だか楽しい感触ですわ」

君が食べ終わるのを待ってた結果だよ？

周囲を警戒しながら店を出る。

どうやらあのタクシー屋は去ったようだ。

良かった。

「大変素晴らしい昼食でしたわ。マサト様のお屋敷の食事に勝るとも劣らない美味でしたわ」

「そりやどーも」

パスタセット9000円だけどな。

まー、口に合ってくれて良かったよ。

俺が異世界に行ったら、絶対1日で日本の食い物が恋しくなるに違いない。

「なあ、ファルファーズの国の料理ってどんなの？」

「そうですわね……肉料理でしたら、私はドリル・バッファローのヒレをレプラコーン・ピノの赤ワインで煮込んだ——」

あ、ダメだ。

さっぱり分らない。

まあドリル・バッファローって時点で理解したくも無くなつたが。

やっぱり角が回転しながら突進してくるんだらうなあ……

食材ひとつに命懸けとは恐ろしい。

…

結局、クボタスポーツ用品店に辿り着く頃には夕方になってしまった。

「よし、前回の徹は踏むまい。ファルフナーズ、自動ドアを開けてくれ」

「かしこまりましたわ。ここに立てばよろしいのですね？」

フイイイン

「えーらつしえい！ ハマタン装備店にようこそ！」

順調にバグリ続けてるな

それとも俺が来たからバグリ直したんだらうか。

「すいません。この金属バットなんすけど、直せますかね？」

「また来たな、兄ちゃん。少しは戦士らしい顔になってきたじゃねえか」

どんな顔だ。

「ああ、こりや耐久度が0になってる。装備できないよ」

「そんなルールあったのか」

『ないぞ』

「普通に鉄の像を殴ってましたわ……」

禿げ散らかした店主が凄いい残念そうな、愕然とした顔になった。  
ええ、何その表情!?

空気を読んで話し合わせろって事?

それっぽく受け答えしないと逆に面倒な事になりそうだぜ。

「オ、オヤジ……流石に強敵揃いになってきてな。お前の腕が頼りなんだ。頼むぜ」

こ、こんな感じか?

あー……すっごい嬉しそうな顔になった。

キラッキラした表情になってる。

「ハッ！ 誰に向かって口を聞いていやがる！」

スポーツ用品店の店員ですよね？

「待ってな。このくらい、すぐに直してやるぜ」

革の作業グローブを手にはめながら言う。

プツプツと手につばを付けて……汚ねえなあ。

そもそもグローブの上に付けて意味あるのかね。

『流石に良い気分では無いのである』

「うるっせえ！ 気が散るからしゃべるな、金属野郎！」

どこからともなく取り出した大きいハンマーで金属バットさんを滅多打ちにしている。

外側からハンマーで殴って、折れた金属バットが真っ直ぐになるはずが——  
あった。

「んなアホな」

「ふう……もう年だぜ。だが、久々に良い仕事をした」

額の汗を拭いながら、やり遂げたぜって爽やかな笑顔してる。

でも額を拭いた時に散らかり気味のバーコードが前髪にかかって、ちよつと切ない事  
になってるぞ。

おっと、あのオyajジの顔は、またそれっぽいな事を言うのを期待してる表情だ。

「えーと……いい腕してやがる。まだまだ衰えちゃあいないようだな」

「はんー！」

ニヤリと笑って真っ直ぐに戻った金属バットさんを突き出してきた。

仕方ないので、同じくニヤリと笑って受け取る。

やめて。 そんな爽やかスマイルで歯をキラリと光らせないで。

「だが、兄ちゃん。それだけじゃダメだ」

「はい？」

「随分と硬い敵を相手にしてるようじゃないか」

『ちよつとテコの原理を使い誤っただけである』

シート！

あー……ほらー、またオヤジがこの世の終わりみたいな顔になった。

「ま、まあそんな所だ。動く鉄の像を薙ぎ倒さなきゃならなくてな」

シャキーン！

そんな効果音が聞こえた気がした。

オヤジ速攻復活。

わー面倒臭い。

「だろうな。そのままの強度じゃ一体倒すたびに俺を儲けさせに来る事になるぜ」

「ふーむ、では何か良い方法でもあるのか？ 教えてくれ、オヤジ」

「俺とお前の仲だ。教えてやろう。ここへ行きな」

どんな仲間かな？ 聞きたくはないよ。

オヤジは腰から巻物を取り出し出して俺に渡した。

巻物って……

「これは……？」

「行けば分かる。そこでハマダというジジイを探すんだ」

ふと気になってオヤジの胸元を見ると……

『店長代理ハマダ』

「納得した。ただの仕事丸投げじゃねーか！」

「じゃあな、兄ちゃん。死ぬんじゃないぜ」

あつ、それは既に7回ほど。

「毎度有難うございました。またのご来店をお待ちしております」

「そこは普通かよ！」

疲れる店だ。

## #29 「剣は万能の武器となる！（バットです）」

「よし、巻物だ」

「何だか楽しくなってきましたわ」

スポーツ用品店を出てすぐ巻物を広げた。

後ろですっごいオヤジがにこにこしながらこつちを見てるけど気にしない。

巻物を広げて、ぱらりっ！

「ハマタン装備店 ↓ 300m ↓ 目的地」

スパアーン！

「直進すぐそこじゃねえか！」

「口頭で終わる話でしたわ……」

反射的に巻物を地面に叩きつけてしまった。

すまん、巻物。

悪いのはお前じゃない。

あのスポーツ用品店の禿げ散らかしたオヤジだ。

「ファルフナース、この巻物あの後ろでニヤニヤしながら見てるオヤジにぶつけて返し



て来て」

「そ、それは流石に……一応、親切で教えてくださったのですし」

『親切3割、イタズラ7割なのである』

そもそも巻物なんてものがスツと出てきた時点でおかしかったんだ。

「リベンジしてやる。今度来るときまでにスライムを生け捕りにして買い取らせてやろうぜ」

『パニック・ホラーの始まりフラグである』

「パニ……？ 美味しそうな響きがしますのですわ」

食いしんぼうさんめ。

「どれ300m先は……あれかな？」

やたら赤い色で目立つ大型の店舗がある。

これが探索の末に辿り着いた約束の地か。

苦節2分。

擬人化されたマスコットがニヤニヤしている看板を読み上げる。

「カー・コンビニエンス倶楽部」

『車のメンテナンス屋である』

「く、車は悪魔の乗り物ですわ!」

「板金屋に來させて何をしろってんだ……」

『ともかくあの店主の父親殿を探すのである』

父親と決まったわけじゃないけどな—

心底どうでも良いから突っ込まない。

「すみませ—ん」

「いらつしやいませ! 修理車のお引渡しですか?」

まあ車のメンテナンス屋に徒歩でくればそうなるな。

だが生憎、俺は車どころか免許すら持つてない。

「あ、いえ。ハマダさんて人を探してるんすけど」

受付のぴつちりとしたブラウスにタイトスカートの綺麗なお姉さんの表情が、いや空

気が変わった。

目を細めて、髪をかき上げながら遠くを見つめてる。

「そう……遂にこの時が來てしまったのね。彼なら倉庫よ。また寂しくなるわね……」

「あ、ありがとうございます」

お姉さんも変なスイツチ入ったみたいだ。

とつとつ用を済ませてしまうに限る。

倉庫は部品や廃棄品の置き場のようで、ガラクタが山となって積み重なっている。

「ハマダさーん、居ますかー？ ハーマダさーん」

「来たか、小僧。そろそろ来る頃だと思っただけだぜ」

うわあ。 最初から全力でバグってる。

もろ右手にスマホ握ってるじゃん。

絶対今、スポーツ用品店のオヤジから連絡もらったろ。

「この金属バットさんの強度を上げたいんだ。鉄の鎧の装甲を抜きたい」

「鉄の剣で鉄の鎧をな。簡単に言ってくれるぜ」

いえ、剣じゃなくてバットです、バット。

鉄じゃなくて超ジェラルミンだし。

「だが任せな。ワシは強化一筋50年だ」

「強化!?!」

「そうだ。鉄は打って鍛えるのだ」

ジェラルミンなんだけど……

大丈夫かなあ？

「突きなら同じ鉄の剣で簡単に抜けるが、これはそうもいかん」  
バットですからね。

『我にも弱点くらいある。完璧な武器など存在せぬのだ』

「その通りだ。だが強化はその無理を押し通す！ 剣は万能の武器となる！」  
バットです、バットバット！

爺さんがどこからともなく出したハンマーで金属バットさんを叩く叩く。

ガングオン！ ガガン！

ピローン！

「えっ、何、今の“ピローン”って音？」

「できたぜ。強化値は＋１だ」

「おお！ 何かゲームっぽいな。でも待てよ……＋１って事は、もつと強化できるの？」

「お値段は強化したい武器の現在の強化値 × 1000円 になります」

営業口調だ！

『何やら体に一本芯が通ったような良い気分である。主よ、良ければもう少し……』

「もちろん。手持ちをはたいて強化してやるぜ」

「ああっ!? 帰りにプリンを買って頂く約束でしたのに!」

お姫様は地球にグルメツアーに来たのか!?

∴

＋9まで強化を終えた。

ここで爺さんが突然違う事を言い始める。

「ここから先は俺でも失敗する事がある。成功率は80%だ。特別な素材があれば成功率が上がるぞ」

「ほーん。失敗するとどうなの?」

「逆に強化値が下がる」

なーるほど。

「手持ちも少なくなってきたし、今回はここまでで十分だろ」

『うむ、格段に強化されたのである。これなら、あの鉄の像も打ち砕けようぞ』

本人が、いや本バットが言うんだから間違いないだろう。

「プリン、楽しみにしておりましたのに……」

プリンセスがあんまりプリンプリン言うなよなー

「大丈夫。プリン買うくらいは十分残ってるから安心しろ」

「流石マサト様ですわ!」

できればもっと別の所で流石って言って欲しいなあ。

「世話になったな、爺さん」

「なあに、俺より先に死ぬんじゃねえぞ」

いえ、もう7回ほど。

店を出る所で入り口が騒ぎになっていた。

さっきのバグった受付のお姉さんが声を張り上げている。

その相手が――

「あの兄ちゃんには俺の力が必要なんだ！ 俺のタクシーがな！ ここを通せ！ 力づくでも通ってやるぞ！」

「あの子の悲しみの何が貴方に分かると言うのっ!? 力だけでは何も解決しないのよ

！」

「……」

『……主はどんな悲しみを？』

さあ……？

毛根とかですかね。

ややこしくならないよう、  
見つかる前に帰ろ。

# #30 「美は見られる事で素晴らしさが増すのだ」

「よし、プリンですわー！」

「ご飯の後にしなさい」

ファルフナーズが口を尖らせながら、手をパタパタとさせて抗議する。

エサをもらえなかった小鳥か。

帰りにコンビニに寄った時のファルフナーズの喜びようときたら。

黄色い声で「プリン祭りですわー！」を連呼してた。

流石に店内の注目を浴びて焦ったぜ。

プリンだけに目が行って、他のスイーツに気付いてなかったから良かった。

あのコーナーが全て甘味だと知ったら、きつと全部買うまで駄々をこねたな。

「よし、金属バットさんを強化もしたし、ステータス画面の確認を頼む」

『差し出がましいようだが主よ、強化の巻物が2枚あると思うのだが』

「そうだった。先に使っておくか」

『よろしく頼むのである』



「お前ばかり強くなりやがって、このヤロー」

『我は主の体の一部と言ってるであらう。第一、我は女だ』

「ははは、冗談も程々に——えっ？ バットに男とか女とかあんの？」

『あるぞ。バットに限らぬが主の影、つまり番つがいとして主の異性になるもの也』

「だって、無茶苦茶おっさんボイスじゃん」

『金属の振動によつて音を出しているせいである。お望みとあらば女性らしい声にもできるが、かなりの高音になる』

「やってみて、やってみて」

『ワガアルジヨー コンナ コエガ オコノミカー』

「わははは、女声というより九官鳥みたいだな」

『とんだ羞恥プレイである』

…

「あつ、こいつ静かだと思つたらプリン食つてやがる！」

「頂いておりますわー んふふっ」

「ふっ、まあいい。食後の一時、優雅にプリンを楽しむ俺の姿を指を咥えて見てるがいい！」

「プリンはまだあるのですわ」

「待て待て、ファルフナーズが2個食べるのが前提なのはおかしいよね？」

「昨日の結果、今は私がプリンを2つ頂く事になっているはずですわ」

「こいつ……いいだろう。」

そつちがその気なら、第2次プリン戦争を起こしてやる。

「血で血を洗う闘争がお望みとあらば地獄を見せてやるぜ。だが今はこつちが先だ」

机の上に放置しておいた強化の巻物を2枚を取り出す。

『思えば、先にこれを使っておけば修理の必要も無かったかも知れぬ』

「確かになー けど、前回これで火傷したから慎重に行こうと思つて」

これ、貼り付けると燃え上がるんだよな。

「よし、ファルフナーズ。風呂場でやるか」

「あむっ……ふあ。もう少々お待ちいただけますでしょうか」

ああん、プリンに夢中なのね、このお姫様。

ちよつと甘やかし過ぎか……？

まあスライム頭から被ったり鉄の像に叩かれたりと、ここ数日は大変な目にあつてたからリフレッシュしてもらわないとな。

プリン1つに30分か、満足したファルフナーズが重い腰をあげた。

あんな細い腰つきのくせに、根でも生えたように動かないとはな。

そのうち1度、きつく締めてやらねばなるまい。

こう、キュツと。あるいはわきわきと。

「マサト様、その妙にいかがわしい手つきは、一体……」

『いかがわしい妄想に違いないのである』

金属バットさんをベッドの下にコロコロ

『酷い仕打ちである』

「うっせー、主の不利になる証言をかますようなバットはベッドより下じゃー」

自分で言っていて訳が分からない。

ちよつと埃つぼくなった金属バットさんを抱えて風呂場へ向かう。

「明日はベッドの下も掃除しますのですわ」

「別にいいよ。ま、ダンジョン探索して時間が余ったら、な」

お姫様の割には家事に積極的。

決して上手でも慣れてもないが。

それも姫巫女の修行と考えると、熱心なのかね。

「おし、じゃあ貼るぜー。2枚貼っちゃうぜー」

「消火準備やよし、ですわ」

『我は耐食性が悪く錆びてしまう。水をかけるのは構わぬが、良く乾かして欲しい』

「1枚目、おりゃー」

ペタッ

ボワッ！

前回と同様に青白い炎を上げて巻物が燃えていく。

「水、かけましょうか？」

「このくらいなら大丈夫だろ」

『何やら一際、体の内側から湧き上がる力が増したのである』

火が消えてからも少し待っ。

熱くて貼り付けられないかもしれないからな。

「よーし、じゃあ2枚目いくぜ！どりゃあー！」

ペタリ

ドゴーン！

「うおおーっ！」

「燃えっ！ 燃え上がりましたわ！」

『漲みなぎってきたのである！』

金属バットさんが炎上した！

貼った巻物が青白く燃えるのではなくて、バット自体が燃え盛っている！

『明日はホームランだ！』

「うるせえ！ 火を消せえ——！」

「水っ！ 水ですわ！」

ファルフナーズもパニックっしてしまい、水を満たした洗面器を手に持っている事を忘れてる。

金属バットさんは高さ1mにもなる炎を上げて燃え続ける。

くそっ、仕方無い！

シャワーのヘッドを持って蛇口をひねる。

ニョロロロロロ

「なんだこれは!?!」

「ローパーの触手ですわ！」

「しまった！ ダンジョン・オープナーの力でシャワーがダンジョンの入り口に！」  
『主よ！ 我を持って！ ローパーごとき、一撃で——』

「燃えてるバットに触れるか！」

「水！ 水を！ マサト様！ ひゃあ！ ローパーの触手が私の体に——！」

「お前が手に持つてるだろオ！」

「ヒノキのスノコに引火したア!？」

「マサト様！ 触手が！ 触手が私の胸を！」

『こうなったら全てを燃やし尽くすまで!』

「やーめーろー！」

……

…

「やっと収まった……」

「えっぐ、くすんつ、ひっ、うつく……マサト様のおバカあ……」

『ガラにも無く興奮したのである』

ファルフナーズから奪い取った洗面器でひたすら浴槽から水をかけた。

水を汲んではバットにかけ、汲んではバットにかけ。

合間、合間にシャワーヘッドの穴から出てくるイソギンチャクみたいな触手に絡みつかれるファルフナーズを引き剥がし……

「やれやれ、大変な目にあつたぜ」

「マサト様のおバカおバカあ……ローパーに胸をまさぐられましたわ」

「知能の無いモンスターに触られるくらい別にいいじゃないか。毎日下着やドレスに胸を触られてる、つてのと同じだろ」

「マサト様には乙女心の恥じらいが分からないのですわ。くすん」

「まあ俺、乙女じゃないしな」

『そういう問題でも無いのである』

…

ファルフナーズを引き剥がす時に触手を引きちぎったせいとか、勢いの弱まった触手がニルニル動いてる。

シャワーヘッドの穴から何十本も短い触手が蠢うごめいていてキモい。

「で、このローパーって何なの？」

「無機物に擬態して獲物を絡め取るモンスターですわ。実体は不定形生物で獲物の体液を吸い尽くします」

「……ちよつとファルフナーズ、じっくり見たいからもう一回、絡まれてみて？」  
「マサト様のえつちいー！」

シャワーヘッドを頬に押し付けられ、ローパーの触手が俺の顔に吸い付く。

「いてててて！ これ蛭ひると同じだ！ 超ジワーツとしてみるように痛い！」

頬に押し付けられた触手を剥がして鏡で確認すると、赤い日の丸のようになっていた。

『ははは、派手なキスマークなのである』

「うっせー あー、しみる」

「自業自得なのですわ」

「ごめんで」

「では、食後のプリンを頂く事で手を打つのですわ」

「まあ良いだろう。第2次プリン戦争は回避だ。1個ずつ食べるか」

頬をぷっくり膨らませていたファルフナーズが笑顔に戻る。



「しかし慌てて火を消したから、水びたしのびしょ濡れだ」

『せっかく滾たぎっていたのに、残念である』

ん……？

このびしょ濡れ具合。

良く見ればファルフナーズの姿も――

いかにもお姫様な真つ白のドレスが水に濡れて、ファルフナーズの体に張り付いている。

ゆったりと広がっているはずのドレスが今は彼女のボディラインをくつきりと浮かび立たせている。

ドキドキする。

そんな、まさか。

いくら絶世の美少女とは言え、未成年の小娘にこの俺が……!?

16歳の小娘かと思っていたが、その胸はとても豊かだ。

日本人体型とは比べるべくもない。

膨らみ、などと言う言葉では表しきれない、まさに双丘。

いや、双球！

冷えに身をすぼめた影響で両の腕に挟まれ、その双丘が柔らかさを主張するように縦にたわむ。

その双丘を包み込む純白レースの下着が、透けて見える地肌を逆に強調している。その匂い立つかのような艶やかさが――

「マサト様だったら！ どこを見ているのです！ いやらしいっ！」

スコーン！

シャワーヘッドを投げつけられた。

頭にコブが出来た。

「いいじゃないか。減るものでも無し」

「減りますわ。貞操の価値とか乙女の尊厳とか色々減るのですわ」

「減らない減らない。芸術とか美とか、見られる事で素晴らしさが増すのだ」

『屁理屈だけは一人前なのである』

「減るのですわ。少なくとも……」

「ん？」

「今日のマサト様の分のプリンは確実に減って無くなりましたわ」

あちやー

そう来たか。

「ちえつ、そんなプリンばかり食べてると、胸がプリンプリンになるぞ」

「マサト様、お下品過ぎますわ！ 少し反省なさると良いです」

パタン

あっ！

風呂場に閉じ込められた。

ダンジョン・オーブナーの能力のせいで、自分で風呂場の戸を開けられない。

くー、まさかこんなお仕置きの仕方があったとは。

「ファルフナーズさーん！ 悪かったから出してくれー！ このままじゃ風邪引いてしまふー！」

「ほら、やっぱり減るのですわ」

「何が減るんだか」

「マサト様の寿命です」

おそろしー

『むしろ錆びで我の寿命がマツハである』

共に逝こう、友よ。

プリンを食べる姿を、指を啜えて見てるのは俺の方だった。

## # 3 1 「いや無理だろ、人間の男なら」

「よし、金属バットさんのステータス確認だ」

「マサト様の分のプリンを頂いてからですわー」

くっそー

俺のプリンがファルフナーズの口に……

「お、俺のプリンがあく……」

「何でございますか。私の胸をいやらしい目で見ておいて」

いや無理だろ。

人間の男なら、濡れて透けた女性の胸を見ないでいるなんて。

「食べながらでいいから、ステータス確認を頼むぜ」

「もう少し々お待ちくださいませ、ですわ」

たっぷり15分かけて食べやがった。

これでも急いだのと言う。

俺なら2口、30秒で食べてみせるのに。

急ぎとあらば一口で丸飲みしてやるぜ。

『プリンを急いで食べる状況なぞ存在し得るのだろうか』

金属バットさん、俺の心読めるの!?

∴

「では金属バットさん様のステータスを確認致しますわ」

『姫、よろしく頼むのである』

「まあ！ 命 midpoint と打撃点が 21 点になっておりますわ」

「俺の 3.5 倍強いのか……」

「名称が「伸縮自在の知的なファイア・ブランド」メジャー級金属バット+9、と書かれております」

「なっげー名前になったな」

『金属バット冥利に尽きるのである』

バットの冥利じゃないと思うけどな。

「で、伸縮自在とはどんな効果だ？」

「はい、ええと……大きさを使用者の任意で変更できる、のだそうでございますわ」

「ほーん。握って命じれば良いのかな？ やってみよう」

『お試しあれ』

「伸びろ！ 金属バットさん！」

みよいーん

「うわっ、マジだ！ 伸びるぞこれ」

ガシャーン

「ま、窓ガラスをブチ破ってしまった……」

『撃破1、なのである』

「のん気な事言つてないで加減しろよ！」

『我自身に調節機能無し。主の意思のみで変動している』

金属バットさんは5mくらいの長さになった。

高い代償を払わされたが。

いや、これから払うんだけど。

「最大でこの位の長さか」

「素晴らしいですわ。流石マサト様」

「素晴らしいのは金属バットさんだけだな」

『我に力無し。ただ主の求めに応じる、その機能が存在の全てである』

じゃあ主の理解できない言葉使わないで欲しい。

「よし、じゃあ元に戻れ！」  
うによーん

「何だか変な感触が伝わってくるなあ」  
『質量変化に伴うものであろう』

そう言えば、大きくなった程には重さはそれほど増加しなかった気がする。

「使いやすくなって良いな。やはり少年野球サイズじゃあ小さいからな」

『念願のメジャーリーグ公式戦用サイズである』

そんな願望があったのか。

でもプロ野球は木製バット限定だよ？

「さて、次は……ファイア・ブランドてのだが。やっぱり燃えるのか」

『燃えるのである』

「はい。マサト様、説明文にもその様に記述してありますわ。炎属性付与、炎による追加ダメージ、と追記があります」

「おー、そりゃ頼もしいな。でも俺が火傷しちゃうんじゃないの？」

『試してみるのである』

「ヤダよ。怪我したくねー」

「熱くなったらすぐに手放せば大丈夫ですわ。ご心配でしたら、またお風呂場で」



ぐう

俺の意思は関係無しか。

「スノコも買い直さないとな」

『申し訳無しである』

ガラスにスノコ、何だかんだで金が掛かる。

明日からバリバリとダンジョンに潜ってモンスターを倒さねば。

：

「よし、では……燃えろ！ 金属バットさん！」

『応！』

ぼわっ

「うおっ……つと、熱くない。大丈夫だ」

『たぎっているのである』

金属バットさんのグリップ（握る部分）は燃えていない。

じつとそのまま持っていても熱さは伝わって来ない。

「最初のだけが異常だったのか」

『そのようである』

「マサト様、追記がありました」

「ほう？ 何て書いてある？」

「使用者の精神状態によって炎の火力、追加ダメージは可変、だそうですわ」

「気合次第でまだ強くなるって事か」

『素晴らしい能力である』

「大きさ、炎の追加ダメージ、強化値。これだけパワーアップすれば鉄の像も楽勝で壊せるだろう」

『うむ。もはやあの鉄剣ごときに遅れを取る事は無いのである』

トラップとして剣が振り回されてるだけなんだけどな。

また鉄の像の手首を狙い撃ちして、部分的に破壊するだけで良い。

威力が増したから楽になるし、金属バットさんの耐久への負担も減ってくれるだろう。

「はっはー、何だかんだ言っても強い武器を手にしてるかと思うと気分が良いな！」

『主にそう思ってもらえて、我としても感無量である』

気分も乗ってきて、素振りを軽く2、3度。

バットの軌道で描いた弧を炎が舐めていく光景が何とも言えずカッコイイ。

ブン、ブオンツ

「きやつ！ マサト様、狭いところで振り回すのは——」

「あつ」

ガツツ！

シャワーの蛇口に直撃。

ブシャーッ！

「ヤバい！ 蛇口ぶつ壊れた！」

『水が止まらないのである』

「マサト様！ マサト様！ 洪水ですわ！ 雨漏りですわ！」

ファルフナーズが慌てて訳の分からない事を言っている。

「やべーな……確か水道管故障したら、家への給水管の根元を止めないとダメなんだよな」

『局地的断水やむ無し』

急いで庭に出て、地面にある給水管の元栓を締める。

元ヒキニートである事が役に立った。

水道の検針おばさんがチェックする所を何度も眺めていたから。

…

「さて……1日に2度も水びたしになってしまおうとはな……」

「散々な日になりましたわ」

しかし、水に濡ればそつたファルフナーズは何だか色気が増したように見える。女性は火や水にくぐらせると魅力が増すと言うが――

「マサト様！ ちつとも反省しておりませんですわ！」

『男のサガである』

洗面器と石鹸を投げつけられてしまった。

タンコブが増えた。

両親に水道を壊した事を伝えたら、オヤジにゲンコツを食らった。

更にタンコブが増えた。

最悪だ。

しかも2度も水を被ってしまったせいで、本当に風邪を引くハメになった。

翌日は水道修理の騒音に頭を悩ませながら寝込むのだった。

騒音とタンコブと風邪。

3重に頭が痛い。

「えつちなマサト様への天罰に違いないのですわ」

姫巫女が言うのだから間違いないね。

「マサト様が回復してくださるまで、お詫びのプリンを買って頂く事ができませんわ  
……」

おや、更に頭が痛くなりましたよ。  
4重苦だ。

## #32 「鉄は熱くして打て」

「よし、ダンジョンだ」

「お風邪を召しておられるのですから、まだ寝ていたほうが……」

「なーに、ウィルス性の風邪じゃないんだ。体を動かしてれば治る」

「ウィル……?」

第一、借金がある。

風呂場の水道を破壊してしまったから。

修理代は親が立替えてくれたものの、俺が払う事になってしまった。

おのれ暮らし感心クラスマン。

ウソです。修理してくれて有難う。

あと両親には隠してるけど、窓ガラスも交換しなきゃなあ。

そしてスノコもか……金かかるなー

「行くぜ！ 3万6千飛んで54円！」

「今日のマサト様は良く分からないのですわ」

『男には稼がねばならぬ時がある、のである』

「方眼紙よーし、ペンよーし。準備完璧！ いざ、ダンジョン・オープナー！」  
『主、我を忘れていけないで欲しいのである』

金属バットさんをベッドの脇に立てかけたままだった。

「わ、忘れてないし？ 片手に方眼紙とペンを持ってて、扉を開けるために仕方なかっただけだし？」

『絶対忘れていたのである』

フスマを開けると第4階層の廊下が……

左右に広がっていた。

「あれ、前回とは出現位置が違うのかな？ それとも配置が違うのかな……？」

「どちらの方向にも遠くに鉄の像が見えますわ。恐らく、壊された形跡がないので——」

『うむ。配置変更であろう』

「ほほー、じゃあ今までも階層のボスを倒すまでは、入り直すたびにダンジョンも復活してたのか」

「どうやらそのようでございますわ」

つまりーからやり直しか。

だが、階層まで戻されてないのはラッキーと思うべきか。

「よし、じゃあ慎重に歩測しながら……って、歩測なんて出来なかつたわ、俺」  
「歩測とは何でございましょう？ 私に出来る事であれば……」

『歩幅をなるべく等間隔に保つ事によって、歩数で距離を測る事である』

「うーん、じゃあこの石壁のブロック数で測っていく方が正確かなあ」

『主よ。計測なら我に任せるのである。機械的な事なら無機物に任せるのが一番也』

「便利な奴だ。バットなのに大きくなったり、火を噴いたり、計測したりと万能だな」  
『お褒めに預かり光栄の至り』

もう全部金属バットさん一本で十分なんじゃないかな。

「まずはシンプルに、『外周に手を付きながら進む外堀を埋めていくぜ戦法』だ」

「流石マサト様ですわ。迷宮を迷わずに進む、そんな手法をご存知とは」

「ファルフナーズ、右と左どっちが好き？」

「はひっ!? ええと、そうでございますね……どちらかという……」

「じゃあ右な」

「もーっ！ マサト様、意地悪ですわー」



ファルフナーズが俺の背中をポコポコと叩く。

姫に押されて迷宮参り。

入り口から100m近く進んだ所で、例の鉄の鎧像が2体、向かい合わせに立っている。

「さあ、今日は軽くぶち壊してやるぜ！」

『リベンジ推参なのである』

日本語おかしくない？

「燃えろ、金属バットさん！」

『応！ さあ主よ、ガツンと一発』

「いやいや」

『!?!』

金属バットさんを鎧の右手首に張りつける。

『破壊せぬのか?』

「鉄は熱くして打て、って言うじゃん?」

『長生きするのである』

「うっせー、この先にどれくらい鉄の像があるか分からん以上、毎回ぶち壊してたら俺の

体力が持たんわ」

10分ほど鉄の鎧像の右手首を炙あぶる。

「さて、こんなものか。おりゃあー！」

ボゴツ！

暖めたチーズをナイフで切るような感触で簡単に手首を叩き落せた。

地面に落ちた手首と鉄の剣が派手な音を響かせる。

「ファルフナーズ、必ず手首を落とした側の像に寄って通ってくれよ？」

「わ、私とて同じ間違いは2度はしないのですわ」

ははは、と笑いながら鉄の像の脇をすり抜け――

ゴムンツ！

「痛って！」

『手首から上も、罨の動作も健在なのである』

余りに像の近くを歩きすぎて、像の右腕そのものに殴られた。

運良く野球用マスクの上にヒットしたから良かったものの。

痛みの余り転がってのたうちまわってしまった。

「マサト様、耐久が1点減っておりますわ」

「マジ痛い！ 本当にわずか1点のダメージかよ」

昨日作ったタンコブも完治してないのに。

頭ばかりダメージを受けるなあ。

「この鉄の像解体して、兜だけもらっていくかな……」

『ちよつとセコいのである』

「ん？ 待てよ？」

「どうされましたか、マサト様？」

「じゃあこの切り落とした手首と剣は安全か」

『また悪い顔になったのである』

「うっせー、顔が悪いのは元々だ。ファルフナース、両替機を出してくれ」

「かしこまりましたわ」

ファルフナースが腰元にあるらしい魔法のアイテム・バッグから両替機を取り出す。

「鉄の像の手首と剣、さて、おいくらハウマツチ！」

『かなりセコいのである』

「こちとら借金を背負った身なんでえ！ 体裁どうの、なんて言ってもらえるか」

「庶民の知恵なのですわ」

お姫様の口から言われると嫌味にしかならないからやめて欲しい。

両替機の画面に換金表示が出た。

「セコく奪い取った鉄の剣と鎧の手首 を換金します 1) 銀貨3枚 2) 3270円」

「一言余計だ。両替機もステータス画面みたいに小言を言うようになったのか」  
「乳母様を思い出しますわ……とても口厳しくて」

ほほー、それでこんなに素直なお姫様に育ったわけか。

万が一に会う事があつたら一言礼を言わねばなるまい。

ついでに甘い物好きを何とかしておいて欲しかった、ともな。

「ともかく3000円ゲット！ よし！ やる気出てきたぜ」

『こうなつたらガンガン進んで稼ぐのである』

「じゃあ反対側の像も壊しておくか」

『最高にセコいのである』

「うそうそ、片っ端からやってたら日が暮れてしまうからな」  
『それを聞いて安心したのである』

「あ、でも、この鉄の像自体を換金できるのかな」

『この上ないセコさである』

## #33 「そんな怖い考えはやめよう？」

「よし、ガンガン進むぜ！ 30000円！」

「その調子ですわ、マサト様」

この第4層、鉄像迷宮はかなり広大だ。

100m程進むと左に直角に曲がる。

そこからまた遠くまで通路が続いており、真ん中に鉄の像が向かい合って立っている。

「いたいた。30000円」

『日本語文化の敗北を感じるのである』

バットに言われたく無いなあ。

俺の分身、影の人格とか言ってるけど……

こんなにツッコミ性質で説教臭いのが俺の分身とは到底思えない。

「よし、じゃあ再び30000円ゲットだけ」

『鼻先にニンジンを吊るされた馬のようである』

「それでやる気になってくれるのでしたら、私は、まあ……」

ははは、何とでも言うがいい。

世の中稼いだ者勝ちなのだ。

ゼニが無いのは発言権も無いのと同じじゃ。

……とか言うのと、つい先日までの自分に跳ね返ってくるから黙っておこう。  
そもそも今だって借金状態だしな。

…

鉄の像の罫を突破し、再び小銭をゲットする。

「よし、次の3000円を求めて進むぜ」

『階層突破の目的すら……』

「お、おほほほ……」

「突き当たりは再び左右に分かれてるな。じゃあ宣言どおり右手沿いで」

「かしこまりましたわ」

おっと、せつかく持ってきた方眼紙に地図も書いておかないとな。

メモメモ……

「それにしても広い迷宮ですわ」

「迷わせて気力体力を奪うための物だからな」

『3000円迷宮である』

日本語文化、ここに完全敗北だぜ。

……

…

「よし、飽きた!」

『早っ! 我が主にしても早すぎるのである』

「私も歩き疲れしましたわ」

『姫まで……』

あれから迷宮を右、右……と、分岐点がある度に右に曲がりつつ進んできた。

3000円、もとい鉄の像の罫も10数体破壊している。

やはり全部を殴り倒してたら体力が尽きてた所だ。

『借金完済の目処が立った途端、これである』

「いやいや、朝からもう何Kmも歩いたしなあ。ほら、一応風邪気味だし」

昼飯も食べてないし。

この距離を歩いて帰ればもう夜かな。

「じゃあ次の角を曲がってチエックしたら、今日は終わりにするか」

『主よ。入り直したらまた1からやり直しな事をお忘れなく』

「そうだった……次からはキャンプ体勢も整えなければダメかな」



「まあ、私ベッド以外で眠れるか自信がありませんわ」

ま、次の階層がさらに広くなったら本気で考えよう。

それよりも今日中にこの階層をクリアする事に専念したい。

「書いた地図から推測すれば、ぐるっと半周した感じだ。曲がり角が本当に直角ならば、だが」

微妙に直角ではない造りでマツピングを狂わす、なんて高度な迷宮だったら怖いな。

やや不安を覚えながら角を曲がる。

「マサト様、突き当たりで扉がありますわ!」

「おお、ようやくボス部屋か。帰りの道のりがこれ以上長くなったらどうしようかと」

「どうしても帰路が労苦でしたらマサト様が死亡して——」

「お姫様!? そんな怖い考えはやめよう?」

やだ怖い。

いくら不死身で死に戻り可能だからって、帰りのタクシー代わりに死ぬのは嫌過ぎる。

これが王族の思考法か!

「扉の手前にまた鉄の像があるな。さあ金属バットさん、炙ってくれ」

『この能力はガス・バーナーではないのだが……』

硬い事言うなよー

無限に出せるエコロジータなパワーなんだからさ。

……エコノミーだっけ？

追加の3000円をゲットして扉まで通路の安全を確保する。

聞き耳を立ててみるも……何の音もしない。

「よし、ファルフナーズ、扉を開けてくれ」

「かしこまりましたわ」

ギツギツギツ……

相変わらず力無いなー

パワフルなお姫様つてのもイメージ崩れるから良いのだけど。

ヴーン！ ヴーン！

「しまった！」

『また警報の罠である』

「避けようが無いとは言え迂闊だった」

「ど、どうしましょう。マサト様」

扉は半開きのままだ。

部屋の中にはどんなモンスターがいるか……

ガシヨン! ガシヨン!

遠くで金属の板が重なり合うような音がした。

——部屋ではなく後方から。

「後ろからモンスターが来る! ええい、ままよつ!」

扉を蹴飛ばして部屋の中に踊りこんだ!

『空部屋である』

「ボス・モンスターが居ない!」

第3層までの部屋より遙かに広い。

バスケットが2試合は同時に出来そうな広さだ。

壁には狭しと松明が取り付けられているが、部屋の床にも天井にも何も見当たらない。  
い。

「トラップが仕掛けてあるのか!? それとも見えないモンスターでもいるのか!」

「分かりませんわ。でもモンスターな気配は感じません」

ガシヤリ! ガシヤツ!

「なるほど……もう分かった。ファルフナーズ、部屋の中に入ってろ」

「かしこまりました。ですがマサト様、どうか状況のご説明を」

「階層のボスは最初から『居た』んだ。見ろ！ 鉄の像が来る！」

「まあッ！」

金属の音を立てながら歩いてくる2体の鉄の像。

そして片方は右腕が無い。

「最初に俺は像を見た時、罨かモンスターのどちらかだと思い込んだ。だが実際はその両方だった」

「でしたら、像はあの2体だけではなく……」

「およそ迷宮の外周だけを半周して20箇所に2体ずつ。もう半周の分と内側の通路の分を合わせたら……」

『20箇所 × 2体 × 通路2倍 +  $a$ の内側で100体は确实である』

100人斬り、ならぬ100体壊しが今、始まる——

100体にボコられる未来しか見えない気もするけど。

最悪、ファルフナーズの【炎の矢】で道連れだ。

何とでもなるな。

金属バットを構えて100体相手に大立ち周り。  
なんて、昔のケンカ映画みたいだ。

でも主役は元ヒキニートだよ！

## #34 「逃げ戦なら百選練磨である！」

「よし、ファルフナーズ！ 鉄の像のレベルは分かるか？」

「は、はいっ！ リビング・スタチューの亜種と思われれます。推定15レベルですわー！」

「15レベルか。勝てるかどうか……」

『5体や10体なら今の主と我の力で完勝できる。だが100体となると我の耐久が持たぬ』

「ですよー 金属バットさんの耐久以前に、俺が疲れ果てるし」

「申し訳ありませんわ。私が最初にリビング・スタチューに思い当たっていれば、こんな事には」

殊更わざとらしく、お姫様に向かってニヤリと笑って見せる。

意気消沈した所で何も変わるわけなし。

「じゃあ今晚のプリンは俺のだな！ なあに、失敗しても死に戻るだけ。今度は100体全部3000円ずつ儲けてやるさ」

「も、もう……マサト様ってば」

ファルフナーズも気を張って笑顔を作る。

よし、それで良い。

本当に全部の右手を切り落としてたら、何日かかるか分からないけどな！

「金属バットさん！ 燃えろ！ ファルフナーズは「魔法の盾」、かけ直しも準備！」

『応である！』

「かしこまりましたっ！」

ガシヨン！ ガシヨン！

ガツシヤンガツシヤン！

鉄の像の第1陣が目の前に迫る。

「うわ……第2陣は走って来てるぞ」

『トロルの時とは逆、部屋に入られて囲まれたら詰み、なのである』

その通りだ。

ここで食い止めなければ！

金属バットさんを振るい、まずは剣を握ったほうの鉄像を殴り飛ばす。

バキヤツ！

鉄の像はよろめいて2歩ほど後退する。

ヒットした胸部はベッコリとへこんでいる。

効果は抜群だ！

だが……

「流石に一撃で仕留めるのは無理か！」

『私の不甲斐なさを痛感せざるを得ない』

右手を落とされた鉄の像は俺を攻撃しようとはせずに、回り込んで部屋に侵入しようとする。

慌てて殴り飛ばして通路に押し込んだ！

「こいつら！ 結構知能があるぞ！」

鉄の像は身長2mを越え、通路では2体しか並んで歩けない。

後ろに次々と押し寄せて順番待ちのような様相を呈してくる。

「我が主よ！ 倒そうとしては部屋に入られてしまう。押し込めることに専念せねば」  
そう言われましても。

一杯一杯なんだよ！

右手の無い像を抑えつつ、3発殴れば剣を持った鉄の像を倒せた。

しかし完全に倒してしまうと、トロールとかと同じように淡く光って消えてしまった。



「倒せば次のがすぐ来るのかー」

うわー、面倒臭いったらありやしない。

というか、1体抑えながら1体倒すだけで呼吸が乱れてきた。

何せ硬い。

フルパワーで殴っては押し込めないと一気に入り込まれる。

通路は既にうごめく鉄の鎧で埋まりつつある。

よし、無理だ。死に戻ろう。

諦めが早いのが元ニートの取り得。

さっさと逃げ帰って風呂にでも……

ん？ 待てよ？

逃げる……良い手だ！

「ファルフナーズ！ 扉に向かって走れ！」

「はっ、はい!?!」

「どうせ死に戻るなら試すんだ！　ボスを倒せなくても次の扉を開けられるか！」

『その可能性に思い当たるとは！　流石は我が主！　逃げの人生なら百選練磨であるッ  
！』

ははは、こいつうら！

……この階層に置いていこうかな。

いや、両替機で売り飛ばすか。

ファルフナーズが勢い良く返事をして走り出す。

パタパタ……

「やっぱりダメかもしれない……」

『こればかりは、我にもいかんとも』

両手を肩辺りまで持ち上げての乙女走りだ。

まるで花園を舞う天使のような。

俺が早足で歩くより遅い……

「死ぬ気で走れえええ！」

「全力ですわー！　はふはふ」

必死で鉄の像を通路に殴り戻しながら、ファルフナーズが扉に到着するのを待ち焦が

れる。

頼む！ 俺が走って逃げる余力のあるうちに！

「……」

『……』

あつ！ あのアマ〜！

立ち止まって休みやがった！

手で胸元を仰いでいやがる！

見せろ！

じゃなくて。

「あと20mも無いだろオ！ 走れー！」

俺は聞いた。 鉄の像の騒音にまぎれてもハッキリと。

「人使いが、いえ、姫使いが荒いですわー」

と……

ちくしょー！

戻ったら目の前で、凄く美味しそうにプリンを食べてやるからな！

「でましたわー！ 階層突破の表示ですわー！」

キタコレ!

「ならば鉄の像に用は無いらしい! スタコラサツサだ!」

『逃げるが勝ち、である』

きびすを返して走り出す!

鉄の像が部屋に雪崩れ込んで来た!

「マサト様! 早く早く!、ですわ!」

ガツシヤガツシヤ!

「はひつ、鉄の鎧像のくせに早いッ! うわあああ!」

『中身は空であるからして』

そういう問題じゃねえ!

くそッ! 突っ込みたい!

鉄の像は見事なランニングフォームで、部屋を埋め尽くしつつ俺を掴もうとする。

何年振りかの全力疾走!

持つてくれ俺の心臓と肺!

「これで……はひつ、勝ちだッ!」

ファルフナーズの足元に転がり込む。

入れ替わりでファルフナーズが扉を閉めた。

ギギギ……ガチャン！

「きやあつ！」

ガンガン！ ガキン！

「マサト様！ 扉が破られてしまいますわ！」

オーケー

じゃあ最後の一仕事だ。

息を整えながら、ふらふらと立ち上がる。

しやべる余裕も無かったので、心配げな表情のファルフナーズに向かって笑顔だけ。

ついでに親指だけ立てる、俗に言うサムアップのハンドサインを。

幸いな事に、こちらから見れば引き戸、つまりノブを回して扉を引き開けるタイプだ。

ノブに手を掛け、回せば——！

ご覧の通りさ！

「ダンジョン・オープナー！」

開いた扉の先は鉄の像が居ない部屋だ。

「その手が！ マサト様！ 流石ですわ！」

『たまに見せる主の知恵は素晴らしいのである』

そう

俺が扉を開ければ、そこはもうダンジョンの入り口。

今、目の前に広がっているのは全然別のダンジョンだ。

元の扉の裏側がどうなってるかは――

ひとまず、神のみぞ知る。

と言う事にしておこう。

プギョルルルル！

パカーン！

扉の向こうから飛び出して来たモンスターに殴られた。

ゴブリンだ……

『そこに新たなモンスターが居る可能性を忘れているのが、実に主らしい所である』

「ふふふつ、最後の最後で締められませんでしたわね」



## #35 「勇ましくって素敵だと思えます」

「よし、階層突破ボーナスだ」

「天使様が降りて参りましたわ」

ゴブリンを軽く退治すると、例の鐘の音が聞こえてきた。

何気に倒せたが、思えば強くなったものだ。

カリーン コローン

「来たなイタズラ天使！ 今度こそお灸をすえてやる！」

『大人気無い事、この上ないのである』

子供天使2人はそれぞれが靴らしき物を片方ずつ持っている。

それをニヤニヤと笑いながら俺に投げつけてきた。

カリーン！

ははは、ホームランだ！

べちゃっ

時間差で投げられた、靴のもう片方が俺の顔面にヒット。

マスクが無かったら鼻血が出てる所だぞ。



子供天使はキャツキヤと笑いながら天井に吸い込まれて消えていった。

打ち返した靴は天使に当たらず、ややライト方向へ逸れて天井にぶつかつた……

「バツティングの練習もせねば。あいつらに勝つために」

『目的はともかく、良い事である』

「もー、マサト様つたら、本当に大人気無いのですわ」

ぷりぷりと文句を言いながらファルフナーズが飛ばされた靴を拾いに行く。

小言を漏らしながら靴を拾う姿は、ちよつとメイドっぽくて良いな。

「マサト様、この靴は浮遊靴レビテーション・ブーツだそうですわ。まあっ！ 〈耐久度

減少中〉ですって！」

「……やっぱ、俺が金属バットさんで打つたから？」

『間違いないのである』

靴屋で直るかな？

「壊れたら直せば良いのだ。さあ、効果と使い方を教えてくれ」

「かしこまりました。ええと……履くと自由落下速度が100分の1になる、のだそうですわ。精神力を込めて空中を『蹴る』事によって上に昇る事が可能、防御点+3点、以上ですわ」

「すげえ、まともな魔法の品だ！ ようやく、それらしくなってきた気がするな」

『新たなライバルの登場に、焦りを禁じえぬ我であった』

バットのライバルってブーツなの？

「どれどれ、使ってみるか。うわ、足を入れたらサイズ広がった。キモい」

「サイズ調節の魔法もかかっているのですわ」

そりゃ便利でいいけど。

こう、ニユルツという感じで変わるのはちよつと慣れそうにないな。

「では記念すべき第一歩だ！」

気合を入れて空中に足を踏み出す。

ググツ

「おお！ 昇れた！ まるでここに見えない階段があるかのようだぜ」

一度空中に上ると、そこが平面であるかのように感じる。

「どれどれ、このまま歩いて……うおっ!？」

「きゃっ！ マサト様!？」

空中で足を踏み外し、床に転げ落ちてしまった。

尻を打って痛い。

「おー痛て。……なるほど、全ての歩みに精神力を込めないとダメなんだな」

『勇み足ならぬ、勇まぬ足である』

わけわからん。

精神力を消耗するような感覚はサツパリ無いが、気を緩めれば突然落ちる。

泥のぬかるみや新雪の中を確かめつつ歩むような、そんな感じで昇ったり歩いたりしないダメだな。

「じゃあこのまま練習がてらに次の階層の扉を開けていこう」

「かしこまりましたわ」

地面と階段の少し上の空中を一步一步、確かめながら昇っていく。

ふんぬっ、ふんぬっ

『主、主。声が漏れているぞ』

「いいんだよ。最初はちよつと格好悪くても」

「そんな事ありませんわ！ 勇ましくて素敵だと思えます」

お姫様の感性は良く分からないなー

「よし、まずは聞き耳を……」

「何も聞こえませんわ」

『どれどれ我も聞き耳を』

うるさいよ。君らが騒がしくて聞こえないよう？

「何の音も聞こえなかった。モンスターは居ないようだな」

「では、開けますわ。とおーう！」

面白い掛け声やめて。

しかも威勢の良い声の割りに重々しく扉が開く。

お姫様は力が無いからなー

ギギツ、ギギツ、ギイーツ

「普通の石の廊下だな」

「鉄の像もモンスターも見当たりませんわ」

第3層よりも、更に新しく清潔な感じは受ける。

もうダンジョンというより、窓が無いだけのどこかの建物内に思える。

「少し進んでみるか」

「かしこまりましたわ」

ファルフナーズがびったり俺の真後ろに付く。

罨を警戒してるのだろうけど……

「ファルフナーズ、近い近い。歩き辛いよ」

「こ、これは失礼しましたわ」

真後ろに張り付くように着いて来るので俺の足がファルフナーズの足に当たってし

まう。

そろそろ転びそうだ。

「しかし長い通路だ……」

カチツ ガゴン！

「んっ!？」

「い、嫌な予感がしますわ……」

ファルフナーズがそろりと右足を持ち上げる。

他のより一際小さい石畳がわずかに数cm落ち窪んでいた。

「も、申し訳ございませんっ!」

「気にすんなって。それよりどんな罠が来るか気をつけろ」

ゴゴゴゴ……

「地鳴りだ。巨大モンスターか、はたまた転がる石か、動く壁か」

「こ、怖いのですわ……」

後ろから俺にすがりつくファルフナーズ。

あれ、ちよつと俺、勇者っぽい。

まあこのお姫様、無敵なんですが。

ガラッ！ グラリ！

「うわあー！」

「きゃあっ！」

足元が総崩れだ！

突然、床が浮いたかのような感触がしたかのように思えた。

だが実際は……床が全て崩れて落下し始めた！

「ファルフナーズ！」

「マサト様あー！」

足に力を込めて浮遊靴で空中に留まる！

手を伸ばしてファルフナーズを――

掴んだ！

辛うじて、伸ばされたファルフナーズの手を掴む事に成功した！

安堵の溜息を大きく肩で漏らした。

「マサト様……ありがとうございます」

「これ意外とキツいな……ちよつと重」

「重くありませんわ」

「あ、はい。すみません」

何とかかんとかバランスを取り、ファルフナーズを引き上げる。

「あー、重……いや、疲れた」

「重くありませんわつたらー！」

「分かった分かった。ともかく、集中させてくれ。何も無い空中だからな。浮遊靴への精神力が途切れたら一転、奈落の底だ」

「私は一度、落とされておりますが」

「集中途切れるような事、言わないでくれる？」

しかし、何だ。

ファルフナーズが落ちないようにするためとは言え。

この抱きかかえ方は……そう

お姫様抱っこ、だ。

紛れも無くお姫様だから、何の不思議も無いと言えば無いのだが。

浮遊靴の効果で空中にいるせいなのか、レベルが上がってステータスが強化されたせいなのか。

正直、妙齢の女性を抱えてるほどの重さは感じない。

ただこう、ふんわりした柔らかい女性の体の感触と――

「マサト様、突然黙ってしまわれると恥ずかしいのですわ……」

「あ、ああ……」

「……」

「……」

あれ、何だこの空気。

集中しろ、集中！

気を抜けば落ちて死ぬぞ、俺！

「まあ、何だ」

「はい……」

「何か色々大変だけど、俺は割と楽しんでやってるし」



「はい……」

「ファルフナーズも辛い事は多いだろうが……」

「そんな事ごさいませんわ。修行だと言うのに私、とても楽しんでおりますわ」

あれ、何かこう……もうちよつと、いつもの……

何か調子狂うな。

「まあ、何だ。その、とりあえず、これからもよろしく」

「こちらこそですわ。頼りにしております」

「……」

「……」

『お楽しみ在所、申し訳ないが主よ、目の前に「扉だ」』

「たっ、楽しんでねーし!？」

「お、おほほほ……」

助かった!

そうだよ、これこれ。

おバカさが俺には必要なんだ。

「よし、ファルフナーズ。扉を開けてくれ」

「かしこまりましたわ」

手を伸ばしてファルフナーズが扉を開ける。

『2人の初めての共同作業なのである』

やめて！

恥ずかしい！

## #36 「ゲームで勝負だ！」

「よし、階層ボスの顔を拝んでやるぜ」

「マサト様となら、どんな敵でも怖くありませんわ」  
しまった。

まだ乙女モードのままだ、このお姫様。

押し開けた扉の中を警戒しながら踏み込む。

とてつもなく広いホール状態になっているボス部屋だ。

天井もとても高い。

「モンスターが見えない。また罠か？」

『いや、主よ。扉の前に何か居るようである』

あ、本当だ。

もうぼやけて見えないくらい遠くだが、反対側に何か居る。

「よし、行こう。こちらが近づくまでは何もしてこないみたいだ」

「マサト様、どうかご慎重に」

「オーケー、ファルフナーズ今のうちに【魔法の盾】を。金属バットさん、燃えておいて

くれ」

「了解しましたわ」

『応である』

ゆつくりと近づき、その物体を見定める。

どうやら……大きなテーブルと、何か車輪のようなものが3つ。

その3つの車輪に人らしき紫の全身を覆う服……ローブって言うんだっけ？

3人のローブを着た人物は女性、どうやら老婆だ。

車輪に白い綿みたいなのをくくりつけてハンドルで回している。

「あれは糸車ですわ」

「糸車？　へー、あれが」

老婆達の脇には白い綿がたくさん置いてあり、テーブルの上には確かに棒に巻きつけられた糸の束が置いてある。

巨大な横長のテーブルを挟んで老婆達の向かい側に到達した。

「お前達がこの階層のボスカ」

「ヒツヒツヒ……良く来たの……ダンジョン・オープナーや」

3人のうち右側の老婆が肩を震わせるように笑いながら応答した。

あれ、ちよつと懐かしい感じの声がする。

引き籠もり生活が長かったせいかな。

「こつちはいつでも良いぜ。婆さんを叩きのめすのは気が引けるが、モンスターとあつちやあ仕方ない」

「ワシらをモンスターとな……無礼な坊やじやて」

「むう、調子狂うな。いかに俺でも、婆さんを金属バットで殴るのは無理ゲー過ぎる」

『ネットに流されたら炎上逮捕必死の絵面である』

「ヒツヒツヒ、元引き籠もりは気が小さいのう」

「あ、やつぱ殴れるわ。ちよつと燃やしてやるか」

「マ、マサト様……流石にそれはどうかと」

「なあ婆さん、俺達の事を知ってるなら戦うか通すかにしてくれないか」

「シシシ……若いモンはせっかちじやのう。」

真ん中の老婆が小刻みに震えながら応える。

「良いじやろう。シシシ……勝負してやろうじやあないかえ。じやが……」

「だが……何だ？ 条件付きか？」

代わって左の老婆がよれよれの白髪を掻き分け、目だけを覗かせて問いかけてくる。

「どの勝負がお望みじや？ 殺し合いか？ ゲームか？」

「ほほー、選ばせてくれるのか。流石に婆さんを殴るのもアレ過ぎるし、ここはゲームで

勝負だ！」

途端に3人は後ろから光を発し、体が宙に浮き始める。

な、何だ!?

「よかろう！ ワシらは未来を司るノルニル3姉妹！ ダンジョン・オープンナの未来は今、紡がれた！」

「うわっ！ まぶしっ！」

それまでの枯れたボソボソの声とは打って変わって、若い女性のようなきびきびした大きな声だった。

「賢明な判断じゃったの、ダンジョン・オープンナ！ これでもワシらは神に連なる巨人族、戦いを選んでおつたら……」

「うっそー……」

3老婆が目の前で巨大化していく。

どうりでこの部屋が異様に広いわけだ！

巨大化しきった老婆の靴だけでも俺より大きい。

こんなのと、しかも3人と戦ってたら即死だったな……

老婆はそれぞれの声で笑いながら、再び普通の人の大きさに戻っていった。

「ワシは運命により未来を紡ぐ者、ウルズじゃ」

「ワシは変化により未来を紡ぐ者、ヴェルザンデイ」

「そしてワシが希望により未来を紡ぐ者、スクルドなのじゃ」

「マサト様! 今、分かりました。この老婆、いえ御方達は御神そのものですわ!」

「まっじでー!?!」

おいおい

危うく神に肉弾戦を挑む所だったのかよ。

いくら不死身とは言え、どこかの哲学者じゃあるまいし、そんなの無理無理。

あー良かった。

「で、何でそのゴッド様達が俺と勝負するってんだ」

「マサト様に頼ってはおりますが、あくまでこれは私の姫巫女としての試練なのです」

「ははー、つまり巫女適正の試験官みたいなモンか」

「その通りですわ」

「ファルフナーズがひざまずいて、ノルニル3姉妹とやらに敬意を示した。

何となく俺も同じポーズをとっておく。

「よい。ワシらはアストラルに映る影、姫巫女の世界に縁のある神でもないからの。そ

うかしこまる必要も無かろう」

「ファルフナーズが礼を言って、ゆっくり立ち上がる。」

えーと……じゃあ俺も立ち上がっておこう。

「そう言えば、モンスターには見えなかったファルフナーズの姿が見えてるのか。こりや確かにモンスターとは違う」

「はい。アストラルの影とは言え、御神にお目にかかれるとは、姫巫女としてこの上無い喜びなのですわ」

「へー……まあ俺には関係無いから良いけど、じゃあゲーム勝負はファルフナーズがやんの？」

「構わぬと言ったものの、無礼な坊やじゃの。むしろおぬしの世界にはそれなりに縁があると言うのに」

へーへー、左様でございましたか。

金運アップしてくれたら拜んでやるから頼むよ。

（とつくに上がっておるじやろ。稼げないのは運よりおぬしの所業のせいじやて）  
「こ、こいつ。心の中に直接……!?!」

「マサト様、御神の前に隠し事は無意味ですわ。どうか慎しみを」

「こえー……プライバシーも何もありません」

「普段はこんな事やらんがの。坊やの肝をちよいと冷やしてやろうかと思っただけじゃ。ヒッヒッヒ」



絶対零度まで冷えました。

まじゴツドすげえ。

超リスペクトすすよ。

女運アツプお願いします。

「それも上がってるじゃろうに……先ほど実感したばかりじゃろ」

「そうでした。すんません、ってか心読むのマジやめてください」

ちくしょー、こうなったらさっさと終わらせるしかない。

ゲーム勝負とやらはファルフナーズに任せて良いみたいだし、先に帰ってようかな。

「いや、勝負するのはおぬしじゃ。姫巫女が選んだ使いの者じゃからの」

俺がやるのか……

使いの者って何だよ。

ファルフナーズが俺のメイドだろー？

「それで、何で勝負すんの……するのですか？」

「そうじゃな、シンプルにおぬしの世界にあるカードで勝負するかの。シシシ……」

3 老女神は椅子に座りローブのフードを脱いだ。

!?

そんな……まさか

「これ、このトランプで勝——」

「スクネ婆ちゃん!!」

喜びの余り俺はテーブルの上から婆ちゃんに飛びつく!

「な、なんじゃ!? 突然老婆に抱きつくでない!」

「婆ちゃん! スクネ婆ちゃんだ! 会いたかった!」

「こりや! 人違いじゃ! 離せ、苦しいぞえ!」

「いいや、どう見てもスクネ婆ちゃんだ! 7年前に死んだ山形のスクネ婆ちゃんだ!」

嬉しい!

亡くなる時に見送れなかった。

ずっと心に引っかかってた!

「何度も仏壇に語りかけたのに、ちつとも会いに来てくれなくて! でも仕方無いよな

! こんな所で神様やってたんじゃあ忙しいよね!」

「ち、違うと言うておろうに……」

「そんなにマサト様の御祖母様に似ておられるのでしょうか……?」

『似てるどころでは無いな。瓜二つである。何せこの我も御祖母殿に買って頂いた身

故。そのご尊顔、忘れようも無い』

「ええい! やめよ、やめよ! こりやたまらんのじゃ!」

ドムンツ!

「うわつ、スクネ婆ちゃんが爆発した!? 婆ちゃん大丈夫!?」

手ではたはたと仰いで煙を晴らす。

見回すと他の2人の老婆も煙に包まれていた。

煙が晴れて、そこに居たのはスクネ婆ちゃんでは無かった……

「ふう、これで分かったじやろ。ワシはスクルド。おぬしの祖母では無いのじゃ」

「ば、婆ちゃんが……子供に戻った!」

「戻ったのでは無いわい。神に肉体的年齢は無意味なのじゃ。老婆の姿は単なる役作りじゃ」

「婆ちゃん、俺はやっぱりあの婆ちゃんの姿が一番好きだよ。割烹着の姿が最高だよ」

「マサト様は余程御祖母様を慕われておられたのですね」

『うむ。主は御婆ちゃん子だったのである。休日のために父上殿に帰省をせがむほどであった』

それから小一時間かけて、ノルニル3姉妹は俺のスクネ婆ちゃんとは関係無いと説得された。

3人とも子供の姿になってしまつて……嘆かわしい。

「くつそー、紛らわしい顔するなよな。違うなら違つて最初に言えよ」

「ずつと言つてたじやろうが！ 何と手のかかる坊やじゃ」

「まあでも考えてみれば納得だぜ。俺のスクネ婆ちゃんはもつと凄い超神になつてるはずだからな！」

「無礼も極まる奴じゃな……」

「申し訳ございません、スクルド様。マサト様は御祖母様の事を思えばこそなのですわ」

「まあ良い。人前ではずつと老婆の役で通してたから、この体は少し違和感があるがの」

「何だよー 人違いだとしても、せめて婆ちゃんの姿になつててくれよー」

「お断りじゃ。またおぬしに抱きつかれたらたまらんからの」

「いいじゃんかよー 抱きつくくらい。久しぶりに膝枕してくれよー」

「久しぶりも何も無いのじゃ。初対面じゃ、初対面」

ちつ、神様のクセにサービス精神でもんがぁりやしない。

何だあのちまつこい子供の姿は。

もつと癒しと慈愛に満ちた婆ちゃんのを姿をしてれば良いのに。

「もう良い。ともかくカードで勝負じゃ」

「あー、やる気出ねーな……スクネ婆ちゃんに会いたいなあー」

「なんだか私も祖母に会って甘えたくなつて参りましたわ」

「だろー? やっぱ人間、爺ちゃん婆ちゃんが大好きなんだよ」

「ちつとも話が進まんのじゃ……」

『主に代わつてお詫び申す。許されよ、スクネ……いや、スクルド様』

「ともかくダンジョン・オーブナー! カードで勝負じゃ!」

「若返つたやつはせっかちでダメだな。仕方無い、勝負するかあ」

「ようやくなのじゃ……これほど疲れる人間は初めてじゃ」

「あ、でも勝負中は昔みたいにちゃんと『マー君』って呼んでくれよな」

「早くも負けを認めたくなつてきたのじゃ……」

「スクルド様! ファイトっ! なのですわ!」

応援するほう間違っ  
てない？

## #37 「ゴールデンタイム・ババア」

「よし、勝負してやるぜ。カードでも何でもかかってきな」

「マサト様、頑張ってくださいませ」

さつき神様のほう応援してたよね、君。

「ウルズ、ワシは疲れた。後は任せたぞい」

「任せようぞ。では勝負はカード、種目は何にするかのう……」

何だよ。婆ちゃん似じやない女神が相手か。

ますますテンション下がるう

あ、スクルドが身を震わせた。

また勝手に俺の心を読みやがったな。

よし、奴に俺の最高のスクネ婆ちゃんのイメージを全力で押し付けよう。

お前はスクネ婆ちゃんだ。お前はスクネ婆ちゃん……お前は……

「ええい！ やめよやめよ！ 卑怯じゃぞ！」

「どっちがだ！ 俺のこの熱い思いを受け取れ！ 俺色に染まれ！」

「御神様相手に、一步も引かないマサト様なのですわ」

『下手に神格に飲まれるよりはマシ……と良い方向に解釈しておくのである』

3老婆、もとい3元老婆のウルズが苦笑いをしながら語りかけてくる。

「よ、良いかの……？　ワシらがおぬし心を読んだのは勝負向きのカードゲームを知っているかどうかを調べるためじゃ」

「理由は何でもいいけどな。俺はこの勝負の間にスクルドを婆ちゃんのイメージで洗脳してみせる」

「神に連なるワシらに精神侵食を試みるとは、流石ダンジョン・オーブナーじゃのう……哀れなスクルドじゃ」

「ははは、元ニートの一念、神をも変えてみせる」

スクルドは涙目でヴェルザンデイとか言うのの後ろに隠れてしまった。

ちくしよー、見た目が子供に戻ったからって、行動まで子供っぽくしやがって。

婆ちゃんらしくしろ、婆ちゃんらしく。

「どうやらポーカードで勝負するのが一番のようじゃな。チップは無しの一発勝負を3人としてもらうぞい」

「オーケーだ。細かいルールを聞いておこうか？」

「山札からカードを配って1回チェンジ、それで勝負じゃ」

「なるほど」



「おぬしがワシらに勝つたびに、何でも好きな願いを1つ叶えてやろうぞ」  
「……マジで!? 俺が負けたら?」

「特に無いがの。ただし、3人の誰にも勝てなかったら、一度強制送還じゃ。再びここに来た時、まあ恐らくワシら以外の何者かとの勝負になるじやろう」

「何かずいぶんと気前がいいな」

んー……何か引つかかる。

言い方もおかしかつたしな。

「マサト様、必ず1勝してくださいませ。これほど寛大に接してくださいさる御神も珍しいのでございますわ」

確かにそうだ。

再入場したら、次は意地悪な邪神が出てきたり、意思疎通が不可能な神と戦うハメになるかも知れない。

何はともあれ、必要なのは勝つプライドだ。

「ではこのワシ、ウルズが最初の相手じゃー!」

どこからともなく取り出したカードのデッキ封印シールを破いた。

こ慣れた手つきでカードをシャッフルしている。

手強そうだが「やるしかねえ」と、言い聞かせるように呟つぶやいた。

滑らせるように交互に手札を配る。

金属バットさんに目配せをして……

『大丈夫である。私の目にもイカサマは感じられぬ』

「当然じゃ。神に連なる者がそのような下衆な真似をするものか」

手札をめくって確認……

スペードの8、ハートの8、ハートの5、ダイヤのJ、クラブの7

「確認だ。絵柄スーツはスペード、ハート、ダイヤ、クラブの順に強い、でOK？」

「良かろう」

「よし、じゃあ俺は3枚チェンジ」

「ワシも3枚チェンジじゃ」

賭けチップ無しの一発勝負だからな。

正直、読みの要素はほとんど無い。

降りる、掛け金を釣り上げるといふ選択肢が無いから。

「ヒツヒツヒ……ワシらは神に連なる者で、心が読める事を忘れておったのがおぬしの

敗因じゃ」

「汚ねえ！ 下衆な真似はしないとか言っておいてそれかよ！」

「ヒツヒツヒ……どれどれ、おぬしの手札は……」

「正面からの堂々イカサマとは恐れ入ったぜ」

くっ！

こんなセコイイカサマ女神に負けるのか!?

スクネ婆ちゃん！ 俺を守ってくれ！

「ヒツヒツヒ、手札は……スクネ婆ちゃん、スクネ婆ちゃん、スクネ婆ちゃん……お前の頭の中はそれだけか！」

「う、うつせー！ いいからお前もスクネ婆ちゃんの姿になれ！」

『神をも欺く我が主の煩惱なのである』

「ある意味凄い能力なのですわ……」

「まずは見事と言っておこうかの……じゃが、ワシは過去の運命により未来を紡ぐウルズ。過去の全ての事象を見通す能力をもってすれば……」

「一発勝負のチェンジー回で、過去が何か関係あんの？」

「……ないのう」

「ですよねー」

「勝負だ！ スペードの8とハートの8でワンペア」

「役無し（ブタ）なのじゃ……」

勝ちい！

まずは最低限のクリア確定だぜ！

「流石ですわ！ マサト様！」

『相手が自滅してくれたのである』

「スクネ婆ちゃんが俺を守ってくれているのだ。ははは」

またスクルドが身を震わせた。

よし、その調子だ。

お前はスクネ婆ちゃんになるのだ！

…

「ならばお次はこのワシ、ヴェルザンデイが相手じゃ」

「よし来い！ 1回は勝ったから、残りはボーナスステージだぜ」

おや、1敗した割りには随分余裕の表情だな。

やはり試験官的な立場で、余興代わりに楽しんでるだけなのかね。

スクネ婆ちゃんに加護がある限り、負けてやる気も無いけどな。

手元にはスペードのA、ハートの5、ダイヤの6、ダイヤのQ、クラブの2が配られた。

また心をスクネ婆ちゃんので一杯にして、手札を読まれるのを防ぐ。

「シシシ……それでワシの能力は防げぬ。ワシは現状の変化による未来を紡ぐヴェルザンデイ。現状を見渡す力で、おぬしの手札は丸見えじゃ」

「これまた汚ねえな！ 神つてのはイカサマやり放題かよ！」

「分かってしまうのじゃから仕方無いのう……シシシ」

「スクネ婆ちゃん、どうか俺に運を！」

手札は完全にブタ。役無しだ。

どれを残し、どれを変えるか、完全に運頼み！

だが掛けチップ無しの一回チェンジなら向こうも運次第。

ならばスペードのAを残して……

「4枚チェンジ」

「ならばワシは3枚チェンジじゃ」

頼むぜ、スクネ婆ちゃん！ 見ててくれ！

「勝負だ。役無し（ブタ）」

「……ワシもブタなのじゃ」

「この場合はどうなるのでございますか？」

『我が主の勝ちなのである。最も強いカード、スペードのAを残していた故』

「ありがとうスクネ婆ちゃん！」

「ぐぬぬ……見通す力があっても、カードを引き寄せるとは限らないのじゃ」

よっしや、2勝頂きっ！

「さあ、最後はアンタだけ。スクネ婆ちゃん！」

「や、なのじゃ」

「何で!？」

「ワシの権能は希望により未来を紡ぐ。勝負をすればおぬしのその希望に近い精神に侵食を許して、勝ち負け以前におかしくなるのじゃ」

「つまり……」

「おぬしの勝ちで良いのじゃ。ワシにとっては勝負したら負けの状態じゃ」

「あつけない幕切れ……だが、これもスクネ婆ちゃんが俺を守ってくれたおかげだ！

やはり婆ちゃんは神より凄かった！」

「変態には神も敵わぬ事があるのじゃ」

「おめでとうございます！ マサト様！ 全勝ですわー！」

『我が主ながら、ここまで勝負強いタイプだったとは、意外であった』

よし、今日からお婆ちゃん教を立ち上げよう。

宇宙は婆ちゃんで出来ている、くらいの勢いで。

## #38 「俺の暮らしがラグナロク」

「よし、3女神に完全勝利だぜ！」

「素晴らしいですわ、マサト様！」

なあに、婆ちゃんの加護があれば女神だろうが悪魔だろうが楽勝よ。

「約束じゃ。お前の望みを何でも3つ、叶えてやろうぞ」

ご褒美タイムだ！

——だが既に見切った。これは罠だ。

「マサト様、これで探索が一気に進みますわ」

「そうだな……」

「マサト様!? 何やら浮かないお顔ですわ」

うーん……慎重にいかねばな。

「ほれ、ダンジョン・オープンナーの坊や、何でも好きな望みを言うが良い。金か？ 力か

? 若さか？」



スクルドが急かすように望みを聞いてくる。

その態度でもう、どんな望みを言うかを見る試験である事は一目瞭然だ。

「1つ目の願いは決まっている。『俺達を次の階層に行かせてくれ』だ」

「ちっ」

ほら、舌打ちした。

「どういう事ですの!?! マサト様」

「これは最初から、そう言う試験なんだよ。欲の皮を突つ張らせて金とか力とか言っ  
て願いを使い果たしたら、ここを突破できないんだ」

「まあ……私ったら、そんなマサト様の深慮も察せずに、恥ずかしいですわ」

「正直、気付かなくても良かった。永久にダンジョン・オープナーの力は解除できなくて  
も、ヌルい余生を歩めたんだからな」

気長に次の友好的な神を引き当てると言う手もあった。

だがボス部屋がこの女神達で固定されてたら完全に詰みだ。

でもそれだとファルフナーズが流石に可哀相だからな。

「ま、そーゆー事じゃ。おぬしの勝ちじゃよ。ダンジョン・オープナーの坊や」

「3つの願いには必ず罠がある。それが俺の世界の基本だ」

「試験は合格じゃ。さあ、もうそれほど意地悪はすまい。残りの願いを2つ言うが良  
い」

「2つ目は流石に俺の希望を叶えてもらう。『このダンジョンやアストラルとか言う世  
界について知ってる情報を教えてくれ』だ」

「ほう……欲の無い事じゃな。良いじゃろ、後ほどまとめて教えようぞ」

「マサト様、もつとマサト様の自由な希望を申されても良いのですわよ？」

そうなんだけどね。

でもファルフナーズを送り届ければお礼に金貨10万枚はくれるって言うし。

それだけあれば大抵の事は自由にできる。

ここはダンジョン・オープナーの能力を解除する事を最優先に考えていくべきだ。

あと毛根！

むしろファルフナーズが俺の毛根でガチャを回すのが一番の心配事だよ。

つまり、ダンジョン早期突破が最優先。

その為にはやはり神から情報を引き出すのが有利だ。

どうせ一気にクリアさせてくれ、なんて言ったらしつぺ返しを食らうんだから。

「元引き籠もりのくせに聡い坊やじゃのう。さあ最後の願いを言うが良いぞ」  
最後か。

「1つくらいは俺の欲望を優先しちゃうかな」

「いや……でも、やっぱ気付いたのに誤魔化すのもなあ。

婆ちゃん、俺に力をくれ！」

「よし、ファルフナーズ。1日で良い。1日で良いから……」

「何でございましょう？」

「ファルフナーズのおっぱい触り放題の日をくれ」

「な!? 何をおっしゃいますのですか、マサト様っ!？」

「これはお前が姫巫女になるのに必要な事なんだ! 俺の目を見ろ! この真剣な目を見ろ!」

「……えっちな目つきにしか見えないのですわ」

「あ、いや、そうなんですけど。ご褒美というか、代償と言うか……」

「——くく……ッ! つまり、まだ何か成すべき課題がある、とおっしゃるのですね?」

「そうだ。今はまだ合格はしたがギリギリの状態だ。追加点を狙う必要がある」

「わっ、分かりましたわ。このファルフナーズ、マサト様を信じてそのお約束、受けますわ」

よし！ 決まりだ。

おっぱい感謝デー、頂きます！

「じゃあ最後の願いだ」

「何でも言うが良いのじゃ」

「『あんた達3姉妹の女神をファルフナーズの世界に招待したい。そして人々に力を貸して欲しい』だ」

「……良かろう。完璧とは言わぬがほぼ満点なのじゃ。その願い叶えようぞ」

「マサト様……そのような事まで」

「まー、そーゆー事だ。お前のこの旅は試練じゃなくて儀式、神事だったんだよ」

「当たり前じゃ。本当は姫に願いの権利を譲り、姫自身がそこに気付く事が望ましかつたのじゃがのう」

「ま、まあっ！ 私と来たら……姫巫女を目指す者として至らない事、消え入りたい程に恥ずかしく思いますわ……」

「しかし良くそこまで考えが至ったのう。おぬしなら絶対に煩惱を優先すると思つたのに」

「まあ、スクネ婆ちゃんに加護、と言う事にしておいてくれ」

『我も知りたいものである。我が主がなぜそこまで献身できたのか、実に興味深い』  
「お盆の行事を思い出しただけだ。あれは仏教由来らしいけどな」

「どのような行事なのでございましょう。お聞きしてもよろしいですか？」

「夏の時期になるとあの世とこの世を隔てる蓋が開くので、ご先祖様が子孫に会いに来てくれる、という風習さ。亡くなった婆ちゃんが会いに来てくれると、朝まで起きて待つてたもんだ。日本だけじゃなく、先祖や神様を迎える祭りや風習は世界のあちこちにある。昔、そうスクネ婆ちゃんに教えてもらったんだ」

「まあ……それでは本当に、これは御祖母様のお導きなのかも知れないですね」

「うむ。巫女を目指す試練が異世界を旅する、だけじゃあ何かピンと来ないだろ。必ずお土産や成果を示す必要があるわけだ。そこで神様に出会ったとなれば、もう答えは」

つだ」

「私達のトリピュロン王国に新しい御神様をお迎えする神事だったとは……マサト様のご慧眼と情け深さには本当に何と感謝して良いか」

「ま、これで気兼ねなくクリア報酬が受け取れるさ。それに一日触り放題だ！」

ファルフナーズは赤くなって俯いたものの、嫌がりも断りもしなかった。

流石にこれだけの事をしたんだから、少しくらい許してくれるのだろう。

魅惑のおっぱい感謝デー、さていつ楽しもうか！

…

「ともかく、一旦帰って休もう。流石に今日は疲れたぜ」

「はい、お疲れ様でしたわ。1日に2階層を突破したのですから」

借金分も稼いで十分お釣りが来る金額だし、神の引っ掛け問題もクリアした。

「じゃあな、ノルニル3姉妹。ファルフナーズの世界を頼むぜ」

「えっ!? マサト様、あのう……」

「アホの子じやのう、ダンジョン・オープナーの坊やは」

「俺、何かおかしい事言った？」

「ええ、マサト様。これから私達はノルニル3女神様達をトリピュロンまでお連れしなければならぬのですわ」

「へあ？」

「つまり、行動を共にするという事じゃ。常にの」

「さ、先に行つててくれるとか、後で呼び出すとかじゃないの……？」

「ノルニル3女神様はトリピュロンのある『場所』を存じてないのでございますわ」

「うむ、巫巫女の言うとおりじゃ」

「分かつてから教えればいいじゃん？」

「ここで1度でも女神様達と別れてしまえば、再び会えるかはダンジョンのめぐり合わせひとつ、万に一つの確率でございますわ。マサト様はそれほどの幸運を引き当てたのでございます」

「つまり、俺はこれから3姉妹と一緒に暮らさなければならぬのか……？ ファルフナーズを送り届けるまで？」

「左様でございますわ」

「しばらく厄介になるぞえ」

なんてこった。

お姫様と金属バットさんだけじゃなく、さらに居候を抱えなければならないとは。

「やっぱ契約キャンセルしていいですか？」

「アホか。しまいにや黄昏れるぞえ」

神々が黄昏。

俺の暮らしがラグナロク



## # 3 9 「俺たちは天使じゃない！」

「よし、今日の事は無かった事にして帰ろう！」

「ならんことは、ならぬのじゃ」

くそー、いらないうって言ってるのに。

この3姉妹、俺の家に押しかける気が満々らしい。

「まあ、いきなり3姉妹で押しかけるのも酷じゃろうて。幸いワシらは三位一体の神。つまり誰か1人が付いてゆくだけで良い」

「あんま変わらん気がするが……」

「食費が1人分で済むじゃろう？」

「神様なのにメシ食うの!？」

「おぬしだつて仏壇に供え物してたじゃろう……」

「神様なら霞を食え、霞を」

「そりゃ仙人じゃのう」

「ファルフナーズさん!? こんな事になるなんて俺、聞いてないんだけど!？」

「申し訳ございません……ですが、私はマサト様におすがりする事しかできず……」  
「おぬしが選択した事じゃしのおう。姫の乳に釣られて高い代償となったかや？」

くしししつ、とイタズラ小娘のようにスクルドが笑う。

「分かった。だがスクネ婆ちゃんの様になつてくれ」

「あれだけはお断りなのじゃ！ 軽くトラウマになりかけたのじゃぞ」

「……何気に失礼じゃない？」

「あいや、神ともなると人に触れるような事が滅多に無くての……」

「仕方無い。じゃあせめて『マー君』て呼んでくれ」

「ぐぬー……しようがないのう。マー君や」

子供声なのがやはり不満だがこの際我慢するしかない。

「白髪だからギリギリ許せるが……」

「シラガちやうわい。これは銀髪じゃ、銀髪」

脳内補正で白髪になつてるからオーケー。

「んじゃ帰ろうかー」

「かしこまりましたわ」

『長い一日だったのである』

…

「さて、無事に帰ったは良いが、スクネ婆ちゃんが若返ったと言って両親が納得するだろうか」

「スクルドと呼べい。ややこしい。その点は大丈夫じゃ」

「ほー、神様パワーで何かやってくれるの？」

「何もせんぞー むしろマー君の宿業が勝手に、ワシをこの家の娘に結びつけるじゃろ」  
「宿業？」

「ダンジョン・オープナーの能力じゃ」

「ああ、やっぱりこの能力で周囲をバグらせてるのか」

「うむー その能力は異界の異物を強引に現世へ馴染ませる能力もあるようじゃやな」

あ、こいつ、俺のベッドに勝手に横たわりやがった。

しかも「ちと男臭いのー」とか文句言ったよ。

男が男臭くて何が悪い。

『ぎゅーん ぱばらぱば、つぱつぱー！ ぱばらぱばすぽぽーん てれーん！』

「お、きたきた。レベルアップ」

「おめでとうございます、マサトさ——」

『ぎゅーん ぱばらぱっぱ、っぱっぱー！ ぱばらぱっぱすぽぽーん てれーん！』

「うはっ、2回上がった」

「流石ですわ、マサト様」

『ぎゅーん ぱばらぱっぱ、っぱっぱー！ ぱばらぱっぱすぽぽーん てれーん！』

「おいおい、マジかよ」

『大盤振る舞いである』

『ぎゅーん ぱばらぱっぱ、っぱっぱー！ ぱばらぱっぱすぽぽーん てれーん！』

「ワルキューレみたいだな」

「なんじゃそれは？ 死んだらヴァルハラにでも行くのかえ？」

『ぎゅーん ぱばらぱっぱ、っぱっぱー！ ぱばらぱっぱすぽぽーん てれーん！』

「5回！ 今日の俺の活躍はそれほどだったとは」

「マサト様、快進撃でしたから」

考えてみれば、3層4層を一気に突破したからなー

「じゃあ早速ステータスを確認しよう」

「その前にレベルアップ・ボーナスのガチャなどを」

覚えていやがったか……

「コホン。ファルフナーズ、神前だぞ。ガチャなどと言うはしたくない行為は控えるんだ」  
「別にはしたなくも無いがのー」

援軍が謀反を起こしました！

アテにならねー！

「ではスクルド様の許可も得た事ですし」

「落ちて着けファルフナーズ。その手をゆっくり下ろすんだ」

ぷくつと片方の頬を膨らませてスネるファルフナーズ。

何てはしたない……いや、可愛いけど。

「それよりマー君、ワシは腹が減ったのじゃ。久しぶりに下界の飯を頂こうぞー」

「そつ、そうだ！ メシだメシ！ もうこんな時間だ。昼も食べてなかったからなー！」

「さあスクルド婆ちゃんが出来たから飯を追加で買いに行こう」

「婆ちゃんじゃないぞえー 様をつけずとも良いから婆はやめよ、婆は」

くーう、俺のスクネ婆ちゃんイメージが消えていく。

これから念入りに俺のイメージでスクルドを汚染していくしかあるまい。  
なあと、時間はたっぷりあるんだ。

「マー君、何じゃその目は。また良からぬイメージでワシを攻撃しておるのじゃろ。じゃが無駄無駄。現世にいる間は神の力は極力抑えておるからの。心を読む力も封印じゃ」

「な、何だつて!? なんでパワーダウンしちゃったの!？」

「力を抑えないで現世に顕現けんげんしたら、ここが聖地かつ新しい宗教紛争の中心地じゃてー」

「なるほど、面倒臭そうだ。ダンジョン攻略が楽になると思ったのに、アテが外れたなあ」

「抑えても権能は使えるが、攻略は手伝えないぞえ」

「なんで? ケチ臭い」

「マ、マサト様、それは無理な相談なのでございますわ」

「うむ。姫よ、神々の関係に疎うといマー君に説明してやるのじゃ」

「かしこまりました、スクルド様。良いですか? マサト様」

「その話長い? とりあえずコンビニ行こうぜ」

「あ、はい。では道すがらご説明させて頂きますね」

3人で最寄のコンビニへ歩いていく。

いくら周囲がバグって当たり前のように認識してくれるからって……

スクルドは多分、浮いて俺の肩に掴まるのをやめるべきだ。

「歩くのは面倒なのじゃー」

「じゃあ明日、首輪買ってやるよ。風船みたいに浮いてれば良い」

「酷い扱いなのじゃ」

『我が主は何かと人や物の扱いが酷くて……』

悪口は本人の居ない所で頼みたい。

…

「おお、これがコンビニとやらの弁当か。このまま食べられそうじゃのー」

「温めないと美味しくないぞ。さあ、どれにする？」

「じゃあの、ワシはこの焼肉弁当とチャーハンとカツカレーと……あの、おにぎりを」

「1つにしなさい。1つに」

「なんでじゃー！ 神様虐待反対なのじゃー！」

「ええい！ 神なら俺の財布にダイレクトアタックを仕掛けるんじゃない！」

ダンジョンから出たせいとか、姿だけじゃなく性格まで丸きり見た目通りの子供じゃな

いか。

俺の素敵なスクネ婆ちゃんとの暮らしが……

「マサト様、私はプリン弁当を所望したいのですが」

「ねーよ」

ちゃんと食べなさい。

だから胸ばかり大きくなるんだ。

全くけしからん！ いえ、最高ですが。

「知識としてはあるのじゃがのう。やはり身をもつて経験せねばなるまいてー」

「だからデザートも片っ端から取るんじゃない。1度に1つままで！」

ファルフナーズと目が合う。

その手元には右手にプリン、左手側にかほちやのプリン。

長い沈黙の時間が過ぎた……

「いや、買わないんだけどね？」

「マサト様のいけずですわー！」



女2人がぷーぷーと文句を言ってる。

駄目だこいつら……

姫様と神様、明らかにどちらも経済観念が存在しない。

俺だって元ニートなのに！

だが俺がしっかりしないと2人が心配過ぎる。

：

コンビニの自動ドアをくぐって外へ出る。

「つしゃーせー、ありあとーつすたーつ」

店員の意味不明な挨拶を背中に受ける俺の手にはパンパンに膨らんだビニール袋。

「マー君がなかなか話の分かる男で良かったのじゃ」

「流石マサト様、甲斐性に満ち溢れておりますわ」

くっ……！

神様のクセに泣き真似までしやがって！

プライドつてものは無いのか！

元ニートの弱点、注目を浴びたくないと言う所を突かれては手も足も出ない。

まさにこの世は生き地獄。

神も仏もありやしな。

……いや、目の前にいるんだけど。

「そう言えば、スクルドがダンジョン突破を手伝えない、と言うのは……？」

「はい。このマサト様と私の探索行が御神様をお招きする神事であるならば、それは私達の手で行われなければならないのですわ」

「それでも……ちよつと手伝う位いいんじゃないの？」

「やはり御神々の間にも礼儀がございまして。スクルド様が手を貸したとあらば、少なからず招かれざる印象を与えてしまうのですわ」

「あー……どうぞ、と言われる前に家にあがったり食事を始める感じか」

「正しく、その通りでございます」

「そう言う訳じゃ。全力で力添えした、何て場合じゃとこりやもう侵略扱いで、神々の全面戦争になるでの」

「怖いな、おい」

「スクルド様方がなさったように、スクルド様をお招きした私達の心は必ずトリピュロンの御神々に読まれますわ」

「分かった。もう十分に分かった。神輿を担いでるんだから、神輿自体が動いちゃ駄目って事だわな」

『四輪駆動のガソリンエンジン神輿。ふふふ……愉快』

昔の霊柩車にしか見えないな、それ。

「まあ、おおよその事は分かったけど、天使とかいないの？ 神様の世話をするのは天使

の役目だろー こう白い服着て背中に羽根が生えた美男美女がさー」

「……姫よ、マー君の信教知識は最低レベルじゃぞ」

「も、申し訳ございませんっ！」

「なぜファルフナーズが謝る？」

「マサト様、天使と言うのはマサト様の国の言葉である日本語で、文字通り天の御使いでございますよね？」

「そーね」

「では今、スクール様のお世話をさせて頂いてるのは……」

「俺だな。……待てよ、何かもう嫌な予感しかない」

やめて、それ以上聞きたくない。

「これから赴くトリピュロンの世界でのスクール様の主天使、マサト様はその座に着いたのですわ」

「自覚が無さ過ぎるのも困り者じゃのー」

「い、嫌だー！ 天使は美男美女で羽根が生えてなきや駄目だー！ 元ニートが天使なんてー！」

「なんじゃ、早くも墮天かえ？ 20歳になって中二病とは感心せんのかー」

なんてこつた。

不死身の体だけじゃなく、死ぬ前に天使になるのか……この子供ゴツドの。

バラ色のぬるま湯ニート生活が、気が付けばバラ色の悪夢になっていたとは。

「ワシらの流儀とは異なるが、マー君の趣味とあらば仕方無い。向こうに着き次第、白い羽を生やしてやろうぞ。何なら頭に輪っかもじゃー」

欲しくなーい！

## #40 「アバンギャルドなセンスをしておるのう」

「よし、酷い夢を見た。夢で良かった」

「お、お早うございませすわ……マサト様」

目を覚ますとファルフナーズが心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

禿げ散らかした俺が白い服に白い羽根、天使の輪っかを乗せて大空を飛び回る夢だった。

右手には血まみれの金属バットさん。

あとスネ毛と内股。

「マー君、それは予知夢じゃな」

「冗談じゃない。とかスカルド、何故俺のベッドに!？」

俺の右腕が枕代わりにされていた。

ぐう、痺れて感覚が無い。

「神を差し置いて自分だけベッドを占有するとは酷い奴じゃのー」

「君、最初浮きながら寝てたよね？」

「浮き沈みの激しい神なのじゃ」

「意味が違うと思う」

長い銀髪、いや白髪だ白髪。

白髪がくすぐったくてうつつとおしい。

「ベッドに入るなどは言わないから髪切れ、髪ー暑苦しい」

「髪は乙女の命じやて。髪は神、マー君にそれが分からぬはずがないのじゃ」

乙女って年なのか？

抱きつかれるとトラウマとか言つてたくせに、自分から抱き付いてくるのは良いのか。

「分かるからこそだ。こっちは日々ファルファーズにむしり取られてるのに……」

「まあっ！ お望みとあらば直接筆つて差し上げましてよ!？」

やだ、この姫様怖い。

自分だつてそのピンクの美髪を伸ばし放題のくせに。

いや、長さじゃなくて本数の問題だけど。

しかし、筆（むし）ると言うこの字と言葉の何と無慈悲な事よ。

「ちくしよー、お前の世界に行ったらスクール教は全員、剃髪ていはつを義務付けてやるからなー」

「寝ぼけた事を言つてないで、早くお顔を洗つてきてくださいませ」

はたはたとキッチンへ駆けていくファルフナーズ。  
お姫様ドレスにエプロンというのは、ちよつと似合わないと思うよ。

「うむー、まだ眠いな。2度寝しようかな」

「良い提案じゃのう。現世に降りると眠くていかんのじやー」

ファルフナーズがキッチンから呼びかけてくる。

「マサト様ー、早くしてくださらないと朝食が冷めてしまいますわー」

「なんじゃマー君、早くも姫と蜜月のようじゃの」

「いやいや、何だかプリンを自分で作るために、とかで料理に目覚めたみたいでさー」

プリンってそんなに難しい料理だったっけ？

コーヒーの醸し出す香りに満ちたキッチンへ行く。

胸のすくような芳香を楽しみつつテーブルに着くと、朝食の乗った皿が置かれた。

サラダと――

「プリンですわ」

「だめだこりや」

お前が食べたいだけじゃねえか！

道理で、コーヒー以外の香りがしなかったわけだ。

そもそもサラダとプリンに冷める要素が無い。

「姫はなかなかアバングヤルドな朝食のセンスをしておるのー」

「センスの問題じゃ無いと思う。絶対」

仕方なく自分でパンの袋を開け——てしまった。

「あー……食パンが、食パンが」

「まあ、パンの袋の中がダンジョンですわ。中に居るのは……重装甲パンツアーパンダですわ」

パン祭りだな。

俺のパンは鎧を着た巨大パンダのエサになった。

「くそー、今朝はパン抜きか。昼まで半休、ダンジョンに行くのは午後にするか」

「ワシのパンツ食べるかの?」

「いらんわ」

せめてお色気マシマシの美女の姿になってから言ってくれ。

そんな10歳程度の子供パンツなんか嬉しくも無い。

嬉しかったとしても朝食にはならないけど。

「パンツで思い出したのじゃが……」



「できれば朝食向けの話題で頼みたい」

「パンツを買って欲しいのじゃ」

「いくらで？」

「……？」

「……？」

何か会話がかみ合わなかったかな？

ファルフナーズが食器を落とした。

あ、凄い顔で睨んでる。

「いやいや、着替えが欲しいという意味じゃてー」

「神様なのに着替えるの!? 変身してたじゃん」

「着替えひとつに毎回権能を使っておられんじやろう。人々の信仰の力じゃぞ」

「仕方ないなあ……じゃあせめてスクネ婆ちゃんの姿か、25歳くらいのお色気最大値の世代に変身してくれ」

スクルドが皿にかぶりつきながら言う。

神様なら犬食いはやめるべきだと思います。

「ならん、ならん。この、本来の姿以外はやはり力を消耗してしまうのじゃ」

「本来の姿はそんな子供の姿なのか……」

「厳密に言えば違う。ここに居るワシは全体の0.1%程度に過ぎぬからのー」  
「ふーん、残りの99.9%はどこに？」

スクルドは長い銀髪——俺の脳内補正で白髪を巻き込んでサラダを食べている。  
仕方無いから手近にあった輪ゴムで髪をくくって留めてやった。

にひひー、と無邪気な笑顔を投げて返してくる。

へアゴムも買ってやらねば。

神様ってお金かかるなあ。

「三千世界に散らばっておるわ。守護すべき世界もまた多いでの」

「つまり、それぞれの世界ごとに別会計でやってるって事か」

「上手い例えじゃな。その通り、別会計なのじゃ。信仰の力も権能の配分もな」

「いつかまとめて取り立ててやるからなー とりあえず、シマムラでいい？」

「そりゃ店の名前かの？ 着れば何でも良いぞえ」

「じゃあファルフナーズのパンツ借りれば？」

ファルフナーズが食器を落とす。

湯気が立つような雰囲気で睨まれた。

怖い。

「実は借りたのじゃが、姫のはちよつとお尻が大きい——」

「スクールド様？ ちょっとお話が」

こわっ！

笑顔なのに凄いい迫力のある顔になってる！

「じよ、冗談じゃ！ 神流のジョークじゃ！ ゴッド・ジョーク！」

「おほほほ、左様でございましたか。でも私達は下賤の人間でございますので、人間に理解できる冗談をお願いしたいのですわ」

「はい、なのじゃ」

「よろしい、ですわ」

巫女つて神様を崇めるのが仕事じゃなかったつけ……

ファルフナーズは尻の大きさがコンプレックスだったのか？

むしろ俺の好みからは、まだまだ小さ過ぎ。

もっところ、ボンツキキュボン的な……

「マサト様、後でお話が」

「なっ、何も言っていないだろお!？」

「マー君は目と表情が雄弁過ぎるのじゃ……」

無言でファルフナーズにプリンを差し出す俺だった。

山吹色のお菓子（カラメル乗せ）

## # 4 1 「バタフライ・過剰エフェクト」

「よし、シマムラに服買いに行くか」

「かしこまりましたわ」

「買い占めじゃー」

そんなお金は無い。

あつ、蚊に刺された。

玄関先で蚊に刺されるなんて、出発早々ツイてないなあ。

「しかしスクルド用の子供服なら、俺が行く必要も無いか」

「私達だけでは、まだこちらの世界を出歩くには不安ですわ」

「そうじゃのー。そもそも今、家を出発しなければマー君は死んでおったしの」

「え!?!」

何それ怖い。

郵便屋のバイクが家の前に止まった。

まあ俺宛ての郵便じゃないだろうし、帰ってからで問題無いだろう。

「な、なぜ俺が……そもそも死んでも死に戻り可能なのに」

「ワシは未来を紡ぐ神じゃからのー たまに意識しなくとも見えてしまうのじゃ」

…

「大まかな流れはこうじゃ。この時間帯にマー君が家に居ると、その呼気と体温に誘われて庭にいた一匹の蚊が割れた窓の隙間から侵入してくる。それに気付いた姫が蚊を追いかうのじゃが、家から出た蚊を玄関の上に巣を作っておるツバメがキャッチして巣に持ち帰る。その時にフンを落とすのじゃが、丁度そのタイミングで郵便屋が玄関のポストにダイレクトメールを入れようとしておつてな。足元に落ちたフンに驚いて飛びのいた結果、足を軽く捻挫する。これが致命傷じゃ。

足をくじいた事に気付かぬ郵便屋は原付バイクに乗ってUターンして家の前を去ろうとするのじゃが、そこに大型車が通りかかる。積荷はガソリンじゃ。突然ターンした上に足をくじいてる事にここで気付いた郵便屋はバイクごと転んでしまう。それに驚いた運転手が急ハンドルを切つてマー君の家に突つ込む。電線を引っ掛けて横転。漏れたガソリンに引火して大炎上、確定じゃ。

ここでマー君は1度燃えて死ぬ。そしてベッドの上の座標で生き返るのじゃが、もちろん即座にまた死ぬ。それを短時間で繰り返す事で、死に戻りのシステムが誤動作を起こす。マー君を異常再生し続ける事1783回目、その姿はついに無限増殖す

る震える肉塊と化す。で、仕方なくワシがアストラル空間へ放り込んでお終いじゃ」

「……冗談でしょ？」

「マジなのじゃ。バタフライ・エフェクトによって、マー君は無意味な死を迎える所じゃった」

目の前をかすめる様に飛ぶツバメの後を目で追って空を見上げる。

帰宅するまで降り出さないと良いがな。

「……シマムラ、ありがとう」

「在り難い事に有難いのじゃ」

「なんだか良く分からないのですわ」

俺達の脇を大型の車が通り過ぎた。

ガソリンを積んでいるタンク車だ。

これらが一歩間違えれば……だったのか。

諸行無常

「そんなワケで、帰りにイチゴの乗ったショートケーキを買ってくれろと、次の不幸を回避できるのじゃ」

うん、絶対ウソだな。

神様の正体見たり商売上手。

：

「スクールド、いい加減俺の首につかまるのは止めてくれ。たまに苦しいぞ」

「これが楽なのじゃ。気に入ったのじゃー」

「周りの人にはどう映って見えてるんだろうなあ……この浮いてる銀髪幼女」

「幼女ちゃうわい。普通に兄の背におぶさってるように見えてるんじゃないやなかうか」

「ふふつ、とても仲の良い兄と妹に見えるのですわ」

「代わってやる代わってやる。ファルフナーズが背負って良いぞ」

くすくすと含み笑いでかわされてしまった。

わがままっぷりだけは本当に妹みたいだ。

近くのシママムラは郊外型の広い店舗で2階が家具屋になっている。

まずはセール品の安い上下をいくつか。

「もちよつとオシヤレなヤツが欲しいのじゃ」

「贅沢言うな。コスバが最優先だ」

「神があんまり地味な服というものう……」



「庶民派ゴッドとして売り出そう」

「靴下も買って欲しいのじゃがー」

「良いけど、1日1時間は床に足を着け。退化するぞ」

この神様、常時浮遊してるからな。

お、3足500円なんてのがあるじゃないか。

当面はこれを2セットくらいで我慢してもらおう。

ダンジョンで稼いだら可愛いのも買ってやるからな。

「さて、後は下着なのじゃ」

「お、おう……」

「マー君好みの凄いヤツを選んで欲しいのじゃー」

「子供用の下着に好みも何も」

「姫のようなエロエロなパンツを買うのじゃ」

「ス、スクール様っ!! 私はそのようなふしだら下着などは——」

「エロエロなのかッ!?!」

「エロエロではありませんわー!」

「そうかのー 案外セクシー路線だと思ったのじゃが」

「エロい下着も持ってたのか……」

「普通の下着ですわ！ 決して淫らかなものは所持しておりませんわ！」

慌てて手を振って否定するファルフナースは耳まで真っ赤だ。

プリンセス・パンツ。

2枚ほど見たが、まあエロいという程では無かったような気がする。

大変魅惑的ではございましたが。

「そもそも今日はマサト様のお母様を買って頂いた、日本製の下着でして……」

「姫ばかり、ずるいのじゃー」

昨日うちに来たばかりのスクールドに下着の用意もあるはずが無いだろうに。

「ほーん、王族の姫様に安物の下着が合うか、心配ではあるな」

「安物などではありませんわ。トリピュロンのものよりも上質で、特にこの伸び縮みするゴムという部分のフィット感が素敵で」

「へー、どれどれ？ ちゃんとフィットしてるかな？ 見せてみ」

「はい、この通り——って、見せるわけが無いのですわ！」

惜しい。

ドレス・スカートの裾に手を掛けてたくし上げて……あと5cmだったのに！  
ノリと勢いでパンツを拝めるチャンスを逸してしまった。

「マー君も存外やりおるの。勢いと雰囲気で姫を流そうとするとは」

「いやいや、ノリツツコミを自然に使いこなすファルフナースのほうが凄い」

顔を手で隠しながら下着売り場のほうへ走り去るファルフナースを見送った。

ジゴロのスキルとか上げられないのかな。

「ほら、ファルフナースが手招きしてるぞ。好きなの選んて来い」

「分かったのじゃ。マー君、何色が好きかえ？」

「下着は黒か紫だろう」

「了解したのじゃ。見ておれー 悩殺じゃあー」

子供用にそんな色は無いと思うがなあ。

遠目に2人が下着を選んでいる姿を眺めていると、何だか父親にでもなったような

……

童貞ですが。

今のうちに服のほうの会計を済ませておこう。

平日の昼間だから客はあまり居ない。  
並ぶ事無くレジに一直線だ。

「9760円になります」

「はい」

子供服といえど、結構な値段になるなー  
母親からもらった1万円札を渡してお釣りをもらおう。

そう言えばスポーツ用品店では、店主がバグってファンタジー風のキャラに染まっていたが。

シママラでは大丈夫なのかな。

店員のお姉さんが袋を取り出して、詰める前に尋ねてきた。

「では、こちら。お兄さん、どれを装備して行きますか？」

「俺が着る服じゃねー!」

こっちの店員さんも順調にバグってました。

「装備しないと効果がでませんよ?」

「むしろどんな効果ですか!?!」

「魅力が1点上がります」

「俺が着ても上がるの!？」

店員さんは笑顔のまま固まった。

想定外の質問だったんだらうか……

そもそも、この袖なし白ワンピースは俺が体を通せるサイズじゃないけどな。

青いリボンもセットで買っていたら危うい所だった。

いや、それよりもだ。

下着の会計時に、今と同じ事を言われたらダメージがでかすぎる……

「今、装備してる服は買い取りますか？」

「勘弁してください」

「どんだけ服を買い取りたいんだよ、ファンタジー風の店は。」

シマムラで中古服は取り扱っておりません。

早くレジ前を離脱しよう。

下着の会計は財布だけ渡してファルフナーズに頼もう。

大きなビニール袋に服を詰めている店員さんがもどかしい。

早く、早く終わってくれ。

でないと、スクルド達が……

俺は見た。

その神の姿を。

しましまパンツを指にかけ、くるくる振り回しながら無邪気な笑顔でこちらに突撃してくる。

その姿は正に――

邪神に違いない。

「マーくん！ このパンツが紫のしましまなのじゃー！」

そのパンツはスクルドの指からすっぽ抜け、宙を舞い……

ああ、神よ。どうか憐れみ給え。

俺の頭の上にパンツは着地した。

店員のお姉さんの目が俺を真っ直ぐ見つめ、口を開く。

「しましま幼女パンツですね。お兄さん、ここで履いていきますか？」

## #42 「アフロですわ」

「よし、俺のナイーブなメンタルに直撃だぜ」

「マサト様は悪くありませんわ。スクール様、もうちよつと慎みを持ってくださいませ」  
「マー君、ごめんなのじゃ」

頭の上のしましまパンツ480円。

悪気は無いのだろうが、店員さんが追い討ちをかける。

「今はいてるパンツは買い取りますか？」

元ヒキニートの履き古したパンツ、いくらになるのかなあ……

むしろ処分費用を請求されるかもしれない。

真顔でスクルドの下着の会計を済ます。

落ち着け、平常心だ。

ピッ

「はじめてのブラジャー。お兄さん、装備していきますか？」

ぐへー



「マー君にはまだ早いのじゃ」

「むしろ着けたら手遅れだと思う」

…

精神的ダメージを癒すために、店舗の脇のベンチで休む事になった。

ファルフナーズが苦笑しながら慰めてくれる。

「女性の買物に男性が振り回されるのは、どこの世界でも同じなのですわ」

うん、かなり角度が違うけどね。

その労わりの気持ちがとても有難い。

「これが自販機というやつかー。マー君、買ってみたいぞ」

「よしよし。丁度良い、ほら、ここにお金を投入して……飲みたい奴の下のボタンを押すんだ。俺にはその茶色い缶コーヒを頼む。ファルフナーズはどれにする？」

「ワシはこの黒い缶に毒々しい緑色の爪あとがある、フリークスと書いてるジュースじゃー」

それはお子様向けドリンクじゃないんだが……神様だしいつか。

夜眠れなくなっても知らないからな。

「では私はこちらの妖精スプライトと書いてある物をお願いしますわ」

「それ、意外と炭酸強いから気をつけてなー」

笑顔ではないと言うファルフナーズに癒されながら缶コーヒーを開け——ない！  
危ない、危ない。

俺が開けたらまたダンジョンだ。

しかも缶コーヒーのプルタブは一度開けたら閉められない！

「危うく不可逆性のダンジョンを開けてしまう所だった……」

「すまぬすまぬ。これはワシもうっかりしておったのじゃ。考えてみれば難儀な能力よのー」

まあ最悪でも、他のダンジョンを開いてそこに捨ててくれば良いだけだが。

ファルフナーズに手渡して開けてもらおう。

……

…

ファルフナーズが顔を真っ赤にして缶コーヒーのプルタブに取っ組んでいる。

「……ひよつとして、意外と不器用？」

「姫、代わってやろうかのー」

「い、いえ、このくらいは私でも……」

「爪割れちゃうと可哀相だ。スクルドに代わってもらいなー」

「任せるのじゃ。神の権能でいかなる封印をも解いてみせようぞ」

缶コーヒー一つに神の力を使っちゃうかー

幸せな缶コーヒーだな。歴史に名が残るぜ。

と言うか、普通に開けて。

スクルドも顔を真っ赤にしてプルタブをパチパチやっている。

妙に開け辛いのがたまにあるんだよな。

「むきやー！ こやつ、缶コーヒーの分際でワシに立て付くか！ 見ておれ！」

スクルドがキレた。

「我が運命の力もて、無限の可能性をここに集約する！ 希望をその鍵とす！ 開け、天

上の扉よ！ ゴッド・アンロック！」

こいつ、本当に神の権能を使いやがった！

缶コーヒーが光を放ち始め、周囲の風景が無数の糸車や歯車で満たされる。

カラカラ、ハタハタと機械的な木のきしむ音があふれたかと思うと、重苦しい鐘の音と共に全てが消えた。

ゴォーン……

これがスクルドの心象風景か。

真面目な時に見てたら畏怖も感動もあっただろうが……  
宙に浮かびプルタブから光を放つ缶コーヒーの下で、淡く光る幾重もの魔法陣が回転するその光景は――

控え目に言っても、心底どうでも良かったのであった。

プシュツ

「さあ開いたぞえー！ マー君、今じゃー！ 飲み干すのじゃー！」

額に浮かんだ汗をぬぐいながら、ドヤ顔のスクルドが言う。

左拳を俺に向かって突き出し、親指をサムアツプさせながら……

俺は宙に浮かんだ光り輝く缶コーヒーを掴み取りぐいっと煽る。

……っ!?

これは！

「旨い！ 旨過ぎる！ いや、旨いなんてモンじゃない！ この正体不明のコーヒー豆が醸し出す芳醇な香りが缶の金属の香りと合わさって――まさに天上をたなびく緑の風！」

ハッ!?

今、俺は何を口走って……

「ワシの権能によつて開けられた缶コーヒーは、その先にある可能性の中から最良の結果を得るのじゃ」

「つまり、この缶コーヒーが出せる、最も良い味を出してみせた、という事か」

シユレディンガーの猫は箱に入れる前より元気でした、と。

スクルドはドヤ顔で腕組みをしながら大きく頭を振つて頷うなづいた。

「ごちそうさままでした。ああ元気が出た！ 今すぐダンジョンに踊り込みたい気分だ」

「御粗末様でしたのじゃ。喜んでもらえて何よりなのじゃ」

「貴重な経験をさせてもらったが……これでどのくらい信仰パワーを使つてしまったのやら」

「そうじゃのー マー君の毛根に換算して7923本分くらいか」

元気半減。

なぜわざわざ毛根換算するのか。

思わず薄くなり始めた後頭部を撫で付けてしまった。

「120円あげるから、俺に毛根を7923本増やしてくれ」

「血迷っておるのー」

「くそー、俺がファルフナーズの世界で天使になったら、スクルド教は毛根を奇跡パワーの燃料にしてやるからな！」

「カツラを被ったほうが早いのにじゃ」

魔法の王国にカツラはありますかね？

「ええ、フィズバット・ファーボールと言う、毛玉のモンスターが居まして……その調教タイムして被る人がおりますわ」

「へえ……黒髪もいるのかな」

「いえ、紫の色しか……」

「20歳過ぎた男が被れるもんじゃないな」

「でもでも、とつてもツルツルの潤いヘアーですわ！」

そこは問題じゃ無い。

むしろ余計酷い。

「きつとマサト様にも気に入って頂けると思えます」

被らせる気だったのか……

「トリピュロンに戻ったら、私がペットとして飼っていたフィズバット・ファーボールを紹介致しますわ」

「へえ……名前は何？」

「アフロですわ」

そりやずいぶんファンキーなお名前ですわ。

「子供が産まれる直前にこちらの世界に来てしまったので、少々気がかりですわ……」

「子供産むモンスターなのか」

「ええ、もう名前も決めたのですわ。産まれたらマサト様にお譲りいたしますね」

「何て名前にすんの？」

ファルフナーズが目をキラキラ輝かせながら手を合わせて、よくぞ聞いてくれたとばかりに嬉しそうな声で言う。

「モヒカン、ですわ」

全力で遠慮しよう。

## #43 「注文の多いレスト・ルーム」

「よし、一通り買ったし、雨が降り出さないうちに帰るかー」

「おー 家に帰ったらワシのセクシー生着替えショーを魅せてやるのじゃ」

「見たくねー 10年分歳をとったら頼む」

予報では結構な確率でこれから雨模様だ。

さっさと帰るに限る。

「む、マー君。ジュース飲んだらおトイレに行きたくなつたのじゃ」

「神様なのにトイレするの!?!」

えらく超特急だなあ。

股間を押さえて内股になるのは、はしたないからやめなさい。

「いくら神とは言え、摂取したものを消化できるわけが無かるー」

「ま、いいや。実は俺もそろそろトイレ行きたかったし」

ここのシママラは2階建ての店舗で、トイレは屋上3階の駐車場へ出る踊り場に設置



されている。

エレベーターのボタンをスクルドに押しさせ、降りてくるのを待つ。

俺が押したら開いた途端ダンジョンになるに違いないからな。

チーン

「お邪魔しますのですわ。大きな鏡まであつて、清潔で素敵なトイレですわ」

ファルフナーズが丁寧にお辞儀をする。

良く出来たお姫様だけど、ここはまだトイレじゃないよ、エレベーターだよ。

スクルドが3階のボタンを押し、上昇のための独特の荷重を味わう。

「きやつ」

「ははは、ファルフナーズはこの上昇感覚に慣れてないからな」

よろめいたファルフナーズの肩を支えてやる。

小声で礼を述べ、照れて顔を背けてしまった。

あれ、ちよつと良い雰囲気……

……だったのだが、鏡に反射したスクルドのニヤけ顔と目が合つて冷めた。

ガゴン！

「きやつあつー！」

「おっと！ 大丈夫か、ファルフナーズ。今のは普通の揺れじゃないな。地震でも起きたか？」

ヒュウウウン……

どうやらエレベーターが緊急停止してしまったようだ。

落ち着け。

よし、落ち着いてる。

なぜなら、不死身の俺と無敵のファルフナーズと神様のスクルドだ。

建物が倒壊した所で怖くも何とも無い。

俺だけ痛い事にはなるが。

「どうやらただの故障だな。スクルド、その受話器マークのボタンを長押ししてみくれ」

「これかのー？」

遠くでアラーム音が聞こえる。

恐らくエレベーターの動力・電源周りで異常を感知したんだろう。

外からも人の声が聞こえてきた。

どうやら俺達に向かつて呼びかけてる声だな。

考えてみれば、それほど物々しく大きなエレベーターでも無いし、フロアとフロアにも大きな隙間は無い。

大声出せば届かない事も無いのか。

「中にお客様は居られますかー?」

「いまーす! 3人でーす!」

「ただ今、修理の業者さんをお呼びしておりますー 今しばらくお待ちくださいーい。怪我人や病気のお客様はいますかー?」

「大丈夫でーす!」

しばらく閉じ込められる事になってしまったな。

…

「しかしエレベーターの故障なんて生まれて初めてだぜ」

元ヒキニートだからエレベーターに乗る機会自体が少なかったけど。

「マー君。実はワシ、割と限界が近くてな」

「言うなスクールド。俺も出来ないとなると限界を感じやすいタイプなんだ」

「マ、マサト様……私、良く状況が飲み込めてないのですが、どのくらい待てば良いのでしょー？」

「そーだなー、来るのに30分、修理に1時間として、まあ1時間半くらいか  
ファルフナーズの顔が蒼白になった。

何か不味い事でもあるのか!?

トリピュロン王国の人間は狭い所に長時間居ると発狂でもするのだろうか。

「どうした、ファルフナーズ。顔が真っ青だぞ」

「い、いえ……その……」

「まさか、ファルフナーズもトイレか？」

「なっ、違っ！ お、王族の姫はトイレなんて行かないのですわ！」

凶星か。

いくら俺でもここを問い詰めようとは思わない。

しかし参ったな。 3人とも限界水域か……

「やはりワシが権能を使った影響じゃろうかのー」

「ゴッド・パワーは周囲にも不思議現象を引き起こすのか？」

「ワシらの権能の根源が因果と意思の融合じゃからのー 機械的な物には影響が出ることもあるじやろうて」

「ふ、ふーん……」

さっぱり分からないから聞き流そう。

……

…

「マー君、何とかして欲しいのじゃ」

「むしろスクルドの権能が役に立つんじゃないのか？ 機械に強いんだろ」

「仕組みと構造がさっぱりじゃてー」

「動力や構造はともかく、原理なんて昔ながらのロープと歯車だと思うぞ」

神様でも尿意には逆らえない。

あれから30分、俺もパンパンだぜ……

ファルフナーズもそわそわと体を揺さぶっている。

こいつはダンジョンなんかより、よほど試練かも知れん。

…

スクルドが前屈みになり始めた。

分かる、分かるぞ。

これは本気の限界直前な合図だ。

「マ、マー君……」

「よ、よし、緊急事態だから許される。そこの隅っこにしてしまえ。大丈夫、笑わないから」

「マー君も一緒にしてくれるかの？」

「いやあ……俺はもうしばらく我慢しようかと」

「ずるいのじゃー！一緒に漏らすのじゃー！」

「漏らす言わないでくれー！」

今日は精神ダメージが大きかったんだ。

ここでお漏らしまでしてしまったら、本気で立ち直れないぜ。

スクルドが涙目で唇を噛んでいる姿は見られない。

確かに誰もこの状況なら笑いはないが、やはり「した」跡を見られるのは恥辱の限りだ。

証拠が残らないようにすれば、あるいは……

駄目だ、そんな上手い方法なんて——いや、あるぞ！

「ここでするのが嫌ならダンジョンでしてしまえばいいんだ！ ファルフナーズ！ アイテム・バッグから『どこでも扉』を取り出してくれ！」

「おお！ マー君、冴えたアイデアじゃ！ その方法があつたのじゃ」

「い、今、取り出しますわ！」

あつ、長いフレア・スカートで分からなかったけど、ファルフナーズも内股でキュツとしてる。

お姫様も限界突破か。

ファルフナーズから最小化済みのどこでも扉を受け取る。

この枠の端をもって引っ張れば

この通り！

人が通れるサイズまで拡大だ。

「よし、スクールいくぞー！」

「おー！ ゴッド・トイレじゃー！」

なんだそれ。

俺とスクルドは我先にとダンジョンへ飛び込んだ。

幅と高さ2、5 m程度の、石壁の通路が左右に分かれている。

「流石にワシでも恥ずかしいのじゃ。マー君はちよつと離れてして欲しいのじゃー」

「もちろんだ。スクルドはそっち、俺はこっちだ」

「ま、待つのじゃー！ 怖いから後ろを守って欲しいのじゃー！ モンスターが出たら怖いのじゃー！」

神様のくせに、夜中にトイレを怖がる子供か！

俺も限界だつてのに。

「分かったから早くしろ。見守つてやるから」

「見られるのは恥ずかしいのじゃ！ 向こうをむいてくりやれ」  
注文の多いトイレだ。

気の抜けた返事をして背を向ける。

さて、高原を流れる爽やかな小川のせせらぎをイメージしよう。



……

…

「もーいーかーいー？」

「……」

返事が無い。

そんなに恥ずかしいのか。

……いや、変だ。

高原を流れる爽やかな小川のせせらぎサウンドがしない！

「スクルド！ 大丈夫か——！」

俺は見た。

薄い青色のゲル状の物体——巨大なスライムがすっぽりとスクルドを覆い尽くしている、その姿を。

「く、食われてるーッ!？」

まずい！ 確かスライムは飲み込んだら、あらゆる物を溶かしてしまうんだっただか！

「……いや、スライムの中を泳いでる。さつすが神様。すげーすげー」

スライムも必死に体を流動させ、スクルドを逃すまいと押し込める。

おつ、スクルドが早い。

平泳ぎで顔だけスライムの外に出たぞ。

「スクルド頑張れー」

「マー君、助けてなのじゃ！ 流石のワシでも3日は持たぬ！」

3日までは持つのか。

「すまん。金属バットさんは家に置いてきてしまったんだ。素手じゃどうにもならない。神様の権能で何とかしてくれ！」

スライムの中を泳ぎながら、手でバツの合図を送ってくる。

こりやあまズい。

ゴツド・パワーが使える状況じゃないのか。

しかし俺にはスライムにダメージを与える手段が無い。

少しでも触れれば俺もスライムになってしまう、らしい。

思った以上にピンチだぞ！

ファルフナーズを呼んで一か八か、「炎の矢」を打ち込むしか無いか!?

だが、あのダメージにスクルドが耐えられるかどうか。

【魔法の盾】はこれだけ離れてても使えるだろうか。

焦る俺はおろおろと周囲を見回す。

そして天啓を得た！

足元、スライムが床一面に広がっているように見えるが、1箇所だけ不自然に形を変えて避けている場所に気付いた。

そう、ほんの少量だけ出された、スクルドの御小水。

つまり、おしつこだ。

「スクルド、良く聞け！ そいつはおしつこが弱点だ！ 残りを盛大に出せッ！」

流石のスクルドも顔が一瞬で真っ赤になった。

何かを叫んでいるが聞こえない。

ゴボゴバガボ！

「死ぬよりマシだ！ いいから出せ！ 責任は取ってやるから、俺を信じろ！」

スクルドが八重歯をむき出しにして何か言ってるが伝わって来ない。

スライムの中だから分からないが、涙目で悪態をついてる、という所か。

何かこつちに向かつて指差している。

しまった、まさかスライムがもう一匹!?

「挟み撃ちか!?」扉を確保——あれ?」

だが、振り向いた先にはダンジョンの通路が広がるばかり。何も居ない。

スライムが這い出して来そうな亀裂も見当たらない。

「スクルド? スライムも何も居な——」

振り向いた俺の目に映ったその光景。

それはそれは神々しいものであった。

10歳程度の銀髪少女がこちらに向けて、いわゆるM字開脚。

つるりと曲線を描く少女の秘密の花園を丸出しであった……

やがて淡いブルー色のスライムの中央で少女の秘部周囲をレモン色に染めていく。

その、ある種の諦めと安らぎと開放感に満ちた表情の潤んだ瞳が……

俺の呆気にとられた視線と交わった。

どうしよう。

とりあえず、死を覚悟しよう。

スライムはスクルドの御神水ごじんすいを浴びて弾ける様に雲散霧消うんさんむしようした。

「……」

「……」

そこには立ち尽くす俺と、M字開脚のまま残りの御神水の水溜りを床に広げるスクルドだけが残された。

小脇には買ったばかりの紫しまパン。

いつの間に履いてたんだ。そして脱いだんだ。

「マー君のバカーツ！ これ程の辱めを受けたのは誕生して以来じゃあー！」

「お、俺のせいじゃないだろ！ むしろ機転を利かせて助けただろお!？」

「じゃから、あつちを向いてくりやれと合図したじやろうがー!」

「ああ! あの指差しはそう言う意味だったのか。てつきり、向こうを警戒しろという意味かと……」

「見られたのじゃ! 乙女の秘密を見られたのじゃあ!」

「死ぬよりマシだと思って、こらえてくれ。頼む」

「うああん! 責任取ってくれるまで許せないのじゃあー」

責任、たったてなあ……神様に対してどう償えと。

仕方なくパンツを履かせてやり、手を引いてダンジョンを出た。

スクルドは泣きながらポコポコと俺の背中を叩き続けている。

まあ、神様が本気で怒ったら想像もつかない恐ろしい目に合わせられるだろうから、これは許してくれている内に入るのだろう。

と、思っておこう。

「お詫び代わりに俺のおしっこシーン見せてあげるから」  
「御免こうむるのじゃ！ お詫びどころか罰ゲームなのじゃ！」

ですよねー

背中を叩かれながら俺も済ませた。

手にかかりそうだったぜ……

::

「二度とダンジョンには入らないのじゃ！」

「マサト様、ダンジョンの中で一体何が……？」

「いや、まあ色々あってな。モンスターに襲われたりしてたんだよ」

エレベーターの中で待っていたファルフナーズが、まあ！と驚いた表情になる。

しかし、すぐに前屈みになった。

頬を一筋の汗がっつた。

こっちも限界オーバーか。

一緒に入れば良かったのに。

だがファルフナーズは年頃の乙女。



しかも王族の姫。

やはり俺が気を使ってやらねばなるまいか。

「ファルフナーズ。無いとは思いますがダンジョンの中に忘れ物があるかどうか、一応確認してきてくれるか？」

「は、はい……あの、出来ればマサト様も一緒に……」

それじゃあ気を使った意味が無いだろう？

「その、やはり独りで中に入るのは怖くて……」

ぐう、そうだった。

数々のモンスターとトラップのせいで、ファルフナーズは俺抜きだとダンジョンはトラウマなんだった。

モンスターに襲われた、なんて教えてしまったし、恐怖もひとしおか。

「分かった。一緒に行こう」

中に入って、少し前方へ進む。

スクルドの……御神水、そう御神水を通り過ぎて少しした所で止まる。「よし、先を少し見てくるから、ファルフナーズはここで待つててくれ」

気遣いの出来る元ヒキニート、それがこの俺マサト様だ。

ガラスのハートは壊れやすいって事を良く知ってるのがヒキニートなんだぜ。ファルフナーズは顔を赤く染めつつ無言で頷いた。

少し早足で先へ進む。

「マ、マサト様！ それ以上離れてしまうと怖いのですわー！」

わずか5mも歩いてないが……分かった、とだけ返事をする。

ついでに、わざとらしく伸ばした手の平を額の上に当てて、やや前屈みになり前を探っているような仕草もしておく。

静かなダンジョンに、スルスルという衣擦きぬずれの音がわずかに響いた。

思わず生唾を飲み込む。

落ち着くんだ、俺。

いかに絶世の美少女とは言え、ファルフナーズはまだ16歳の小娘。

俺が相手にするような女性じゃない。

確かに胸は超ワールド級の大きさと素晴らしさだが。

いや、腰つきも見事な砂時計的くびれだが。

お尻と太ももはもうちよつと大きくて良いが、これも素晴らしい。

「マサト様、あまり静かですと、その……」

消え入るような細かい声で気付かされる。

音を聞かれたくないのか。

えーと……何か話しかけられても恥ずかしいだろうし……

よし、歌だ。俺が一番好きな歌と言えば、そうだな。

まんが日本昔話のエンディング・テーマかな。

…

「~~~~♪」

「——なぜお尻を出すと一等賞なのでございますか——」

しまった、歌詞がまずかった。

2番にしておけば良かった。

鼻歌で熱唱開始。

「ふふふふ　ふふふふん　ふふふんふ〜ん」

「マ、マサト様あ〜……」

「もういいか〜?」

「振り向かず、そのままでお聞きくださいませ」

「お、おう……?」

「今、私の目の前に、その……うつすら青いスライムが」

「何だっ!?　まだ倒しきれてなかったのか!」

「振り向かないでくださいませッ!　今、振り向かれたら私、どうにかなってしまうすわ!」

「お、俺にどうしろと!　金属バットさんは家で留守番だぞ!」

徒手空拳で、しかも振り向かずに倒せるはずが無い！

「ファルフナーズ！ そいつはスクルドのおしつこで撃退できた！ だからお前も――」

「無理！ 無理ですわ！ 床に落ちるだけでかけることなど……つて、そんな事言わせないでくださいまし！」

「スライムに飲まれたら出せばいい！ それでスライムは溶けて無くなる！」

「お、お許してください！ もうスライムを被るのは嫌なのですわ！」

そうだった。先日、トラップで頭からスライムを被って、これもトラウマになってたんだ。

メンタルよえー！

「じゃあ、もうこれしかない！ いいか、ファルフナーズ！ 俺は目を瞑ったぞ！ 何も見えてないからな！」

「マサト様な、何を……?!？」

ファルフナーズを後ろから持ち上げる。

膝の裏を抱えて。

「またもやM字開脚のポーズだ！」

「今度は俺の腕の中だが！」

「いやああ！ マサト様ああ！ お許しくださいませ！」

「大丈夫だ！ 俺は何も見えていない！ 早く！ 早く出すんだ！」  
ウソです。

ファルフナーズを抱えて、スライムに狙いを定めるために薄目を開けてます。  
しかしもう、これしか思いつかないんだから仕方無い！

「ファルフナーズ！ 死にたくなければ出せえええ！」

「マツ！ マサト様ああ！」

ファルフナーズが両手で顔を覆った。

「んんっ……！ はんっ……くう」

羞恥心が意図せず抑え込むそれを、無理矢理放とうとする。

その葛藤が苦しそうな喘ぎ声となってファルフナーズの唇から漏れる。

それは見事な放物線だった。

暗いダンジョンにかかげられた松明の光に反射し、まばゆい光の橋を描いた。白いニーツとガーターベルトの作る谷間からほとばしる、恵みの泉。

シヤワワワ……

スライムは浄化された。

ピチヨン……

最後の一滴ひとしずくがダンジョンの石床に落ち、こだまする。

「お、終わった……のか？」

ファルフナーズは両手で顔を覆ったまま、ふるふると震えている。

薄目だったのをはつきりと開けると、スライムは影も形も無くなっていた。

「見ろファルフナーズ！ スライムを倒したぞ！ 助かったんだ！」  
「ふえ……むしろ見ないでくださいましー！」

羞恥のあまりバタバタと足を激しく動かすファルフナーズ。  
このままだと転びそうなので、何とか降ろして立たせた。

：

「ぐすんつ、ひつく、マサト様酷いのですわ……」

「スライム被るのが嫌だって言うんだから、これしか無いだろう？」

「それは……そうですけれども。もう少しデリカシーとか……」

「急場のギリギリの所だったんだ。許してくれ」

正直、褒められても良いくらいだとは思うけど。

お姫様のトラウマだから仕方無いか。

それに薄目ではあったが、凄いものを見せてもらったからな。

おっと、これは絶対ファルフナーズには言えない。

一生の思い出にさせてもらおう。



…

「おかえり、なのじゃ」

「ただいま戻りましたのですわ」

「しかし激しいプレイだったようじゃの」

「プレイとか言うな」

自分だけしつかり立ち直りやがって。

程なくエレベーターは修理され、俺達は無事に脱出する事が出来た。

お詫びと粗品を押し付けてくる店員さんに愛想笑いを返して、そそくさと家路につく。

「マサト様に乙女の、最も恥ずかしい姿を見られてしまったのですわ……」

「見てないって。角度的にファルフナーズを持ち上げてたら見えるわけないだろ？」

本当はちよつと見えてたけどね。

「ワシなんか丸々見られてしまったんじゃぞー！」

「スライムの中でぐにやぐにやしてたから、良く分からなかったってば。大丈夫、大丈夫」

本当はくつきり見えてたけどね。

3人ともぐったりしながら家に戻った。

部屋に辿り着いて3人ともへたり込んでしまう。

『主よ、おかえりなのである。買い物は楽しかったのであるか?』

「色々あつて散々だった。大変な一日だったぜ」

「この上なく酷い目に合いましたわ」

『災難であつたか。ともかく、無事に戻って良かったのである』

「ああ、今度からは金属バットさんも持って外出しよう……ん?」

『どうかしたのであるか?』

「戻る……」

「死に戻る……」

俺は得心して右の手の平を左拳でポンと叩いた。

「そっすだよ！」

俺が死んでここに戻ってくれば、あつという間に脱出してトイレに行けたな」

「!!」

「マー君、なぜそれを今更……」

「マ、マサト様のえっちえっち、えっち！ 変態おバカ、ですわーっ！」

わざとじゃないんだからな！

## #44 「姫ガチャ成りて、万毛枯る」

「よし、今日もダンジョンに……ファルフナーズ？」

「マー君や、姫は先日のダメージから立ち直れてないようじゃの」

朝、俺の部屋に顔を出したと思つた途端、ファルフナーズが押入れに飛び込んだ。

何がどうなつたんだ？

「すまんがスクルド、押し入れを開けてくれ」

「少しでも探索に関わる事を手伝うのは、本当は駄目なんじゃがのー」

ぼやきながら、それでも押し入れを勢い良く開けてくれた。

スパアーン！

押入れの下の段、オタクグッズが満載でわずかしな隙間に膝を折り曲げて、ファルフナーズが両手で顔を押さえていた。

「き、昨日の事を思い出してしまつて……恥ずかしくてマサト様に合わせる顔が無いのですわ」

「俺と顔を合わせた途端、記憶が一気に蘇ったのか」

『昔の我が主を見ているようである』

ふるふると震えて耳まで赤いファルフナーズ。

小さく、コクコクと頷いて俺の言葉を肯定している。

「ワシもじゃー マー君に乙女の秘所をまるっと晒したのじゃー」

「見た目は子供、中身は神様だからスクルドのはセーフ」

「なんでじゃ！ 神差別は良くないぞえ！」

「いやいや、スクルドの主天使としては当然シモの世話をだな」

ぼんぼこと俺の背中を叩くスクルドの手を、俺の肩に誘導。

特に意味も無くスクルドの方へ振り返りながら、重々しく頷く。

ターゲット・ロック、いつでもどうぞ。

ものの数分のうちにスクルドは楽しくなったのか、リズムをとって俺の肩を叩いていた。

単純か。

頭の中まで子供か。

ゴッド・肩叩き。

さてスクルドのほうは上手く誤魔化せたとして、ファルフナーズをどう立ち直らせるか。

俺の目を盗み、さり気なく押入れのフスマを閉めて引き籠もろうとしている。

ああもう、どいつもこいつも。

フスマを手で押さえて、ファルフナーズの目を見つめる。

反射的に再び顔を抑えて俺と目を合わせようとしない。

放っておいたら、ドラえもんみたいに押入れに住みかねないな。

「おーい、 姫えもん」

「私はそのような名前ではないのですわ」

「この国では押入れに住む者の名前に、『えもん』を付ける慣わしがあるのだ」

「せ、せめてファルえもんと呼んでくださいませ……」

どうせならフナえもんと呼びたい。

おっと、話が脱線してきた。

「ファルフナーズ、そろそろ腹が減ったぜ。朝飯作ってくれないかな」

「……い、今しばらく時間が欲しいのですわ」

意外と重症だな。

困った……

日常的な行動と会話を重ねて、羞恥心を薄れさせてしまうのが一番なんだが。

そうだ、何も普通の日常である必要も無い。

ちよつとしたスパイスで上手く誤魔化そう。

だがっ……！

いや、ここは仕方無いんだ！

分かって死んでくれ、俺の毛根達フレンズよ。

「そうだ、ファルフナーズ。連日たくさんレベル上がっただろ。またレベルアップ・ボーナスで半額だからガチャを——」

ファルフナーズが体をビクンと跳ねさせて反応した。

よし、食いついた！

「3回くらい、やつちやおうかなー……なんて」

「7回ですわ」

「えっ」

「一昨日に5回、昨日戻った時に更に2回レベルが上がったのですわ」

「な、何も全部使わなくても……それは後日の楽しみで」

ススス……

「閉めるな閉めるな、フスマを。お前……本当はもう立ち直ってるだろ！」

「はしたないとはいないながらも……ガチャの楽しさには抗あらがえ無いのですわ」

照れてはにかみながら押入れから出てきた。

あら、良い笑顔。

だがその笑顔のために、俺の毛根達フレンズがまた死地へ赴おもむくのだ。

一姫ガチャ成りて、万毛枯る

…



「では行きますわー！ とおうー！」

フアルフナーズが宙に向かって指を突き出した。  
ステータス画面にガチャのボタンがあるらしい。

フアルフナーズにしか見えていないのだが。

お姫様が勢い良く指を突き出すと、後頭部に鈍痛が湧き上がる！

ぐううう！

さらば毛根達フレンズ！

空中にドラム・リールが出現し激しく回転し始める。

ドウルルルル、デデドン！

『スーパー・レア』

「きたあー！！」

「遂にやりましたわ！」

ドラムが消え、そこから神々しいような演出でゆつくりと剣が舞い降りてくる。

流石最高レアだぜ。

乱暴に投げ捨てられてくるコモンのアイテムとは訳が違う。

最高レア、無限ソードを入手した！

テレーツテレー！

「おめでとうございます、マサト様！」

「良くやった、ファルフナーズ！」

手に手を取って喜びを分かち合う。

『これで私の出番も終わったのである。嬉しさと寂しさの交じり合ったほろ苦い感情である』

「おいおい、金属バットさん。寂しい事言うなよ。2刀流って手もあるんだしさ」

手元に降臨してきた無限ソードの柄を握って、誇らしげに構えた。

いよいよ俺も勇者としていっぱしの武器を手に入れたのだ！

……勇者は言いきるか。

戦士、戦士くらいにしておこう。

「よしファルフナーズ。無限ソードのステータスを頼む」

「かしこまりましたわ。ええと……無限ソード、命 midpoint MAX、打撃点 10、刃の部分が延びて目標に絶対命中する名刀……」

「んん……？」

「……」

『……』

「ファルフナーズ、今の金属バットさんのステータスを頼む」

「はい。【伸縮自在の知的なファイヤ・ブランド】英雄級金属バット+9、命 midpoint 40、打撃点 40」

「……」

「……」

『……』

「……ゴミだな」

「金属バットさん様の足元にも及びませんですわ」  
『完全勝利である』

「絶対命中という利点を考慮しても……ダメージが低すぎる」

「金属バットさん様は武器エンチャントの巻物と強化で鍛えられていますから」  
『日々の鍛錬の賜物なのである』

それを鍛錬と言うかどうかは怪しいが。

「ま、いらんな」

ポイツ

『流石に勿体無いのである』

「そうですわ、マサト様。物を粗末にするのは良くないのです」  
「確かにそうだな。ファルフナーズ、アレを出してくれ。両替機」

「まあ、売却してしまわれるのですか」

ファルフナーズが腰元の、見えないアイテム・バッグから両替機を取り出して手渡し  
てくれる。

見た目は炊飯器の上に漏斗じょうごが付いたような奇妙な箱だが、あらゆる物を換金可能なスグレモノだ。

「さあーて。名刀、無限ソードおいくらハウマッチ！」

両替機の液晶じみた表示パネルに文字が光って浮かび上がる。

『それを 売るなんて とんでもない！』

「ちつ、両替機が聞いて呆れる。そこは根性で買い取れよな」

『マサト・オコノギの根性 を買い取ります。 1) 銅貨3枚 2) 2000円』

「根性を買って取れとは言ってねえー！ しかもえらい安いな！」

ファルフナーズが口元を押さえてクスクスと笑っている。

まあ、お姫様がすっかり元気になったようだから結果オーライ、という事にしておう。

妙に人間臭い両替機も、たまには役に立つもんだ。

「さあ、ガチャの最高レアも出したし。ファルフナーズ、朝食の用意を——」

「まあ！ マサト様、ガチャ景品入れ替えだそうですね！ 今度のスーパー・レアは多機能ガンレット、覇者の籠手こてだそうですね！」

「くっ、商品入れ替えとは余計な事を！ 待て！ ファルフナーズ、その指を下ろせ！」

にまあーっ

ファルフナーズが笑う。

その笑い方は美少女がして良いもんじゃない！

色々台無しだ！

「何だか楽しくなってきたのですわー！ とおおうー！」

「待て！ うわああああ！」

……

……

「朝から元気な2人じゃのー」

『今日も騒がしくなりそうなのである』

俺の絶叫が6回響き渡った。

首筋からうなじが無くなった。  
生え際くつきり

## #45 「とてもお似合いのタイツだと思えますわ」

「よし、満足して元気モリモリですわー！」

『代わりに主が虫の息なのである』

ああ……俺の大事な毛根達フレンズが1050本も天に召された。

燃え尽きた気分で床に突っ伏している。

「後頭部が……寒い……もう夏だったのに……寒いんだ」

「後ろがツルツルで、なんか勘違いしたアーチスト気取りみたいなのじゃ」

バタツ

追い討ちしないで。

今日は一日このまま、畳を涙で濡らして過ごそう。

二度とキノコの里は食うまい。

共食いみたいになるから。



「さあ、遅くなりましたが朝食を用意して参りますわ。プリン・プレートでよろしいですか？」

あの朝食はそんな名前だったのか……

とてもよろしく無いけどツツコミを入れる気力が湧かない。

目の前に置かれたハズレ景品の山が恨うらめしい。

都合4つ目となる『どこでも扉』。

強化素材、とか言う『キレニウム』3つ。

投擲武器『爆裂ボウラ』。

脚用装備『大胆光沢ニーソ』。

これらの使い方も教わらねば。

…

遅い朝飯なのか早い昼飯なのか分からない、それでいてオヤツめいた食事を済ます。

今日のコーヒーは一際苦いぜ……

スクールが俺のコーヒーに興味を示し、マグカップを奪い取り飲み干した。

ぶびゅっ

「わっ！ 汚なっ！ 俺の顔に吹きかけるな！」

「苦っ！ 苦いのじゃー！ 何の罰でこんな黒くて苦い汁を飲まされてるのじゃ」

「その香りと苦味が良いんだよ。あーあ、昨日買ったばかりの服が台無しじゃないか  
なんでまたマールライオンみたいにびゆるびゆると噴き出すのか。

わざとか。

寝巻き代わりに貸した駄目文字Tシャツが染みになつてしまふ。

テールブルふきんで拭き取つてやる。

「わー、マール君に胸を触られてしまったのじゃー」

「笑いながら言うな」

「マール君、このシャツの文字は何て書いてあるんじゃ？ 漢字は難しいのー」

「……『変態紳士』」

「マール君の職業じゃったかー」

「違います。もう一度言う。断じて違います」

「スクール様、洗つてしまいますので服をお脱ぎくださいな」

「んっ」

俺に向かつてバンザイする。

「いや自分で脱ごう？ 何千年も生きてる神様？」

脱がせたら今度は見られたー、とか言つて大喜びで騒ぐに違いない。

楽しそうで何よりですが。

「マサト様もお脱ぎください。一緒に洗ってしまうのですわ」

「えー、俺のは良いよ。色の濃いスウェットだから多少染みになつても……」

「駄目じゃー マー君、おっさんの匂いがするのじゃ」

まだハタチなのに。

昨日母親に洗濯機の使い方を教わつてたから、ファルフナーズは洗う気満々だ。

流石に自分のドレスは洗えない事を教えられ、渋々母親に渡してクリーニングに出したらしい。

洗濯機でお姫様ドレスを洗つたらどうなつちやうなだろうな。

やつぱボロボロになるのか。

あるいは魔法の使用回数を増やしてくれる特殊能力が消えたりして。

「えらい所帯じみた姫じゃのー 貧乏国の姫だったんじゃるか」

「お風呂にすら一人で入った事無いって言ってたから貧乏は無いだろ。むしろ世話され過ぎて、家事の才能が芽を出すタイミングが無かったんだらうな」

洗濯物を抱えて鼻歌交じりに風呂場へ向かうファルフナーズを見送りながら好き勝手な事を言い合った。

…

「しかしファルフナーズのお姫様服を毎日クリーニングに出してたら、代金もバカにならないな」

「はい。ですからドレス以外は洗濯機で大丈夫なようですので、使い方を教わったのですわ」

社会適応も早い。おまけに経済観念まで身に付け始めた。

スーパ―お姫様め。

「ん？ ドレス以外の服と言うと……？」

「あつ、はい……このレースの白手袋とか……タイツとか……し、下着とか……ですわ、はい……」

恥ずかしい事を言っつて顔を覆い隠す。

俺のスウェットにその綺麗な顔をうずめて良いものかどうか。

「ほう、でも洗濯機もそこまで万能では無い。物によつては縮んでしまったり生地が傷んだりしてしまうんだ」

「はい、気をつけて洗いますね。柔軟剤と言うのも教わりましたわ」

「いや、それだけでは不十分だ。どれ、俺がちゃんと判別してやろう」

「ええっ!? その恥ずかしいですわ」

「例えばそのニーソ、シルクの生地だろう。洗濯機に投入すると毛羽立ちが激しく、色がくすんで白さが失われる」

「さ、左様でございますか……」

いや知らんけど。シルクの服持つてないし。

「さあお次は下着だ！ 下着の材質は？」

「それは……流石に恥ずかしすぎてお答えできませんわ」

ファルフナーズは目を伏せて逸らしながら、手を合わせてモジモジとしてしまう。うむ、今日もお姫様は可愛い。

しかし別に履いてるのを見せるとか触らせるとか言ってる訳じゃないんだが……材質一つ聞かれるのがそんなに恥ずかしいのだろうか。

「ま、いつか。洗うのを手伝えば済む話だ」

「そそそ！ それこそ無理ですわー！」

「冗談だ。許せ。それよりニーソで思い出したんだけど、さっきのガチャの景品の效能を知りたい」

「先ほど一通り説明しましたのに」

「マジで？ 放心状態で聞いてなかったみたいだ。もう一回頼む」

「かしこまりましたわ。では洗濯物を先に洗濯機にかけてしまいますので、コーヒードリンクも飲みながらお待ちくださいませ」

「あ、ああ……頼む」

出来るお姫様メイドだ。

でもやはりお姫様ドレスにエプロンは似合わないと思う。

…

「では、こちらの道具の説明文を再読致しますわ」

「頼んだー」

「まず『どこでも扉』は以前の物と同じですわ。伸縮自在で、マサト様ならどこでもダン

「ジョンへと繋がる扉です」

「持ち運びに便利な以外はただの扉じゃのー」

「でもリセマラ戦法で動き回らなくて良いので地味に便利なんだ」

「リセマラとは何じゃ？」

「ダンジョンは開ける度に違うモンスターが出てくる時がある。より倒しやすいモンスターが出るダンジョンを選ぶために扉を渡り歩くんだよ」

「同じ扉を開け閉めすれば良いじゃろー」

「それだと何故か開ける度に高レベル・モンスターが出やすくなるらしくてな。開ける扉を変えていく必要があるんだ」

「そりゃ面倒なシステムを作ったものじゃな」

「次にこの『クレニウム』ですが、武器装備の強化に使うのだそうですわ」

「ああ、こないだのカーコンビニエンスの爺さんが言ってた……」

「はい。これで益々戦いが楽になりますわ」

「また金属バットさんに差を付けられてしまうのが少しばかり切ないが……」

既に俺の何倍強いのか。

あ、そうだ。それも確かめておかないと。

「それで更に思い出した。レベルアップしてからステータスを確認してないんだった。

これ終わったらすっちも頼むよ」

「かしこまりました。では次の投擲とうてき武器『爆裂ボーラ』ですが、敵に投げつけると爆発する武器だそうですわ」

「ふーん、これが武器なのか。でかいアメリカン・クラッカーみたいなオモチャっぽい形だが」

「なんじゃマー君、ボーラも知らんのか。男の子なら狩猟道具くらい知っておかぬと駄目じゃろー」

このボーラと言う武器、3つの紐が1つの紐にまとめられていて、3つの紐はそれぞれに小さい鉄球がくくり付けられている。

「いや俺、現代日本の元ヒキニートだから。狩り道具とか知ってるわけが無い」

「これは、こうグルグルと振り回して敵にぶつけるんじや。敵にダメージを与えた上に運が良ければ紐に絡まって逃亡を阻止できるスグレモノじや」

「しかもこの『爆裂ボーラ』は敵にぶつかると、その鉄球が爆発して追加のダメージを与えてくれる、とありますわ」

「ほー、ちよつと便利そうだな。絡めてよし、ぶつけてよしなら俺にも使えそうだ」

「鉄球を外して直接ぶつけても良いそうです。更には使い捨てですが、消費しても1日



「個補充されるそうですわ」

なるほど便利。無限補充とはゲームみたいで有難いな。

何より俺に遠距離攻撃の手段が出来たのは頼もしい。

これで昨日のスライムみたいな敵にも対処できるようになる。

「そして最後に脚用装備『大胆光沢ニーソ』ですが……ええと、説明文には『ちよつぱり大胆になれる、この夏流行の光沢モデル。魅力度アップの光沢コーデで注目度急上昇！』だそうですわ」

「ムカつく説明文だ。まあそれはファルフナーズ用だな。白ニーソだし、似合うだろう」

「一応男女両用だそうですわ」

「着ないよ!?!」

20歳の男がニーソ履けるわけないだろう!

「そうでしょうか? マサト様にとってもお似合いのタイツかと思えますわ」

「薄々感じてたが、ファルフナーズはどこか美的センスにズレがあるな」

お仕着せのお姫様ファッションばかりだから、そこらへんを身に付け損ねたのだろうか。

常にお姫様ドレスを着ているのは大正解だったな。

部屋着みたいな、くつろぎ系ファッションは覚えさせない事にしよう……  
一度覚えさせたが最後、あつという間に芋ジャージを着てあぐらをかくに違いないのだ。

ジャージ・プリンセス

「でも防衛点も2点上がるそうですわ」

「それは多少惜しいが、やはりぴっちり白ニーソを履くのは抵抗がある」

「いつものジーパンという物の下に履くものですから、目立たないと思いますわ」  
「待て待て、ただだけファルフナーズは俺にニーソを履かせたいんだ!」

「とてもお似合いだと思いますのに……私の国でも貴族は白いタイツを——」

「あーそーね。確かにメルヘンな王子様達は白タイツだろうけど」  
なるほど。

あんなイメージの人達がお姫様の王宮で闊歩かつぽしてるのか。

……行きたくねえー

向こうに着いたら、式典だかお祝いだかで同じ格好させられるんだろうな。

「しかも装備すると魅力点が15点も上がるそうですわ」

「そんなステータス項目あったっけ？」

「え、ええ……私に」

「初耳だ」

「聞かれなかったものですか……色々と恥ずかしい項目が多いのですわ」

「ほーほーほー！ そりゃあメイドの主としては把握しておかないと、なあ？ フアルフナーズ？」

「お、乙女の秘密だけは、どうか……」

あ、こりゃそろそろ固まるな。

流石に俺でもフアルフナーズの限界点は少しずつ察する事ができるようになってきた。

あと一押し二押ししたら顔を抑えて固まってしまおうだろう。

「仕方無いな。で、その魅力点で何に使うの？」

「魅力は姫巫女の使う術に影響する、と言われていきますわ」

「へー、神様も美女相手のほうが気前も良い、って事なんかな」

「風評被害じゃー 顔でひいきするならマー君の所へ来るはずなのじゃー」

「そう言えば目の前に居るのは神様だった。って言うか滅茶苦茶俺に失礼じゃね？ それ」

「すまんかったのじゃ。お詫び代わりに教えると、姫巫女は人々の願いを自身を通して具現化するものじゃから、姫巫女自体のカリスマ性も重要だつて事なのじゃ」

「えーと、つまり?」

「姫巫女自身の人気や魅力がそのまま姫巫女の力となるのじゃ」

「なるほど。じゃあ地球でファルフナーズをアイドル・デビューさせよう」

「辛い事がある度にガチャとやらに手を出して、マー君が禿げ上がっていく未来が見えるのう」

「よし、やめよう」

「挫折早っ! 速攻じゃのー」

マネージャー兼プロデューサーの道は断たれたのだ。

そもそも大勢の前に出したら、誰がどうファンタジー風にバグるかわかったもんじゃ  
ない。

「で、何だっけ。ああ、ニーソだニーソ。やっぱりそれはファルフナーズが装備する事  
しよう」

「残念ですわ……絶対にマサト様用だと思いましたが」

いやだって、男女兼用と言っても端っこレースでめっちゃフェミニンですから。

びつくりするほどツルツル光沢ですから。

「じゃあ装備してみてくれ」

「かしこまりましたわ」

「……」

「……」

スルツ……シユルシユル、パチン

「つて、マサト様！ なぜ凝視してるのですか！」

「お前が目の前で脱ぎ始めたからだろお!?」

お姫様は基本ノリツツコミなのか？

今日のパンツは桜色か。

眼福眼福。

うわっ！ 目が！ 暗い！

つてスクルドが後ろから俺の目を塞いだだけか。

「さあ姫よ、ワシがマー君を目隠ししてるうちに早う！」

「で、では……スクルド様がそう言われるのでしたら  
スクルドが俺の耳元で囁く。」

「ケーキ3つでワシの指の隙間が広がるのじゃが……」

「こいつ！ 悪魔か！ いや、邪神だ！

「晩までには用意しよう」

「商談成立なのじゃ」

指の隙間が広がり、光が差し込んで来る。

そう、そこには魅惑の光景、美少女姫様の着替えシーンが――

無かった。

パタパタとスリッパの音を立て、風呂場へかけていくファルフナーズの後姿が見えていた。

「だめじゃん」

「駄目じゃったのう……」

邪神の上に使えない神様だったとは。

所詮、子供の浅知恵だったか。

：

「着替え終わったのですわ」

戻ってきたファルフナーズが恥ずかしそうにはにかんで言う。

お嬢様が挨拶をする時のように長いお姫様ドレスの裾を広げながら上げ、膝上までを見せてくれる。

直前まで着ていた自前のニーソと大きくは変わらないはずなのに……

魔力めいた特別な魅力を感じさせられる。

「……綺麗だ。とても良く似合っている」

「お褒め頂き光栄ですわ」

そんな恥ずかしい言葉がするりと出た。

これが魅力値＋15の力か。

「美しい。食べてしまいたいくらいだ」

「た、食べちゃ駄目ですわ」

「じゃあせめて舐めるだけでも」

「よ、余計駄目ですわー！」

「じゃあ生クリームを添えて、生クリームだけを舐める方向で」

「変態的になりましたわ！」

「じゃ、じゃあせめてせめて、出汁を取るだけでも！」

「マサト様は何をおっしゃっているのか、分からなくなりましたわ……」

はっ!?

俺は一体何を言わせられているんだ!?

「マー君、とびきりの変態じゃのー」

「ち、違う！ 今のは何と言うか、ニーソの魔力でだな」

恐ろしい力だぜ、大胆光沢ニーソ。

でも出汗を取るのはちよつと良いかも。



## # 4 6 「初乗り運賃730円」

「よし、ステータス確認だ」

「お任せくださいですわ」

わずか2日で7レベル上昇。

意外と頑張ってるなあ、俺。

「では、上から順に読み上げますね」

「よろしく頼む」

「マサト・オコノギ 20歳 慎重161cm 体重77kg 童貞……はて、この新しく追加された童貞というのは、どういう意味でございましょう?」

「よ、余計な項目追加しやがって……ッ!」

「ひゃっ! も、申し訳ありません」

「いや、ファルフナーズに言ったんじゃない」

「はい……あの、続けても?」

「ああ、頼む」

「特性【主天使】一気の良いご身分でございますね。よござんした」

「なんで僻ひがみつぽいんだよ。たまには祝え」

「レベル12、ダンジョン荒らし」

「いいね。それらしくなってきたぜ。ちよつと悪者みたいだけど」

「命中心15+40（金属バット、詳細略）：スワッシュバックラー級」

「スワッシュバックラーって何だろう？」

「剣士の事ですわ。ただ……」

「ただ、何？」

「あまり良くない意味でして……日本語に意識すれば、剣を持った暴漢、くらいの意味に」

「酷い。もうちよつと上手い訳を頼む」

「暴れん坊剣客、と言った所でございますしようか」

「その辺で納得しよう。剣使ったこと無いけど」

「打撃点15+40（金属バット、詳細略）：スワッシュバックラー級」

「まあ順調だな。しかしオリンピック級より暴れん坊剣客の方が上なのか。基準が分かるな」

「回避点18+0：ネズミ級。これは新しい項目ですわ」

「今まで回避してなかったっけ……？ ネズミ級って高いのか低いのか」

「防御点22+15（素敵なプロテクター）+7（素敵なマスクとレガース）+5（浮遊靴）：トパーズ級」

「トパーズ？ 宝石の？」

「はい。とても硬い宝石ですわ」

「おほー、流石にステータス評価もおふぎけが少なくなってきたな。満足満足」

「体力点30：英雄的サンドバッグ並み」

「……前言撤回。何だよ、英雄的なサンドバッグって！」

「ひいつ!? 申し訳ありませんっ」

「あ、いや、毎度の事だがファルフナーズに言ったんじゃあ無い」

「さ、左様でございましたか……」

「幸運値：99（ハッピー人生）」

「ああ、ステータスの中でこの項目だけがオアシスのように輝いている」

「まあ！ マサト様、更に新しい項目が追加されておりますわ」

「おおっ？ 何だ何だ？」

「魔力点5、ですわ」

「きつ！ きたああああ！ 遂に俺も魔法使いだ！」

「おめでとうございます、マサト様」

「ありがとう、そしてありがとう！ 魔法剣士デビューだぜ！」

「……」

「……」

「……で？」

「……はい？」

「いや、どんな魔法の呪文が使えるようになったの？」

「そう言えば……どこにも……きやつ」

「どしたどした？」

「魔力点の文字に触れたら、ええと呪文一覧という別のページが飛び出しましたわ」

「ポップアップ・ウィンドウだな。呪文は何個ある？」

「ええと、ひとつですわ。召還呪文と言う項目にあります」

「1つってのは少ないが、召還系！ ははは！ いいぞいいぞ！ どんな召還魔法だ？」

「名前は載ってませんが……要スマホ、と書いてありますわ」

「スマホお？ デジタルなモンスターでも召還するのかな。どれどれ、スマホがある自室に行こう」

「あ、はい」

自室に戻って机の上にあるスマホを握る。

スマホからモンスターが飛び出してくるのかな。

「どうしたんじやマー君。ステータスの確認とやらは終わったのかの？」

「それが魔法を使えるようになったらいいんだが、スマホを使わないと駄目らしくて」

「変な魔法じやのー どれ、使ってみせい」

「言われなくてもお披露目タイムだぜ」

どんなモンスターが召還できるか分からないので、ダンジョンに入る事にした。

スクルドはダンジョンに入ろうとせず、扉から顔を覗かせているだけだ。

先日のスライムの中でお漏らしたのがトラウマなのか。

幸い今回は周辺にモンスターは見当たらない。

居たら居たで、召還魔法の最初の犠牲者になってもらおう。

通路の先に向かってスマホを握り締め、体をくねらせるようなポーズを決めてみる。

ズババアアアン!

「よし、ファルフナーズ。召還方法を教えてくれ!」

「かしこまりました。魔力を手からスマホ? に伝えるようにして次の操作を行う

……」

「魔力……こうか。おお! 何か体の内側から手に向かってグイグイ来るな! さあ、

次はどんな操作だ!」

「はい、ええと……0X0—9014—1094」

「……」

「……」

「電話番号じゃねーか!」

「ひいん! 申し訳ありませんー」

「ま、まあ、ともかくやってみよう。ええと、0X0で……きゅーれーいち……待てよ、

これは」

「な、何でございましょう?」

「くそ、また語呂合わせだ」

「まあ、ではその数字が召還キーワードなのですね?」

「そんな良いモンじゃないけどな……せめて初回くらいは格好つけて召還してみよう」

魔力を込めると、手の平の上でスマホがカードのようにくるくる回る。

おお、勝手に魔法陣が出たぞ！

「速攻召還！ 出でよ！ クレイジータクシー！」

パッパーーーーッ！

クラクシヨンの音と共にギヤーギヤーと激しいエンジン音。

タイヤのスリッパするキュルキュルという音がしたかと思うと――

ガシャーーン！

まるでガラスのようにダンジョンの壁が割れ、そこからあのタクシーが飛び込んで来た！

「おらああ！ 敵はどこだああ！」

キキーツ！

「……」

「……」

「兄ちゃん！ 敵がいねえじゃねえか！」

「やっぱりこれ、敵を轢いてくれる魔法なのか……物騒な」

「普通に乗せてやってもいいぜ。便利だろお？」

「遠慮しておきます」

フアンタジー風にバグった運転手は危険すぎた。

「おう兄ちゃん、通路が狭くてUターンできねえ。バック誘導よろしく！」

「あつ、はい。オーライ、オーライ」

「また、いつでも召還しな。魔力点は2使うぜ」

「タクシー運転手の口から魔力なんて言葉は聞きたくなかったな」

「運転手なんてつれない言い方はもうするんじゃねえ。俺とお前の仲だ。暮井寺くれいじか卓志たくしって呼んでくんな」



「ほぼ変わらないと思います。あと、どんな仲ですか」

おっさんのタクシーはバックしながらガラスの様に割れた謎の空間へ引っ込んで

……

行かずに停車した。

「忘れてた、兄ちゃん」

「はい？」

「初乗り運賃730円だ」

「金も取るのかよ！」

「カード払いもOKだぜ！」

「利用は計画的に。」

## #47 「確かあのヒゲはカイゼル髭って言うんだっけ」

「よし、今日は早朝ダンジョンだ」

「マサト様がやる気に満ち溢れておりますわ」

「いやー……何だかんだ言って2日連続ダンジョン攻略してなかったし」

「私とした事が……少々弛んでおりましたわ」

ファルフナーズは家事修行に夢中だったからな。

良い事だが、それが本職じゃない。

巫女として神事と修行を兼ねて異世界から地球に來ているのだ。

昨日は俺も召還魔法と爆砕ボールの練習で残りの時間を費やしてしまった。

『我也魔法や飛び道具ごとくに負けるわけにもいかないのである』

金属バットさんもやる気か。

「装備も充実、いざ出陣だ」

おー、とファルフナーズと金属バットさんが応じた。

押し入れのフスマの前に立つ。

「いってらっしゃいなのだじゃー　ワシは今日中にこのドラゴンボールを全巻読破してや

るのじゃ」

机の椅子に座り、足をプラプラとさせながらスクルドが見送る。いや、漫画から顔を離してすらいらないから見送るってのも変か。

しかし、いつもながら少々間の抜けた絵面だ。

俺は金属バットを片手に野球用のキャッチャー・マスクと審判用プロテクター。後ろには胸部装甲だけのミニスカ・ドレスにウサ耳ヘアバンドを付けたお姫様、フルフナーズ。

それがフスマを開けて押し入れの中に入れていくのだから。事情を知らない誰かが見ていたら、何事かと思う事だろう。

いざー！

フスマをスラッ！

湿った風がスウツと漂ってくる、青味がかった白い石畳の通路が真っ直ぐに伸びていた。

「マー君！」

「おわっ!?! な、何だスクルド?」

突然、背中から声を掛けられてビックリした。

振り返って更に驚いた。

俺の家に来て以来、見た目通り子供然としていたスクルドが真剣な面持ちをしている。

「マー君。これは——そう『商売』じゃ。ワシの術を買え」

「突然何を——」

はっ気付いた。

あえて商売という言葉を殊更ことさらに強調した所でピンと来た。

スクルドは神としてファルフナーズの世界に招かれている。

だから帰還の旅でもあるこのダンジョン探索を手伝う事が出来ない。

手を貸せば侵略の邪神としての疑いを持たれてしまうから。

だからあえて商売という建前で、違反ギリギリのグレーゾーンの手伝いをしてくれ

る、と言っているのだ。

その目は真剣そのもの。

もはやこれは威厳と言っても良い迫力を感じた。

「是非、お願いします」

自然に頭が下がった。

いくら鈍い俺でも分かる。

何か深刻な事態になるか、あるいは既になったのだ。

「マー君と姫に術をかける。代償はマー君の毛根をそれぞれ10000本、都合20000本じゃ。良いな？」

無言で頷いて了承の意を伝えた。

スクルドが権能を発動し、周囲の風景が変貌する。

無数の糸車や歯車に埋め尽くされた機械的な光景。

俺とファルフナーズに光が降り注ぐ。

代償を払った証に、後頭部に激しい痛みを感じる。

20000本の毛根がまとめて死滅する感覚だ。

光が止み、風景が元の俺の部屋に戻ると、体が不思議と軽くなるのを感じた。

「環境の変化に対する保護の術じゃ。急激な気流や水流、気圧や水圧、重力や慣性の変化から身を守ってくれるじやろう。本来は異次元探索用の術じゃが」

「ありがとうございます」

額の汗を拭って見せたスクルドの表情は、再び子供らしいそれに戻った。

「では、行ってくるが良いのじゃー お土産のひとつもよろしくなのじゃ」

「ああ、楽しみに待っていてくれ」

心の中で礼を言つてダンジョンに飛び込んだ。

…

「あの……マサト様。先ほどのスクルド様ですが」

「ああ」

青白い石畳で出来た一本道の通路を慎重に進みながらファルフナーズに返事をする。

「一体、スクルド様は何を教えてくださいましたのでしうか」

「恐らく、この先に待ち構えてる何かだ。敵か罠か……」

「突然スクルド様の様子が変わったので、私、驚いてしまつて何も言えませんでしたわ」

「スクルドは未来を紡ぐ神、たまに未来が勝手に見えるらしい。そして俺がフスマを開けた途端に様子が一変した。つまりこのダンジョンが開いた瞬間だ」

俺は自分が唾を飲み込む音を聞いた。

かなり緊張している。

「何かを引き当てたんだ。だが、止めなかったと言う事は避けては駄目な何かかなんだらう」

「その助けとなるのがこの保護の術なのですな」

『恐らく、これまでに無い強敵であろう。武者震いを禁じえぬ』

本当に震えてる。

振動機能まで搭載したのか。

慎重に進んだが、特に罨は無かった。

恐らく1km程そのまま直進した所で扉にぶち当たる。

「いきなりボス部屋か」

『やはり強敵との戦いなのである』

扉に耳を当て聞き耳を立ててみるも、特に何も聞こえない。

ファルフナーズと顔を合わせ、頷き合つて扉を開けてもらう。

ギツ、ギギギイ……

鉄で補強された木の扉が開いていく。

その扉の向こうには——ただの広い部屋の奥に、ぽつんと1つ道具が置かれていた。

黄金色した金属の……これは、何だったか。

カレーが入ってるじょうろみたいな形のあれに蓋がついてるヤツ。

「ランプですわ」

「それ、ランプだランプ」

あの口先に火を灯ともすタイプのランプだ。

だが、このランプの口先は煙こそ出ているが、火が灯っていない。

「確かあそこからランプの精が出てくるんだよな。アラジンと魔法のランプだ」

「そうなのですか？ トリピュロンの言い伝えでは邪悪な風の王が封印されて——」

ドムンツ！

突然、爆発音と共に大量の煙がランプを覆い隠した。

「ハアーツハツハツハツ！」

ランプの先から出ている煙が巨人の男の形になった！

青い肌に身長は3mを越えるような巨大な筋肉男。

しかし下半身は煙の状態だ。

頭髮は天辺だけを残して剃っており、とても長く伸ばして結んである。

大男は八の字のヒゲを指で引っ張るように撫でながら俺の事を見てニヤニヤ笑った。

確かあのヒゲはカイゼル髭って言うんだっけか。

「ワタシは追放された風の王、シャイターン・ジン！」

「あれ？ ランプの精はアラジンじゃなかったのか」

アラジンは人間のほうだっけ？

「マサト様！ これは風の旧精霊王ですわ！ 悪業酷く、アストラルへと追放されたと

言われている邪悪な存在ですわ」

「ムムーン!? チビ人間の他に何か居るな？ このワタシの目を欺あざむくとはネー」



チビ人間って俺の事か。

ファルフナーズはモンスターには見えないのに、居る事にだけは気付かれた。

確かに並みのモンスターじゃあ無いようだぞ。

「旧精霊王のレベルは100以上です！ 今のマサト様に勝てる相手ではございませんわ！」

「だからこそそのスクルドの加護だ。これで納得したぜ。【魔法の盾】を頼む！」

「かしこまりました！」

ファルフナーズが【魔法の盾】をかけてくれる。

スクルドの加護と干渉してるのか、青白く輝く薄い膜が俺を包んでいくのが見えた。

「ホツホツホーウ！ チビ人間が！ このワタシに戦いを挑むと!? ホントに？ これ  
はケツサクだ！」

シャイターン・ジンと名乗った旧精霊王は文字通り腹を抱えて笑い出した。

いちいち芝居がかったオーバーアクションをしゃがる。

「風の精霊対策は施してきたようデスガー！ 呼吸が震えてますヨー？ ビビリのチビ人間く〜ん？」

「う、うるせえ！ 御託並べてないで、さっさとかかってきやがれ！ 燃える金属バット  
さん！」

『主、挑発に心を乱してはならぬ。奴のペースに乗っては負けである』  
ぐう、その通りだ。

しかしイラつとくるしゃべり方をしやがる。

煽り耐性が低いのは元ヒキニートの弱点だぜ。

「ビビって来ないなら、ワタシから行きますヨー？」

風の精霊王が突撃の溜めポーズを取ると、下半身の煙が渦を巻いた。  
一瞬にして体が煙で出来た竜巻に包まれる。

まずい、初撃だけはかわさねば！

ニヤニヤ笑いながら風の精霊王が左右に揺れ始める。

タイミングをずらして回避しづらくする魂胆か。

「さあワタシの竜巻でミンチになりなサーイ！」

ゴウツ！

今だ！

横っ飛びダイビング！

間一髪で風の精霊王が身に纏まどつた竜巻攻撃を回避した！

「オーウ！ 見事なすばしっこさですネー！ 実に素晴らしーイ！」

よし、避けられない攻撃ではない。

このくらいならば避けつつ反撃していける。

スクルドの加護と回避点に感謝だ。

これなら十分、奴と渡り合える！

「てめーの攻撃は見切ったぜ。さあ今度はこっちの反撃だ！」

「オー！ 怖い怖い。怖いのでさっさと逃げマース！ 再見、再見！」

えっ!?

風の精霊王は右手を前、左手を後ろに丁寧なお辞儀をした。

かと思うと、そのまま高笑いと共に部屋を出て行ってしまった。

「に、逃げられた……勝ったのか!？」

ファルフナーズも呆気にとられている。

「風の旧精霊王は狡猾だと言ひ伝えられてますが……何だったのございましょう?！」

『違う、違うのである、我が主よ!』

「どうした金属バットさん!？」

『奴は最初からこれを狙っておったのだ！ 奴の狙いは戦いと逃走に見せかけた、ダン

ジョンからの脱出なのである!』

——ッ!!

「そ、そうですね！ 風の旧精霊王はこのアストラル空間に封印された存在でしたわ」「くそっ！ まんまと一杯食わされた！ 最初から奴の術中だったのか！」

「まずい、風の精霊王は地上へ、地球へ出ていってしまった！」

「急いで戻るぞ！ 家が滅茶苦茶にされる！」

『それだけで済めば良いが……』

「……!?!」

部屋を出る前に一応ファルファナーズに出口側の扉を開けてもらおうとしたが、やはり駄目だった。

出口が開いて次の階層へ行ければ、奴が消えてくれるかも、と甘い期待をしたのだが。走って通路を逆戻りする。

こうしてみると、この長い通路もトラップのひとつだったのかもしれない。

誰がそう設定したのかは知らないが……ただ長いだけの通路が罠そのものになるとは。

「マ、マサト様、お待ちくださいませー！」

しかもファルファナーズは致命的に足が遅い。

文字通り突風のような風の精霊王に時間を与えてしまう。

「ファルフナーズはゆっくり来い！ 俺は奴を食い止める！」

「い、嫌あー！ 置いてかないでくださいまし！」

そうだった……！ ファルフナーズはダンジョンに取り残されるのがトラウマだった。

だが時は一刻を争う！

ここは無情なようだが――

「分かった。無理しないで良いから」

置いていけるわけが無い。

無敵状態が約束されているとは言え、ファルフナーズはただの一人の女の子だ。

落ち着け。

大きく深呼吸して体と頭のテンションを整える。

焦ったら駄目だ。

家を取り返しが付かないかも知れないが……モンスターを外に逃がしたとあつては、一般の人に怪我人死人が出る話だ。

むしろ、オコノギ家を破壊する事に夢中になってくれる方がありがたい。

『流石、我が主は優しいのである』

「そんなんじゃない。頭に血が昇っていたのをクールダウンしたかっただけだ」

通路を逆戻りしながら考える。

家の破壊に夢中になってくれたら御の字。

出口や奴に有利な場所で待ち伏せされていたら……不利な状況とは言え、これも俺にとつてはラッキーだ。

外に飛び出して街を暴れまわっていたら厄介だ……あのタクシーのおっさんと呼んで追跡しよう。

よし、考えはまとまった。

まずは出口手前か出た途端に襲われる事を警戒してダンジョンを出よう。

ダンジョンの入り口、すなわち押し入れフスマの前には居なかった。

ただし、フスマが閉ざされていた。

「なるほど。怖くて試す気にはなれなかったが、ダンジョンの入り口になった扉を閉ざす事が出来るのも、また俺だけって事が証明されたな」

『怪我の功名である』

それは無事に終わって初めて言っただけの言葉だ。

フスマの外からは破壊音や風の音はしない。

スラッ！

「家は無事……とは言えないか。壁に大穴開けて出て行ったようだな」

「ひとまずおかえりなのじゃ、マー君。やはりこうなったの」

「スクルド、奴と会ったのか」

「会った。家を壊そうとしたから止めさせたのじゃ」

「そんな俺達を手伝うような真似して大丈夫なのか？」

「ここは今やワシの『神殿』、『神社』じゃからの。派手にやるならこちらも容赦せぬ、と

言っただけじゃ」

それで壁だけで済んだのか。

有難い。

「しかし奴はどこへ向かったんだらう。庭から上空へ飛び立ったのか、破壊の跡を追うのも無理みたいだ」

突然、ボロンボロンと不協和音がテレビから鳴った。

皆の視線がテレビへと集まる。

スクルドがテレビを見ていたのか。

「この不協和音は、確か災害の緊急ニュースだ」

昼前のバラエティ番組が突然ニュースキャスターが座った机に切り替わる。

「ここで緊急ニュースのお知らせです。突如、フィリピン海沖に発生した大型低気圧が急速に発達しながら北上しています」

「これは、まさか……」

「はい。風の旧精霊王の仕業に違いありませんわ」

「史上類を見ない速度で北上を続け、九州南部を通過するコースを取るとみられています。中心部の気圧は860ミリヘクトパスカルを下回ると予想され、最大風速は120mに——これは直撃すれば地上の全ての施設が倒壊する規模です！」

「マジかよ……歴史上最大の台風って事か」

「人間が空に吹き飛ばされる速さじゃない。時速にして400kmを越えるかのう」

「このままじゃあ日本が！」

「根こそぎ持ってかれるのう」

親方！ 空から日本が！

奴を、風の精霊王を倒さなければ。

台風が大災害を巻き起こす前に！



「奴はやはり台風の中心部にいるのか!？」

「じゃろうなー 移動するだけなら、風の精霊は音速の何倍もの速さで動けるからの。合流も時間の問題じゃて」

テレビがやかましく緊急避難警報を鳴らし続けている。

外から街が一際ざわめき、車のクラクションやら様々な音を立て始めた。

混乱は早くも深刻になってきている。

すぐにでも台風と化した風の精霊王を倒さなければ！

## #48 「魔法時代の幕開けだ！」

「よし、風の精霊王を追おう！」

「かしくまりましたわ！……ですが、どうやって？」

ぐう。確かに。

敵はフィリピン沖パラオ諸島付近、俺は関東。

その距離、実に3000km。

風の精霊王は音速の数倍で移動できる。

もう1時間もあれば自身の力で作り出した台風と合流し、日本を狙い撃ちし始めるだろう。

どうすれば良い……

俺達はそんな遠くに移動する手段が無い。

考えをまとめなければ。

テレビのニュースは尚なおも気象情報が続いている。

「超大型低気圧『バビンカ』は急速に勢力を増し九州沿岸へと到達する見込みです。どうか落ち着いて避難と対策を——」

「バビンカ？ この台風の名前を付ける風潮は何なの？」

『バビンカとはマカオの言葉でプリンを意味しているのである』

「途端に可愛らしく見えて参りましたわ」

お姫様は案外マイペースだな！

だがプリンごときに日本の地表を根こそぎ剥がされたら死んでも死にきれまい。

「と言うか、金属バットさんは何で俺の知らない事を知ってるんだ」

『我は主の影、主が知らぬものは我も知らぬ。主はこの情報を知らないのでは無い、忘れていただけなのである』

左様でござえますか。

でもくだらない会話で心が落ち着いてきた。

「スクルド、このかけてもらった加護は俺とファルフナーズを乗せた乗り物にも影響する？」

「イエスじゃ。マー君達が乗っている間は強風からも守られるじやろう」

「有難い！ それを聞ければ十分。ならば飛行機を借りて現地へ向かうしかない」

『飛行機など易々と貸してくれるものであろうか。しかもこの状況下である』

「まー無理だろ。そもそも借りられても操縦も出来ないしな。超強引に、パイロットごと無理矢理借りるしかない」

『ただのハイジャックである』  
言わないで。

ほつときや飛行機だって雨風にさらわれてオシヤカになつちやうんだ。

この際、細かい事は気にしない気にしない。

「まあそれしか無かろうて。なに、事が終われば全て無かった事になる。マー君の言う『バグった』人達も普段はいつも通りの社会生活を続けておるからの」  
「それを聞いて安心した。じゃあ遠慮なくハイジャックさせてもらおう」

臨時のテロリストだ。

だが大事の前の小事。

大いなる善を成すためには小さな悪を何とかかんとか。  
全ては台風と化した風の精霊王を倒してからだ！

パパーッ！

車のクラクシヨンの音が響いた。

驚いて外を見ると、例のタクシーのおっさん——暮井寺 卓志氏——が手を振っている。

風の精霊王が飛び出したときに俺の部屋の壁と外壁まで破壊して飛び出したため、現在俺の部屋は野ざらした。

「兄ちゃん、乗りな！俺の力が必要だろお？」

「呼ぼうとは思ってたけど、呼ぶ前に来てりや世話ないな」

「一刻を争う事態だぜ！いいから早く乗りな！」

……なぜ知ってるんだらう？

いや、これも気にしてる場合じゃ無いな。

「ファルフナーズ、ここに残ってもいいぞ？」

お姫様は1度乗って以来、このおっさんの運転がトラウマだ。

むしろ車自体に乗るのが苦手になってしまった。

「いえ！私も行きますわ！大元はと言えば、私がこちらの世界に来たのが原因なのですから」

「そこまで気負わなくてもいいんだけどな。戦うのは俺だし」

俺達はタクシーに乗り込む。

正直、事態の大きさに体が震える。

だが、むしろ放っておけば日本が滅びる。

この馬鹿馬鹿しいまでのレベルになってくれたのが嬉しいてる。

やらなきゃ全てが海の底だからな！

元ヒキニートだって垣根を飛び越えて動くしかない。

：

タクシーが猛スピードで国道を突っ走る。

右へ左へ激しくスラロームして、他の車を避けながら。

ファルフナーズは辛うじて悲鳴をこらえているが顔が真っ青だ。

少しでも気を紛らわすためにラジオをつけて大音量で流しているが、どこもこの災害情報しか流していない。

「……あれ、こっちは飛行場じゃないんじゃないの？」

「兄ちゃん何言ってるんだ。入間いるまはこっちだろお」

「入間!? 桶川おけがわの飛行場の方が近いんだけど」

「桶川あ? あそこは民間の飛行場だろ! セスナなんか借りたって間に合わないぜ!」

「ま、待ってくれ! じゃあどこで何を借りろと……」

「決まってるだろ? 軍用の飛行機を奪うしかないだろお」

おいおい

マジかよ……

「い、いやそれは……流石に無理って言うか、撃ち殺されるって言うか」

「撃ち殺されるか、大波にさらわれるか、台風でロシアまで飛ばされるか、兄ちゃんの好きにしているぜ」

「マー君、覚悟を決めるしかないのじゃ。ワシの神殿たるオコノギ家の危機でもあるし、直接は手伝えぬが後始末は手伝えるぞえ」

神様の後押しまでもらってしまったら、もうやるしかない。

くそ!

戦後初の自衛隊の戦闘は、この俺。

元ヒキニート・テロリスト相手に決まったぞ!

銃撃に対して、「魔法の盾」と防具類はどこまで役に立ってくれるかな……

「銃弾一発で金属バットさん何発分のダメージになるやら……」

「なんだ兄ちゃん。台風を銃撃で倒そうってのか？」

「いやいや、飛行機を奪うまでに自衛隊員とどのくらい戦うかって話で」

「何を寝惚ねぼけてんだ！ 自衛隊は味方に決まってるんだろお？」

「駄目だこのおっさん。これだからバグった人達は——」

「駄目なのはマー君じゃなー タクシーのおっさんはバグっても、自衛隊とやらがバグらないと思っ込んでるのじゃから」

!!

そうか！

俺と会話すれば、自衛隊の人もバグってくれる可能性が高いのか！

「それを聞いて一気に肩の荷が下りたぜ！ どうやればバグってくれるのかは知らないけど、全力で自衛隊員もバグってもらおう」

バグってファンタジー風の世界観に染まってくれれば、もう味方も同然だ。

適当に誤魔化して飛行機に忍び込ませてもらう。



あとはパイロットさえバグらせてしまえば、こつちのもんだ。

「その必要も無さそうだが、兄ちゃん」

タクシーのおっさんがラジオの音量を更にした。

緊急災害ニュースに更に緊急ニュースが挟み込まれる。

「続報です。台風を中心部付近から発せられたと思われる正体不明の電波ですが、解析した所、何者かの犯行声明である事が判明致しました」

「曰く『この台風はワタシ、風の精霊王の氣象兵器である。マサトとか言う後頭部の禿げたキノコ頭の元ヒキニートとの決着を望む。応じぬ場合は6時間で暴風圏内に——』」

「誰も禿げとらんわ！ まだまだフツサフサやぞー！」

「マー君、落ち着くのじゃー！」

あの青肌マツチヨめ！

精霊王だか何だか知らないが、好き放題言ってくるじゃないか！

「これに対し、内閣府はマサトなる名前で引き籠もりのニートである人物の特定を急い

でおります。この人物が災害回避の鍵となる可能性があり、政府はこの人物の捜索に協力を呼びかけています。お心当たりのある方は——」

「し、指名手配された……!? って言うかヒキニートとか余計な情報いらなくね?」

「賞金もらえるんかのー?」

「まずい……詰んだかも知れない。おっさん、なるべく目立たないように——」

「任せろい! 派手に宣伝してやるぜ!」

やめて!

俺の静止も聞かず、おっさんは無線のマイクに向かって怒鳴り始めた。

「おう、俺だ! 暮井寺だ! 今ウワサのキノコ頭のマサトを運んでる。——そう

だ、入間基地に向かっている。話を通しておいてくれ。ああ、コイツなら台風を吹き飛ばせる!」

勘弁して!

話を大きくしないでくれ!

「ちよ、ちよつと急用を思い出したので、俺はここで降りてもいい?」

ああ……何かパトカーが見えてきた。

なぜか止まれとも言ってこない。

タクシーの前後がパトカーに挟まれた。

こつちを見て敬礼とかしてる……

一体、何がどうなっちゃったの!?

このタクシーの進路上の信号が全部青のまま変わらないのは、どんな意味があるのか

……知りたくない。

…

「着いたぜ、兄ちゃん。俺はいつでも呼べば来てやる。忘れるなよ」

航空自衛隊のゲート前にタクシーが止まる。

着いてしまった……

できればコツソリと事を成すのがニート流なのに。

後ろじゃパトカーから降りたポリスマンが自衛隊の門番と敬礼を交し合っている。

「お待ちしておりました。マサトさんですね?」

「え、あ、あの……」

『然り。オコノギ・マサトとその一行である。火急の事態にて航空機を拝借しに参った』

俺は普通の人前ではまともにしゃべれない。

ファンタジー風にバグった相手なら何とでもなるが……

しかし、金属バットさんがしゃべっても自衛隊員の人は驚きもしていない。

やはり彼らもバグり始めてくれたのだろうか。

ゲートの脇にある警務小屋に通された。

ファルフナーズは青い顔をしたまま、フラフラと着いてくる。

考えてみれば、ファルフナーズのお姫様ドレスを見ても平然としているのが、既にバグり始めている証拠なんだろう。

「回線は全て繋がっております。どうぞ」

自衛隊員の人にマイクを手渡された。

これで何をしゃべれと言うんだ。

そもそも何に繋がっているんだ。

仕方なくマイクに向かってしゃべりかける。

「あ、あの。マサトです……ちよつと、その、台風を止めるのに飛行機を、その、借りたくて……ですね」

『我が主よ、それでは駄目なのである』

駄目なのは分かっているんだよ！

でもつい最近まで元ヒキニートだった俺がまともにしゃべれる訳が無いだろうが！

振り返ると、警務小屋の中にいる自衛隊員の人たちが、この世の終わりみたいな顔で口を開けていた。

「そ、そんな顔されても……待てよ？ そんな顔？」

そうだ、これはスポーツ用品店のおっさんの表情と同じだ！

ファンタジーなノリに噛み合わないテンションだと、なぜかガツカリしてしまうんだ。

『ようやく気付いたのである。ここは彼らを鼓舞こぶする事が何よりなのである』

「そ、そう言う事か。よし、ならば任せておけ！」

自衛隊員の人がかんだ。

「テイク・ツー、お願いします！」

何!?! テイク・ツーって？

映画の撮影かよ！

だが、そのバカバカしさに返って肩の力が抜けた。

よし、いける。

「あ、ああ。マイクテスト。本日、天気晴朗なれど波高し」

「惜しい！ マサトさん、それは海の奴ら向けです！ 空！ 空の方でお願いします！」

何？ 海とか空と違って。

そーゆー縄張り意識、やめよう？

「えー、じゃあ、も一回な。——おはよう、そしておはよう」

咳払いをひとつ。

「え？ 何？ パクリも無し？ 面倒だなあ。」

あー……諸君、この日本は現在、未曾有みぞうの危機に直面している。

精霊台風プリンだ。え？ 違う？ ああ、バビンカだバビンカ。

そう、俺は今精霊と言った。我々日本は未知の敵、邪よこしまな精霊の攻撃を受けているのだ。

敵は精霊、精霊王だ！

奴はお伽噺とぎばなしの世界から飛び出し、その魔力でこの日本を破壊せんと息巻いている。

だが、そうはならない。

なぜなら、この日本には君達、自衛隊員がいるからだ！

敵の魔力は強大だ。だが我々には異世界から来た姫巫女と神様の加護がある。

ついでに飛び切りの魔法美少女だ。

しかし姫様が矢面に立つには、護衛の騎士が必要だ！

だから君達、天空の騎士の力を貸してくれ！

君達の技術、鍛錬、そして国を守る志さえあれば邪悪な精霊などに負けはしない。

未知の敵だろうと未曾有の大災害だろうと打ち破れる。

空の平和は俺達が守る！ 共に飛んでくれ、諸君！

なあと、上手く行ったら飯のひとつもオゴってやるさ。

準備は出来たか？ じゃあ行こうか。

今日が我ら日本国の、魔法時代の幕開けだ！ 魔法立国日本！」

ふー……何か訳が分からなくなったな。

マイクのスイッチを切りながら大きくため息をついた。

「あ、こんなもんでどうツスか？」

近くにある建物から隊員達の歓声が響いた。

「S・D・F! S・D・F!!」

喜んでもらえたようで何よりです。

マイクを渡してくれた隊員が俺の手を取った。

「感動しました! さあマサトさん、こちらです!」

あれで良いのか……良いのか?

手を引かれながら俺とファルフナーズは滑走路のほうへ誘導される。

航空機エンジンのキンキン、ゴウゴウとした爆音で周囲の音は何も聞こえなくなる。

俺とファルフナーズの周囲だけはスクルドの加護で守られているので不思議と会話は届くのだが。

普通だったら近づいただけで耳を破壊されるレベルだろうな、これ。

「ハ、これは……」

「F-15DJ改 イーグルです」



「戦闘機じゃないか！」

「当然でしょう。戦いに行くんですから。貴方が望んだ事です」

「いや、それは物の勢いで……現地まで輸送してくれば十分なただけ。偵察機とか輸送機とか」

「問題ありません。それに最高速度でも断然コイツですよ。増槽兵装なので戦闘力と最高速度は落ちますが」

駄目だ。会話が噛み合わねー！

「そもそも俺とファルフナーズを乗せられないのでは？」

「すし詰めになりますが後部座席にご一緒をお願いします」

「現地で降ろして欲しいんだけど」

「緊急用脱出装備があります。念の為パラシュートの使い方方のレクチャーを」

「い、いや。その、魔法で浮かぶ事が出来るんで、パラシュートは要らないんだけど」

「それは良かった。では早速乗り込んでください」

こいつ……魔法で浮かぶという言葉をさらりと受け入れやがった。

まともに見えてもスポーツ用品店のおっさんと同じくらいバグっているんだな。

背中を押されて渋々タラップを昇り、後部座席に収まる。

「きゃあつ！ 押さないでくださいませっ」

女性隊員に半ば放り投げられるようにして、ファルフナーズが俺の上に乗っかってきた。

「マ、マサト様、狭いですわ」

「一人用の座席だ。しかも客席じゃなくて操縦席だぞ。仕方無いだろ」

何とか2人が収まる形を探って、ファルフナーズが俺の上でモゾモゾとしている。

ああ、何か風防キャノピーが閉じていく。

もう後戻りは出来ない……

あー、お家帰りしたい。

「マサト様っ、変なところを触らないでくださいませ！」

「変なところってどこ？」

ピンクの長い髪からふんわりと甘い香りが漂う。

あー抱きしめたい。

というか膝の上にいるんだが。

「マサト様！ 私のお尻に何か硬いものが当たっておりますわ！」

「仕方無いだろお！ 生理現象だ！」

スクルドは外で手を振って見送ってくれている。

流石にここに3人乗り込むのは無理だ。

というか2人でも明らかに無理なんだが。

「兄ちゃん、そのままでは本当に大丈夫なんだな?」

パイロットのおつさん……と言うにはちよつと若すぎる隊員が聞いてくる。

俺とファルファーズがマスクもつけず、スーツも着てないからだ。

「はい、大丈夫です。お願いします」

非常識も極まる状況だが、落ち着いてる。

……股間以外は。

思えばスクルドがかけてくれた加護の術はこのためにあつたんだ。

気圧や重力の変化に対しても平気になる術。

精霊王の風攻撃のためでは無かった。

これが規定路線なのか、と思うと気がスツと楽になる。

「二条にしよう 義輝よしてる 一等空尉だ。しつかり体を固定しておけよ?」

「あ、えと、オコノギ・マサトです。よろしくお願いします」

二条さんが勢い良く振り返ったかと思うと、この世の終わりみたいな顔をした。

マジかよ……また変な事言わなきや駄目かよ。

「あー……俺の事はマサトと呼んでくれ、相棒。お姫様シンデレラがパーティーに遅れそう。魔法が解けちまう前に頼むぜ、相棒」

「そいつはゴキゲンだ！ 派手に飛ばしてくぜ。台風なんかパーティーの主役は譲れないからな！」

喜んでもらえて何よりです。

機体がカーブして滑走路に乗る。

航空機誘導員達が合図を送ると、エンジンがこれまでに無い大音量になる。

離陸許可の最後の通信を受け取り、二条空尉が復唱した。

「ブラボー・2 テイクオフ！」

急激な加速と共に、シートに押しえつけられるような感覚に襲われる。

スクルドの加護があってもこれかよ！

普通に乗ってたら離陸前に嘔吐して気絶だぜ。

「マサト様！ マサト様ツ！ 傾いてますわ！ 落ちる落ちちやいます！」

「やめっ！ ファルフナーズ、しがみつくな！」

おっばいが！ おっばいが重力で俺の顔に！

落ちてるんじゃないやなくて昇ってるんだよ！

ファルフナーズのおっばいの心地良さに、俺も昇天しそうです。

窒息寸前ファイナル・テイクオフ

## #49 「甘きカラメルの芳香に凜ぎなさい！」

「よし、雲の上に出たぞ、マサト、いや相棒」

「あつ、はい」

本当に呼び捨てにしてきたぞ、このパイロット。

俺の顔には真つ赤な手形がついてる。

もちろんファルフナーズのお手手だ。

この狭い戦闘機内で器用に引っ叩いてくれたもんだ。

そして今、反対側の頬をつねられている。

「ファルフナーズ、そろそろ勘弁してくれ。流星にちよつと痛くなつてきたよ」

「痛くしてるのですわ。マサト様のえっち、えっち！」

2回言った……

むしろお姫様の方から抱き付いて来たんですが。

「ほら見ろ、ファルフナーズ。空が青いぞー、雲の上だぞー」

「まあ……とても素敵ですわ。これほど深みのある青さも素敵なものですね」

よし、誤魔化せた。

確かに、青いというより暗くなってきてる感じすらあるな。

逆に眼下は白い雲一色だ。

その更に下はもはや暴風と雷雨なのだ。

：

「魔法の加護つて奴か。空気抵抗が思った以上に少なくてコントロール・ロスする所だった。間もなく暴風圏内に突入するぞ」

パイロットの二条空尉が教えてくれる。

2時間近く、スクルドの加護の術のおかげで狭苦しいけど快適な空の旅だった。

「台風の中を突つ切る事はできますか……じゃない、できるのか、相棒?」

「普通の台風ならな。だがこれは桁違いの勢力だ。機体がバラバラになっちまう」

「困った。台風の中を延々空中歩行しなければ、か……」

「安心しろ、わざわざバカ正直に台風に突つ込む事は無い」

「と、言うത്?」

「簡単な話さ。俺達は今、雲の上を飛んでるんだぜ。上から台風の目に突つ込む」

「そんな針の穴を縫うような事が出来るのか!」

「あのな、台風の目は普通、直径何十Kmとあるんだ。亜音速で飛んでも楽勝だ。ただし、流石に目の中心が確認できるような高度までは飛べ無い。手探りの状態で目に突入した瞬間、一気に急降下する」

「分かった。そこで俺とファルフナーズは脱出する。世話になりつつ放しで悪いが、無事に帰ってくれ」

「そうもいかねえ」

「!？」

「理由は3つ。急降下してから上昇するまでに暴風域に突入する可能性が高く危険だ。そして、急降下中に1度開いた風防は恐らく戻せ無い。最後に、何より帰りの分の燃料が無い」

「じゃあこの機体は……」

「今日でお役御免ってわけだ。俺も一緒に脱出してな」

戦闘機って初期費用だけでも1機あたり10億円とかするよな……

諸々の費用を考えると気が遠くなる。



「高度1万5千mからのダイブだ、やり直しは効かない1発勝負。腹あくくれよ?」  
「お、おう!」

緩やかだった雲の海が盛り上がり、山のようになりはじめる。

これが台風の上側か。

「ファルフナーズも、いつでも飛び出せるように心構えをしておいてくれよ?」

「か、かしこまりましたわ。私は空に浮けませんので、しっかりと抱きしめてくださいね?」

「もちろんだ」

この柔らかか天国を手放すなんてとんでもない。

機体が雲の海へ突入した。

「さあブラボー・2の最後の晴れ舞台だ! ドーンと行くぜ!」

「頼んだ! にじよ……じやない、相棒も無事でな!」

「当然だ! お前に飯をおごらせるまでは頼まれたって死んでやるものか」

「最近料理を覚え始めた、お姫様の手作りプリンもつけてやるさ」

「私ので良ければ、お約束しますわ」

「そいつあ光栄だ! 末代までの家宝にするぜ!」

いや、食えよ。

初めてもらうバレンタイン・チョコかよ。

俺もらった事無いけど。

機体が突然ガクンと揺れた。

「(こ)だ！　いくぞー！」

「おお、おう！　うわあああー！」

「ひゃあああー！」

怖い！　流石に怖い！

自由落下以上の速度で落ちる！

「見えた！　あれが敵か！」

「そうだ！　風の精霊王だ！　ひいひい！」

下には白い雲の海に浮かぶ青肌マツチヨが見えた。

「奴はすぐ目の前だ！　脱出するッ！」

緊急脱出装置が作動し、風防が開くと同時に俺とファルフナーズも放り出された。

バンツ!

しまった!

ファルフナーズを手放してしまった!

「ファルフナーズッ!」

「マ、マサト様あー!」

互いに手を伸ばして何とか近づこうとする。

スクルドの加護の術のおかげで俺達の落下速度はかなり遅いみたいだが、下降する気流と相まって相対的にどうなのかはハッキリとは分からない。

眼下で戦闘機が真っ直ぐ青肌のマッチョ、風の精霊王に向かっていく。

なんてこった!

奴はすぐ近くに居たんじゃない。

とてつもなく巨大化していた!

戦闘機が吸い込まれるように風の精霊王に向かったが、奴は手の平で握りつぶすようにして防いだ。

衝突と共に爆風が派手に巻き起こった。

だがその爆煙ですら風の精霊王の姿を隠すほどでは無かった。

くそ！ どうすりゃいい!?

ともかくファルフナーズの手を何とか掴む。

空中遊泳とはラピユタみたいだ。

「大丈夫か！ ファルフナーズ！」

「ぐすつ、何とか……ひっく」

空中に放り出された恐怖の余り、泣き出してしまったようだ。

いや俺もめっちゃ怖いけど！

ファルフナーズを抱きとめると、浮遊靴に精神を集中してコントロールする。

こいつは空中を歩けるだけでなく、落下速度をほぼ0にしてくれる優れものだ。

俺達は一面の雲の海に降り立った。

驚いた事に浮遊靴の能力を使わずとも、まるで地面みたいにしつかりと足がつく。

台風の目の中だつてのに、雲の海があるとは。

ちよつとふわふわして踏ん張りが利かないが。

固形化した雲とは、ジャックと豆の木みたいだな。

遙か頭上から風の精霊王のムカつく声が響き渡る。

「んふふう、ようこそヒキニート君、ワタシの台風へ。不意打ちとはやってくれますネエ

」

「ちよ、ちよつと見ない間にずいぶん太ったじゃないか……」

巨大化した風の精霊王は身長がどのくらいあるだろう。

100mか200mか。

煙状になっている下半身ですら50m以上はありそうだ。

それはこの雲の床と一体化しているように見える。

「おかげさまでネエ。この世界の風を次々と取り込み中でして、すくすく成長中ですヨ

」

「マサト様、風の旧精霊王はこの世界に風の精霊が居ないのを良い事に、台風で力を集めているのですわ」

ファルフナーズも雲の上に立ち、俺に語りかけてきた。  
ずっと抱きとめてあげたのに。

……それじゃ戦えないか。

「何だか良く分からないが、台風が武器でもあり飯でもあるって事か」

「概ねおおむね、その通りですわ」

「戦闘機の体当たりを食らっても、びくともしないようじゃあ俺に出来る事が……」

「私にお任せくださいませ！」

「【炎の矢】はダメだぞ？ 俺自身が巻き込まれて死に戻りしてしまおう」

「それでも私は姫巫女を目指す身、天候を変える事ができますわ！ 風の旧精霊王が台風を利用して力を得ているのであれば……」

なるほど！

だからここまで必死に俺に同行してきたのか。

姫巫女としての力が役に立つ可能性を信じて。

「分かった。ファルフナーズ、頼む」

「かしこまりましたわ!」

ファルフナーズは腰元の見えないアイテム・バッグから取っ手のついたベルを取り出した。

ハンド・ベルって奴だ。

チリーン

「伏して乞う! 姫巫女がファルフナーズ、四神の風に願い奉ります!」

一振りしたハンド・ベルから高く澄んだ音色が響く。

ハンド・ベルはファルフナーズの手を離れ、ゆっくり時計回りに彼女の周りを浮きながら回転し始める。

さらに3つのハンド・ベルを取り出し、同様に呪文を唱えながら振っていく。

あたりに4つのハンド・ベルそれぞれの音色が混ざり合う。

これが姫巫女の術か……確か巫女の呪文を祝詞のりと言うんだっけ。

青肌マッチョこと、風の精霊王はしびれを切らしたように言う。

「怖気づきましたか？ 鈴を鳴らした所で——こ、これはッ!?」

「姫巫女が重ねて願い奉ります！ 四神の風よ！ 穏やかなる時を平和の内に過ごさん事を！」

ファルフナーズが片膝をつき、両手を組み祈りの姿勢を取ると、光の粒のようなものが降り注ぎ始め周囲が静寂に包まれた。

「風が……止んだ、のか？」

俺の眩きをかき消すように風の精霊王の怒号と絶叫が響き渡る。

「キイイエエーッ！ 禿げニート！ きつ、貴様何をしたッ!? 風が……力が抜けていくッ！」

風の精霊王が頭をかきむしりながら身もだえすると、奴の巨体が見えるみる萎んでいった。

「その鈴の音ですネッ!? ダンジョンの時にも居た、ワタシに見えない何者かの仕業ですネッ!? ぐうう、憎らしいッ！」

「今だッ！ 伸びろ、そして燃えろ金属バットさん！」

『応ッ！ ようやく出番なのである！』



最小化していた金属バットさんを最大にまで伸ばし、ファイヤ・ブランドの能力も発動させる。

そして今や最初に見たときと同じ位にまで縮んだ風の精霊王に飛び掛った!

最大化した金属バットさんは5mを超える長さになる。

それを大上段から――

全力で振り下ろす!

「食らえッ!」

ゴウッ!

やった!

俺の一撃が風の精霊王を真つ二つに切り裂いた!

「ギャアアアアー! ……とでも言うと思いましたがカー! お間抜けサ〜ン!」

「なん……だど!?! 効いてないッ!?! それとも不死身なのか!?!」

「魔法武器のせいで少し痛かったですね〜 風の精霊を倒したかったら真空を作るく

らいじゃないとダメダメ！」

効いてないのか！

『我が主よ、暖簾のれんに腕押しのようなものである』

「くそう！ どうすれば良い!？」

「こちらの反撃デクス！ 食らいなサイ、禿げニート！」

風の精霊王が右拳をグルグルと振り回しパンチを繰り出してきた！

金属バットさんで受ける！

ガキツ！

「こつちの攻撃は効かないのに、向こうのパンチは当たるのかよ！ ずっちい！」

『恐らく、空気の密度差であろう。攻撃の瞬間にだけ、しかも拳にだけ空気を固めて逃さない固形物と化している』

じゃあカウンター狙いしか無いって事か!?

確かに風の精霊王はちよつと涙目で自分の拳をフーフーと吹いている。

一々漫画カートゥーンめいた大仰な動作がイラつく。

「このままではお互いに致命傷を与えられない千日手デスネ〜! こうなつたら、もう一度。パワーアップデス〜! 風よ集まりなサ〜イ!」

「させるかッ!」

風の精霊王は右腕を天に突き上げる。

俺は奴の頭やその右腕に向かって金属バットさんで攻撃を仕掛けるが、やはり一瞬だけ切り裂いて元に戻ってしまう。

「全くダメージを与えられないぞ!」

『炎の属性と魔力が込められている分、ダメージは与えている感触があるのである。ただ、奴の力の増幅速度の方が勝っている』

1のダメージを与える間に、2の耐久点を増やしてる感じか!

おまけに残つた左腕で牽制してくるから、こちらも攻撃ばかりしてられない。

後ろからファルフナーズの呻き声が聞こえた。

「くうう……マサト様、風の旧精霊王の力が増して……私の力では抑えきれなく……」

「ファルフナーズ、もう少しこらえてくれ！　今、奴にダメージを与える算段を考える！」

とは言え、正直ノープランだ！

どうすれば奴を倒せる!?

何か手はあるはずだ。

いつそ、どこでも扉で再びダンジョンに押し込めるか。

いや、気体である風の精霊王を押し込めることは無理だろう。

再びゴウゴウと風が鳴り始め、上から叩きつけるように吹き付けてくる。

また台風になり始めた！

ファルフナーズも限界か。

あんな苦しそうなお顔をしているのは初めて見る。

4つハンド・ベルがファルフナーズの周りを回転するのを止めてしまった。

風の精霊王の力が圧倒的になった証拠だ。

「ファルフナーズ！　大丈夫か!?!」

「はい……もう一度、必ず風の旧精霊王を止めてみせますわ。私の未熟さゆえの結果なのですから」

お姫様にはそんな作り笑顔は似合わないぜ……

再び術を使おうと、動きを止めたハンド・ベルに手を伸ばす。

風の精霊王の嫌味ったらしい笑い声が響いた。

「んふくう! 勝負ありましたかネ? ワタシの必殺技を食らうが良いデース! それは! ワタシ自身が竜巻になる事デース!」

風の精霊王が両腕を左右に広げ回転し始めた。

ダブル・ラリアットの状態で速度を増すと、あつという間に竜巻になる。

首から上だけは回転しないのが本当にムカつく。

ヒューヒューと甲高い風切り音で俺に向かって来た!

右に走って逃れようとする。

横に逃げないとファルフナーズが巻き込まれてしまう!

「風の精霊王であるワタシと追いかけることは良い度胸デスネ! ミンチより酷くしてやりマース!」

「くそおお!」

全力で走って逃げるも、あつという間に追いつかれ竜巻に体を浮かされる。

ねじ切られそうになりながら竜巻の回転に巻かれて、吐き捨てるように放り出され

た。

関節技を全身に食らったかのように痛む！

スクルドの保護と昼に使った「魔法の盾」が残っていないなかったら、本当にミンチだったぜ。

「頑丈なニートですネ〜！ いい加減、死ぬか殺されるか逃げるかして欲しいものデ〜ス〜！」

「うるせえ、ニートじゃねえ。元ニートだ。第一、ニートが家を失ったら生きるも死ぬも逃げるも無えだろうが」

悔し紛れの言葉しか出ない。

「オ〜ウ！ ではワタシの靴を舐めて忠誠を誓えば、貴方の家だけは残してあげますヨ〜！」

「ぬかせ！ そもそも舐める靴すら履く足が…… んッ!?」

「そうか！ そこだ!!」

「奴にも弱点はあるんだ！」

俺自身がアラジンとか言っておいて、そんな当たり前の事を忘れていたとは！  
軽口が災いしたな！

よし、勝ちの目は見えた。

あとは……

「ファルフナーズ！ 後一回！ 一瞬でいいから奴の風を止めてくれ！」

「かしこまり……ましたわ」

まずい。

肝心のお姫様が明らかにダメそうだ……

体力とか術の力よりも、自分を未熟とか言ってしまう気力の時点で負けてしまっている。  
何とか元気付ける……には、やはりアレしかないか。

「ファルフナーズ！ 良く聞けッ！」

「はあはあ……はいっ！」

「ここから一番近い島、沖縄にはな！ なんと、プリン専門店がある！ その店を守ー

「」

俺は見た。

ファルフナーズの目に炎が吹き上がるのを。

良く分からないシャキーン！ という効果音と共に。

「お土産ですわねッ!？」

「えっ、いや、そのうちに行こうか、とか……」

長いピンクの美髪を翻し、凜とした姿勢で立ち上がった！

「姫巫女が命ず！ 四神の風よ！ 我が声に従え！ 甘きプリンにひれ伏せ！」  
んん？

さつきはお願い、くらいのトーンじゃなかった!？

呪文にプリンとか入れちゃって大丈夫!？

その声と同時に風の精霊王が喉をかきむしって苦しみ始めた。

「ギイイエエエーッ！ やめろオ！ 甘ったるい風を送ってくるなあッ！」



ファルフナーズはくるりと身を翻し、華麗な跳躍と共に祝詞を続ける。

「プリン専門店の名において姫巫女が命を下します! 四神の風よ、眠れ! 甘きカラメルの芳香に風ぎなさいッ!」

今やハンド・ベルは物凄い勢いでファルフナーズの周囲を回転している。触ったら切り裂かれそうな速度だ。

ファルフナーズはバレリーナのように片足で回転し、飛んだり跳ねたり良く分からないいポーズを取ったりだ。

『姫がノリノリなのである』

「お、おう……」

さつきまでは無かったはずの良く分からない歌まで祝詞に混ぜ込んでいる。

「これが〜終われば〜 マサト様が〜 プリンを買ってくださいなのですわ〜♪」

「誰もそこまで言っていないよ!?!」

「私には2つ〜 いいえ〜 きっと頑張った私には3つ買ってくださる〜♪」

「お金持って来てないよ！　そしてちよつと音痴気味だよ!？」

「マサト様、今ですわー!」

「え、あ、ハイ!」

振り返ると、風の精霊王「だったもの」はマッチョだった上半身がすっかりしなびていた。

むしろ全身シワシワの痩せこけた老人のようになってる。

「これなら……!　もらったあ!」

「やらせません……やらせはしませんゾオ……!　弱体化してもニートの攻撃など効かないのデッス……!」

風の精霊王は再びダブル・ラリアットの構えから体を竜巻にした。

「それを待っていたッ!」

俺は腰にくくりつけていた、もうひとつの武器を投げつけた。

そう『爆砕ボーラ』だ。

太めのロープの先に細いロープで3つの鉄球がくくりつけてある、狩猟用の投擲武器。

敵に絡み付くのが特徴の投げ武器だ。

相手を吸い込む竜巻の攻撃との相性はこの上無しだ！

「ぎゅううううッ！」

風の精霊王がポーラの鉄球のロープに雁字搦めがんじがらめになり、竜巻の回転は止まった。

良かった、任意で爆発してくれるから魔法武器だとは思っていたが、きちんと奴に巻きついてくれた。

「爆・砕ッ！」

鉄球を爆発させると共に奴に踊りかかる！

風の精霊王の体はすぐにでも再生する。

それは奴の本体じゃないからだ！

狙いは下半身の煙、その出所――

あった！

魔法のランプだ！

雲の地面はこれを隠すためのものだった！

奴は空を飛べるのに、地面を作る必要なんて無かったのだから！

「獲ったぞおおお！ 俺達の勝ちだッ！」

ランプの口先を塞ぎ、出ている煙をさえぎる。

ただそれだけで、再生中の風の精霊王の動きが固まった。

再生途中の体を作りかけの状態で、風の精霊王「だったもの」が萎びていく。

「アアッ……！ ゆ、許してくださいサッ！ ワタシの負けデゥス……認めマゥス」

「本当、自分の間抜けさに嫌気がさすよ。アラジンと魔法のランプって、最初から自分で答えを出してたのに」

「何でもアナタ様の願いをかなえマゥス！ 言う事を聞きますカラッ」

「必要ないね。俺には飛びつきりの美少女姫が仕えてくれてるんでね!」

金属バットさんを振り下ろし、風の精霊王にトドメを刺した。

中途半端な煙の塊だったそれは、雲散霧消していった。

周囲何百kmにも渡っていた、厚く暗い雲が一瞬で吹き飛び――  
史上最大の台風は跡形もなく消えた。

雲の地面に、夏の訪れを知らせる強い日差しが反射した。  
雨の残滓さんしが遠く、虹を空にかけている。

「ファルフナーズ! 勝ったぞおお!」

「マサト様はく きつと頑張った私にく ガチャをたくさん許可してくださいさるく 絶対

く

「しないよっ!?!」

「そんな事く あるはず無いのですわく」

「おい見ろよ……このお姫様、精霊王の事なんてすっかり忘れて踊りに夢中だぜ……」

『踊りと言うよりプリンとガチャに夢中なのである』

肩をすくめて金属バットさんと語り合った。

「おーい、お姫様ー 終わったぞー 帰るぞー」

「プリンとガチャ〜……はっ!? もう終わったのでございますか?」

長生きするよ、このお姫様。

「ファルフナーズのおかげでな。ほら、戦利品の黄金のランプだ」

「じゃあそれを両替機で換金してプリン専門店を買占めますわ!」

やれやれだ。まあ今回は大変だったし、その位は……

ぼふんっ! ズズズズ……

「な、何だ!? 体が雲に沈んでいくぞ! 雲の地面が消えていくッ!」

「風の旧精霊王の力が消滅したからですわ! マサト様、お助けをー!」

「ダメだあああ! スクルドの加護も切れてるうううう!」

急速な落下とその空気抵抗で浮遊靴も役に立たない。

これは靴の裏に空気の地面を作る魔法アイテムだから、自由落下で頭が下に向いてしまおうと無力だ。

俺達は地表数kmからのスカイ・ダイビングを体験するハメになった。

生の風圧を受けて、俺は早々に気を失った——らしい。

：

「——ハッ!」

目が覚めれば、いつものベッドの上だった。

手元には黄金のランプ。

そしていつものファルフナーズの涙声をバックに、スクルドが俺の顔を覗き込んで笑顔になった。

「おかえりなのじゃ、マー君。良くやった、お疲れ様じゃー」

「えぐっ、ひんっ、ぐしゅ、私のプリンが、プリンが……マサト様の嘘つきー！」

落下して家に着いた。

一件落着とはこの事か。



## #50 「聖なるサラダ油」

「よし、風の精霊王は倒したぜ！」

「流石ですわ、くしゅん…ひっく、マサト様のおバカー」

死に戻りで自室のベッド上にて目覚め、飛び起きながら叫んでしまった。

今回はとびきり疲れたなあ。

死に戻りが便利だと思ってしまうほどに疲れたよ。

戦闘機に飛び乗って、台風と同化した風の大精霊を倒してきたんだ。

失敗すれば日本の地表が暴風で吹き飛ぶ程度には大仕事だったさ。

「しかし本当にバグった人達は、元通り普通の生活に戻ってくれたんだろうな？ この

珍事件の事も綺麗さっぱり忘れてくれただろうか……」

「問題ないはずじゃ。ただの大型台風だったと記憶して、これまでと変わらぬ日常生活を送ってるじゃろう」

スクルドが太鼓判を押してくれる。

見た目は宙に浮遊する銀髪の10歳児でも、中身は紛れも無く神様だ。

信じて間違いない。

「ほれ、壊された壁も直しておいたぞい」

「あつ本当だ、直ってる。スクルド偉いぞ！ 頭を撫でてやろう」

わーい、と喜び勇んで俺の胸に飛び込んで来た。

……本当に神様だよな？

みぞおちの辺りに神様ヘッドが直撃する。

やや青ざめた顔になりながら頭を撫でてやる。

「いやー、助かる。夏場は虫が飛び込んで来るからな」

「ただし、直したのは家の壁だけじゃ。外壁は流石にマー君が何とかせいー」

「外壁の修理っていくらかかるんだろう……ネットで見積もり出せるかなあ」

「その戦利品の黄金ランプを処分するのじゃ。良い値でさばけるじゃろー」

「そうだな……とりあえず飲みものでも……つと」

『ぎゅーん ぱぱらぱっぱ、 っぱっぱー！ ぱぱらぱっぱすぽぽーん てれーん！』

おお、レベルアップのファンファーレだ！

そのままファンファーレを更に4回繰り返し、計5レベル上がった事を教えてくれた。

「えっらい沢山レベル上がったな！」

「強敵じゃったからのー 追放された精霊の王、とか言ってたかの」

『私の攻撃が役に立たずに申し訳なかったのである……紐付き鉄球にまで見せ場を奪われるとは、屈辱の極み』

「バットだけに空を切る、と言う感じの敵だったな」

「下手な駄洒落なのじゃー」

金属バットさんの残念そうな声が響く。

しゃべれる上に炎をまとったり、大きさを換えられたりと便利なヤツだが、煙の体を持つ敵とは相性が悪かった。

しかし爆砕ボーンにまでライバル意識を持つのはどうかと思うぞ。

……鉄球がついてるからか。

玉に対して対抗意識を持つのがバットの性さが。

という訳か。

「ともかく修理代を捻出せねば。ファルフナーズ、両替機を出してくれ」  
「くすん、かしこまりましたわ。マサト様の意地悪——」

まーだ泣いてる。

何も意地悪をした訳では無いのだが。

せつかく南方の海まで出向いたのに、死に戻りで一瞬にして家に戻ってしまったからなあ。

約束した現地でのご褒美スイーツを買ってあげられなかった事を責めているのだ。

涙目で頬をぶくつと膨らましながら、両替機をアイテム・バッグから取り出してくる。

そういう表情をするから、俺に子供っぽいと思われてしまうのだ。

口には出せないが。

「代わりに同じくらい美味しい甘味をご馳走するから、機嫌直し——」

「かしこまりましたわ！」

あら、いい笑顔。

早い！ 圧倒的変わり身の早さ！

ちよろいな、このお姫様。

「では早速、いつもの甘味屋へ参りましょうー！」

「コンビニな、コンビニ。ご飯とか雑貨も買ってるだろ」

「そうでしたわ。では参りましょう」

「待て待て、まずは軍資金を……さあ黄金のランプを換金だ！」

両替機に黄金のランプを乗せる。

見た目こそ炊飯器に漏斗じょうごをくつつけたような奇妙なアイテムだが、どんなものでも換金してくれる凄い奴だ。

『魔法のランプ を換金します。 1) 金貨100枚 2) 100万円』

「き、来た！ 大儲けだ！」

「おめでとうございます、マサト様！ 金貨100枚分のプリンですわ」

「そんなに食べられないよ!! 何個買えると思ってるんだか」

「決死の覚悟ですわ！」

頑張りどころの方向音痴だ。

「ま、まあ浮かれるのはまだ早い。外壁の修理見積もりを出してからだ……」

「そうでしたわ。失礼しました。次はドラゴンの襲撃にも耐える外壁に致しましょうね」

ブロック塀です、ブロック塀。

外壁だけ頑強にした所で、家が壊されてちや意味が無い。

「では防御兵装として、煮えた油を入れる大釜を備えつけたい所ですわ」

「なにそれ怖い。つか、ファルフナーズの城はそんなに外敵に攻められてるのか!？」

「そもそも城壁の無いお城でしたので、一度目にしたいと思ひまして」

「それはそれで無用心だな。どんな所に建ってたお城なのやら」

「空中ですわ」

「風通し良さそうだな」

非常識すぎて付いていけない話だ。

もう適当に合わせて済ませよう。

「ええ。ですが冬場の寒風がとても辛くて……」

「お城を地面に降ろせば良いのに」

「その手が！ 流石はマサト様ですわ！ トリピュロン王国に戻った暁には、すぐお父

様に進言致しますわ」

日常会話で浮遊城の撃墜に成功。

攻めないけど。

：

「わはは！ 100万円ゲットだぜ！ 見ろ、札束が縦に置けるぞ！」

——あれ、ファルフナーズもスクルドも感心が薄い。

ぼやんとした表情で俺の言葉を聞き流している。

そうか、紙幣に馴染みが無いからこの凄さが分からないのか……

ファンタジー世界のお姫様と神様だからなー、仕方無いか。

PCを立ち上げてネットで外壁と設置のお値段を検索する。

どうやら壊される前と同じ、ブロック塀1面で最低でも50万は覚悟せねばならぬいな。

正直、台風のせいだとすつとボける事も出来るが、やはり後味が悪い。

元二トが初めて稼いだお金だ。

家のためにバーンと使ってやろうじゃないのさ。

二ト、外壁を建てる。

「と、なると……70は家と諸々の修繕費に当てるとして、残り30」

「鉄の壁になりそうですわ」

『鉄壁とな……?!? 我のジェルミンの体でも打ち砕けるかどうか』

しないよ。 打ち砕かないよ。

血の気が多いな、君達。

「あとはファルフナーズとスクルドの身の回りの雑貨だなー 10ずつとっておこう」

「マサト様、そこまでお気遣いを……」

ファルフナーズが目を潤ませて感動し始めた。

両親からすれば気付かないが、居候が2人増えてるからなあ。

先日も2人の服代とか出してもらったし、少しは俺も家計に貢献せねば。

俺の膝の上にいたスクルドが元気に両手を上げて言う。

「じゃあこの『こち亀』の残りの巻が欲しいのじゃー」

「買わないよ!?! 生活用品代だからな」

残りの巻がどんだけあると思ってるんだ。

値段より先に生活空間の危機が訪れるに違いない。



「ファルフナーズがはっと気付いたように手を上げた。

「あ、マサト様。私も備えておきたい物がございまして」

「何？ 食べ物とか漫画じゃなければ良いよ」

「先ほどの話で思い出したのですが、聖別するための油が欲しいのでございますわ」  
「聖別って何だ？」

「ファルフナーズが微笑んで首を軽く傾ける。

「ピンクのきめ細かい、艶やかな髪がさらりと肩から流れた。

「姫巫女が道具や場所を清めて聖なるものとするための、触媒的に用いる油ですわ」  
「清める……ほーん、聖水みたいなもんか」

「まあ、良くご存知で。その通り、聖水と同じ効力を持つものですわ」

「じゃあ聖水でいいんじゃないの？ 水道から、じゃーっと」

「残念ですが、清らかな水源のすぐそばの水からでないとなんと聖水を作れないのですわ」

「なるほど。でも油ならその辺のものでもOK、って事か」

「はい。純度さえ高ければ油はどんなものでも構わないのです。聖水は保管にも清めた瓶が必要で何かと不便なのですわ」

「オツケー、じゃあちよつと台所へ行こう。良い油がある」

流し台の下の扉を開けてもらい……あつた、あつた。

ドンッ

「これでどうだ」

「まあ！ こんなに大量の油を。しかもこれほど澄んでいて綺麗な……とてもお高いのではありませんか？」

日精サラダ油、徳用1.5リットル400円程度です。

「いや全然。使いかけだけだな」

「サラダ……油、と書いてありますわ」

ファルフナーズが小首をかしげて不思議そうに白いボトルを見つめた。

人差し指を顎に添え、深い青の瞳でボトルの周りをしげしげと……

「何か変か？」

「いえ、あ、はい。サラダ油というからには、どんなサラダから絞られた油なのでしょう

かと……」

「……キャベツかな？ いや知らんけど」

「謎の野菜から搾られた油なのですね」

後でネットを見て調べよう。

「ともかく、その油で聖別とやらが出来そうか？」

「はい、ありがとうございます。これなら素晴らしい聖油ができそうですわ」  
聖なるサラダ油（使いかけ）、ゲットだぜ！

「では早速、今夜から仕込みに入るのですわ」

「仕込み？ どんな風に仕込むの？」

「私の体に油を少しずつかけて……はっ!? おっ、乙女の秘密なのですわ！」

なにそれ！ 見たい！

体に油を……だって!?

今晚絶対覗きに行こう。

「マサト様、絶対に覗きに来てはダメなのですわ！」

「な、何も言っていないだろお!？」

「マサト様はえつちな事を考えると、すぐに顔に出るのですわ！」

「あー……主としてはだな。メイドの仕事を——」

「言い訳ご無用ですわ！ マサト様ったらフケツ！」

ぷりぷりと怒りながらキッチンから逃げ出していった。

サラダ油を大事そうに抱えて。

「お肌の手入れにも使えそうなのですか  
んなバカな。」

所帯じみた油プリンセス。

## #5 1 「この世界の牛は空を飛ぶのですね」

「よし、ダンジョン探索だー！」

「マサト様がやる気に満ち溢れておりますわー！」

いや、だつて……

ガガゴン！ ガシヤア！

破壊音。

工사용重機の駆動する音。

ハンマーがブロックを叩き割る。

「……この騒音で部屋に居られないだろ！」

「えーっ？ 今ー！ 何ておっしゃいましたかーっ!？」

ドドド！ キュイーン！

ファルフナーズが耳を塞ぎながら大きな声で聞き返してくる。

そりゃ耳を塞いでちゃ聞こえるわけが無い。

庭には工事の業者がいて、早速外壁の修繕を始めたのである。

以前、風の精霊王に壊された壁だ。

うるさくてかなわないや。

「とにかくダンジョンだ！ ダンジョンに入れ！」

「えーっ!?! マサト様！ 今、何とーっ!?!」

辛抱たまらん。

風呂場へ逃げ出して浴室の扉をカラララ……

モンスターが居ようが居まいがこの際構うものか。

飛び込め！

「おっ、ダンジョンの中までは音が響いてこないや」

「本当ですわ。 これで一息つけるのですわ」

松明が所々壁にかけられた、茶色い大きな石を敷き詰めたダンジョンは静かだった。

有難い、本当に有難い。

扉から覗く風呂場の脱衣所から工事の騒音は聞こえてくるが、遥か遠くからの音のよううに小さい。

ファルフナーズが耳をぽんぽんと叩き、目をしばしばと瞬きさせて言う。

「私、あのような轟音は初めてで……雷が目の前に落ちた時より凄いのですわ」

「そうだなー……って目の前に雷落ちた事あるの!？」

「はい。雷の竜が城を襲ってきた時に……こう、髪の毛がハリネズミみたいにボワワツと逆立ちまして」

「何それ、凄い見たい。ちよつとこの間のハンドベルで雷雲呼んで」

きつと硬そうな金髪になって、スーパープリンセス人とかに変身するに違いない。

「ダンジョン内では天候操作は無理ですので……申し訳ございません」

「よし、じゃあ戻ったら頼もう。夜の方がファルファーズの逆立った電気ヘアーもより目立って楽しいに違いないしな」

「絶対にやらないのですわ! そんな恥ずかしい姿を披露するだなんて」

「えー、見せてよー プリン買ってあげるからー」

「……」

「……」

「い、一国の姫を買収しようだなんて、マサト様は悪いお人ですわ!」

「今すつごい迷ってたよね?」

「このピンクの髪のお姫様は甘い物に目が無い。」

だが、流石にプリン1つではお願いを聞いてくれなかったようだ。

いつものスネたように頬をぷっくりと膨らませて顔をぷいっと背けられてしまった。

——が、ファルフナーズの手が人差し指を立てて宙をさまよわせている。

これはガチャを回したい、のサインなのだ。

「ほーん、お姫様とあろう者がはしたないですなあ。そんな露骨にガチャを回したがるなんて」

「ろっ、露骨だなんてそんな事ないのですわ！ 少々手持ちぶたさで指先を遊ばせていただけで、私は別に」

ファルフナーズにはゲームのようなステータス画面が見えているらしい。

そこで俺と自分の戦闘データを確認したり、課金ガチャを回したりできるのでそう  
だ。

正確にはガチャの代金は俺の毛根なのだ……

もう何度と無く回したせいで後頭部が大変寂しい。

天辺や前から薄くなるよりは恩情だけど。

「しかし、ファルフナーズの逆毛スタイルを見るために貴重な毛根を300本も捧げなければならぬのは……」



「あつ、思い出しましたわ。レベルアップボーナスで半額中だそうで」

「うっ……そんなルールもあつたな。だが、大道芸ひとつ観るのに毛根150本とは」

「最近ちつともしてなくてご無沙汰なのですわ」

「やだ、言い方がちよつとエロい。」  
「もうちよつと、こう。上手くおねだりして欲しい。『ご主人様、もう我慢できませんー』とかさー」

「マサト様が何をおっしゃっているのか、分かりかねるのですわ」  
「ややジト目で呆れたように返されてしまった。」

「伝わらないかー」

「まあ仕方無い。帰ったらガチャしていいから。逆毛ファルフナーズを拝ませてもらおう」

「笑いにされそうで、身の危険を感じるのですわ……」

「絶対スマホで画像を撮って、PCの壁紙にしてやるからな。」

「毛が増える魔法とか薬とか、落ちてねーかなー」

「トリピュロン王国に戻ったあかつきには私もマサト様の毛が増える方法を調べますわ」

ありがたいね。禿げ上がる前に辿り着けるだろうか。

このダンジョンをクリアしていけば、ファルフナーズの故郷に着くらしいが。

雑談もそこそこに一本道の通路を進み始める。

突然、後ろから抱きつかれる感触。

「マー君！　今回はワシもついていくのじゃー！」

「うおっ……と、スクルド。後ろから急に飛びついてくるなよ。びっくりしたあ」

「もうあの騒音には、ほとほと参ったのじゃー」

「神様はダンジョン探索手伝ったらダメなルールじゃなかったっけ？」

「付いていくだけだからOKなのじゃ。それに今回は手伝う事も無さそうじゃからのー」

「いきなりネタバレか。何だろう？　ボーナスステージかな」

「行ってみれば分かるのじゃ。マー君は引きの運を持っておるのー」  
「どうやらボーナスステージは確定のようだ。」

引き運なんてあつたかな、俺。

ファルフナーズもスクルドの言葉を聞いてウキウキし始めた。

「さあ、早く参りましょう。きつとプリン山の山に違いないのですわ」

「んなアホな。俺の引き運ならきつとナイスバディの美女が待つてるに違いない」

お姫様はまたふうつと頬を膨らませてスネた。

歩く早さがいつも以上に遅いと思つたら、一生懸命自分の胸を持ち上げたり、腰に手を当てながらくいくいとひねっていた。

いや、君はスタイルは地球で一番だと思ふよ。

だが俺の好みはもう少し大人の女性なんだ。

ダンジョン探索に数年かけて、じっくり口説き落とすなんて計画も有りではあるが

……

まあその頃には俺の頭がツルツルだろう。

くわばらくわばら。

「お、扉が見えてきた……が、何だあれ？」

「何か飾り付けのようなものがしてありますわ」

扉の上に『ようこそダンジョン・オーブナーご一行様』と日本語で書いた看板が付けてある。

「えらく歓迎されてるな」

「言つたじゃろ？ 良いのを引いたと」

スクルドがにひひと笑顔で言いながら俺の肩から身を乗り出す。

仕方無いので、銀髪の頭をわしやわしやとかき回すように撫でてやった。撫でられるが好きな神様とは扱いが楽でいい。

「つまりスクルドと同じく、また神様がいるダンジョンを引き当てたわけだ」  
「流石マサト様なのですわ。これでトリピュロン王国も益々栄える事疑いようもありません」

そんなもんですかね。

まあ向こうに到着すれば謝礼金で豪遊生活が決まってるんだ。

一日でも早くゴールでできるよう頑張らねば。

「よし、ファルフナーズ、扉を開けてくれ」

「かしこまりましたわ！」

俺自身が開けると別のダンジョンへ繋がってしまうからな。

ファルフナーズが重そうな扉を開けるのを、やや心苦しい思いをしながらも見守るしかない。

扉の隙間から見えてきたのは――

「草原だな」

「本当ですわ。もしやトリピュロン王国に帰還できたのでしょうか!」

「マジで……いや、違う。すぐそこに扉が置いてある。次の階層があるんだ」  
「まあ……あ、マサト様、あそこに変な生物が」

『ン、モ、くくくウ』

モンスターか!

……いや、あれは。

スクルドがつぶやいた。

「牛じゃなー」

「しかも乳牛だ」

「あれが牛という生物なのですわ。バッファローと似てるのでございますわ」  
「ファルフナーズの世界では牛が家畜化されていないようだ。」

だからプリンなんかのお菓子を有り難がって喜んでいるのか。

スクルドが俺の肩越しに身を乗り出して指差す。

「マー君、牛から羽根が!」

「マサト様の世界の牛は空を飛ぶのですね」

「んなワケあるか! ありや牛とは別の何かだ!」

牛の背中に金色の翼が生えたかと思うとこっちにゆっくり飛んでくる。

これだからファンタジーは嫌なんだ……わけが分からない。

パタパタ……

羽根は意外とせせこましく動いて、どうにもコミカルだ。

羽根牛は俺達の目の前まで来るとゆっくりと地面に降り立った。

「2本足で立ったのじゃ……ワシも家畜化された牛種を見るのは初めてじゃが賢いのー」

「違う。違うぞスキルド。牛は立たないぞ」

「私の世界にはミノタウロスという、牛頭人身のモンスターが……」

ややこしくなるからやめて。

羽根乳牛は後ろ足で立つと、どこからとも無く手……もとい前足になにやらアイテムを取り出した。

「何だ!?! 攻撃してくるのか!」

パーン!

撃たれた!

だが、外した!?

「マサト様! 赤や白の紐と紙吹雪ですわ!」

「……クラツカード」

『はい! どーもどーも! SLMN72といいまーす! 今日だね、名前だけでも覚えていつてください、つて!』

「マー君、しゃべったぞえ!」

「マサト様の世界の牛は何て賢いのでしょうか。とてもこれを食べるだなんて可哀相な事は……」

食べません。

「しかも何故かお笑い芸人調で語りかけてくる」

羽根乳牛はそれはそれは美しい女性のソプラノ声で語りかけてきた。

とりあえず情報を交換しておくべきか?

「あんたが神様なのか……? SLMN72って、記号みたいな名前なんだな」

「あ、いいえいいえ。SLMN72はグループ名でして、正式にはソロモン72って言ってますけど。どうかひとつ、よろしくお願いしますね、つて」

「ぐ、グループ名？ スクルドみたいな3人で1人の神様なのか？」

「わたし達は別々の存在でして、ダンジョン・オープンナーさんの世界では割と有名なんですよー？ ご存知ありません？」

「俺は神話とか歴史とかさっぱり知らないしなー どの国の神様なの？」

「はいー、イスラエルの方でブイブイ言わせてた時期がありました。そりやもうね、ちよつと最近地球では廃れ気味のローカルアイドルでして」

「アイドルで……まあ神様もアイドルも似たようなもんか」

「ま、ちよつと当時は悪役だったんですけどねー 知りません？ ソロモン王に使えた悪魔なんですがー」

「ちよつと待て。今、何て言った？」

「ソロモン王に使えてた悪魔ですがー」

「悪魔かよー！」

「えええ！ 差別良くないですよー！」

「帰ってもらえますか」

「ちよちよちよ、ちよつと待つてください！ わたし達良い悪魔！ 悪魔ウソ付かない  
！」

神様じゃなくて悪魔だなんて、とんでもない！



「いや、マー君大丈夫じゃ。こやつは本当に悪い悪魔じゃない」

スクルドが間に入ってきた。

悪いから悪魔って言うんじゃないのか？

それとも本当に良い悪魔なんているのか。

「そ、そちらの神様の言うとおりです。ね？ わたしとっても頑張りますから！ 何でもやつちやいますよー！」

「空飛ぶ乳牛が何の役に立つんだか……悪魔ってのはやっぱり騙されそうで嫌だなあ」

「マー君、神か悪魔かと言うのは人間の見方や立場ひとつで逆転するものなのじゃよ」

スクルドが俺を諭してくる。

流石にスクルドが俺を騙すはずもないし……

「そうですね！ わたし達は人間さん大好きな悪魔っ子ですからね！ どうぞひとつ、仲良くしていきたいなー、って」

「胡散臭せー、けど、スクルドがああ言うてるから信じよう。んで、ソロモン72はどんな悪魔なの？」

「あ、はい。ソロモン72柱はグループの名前でしてー わたしの正式名称は別にあります、って」

「ほほー、じゃあアンタのお名前聞いてもいいかな？」

「はい、もちろんですともさ！　これからお世話になるのですから、ぜひぜひ覚えてくださいねー ソロモン72柱の第48柱、地獄の大総裁、このわたしの名は——」

羽根乳牛は足を重ね右前足を前に出して、左前足を背中に回し挨拶のポーズをとつた。

牛の関節は絶対にあんな風に曲がるはずが無い。

「ハゲンテイ、と申します」

「帰ってもらえますか！」

「えええええ！」

名前だけで全てが分かった。

これは俺をハゲさせる、正真正銘の悪魔だ！

## #52 「喜んで頂けるのなら水着もなんのその」

「よし、解散！ 帰ろう」

「えええええ！ 待って！ 待ってください、って！」

2 足歩行の羽根乳牛が、俺にすがりつこうとヨタヨタ歩いてくる。

こわっ！

めっちゃ怖い！

「そんな直立歩行する牛が住めるほど、我がオコノギ家は広くないんだ！ 今回はご縁が無かったと言う事でっ！ じゃっ！」

「はっ!? そうでしたそうでした！ 私、人間！ 人間になれます、って！」

ボムンツ！

ややコミカルな爆発音と共に牛がカラフルな煙に包まれた。

煙の中から現れた人物は――

きらめく金髪と泣きぼくろが印象的な美女だった。

しかも……

「しかも薄いドレスから覗く双丘が……ファルフナーズより凄い！」

「……マサト様、声に出ているのですわ」

はっ!? しまった! つい……

「い、いや。その、何だ。服をまた新しく追加しないとなー……なんて」

「結局、殿方は胸なのですね! 胸が大きければよろしいのですねっ!」

姫様かなりお冠。 姫だけに。

だが、ファルフナーズも地球人基準では最高に大きいと思っていたが……

それを上回るとは。

訊ねずにはられないッ!

「た、例えばその、頼んだら水着とか……」

「はいっ、わたし頑張っちゃいますから! ダンジョン・オープナーさんに喜んで頂けるのなら水着もなんのその、ですって!」

「た、たまにうっかり触っちゃったりとか……」

「恥ずかしいですって……でも、うっかりなら仕方無いか、って」

「そ、添い寝とか何とか……」

「わたし、抱きついて寝るクセありますけど、それでも良ければ、って」  
俺は天を仰いだ。

ついに引き当てたのだ。

そう、理想のおっぱい美女を！

我が一生、ここに成れりッ！

拳を天に突き上げ、あふれる涙の熱さを噛み締める。

「——ッ、合格ッ！ 今日からヨロシクお願いしますッ！」

「きゃああく〜ッ！ メンバーの皆さん、わたし、やりりましたあ〜って！」

ファルフナーズとスクルドが口々に文句を言ってる。

「マー君は結局おっぱいなんじやのー ワシももつと大人の姿になっておくべきかのー  
！」

「マサト様ったら色香に惑わされるなんてっ！ 私が毎日こんなに頑張っておりますの  
に——」

なだめるのに30分かかった。

「まあまあ、神様をファルフナーズの世界へ招くのがこのダンジョン探索の主目的だろ？」

「それはそうですけれども……マサト様の態度が変身前と後で真逆なのですわ」  
なだめきれてなかった。

ま、おいおい納得してもらうしか無いかー

「ともかく連れて行かない手は無いし、来るとなったら牛の姿で歩き回られても困るしな。しかも2本足で」

「ですががー！」

ファルフナーズが口を尖らせる。

そーゆー仕草が子供っぽいんだよな。

まあ年相応ではあるのだが。

「で、では、今後ともヨロシクという事で握手を。俺の事はマサトと呼んでくれ」

「はいっ！ よろしくお願ひしますね、って！ わたしの事はハーちゃんと呼んで欲しいな、って」

互いに手を触れ握手を——しないで挨拶代わりにスキンシップ開始!

「おっとお!! つまずいたア—!」

「ひゃんっ!」

ハーちゃんこと、悪魔ハゲンテイの手を素通りし俺の手が魅惑の丘へと向かう!  
超世界級のおっぱいは大ききだけなのか!?! 触り心地もそうなのか!?!  
今、右手に全神経が集中するっ!

ピシャーンツ!

その瞬間、俺は電撃に体を撃たれ一瞬頭が真っ白になった。

意識が戻り振り向く。

スクルドが仁王立ちのまま手をこちらに掲げ、厳しい表情になっていた。

その手から煙が一筋。

電撃を放ったのはお前か!

「待つのじゃ、マー君! そやつの手に触れるのは危険なのじゃ!」

「お前の方がよっぽど危険だ! 問題は無いって言ったのはスクルドだろお!?!」

スクルドの視線が俺を通り越してハーちゃんを真っ直ぐに見据える。

「ハゲンテイとやら。貴様の権能、ドレイン系じゃな?」

「あつ、はい。その通りですつて。人間さんからドレインしたパワーを力に変えますつて」

ドレイン……ゲームで良くある、敵のHPを吸収するアレか。

「じゃ、じゃあ俺がハーちゃんに触ると耐久点吸われて死ぬの?」

「そうじゃ。いや、吸収するものは生命力とは限らぬ。悪魔だけに生命力の器、すなわち寿命そのものを吸うタイプもおる」

「こわっ! 寿命自体を吸われたら、いくら俺が死に戻りできても意味がなくなっちまうぜ!」

「その通りじゃ。こやつの権能を明らかにするまで触れるのは危険すぎるのじゃ」

悪魔ハゲンテイこと、ハーちゃんはオロオロしている。

「スクルド、そーゆー事は先に教えてくれよな」

「異なる体系の神の力なぞワシでも知らぬのじゃ。マー君が近づいて初めて力場の変動に気づいたのじゃからのー」

「だからつて電撃で止めなくても」

「咄嗟の判断じゃ。そもそも見知らぬ神にいきなり抱きつく無礼者なぞ、有史以来マー



君くらいなもんなのじゃー」

ほう。

人類史上最高の無礼者だったのか、俺。

いや、違うな。

見解の相違だ。

そこに美女のおっぱいがある限り！

危険を顧みず求めるのが男の正道よ！

「よし、ハーちゃん。神の権能とやらの情報を聞かせてもらおうか」

「分かりましたって。でもわたしのドレインはとて平和的な力で、生命力なんて吸い

ません、って」

「ほほー、じゃあ相手の何を吸い取るの？」

「毛根です、って」

「帰れ！ ダンジョンの闇へ帰って！ 今すぐ！」

「ええええええ！ 酷いですって！ とても平和的じゃないですかー、って！」

「うるせえ！ 毛根は命より大事なんだ！」

「でもでも！ 引き換えに錬金術とか使えますよー、って！ 石ころが金塊になりますよ、って！」

「知るか！ 金なんかより毛根じゃ！ 返して！ 俺の毛根返して！」

「ま、まだ一本も頂いて無いですよ、って……」

「よもや本当に俺の毛根を狙ってきた悪魔だったなんて」

「知力と知識も上がるんですよ、って。とってもお得な権能なんですよ、って」  
頭の中身が満ちても、外側が不毛の地じゃあなあ。

スクルドが優しく俺の頭を叩く。

「マー君も災難じゃのー ご馳走を目の前に触れる事もかなわぬとはのー」

「くっそー、これのどこが良い神だったんだ。ハズレもハズレ、大ハズレじゃないか」  
ハーちゃんがビクンと怯えてひきつる。

目には涙。

可哀相ではあるが……

「なるべくドレインは抑えていますので、マサトさんさえ良ければ……って」

「抑えられるの!?! どのくらい?」

「限界まで抑えて1秒1本、ですって」

「帰って頂けますか」

抑えてそれかよ!

おっぱい1秒、毛根1本か。

「あ、服の上からとかなら2秒で1本くらいに……ですって」

「俺の心、見透かされてる!?!」

うっむいて腹を抑えていたファルフナーズがフォローに入る。

こいつ、今の今まで笑いを堪えていたな!?!

「マ、マサト様。せっかくのご縁を頂いたのですし」

「だ、だが2秒で1本はキツイ」

「もうっ! 淫らな事ばかり考えないでくださいまし!」

「お、『淫ら』ってファルフナーズの口から出るとエロさが増すな。もう1回言つて?」

ぺちぺちぺち……

お姫様にはたかれてしまった。

まあ元から非力な上に、無敵状態に保護されている影響でかゆいくらいにしか感じないのだが。

「ま、まあ冗談はともかく、触ったら危険な神様と一緒に暮らすのはなあ」

「誤魔化したのですわ」

「まじまじやー」

そこは誤魔化されてくれよ。

「そ、そこは大丈夫ですって。ドレイン能力の対象はマサトさんだけですから、って」  
「一番ダメじゃねーか！」

ファルフナーズがポンと手を叩く。

スクルドも腕を組んで重々しげに頷いた。

「まあ、でしたら安心なのですわ」

「やはり良い悪魔だったのじゃー」

「俺俺、俺の安心は!？」

神様を迎えて招くのがこのダンジョン探索の目的だ。

それは分かる。

だがいくら絶世の美女とはいえ、触れたら毛根を死滅させてくる相手が側にいるとなると……

「マサト様、どうか……」

「マー君、腹をくくるのじゃー」

……

…

その時、草原に一陣の風が通り抜けた。

正に奇跡。

奇跡を帯びた風を古来よりこう称する。

神風、と。

その突風はハーちゃんの短く薄い、そのドレススカートを弄もてあそぶように通り抜けた。

「きゃっ、きゃあーつですつて！」

天国への扉は開かれた。

黒きレースのカーテンに彩られた天国がそこに。

そう、見て愛でる天国もそこにはあるのだ。

風がそう教えてくれたのだ。

「さ、採用ッ！」

飛び上がって喜ぶハーちゃん。

ファルフナーズが呆れながら怒った。

「もうっ！ もうっ！ マサト様は何を見て決めたのでございますかーっ！」

黒い下着は大好物。

デビル・ぱんっ万歳

## #53 「綺麗なバラには禿げ上がる」

「よし、神様だか悪魔だかも迎えたし、部屋に戻るか」

「マサト様のスケベさにも困ったものですわ。結局、殿方はパンツなのですわねっ！」  
さつきは胸って言ってたじゃないか。

見た目は完璧な金髪美女をゲットだぜ。

「はいっ、これからヨロシクお願いします、ですって！」

ソロモンの悪魔ハゲンティ、ことハーちゃんが俺に飛びついてくる。

「あぶなっ！ 触るな！ 禿げる！」

「そんなあー、親愛のハグ、ですってー」

くっそー、お触りOKの金髪セクシー美女だつてのに。

触ったが最後、毛根をドレインされてしまうのだそうだ。

綺麗なバラにはトゲがある。

いや、ハゲがある。

むしろ禿げ上がる？

「しかしこう大所帯になると、いよいよ部屋が足りなくなってくるなあ」

「マサト様のご両親に用意して頂いた部屋ではいけませんのですか？」

ファルフナーズが不思議そうに訊ねてくる。

「あの四畳半部屋はファルフナーズとスクルドでもう一杯一杯だろう」

「私でしたら構いませんのに」

「お姫様の割にはパーソナルスペースを主張しないんだな。ファルフナーズは」

「私は3人姉妹の長女でしたので、やはり賑やかなのが好みなのですわ」

「ほー、初めて知った。だが、残念。更に年下の妹かー」

「マサト様の欲望は底なしなのですわ。このままトリピュロン王国にお連れしていても良いものかどうか、不安になって参りましたわ……」

話が逸れたので戻そう。決して誤魔化すわけじゃないよ？

「まあ、寝るだけとしても四畳半に三人は無理だろう。日替わりでリビングに布団を敷いてもらうしかないかな」

「マサトさんっ、わたしのデーモン錬金術で空間も練成できちゃいますって！」

ハーちゃんが身を乗り出して提案してくる。

反射的に軽くバックステップで距離を取りつつ回避しておく。



30cm以内は毛根死滅ゾーンだと見ておくべき。

セーブ・ザ・毛根

「その気持ちは有り難いかな、代償が用意できなくてな」

「今なら毛根3000本で快適四次元ルームが貴方のものに、ですって！」

「でもお高すぎるでしょう」

「はいっ！ そうおっしゃるだろうと思ひまして、今回は特別になんと！ バス・トイレ付きの部屋をご用意させて頂きました！ っって！」

「通販番組か！」

「回転ベッドの方が良かったですか？ っって」

「良くないよ。ラブホかよ。しかも昭和か」

「空も飛べるベッドですのにーっって」

「天にも昇る気持ちーっって？ 物理的に天に昇るのは困る」

「誰うまい、ですって」

手をパタパタと叩いて喜ぶハーちゃん。

その度に超世界級の胸がふるふる揺れている。

ワールドカップ。胸だけに。

「そもそもハーちゃんは今日までどこに住んでたんだ？」

「どこにも住んではいなかったのですって」

「ずっとここに居たのか？」

「いえいえー、この体はマサトさんがダンジョンを作り出すまで存在しなかったんですって」

「俺が？　ダンジョンを？　作る？」

「はいっ、ですって」

「ダンジョン・オープナーの能力ってそういうモンだったのか」

「はいー、カオスの海から形あるものにして掬いすくい上げる。それがマサトさんの力ですって」

「つまりこのナイスバディのハーちゃんも、実は産まれ立て、と……」

「神や悪魔はカオスの海にも普遍的な存在として漂っていますから、厳密には肉体だけです、って」

「難しい事は分らん。ともかく家や部屋を用意する必要があるのだけは理解した」

「わたしはそちらのスクルドさんのように一級神ではありませんので、お気遣いは無用、ですって」

「そりゃ有り難いね。って、スクルドって偉い神様だったの!？」

「……今の今までワシを何だと思っておったのじゃ」

スクルドが呆れながら手を腰にやって踏ん返り返る。

「マンガを読み散らかして昼寝をする神様かと」

「そりやただの暇つぶしなのじゃー!」

盛大にコケたかと思うと、俺の頭にかじりついてきた。

暴飲暴食の神に違いない。悪食だなあ。

「こう見えても運命や因果を紡ぐ、有り難い神なのじゃぞー」

「じゃあハーちゃんに触っても禿げないで済む運命を紡いでくれ」

「その願いを叶えるために、マー君の毛根は全滅するから無駄な願いじゃのう」

「なんでスクルドまで俺の毛を狙ってくるんだ!?!」

「そりや寿命や命以外でマー君が持つてる、最も価値あるものじゃしー」

「神の世界ってどれだけ毛が大事なんだよ……神だけに髪なのか」

……

「あのあのつ、わたしでしたら部屋はマサトさんとご一緒に構わないのですって」

「マジか! 問題解決だな!」

そうだ、触るのがダメでも、見て楽しむ事はできる。

同室ならそんなチャンスが多いのは確実。

しかもハーちゃん、どう見てもアホの子……もとい、隙が多いタイプ。

「そんなはしたない事はダメなのですわ!」

ファルフナーズに大声で制止された。

良識プリンセスめー

「じゃあ、どうすりや良いんだよー ファルフナーズが俺と一緒にの部屋になるか?」

「えっ、いえっ、私は別にそのっ……はっ、恥ずかしいのですわ。でも、マサト様がそうおっしゃるのでしたら……」

おや、まんざらでも無いご様子。

ハーちゃんよりやや顔つきが幼いものの、ファルフナーズは間違い無く絶世の美少女だ。

「よし、じゃあファルフナーズと俺でいいな。流星に布団くらいは別々で勘弁してやろう」

「は、はい……不束者ではございますが、どうかよろしくお願い致しますのですわ」

俯むいたままモジモジと手を腰元で重ねるファルフナーズ。

これはこれで。

ハーちゃんが来てくれたおかげで、日常生活が更に潤う。

いや、撈る！

まとまりかけた所でスクルドが乱入。

「待つのじゃー！ ワシがマー君と同室になるのじゃー！」

「なんで!?! セっかく良い感じにまとまってるのに」

「マー君の部屋に住んでれば、いちいちマンガを取りにいかなくて済むのじゃー！」

「取りに来なくても、いつも俺のベッドの上に陣取って読んでるよね？」

「マー君のベッドこそワシの理想郷ユートピアなのじゃー。譲れない願いなのじゃー」

「神様が理想郷を求めないで欲しい。提供する側たれ」

そこへハーちゃんも割り込んでくる。

「でしたらでしたら！ わたしもマサトさんと親交を深めるためにご一緒したいんですってー！」

「親交は信仰。やはりハーちゃんにするか」

「わたし、頑張っちゃいますからー、つて！ 膝枕で耳かきとかサービスしちゃいます、つて」

「速攻で禿げるから遠慮しよう」

その張りのある太ももは惜しいが、毛根には代えられない。

「マサト様！ 耳かきでしたら、このファルフナーズが得意ですわ！ 妹達に大好評で

耳かきプリンセスと呼ばれたものですわ」

ファルフナーズが挙手して宣言した。なぜ挙手？

地味な称号だなあ。

呼んでる妹もプリンセスだし。

「耳かきならワシも得意中の得意なのじゃ！ 因果律を操作して耳垢を2度と出ないよ

うにしてやるのじゃ！」

「それもう耳かきじゃないよね？」

女神と悪魔と姫様で謎の言い合いが始まってしまった。

いち男子としては嬉しい光景だ。

なんだか良く分からないが、俺もここまで到達したのだという達成感に満ちていた。

静かになったと思ったら、ファルフナーズがコホンと咳払いをして一言。

「結論として、部屋と耳かき当番は日替わりで、という所に落ち着いたのですわ」

「……俺の意見は？」

「決定事項でございますわ」

「さいですか」

参ったな。

毎日耳かきされたら血が出そうだよ。

……

「じゃあそろそろ外壁の工事も終わった頃だろうし、部屋に戻るか」

三人がそれぞれ返事をする。

「かしこまりましたわ」

「凱旋帰国じゃー」

「お邪魔します、ですって!」

ダンジョンの通路を歩きながらしみじみと感慨にふけってしまう。

「しかし大所帯になったなあ。オコノギ家にファルフナーズが来て、スクルドが来て、ハーちゃんが来て……4人か」

『私の事も勘定に入れて欲しいのである』

腰につけていた金属バットさんが振動して主張した。

「悪い悪い。静かだったから忘れてた」

『酷いのである。戦いも無い上に毛の話となると、金属ボディの我には口を挟むタイミ

ングが無かったのである』

「金属バットさんを含めて4人と1本、増えに増えたものだ」

『感慨深いのである』

スクルドが俺の顔をまじまじと見つめて言葉を漏らす。

「なんでじゃ？ 5人と1本、じゃろう？」

「えっ？ 俺、ファルフナーズ、スクルド、ハーちゃん、金属バットさん。4人と1本じゃないか」

「なんじゃ、あやつは勘定に入れてやらぬのか。まあオコノギ家には住んでおらんしのうち」

「誰の事？ タクシーのおっさんとかスポーツ用品店のおっさんとか言うなよ？」

「おっさんなんぞ知らぬわー。あれほど懇ねんごろにしておいて酷い男じゃのー」

「ね、ねんごろ……？ 一体、誰の事を言ってるんだ」

「ほれ、アレじゃアレ。やたら寄り道してはアレコレしてる……名前は何じゃったっけ」

「誰!?! そんな知り合い居ないぞ？」

…

「思い出した。あやつの名は——」





## #54 「死神少女を食べたい（ダメな方の意味で）」

「よ、よし、もう一回言ってくれ。ちよつと聞き間違えたみたいだ」

「だからー マー君には死神が憑ついとるんじやてー」

「……」

「……」

「俺、死ぬの？」

「もう何度も死んどるじやろー」

それもそうでした。

死に戻りし放題の身体でした。

「な、なら安心だ。てつきり呪い殺されるのかと」

「むしろ常連客なのじゃ」

「つまり、良く死ぬからお得意様として担当が着いたつて事だな？」

「その通りじゃ。着いたと言うか憑いたんじやがのー」

いやー、怖い話じゃなくて良かった。本当に良かった。

夜にトイレ行けなくなる所だった。

「しかし、いくらマー君と云えど、死神にまで手を出すのは感心せんのー」

「ははは。いやー、そこはさ、ほら、俺だし」

「……」

「……なんじゃ?」

「いやちよつと待て。死神に? 手を? 出す?」

「そうじゃー イチャイチャしとつたじゃないかえー」

「えええええ! さっぱり覚えが無いんだが!」

「なんじゃ。現地妻として困ってたんじゃ無かったのかえー」

頭がクラクラしてきた。

俺が覚えてないうちに、死神に手を出している!?

フアルフナーズがふらりと俺の前に躍り出る。

「マサト様……、私に内密でそんなふしだらな事を……」

「ま、待て。誤解だ。身に覚えが無い!」

お姫様がそんなジト目で人を睨にらむのは良くないと思います!

そのツヤツヤのピンク髪でも、前から垂らして顔を半分覆い隠すとちよつと怖い。

背中に罪の這はい登る気配を感じた。

俺は何かを忘れている……？

考え込むような俺の顔で察したのか、スクルドが俺に向かって自分の長い銀髪を手で掴みぺちぺちと叩き付けながら教えてくれた。

髪の毛自慢か。

「なるほど。マー君は忘れておるのじゃな。死んでから復活するまでのサイクルは時間軸を超えるからの」

「俺に分かる言葉で頼む」

「ええい、面倒臭いのじゃ。少しは勉強せい」

ハーちゃんが勢い良く手を挙げる。

「はいはいっ、マサトさんっ、わたしの権能で知力をブーストできますって！ 今なら毛

根——」

「——を払ってまで理解しなくても良いので適当にかいつまんで頼む」

「あ〜う〜……」

と、切ない嗚咽おえつをこぼしながらハーちゃんが涙を流す。

マンガじみた涙を流すのはやめて欲しい。

デビル滝涙。

「まあ死んでる間は別の世界に魂が旅行してると思えば良いのじゃ。んで、その間は忘れておるようじゃのー」

「ふ、ふくん……」

覚えてないが、死んでから復活するまでに死神に会ってる、という事らしい。

「あのあのっ！ マサトさんっ、わたしの権能でその死神さんここに呼べちゃいます、つてー！」

「確かに気にはなるが、別に呼ばなくても……ガイコツ頭の黒い服着たアレだろ」  
見た瞬間死ぬ、とかじゃなからうか。

一応聞いてみよう。

「代償どのくらい？」

「はいっ、死神100%確定ガチャ、1回1000毛根ですつてー！」

隅から隅まで景気悪そうな言葉だなあ、おい。

だが、ガチャの一言がピンク髪のお姫様に火を点けた。

点けてしまった。

「マサト様！ これは2度と無い機会なのですわ！」

ポポポポポ！

燃えてる。ファルフナーズが燃えている。

NOとは言わせない目の輝きがそこにあつた。

「いやー……死神とか、別にいらなくね？」

「マー君は知らんのかー。死神は殺す神ではない、転生と輪廻りんねのレアな神なのじゃ」

くつ、スクルドが俺の退路を塞いだ！

後で覚えてろよ。

お前がさつきまで読んでた進撃の巨人、次の5巻目だけどこかに隠してやるからな。

「し、仕方無い……これも将来のためと割り切ろう。やってくれ、ハーちゃん」

「流石マサトさんです、って！ では悪魔に相談、デモニック・コンサルテーション！」

ブチブチブチイ！

「ぎゃあああ！」

こめかみのやや斜め上を激痛が走る！

「ハーちゃん！ よりによってデリケートな前髪から攻めやがったな！」

くつそー！ ダメージの少ない後頭部側からと言つておくのを忘れたぜ。

余りにも高すぎる代償を払わされた。

ハーちゃんと俺の間に水色に輝く電気回路図のような模様の魔法陣が現れ、いくつもの形を変えた魔法陣が更に増えていった。

「死神確定！ おめでとうございます！」の文字が浮かんで輝く。嬉しくない。光が強くなって、視界を白く染め上げた。

「ぐわーっ、眩まぶしい！」

視界が戻ってくると、辺りは紫と黒の毒々しい煙が漂ただよっていた。

魔法陣があつた場所に人影ひとつ。

「し、死神……なのか？」

煙が晴れ、そこに居たのは――

一人の少女だった。

青白い髪の毛のショートヘア、黒いフード付きマントのような……ローブって言うんだっけ。

内側には学校の制服に近いチェック柄のベストと白いシャツ、短いスカートとガータベルト付きストッキングにブーツの……

線の細い小柄な美少女だった。

その少女は無表情なまま俺を見据えたかと思うと、スツと涙を流し始める。  
なぜ!?

「やっと会えた……マサト、私の旦那様」

その場にいた全員が同じ言葉を漏らす。

「——はい?」

ええええええ!?

「あ、あの。俺とはどういったご関係で……?」  
間抜けな質問だ。

「ワタシとマサトは将来を誓い合った」

涙を流したまま、小さく薄い色の唇だけで微笑み返事してきた。



わけがわからないよ。

「マサト様!? こちらの死神様といつの間になんか深い間柄になられたのですか?」  
「ファルフナーズが問い詰めてくる。」

「し、知らん! 誤解だ誤解!」

「マサトが忘れてるだけ。でもワタシはこの温もりを覚えている」

そう言った途端、俺に抱き付いてきた。

細くて華奢きやしやなのになんか柔らかい。

……じゃなくて! これは俺の与あずかり知らない事態なんだってば!

「いや、だが感動した。この俺が美少女に抱き付いてもらえる日が来るなんて」

「マサト様、恐らく頭の中と口に出す言葉が逆でございますわ」

君、俺の心の中読めるの!?

「その表情だけで8割方読めるのですわ。マサト様は顔に心が出すぎでございます」

「ですよー。でもそれなら、本当に俺がウソをついてないって分かってくれ」

「そ、それは確かに……でもでも、納得できないのでございますわー!」

死神らしき少女は頭をぐりぐりと俺の体に擦り付けている。

表情が全く変化してないな、この子。

「死神さ——」

「デスノ」

「え？」

「いつもマサトはワタシをそう呼ぶ」

「あ、はあ……それが君の名前なのか？」

「ワタシには名前が無かった。悪名高き死デス・ノートリアスと呼ばれていた」

「ふ、ふん……」

「マサトがこの名前をくれた。愛の証だ、と」

「マサト様だったら！ 私の知らない所で片っ端から女性を口説いていたのですね!？」

ファルファーズが俺の頬をつねる。

「いひゃい。口説いて無い、口説いて無いよ！ 死神、本当の事を言ってくれ！」

「デスノ」

「はい？」

「マサトがくれた名前前で呼んで欲しい」

「ああ、はいはい。デスノさん、ウソは無しで、本当の事だけを教えてくれ」

「チツ」

舌打ちした！

今、舌打ちしたよ、この子！

くっそー、案外良い根性してるんだな。

「つまり将来を誓い合ったとか、愛の証とかはウソなんだな!？」

「半分は本当。死に戻りしなくなって、同じ所に住めるようになったら結婚してくれ  
るって言った」

「……」

「……」

「意味分らないよ?」

「結婚して」

「そもそも、どうして結婚だとか愛を誓うだとかの話になってるんだ」

「独りは寂しい。何度も会いに来てくれるのはマサトだけ。会いは愛」

そりゃあ、何度も死ねる体なんて、今の俺くらいのもだろう。

「俺が覚えてないのを良い事に、騙してるなんて事は……」

「本当。死んで魂だけになれば時間軸を超えるから思い出すはず」

デスノはどこからともなく、長い長い柄えの大きな鎌を取り出した。  
紛れも無く死神だ！

「もういつぺん、死んで見る？」

「遠慮させてください」

「じゃあ結婚してくれる？」

「もう脅迫だこれー！」

表情ひとつ変えずに結婚を迫ってくるとは。

しかし見た目はファルフナーズより少し年下、14歳かその程度。

ギリギリ誘惑には打ち勝った。

ギリギリで。

「寂しいのは分かるが、何でそんなに結婚にこじつけるのやら」

「独りはもう嫌。鎌って欲しい」

死神だけに。  
字が違います。

「ようやく一緒に暮らせるようになった。絶対結婚してもらおう」  
押しかけ女房を迎えるハメになったようだ。

あの世から。

## #55 「強いて言うならランジエリー」

「さて、無事戻ったぞ。確かにポーナスステージではあつたな」

「1日に2柱もの神様をお迎えされてしまうなんて、流石マサト様ですわ」  
ファルフナーズがパチパチと軽い拍手と共に賞賛してくれる。

んー、そうだろそうだろ。

もつと褒めてもいいよ。

2人とも向こうから押しかけて来ただけの気もするけど。

「ここがマサトの部屋。マサトはここで育ったのね」

「お、おう」

デスノ、つい先程迎え入れた死神少女が部屋を眺め回しながら言う。

やだ、何か初めて彼女を部屋に連れ込んだ時の台詞みたい。

……自称、俺の嫁らしい。

「それは違う。マサトがワタシの嫁」

「デスノが何を言ってるのか分からない。あと心読まないでもらえる?」

「読んでない。以心伝心、夫婦の絆」

「俺にはデスノが何を考えているかさっぱり分からな——痛い痛い、ファルフナーズさん、つねるの止めて?」

本当はさっぱり痛くないのだが。

アピールしておかないと、どんどんパワーが上がっていくかも知れないし。

「と、とりあえず座って……と言っても、この人数だと足の踏み場も無いな」

床に散らかしておいた漫画やら服やらをどかしてスペースを作る。

あつた。

進撃の5巻を押し入れの奥にポイツ

「悪いな、狭い部屋で。自分ここを自分の家だと思つて自由に使つてくれ」

「大丈夫なのじゃー。ワシらは空間をもっとフリーダムに活用できるのでのー」  
スクルドが浮いて俺の頭の上に座る。

「人の頭の上に座るのはやめなさい。あと髪の毛垂れてきて顔がくすぐつたい」

その内、天井に本棚とか据えつけそうだなあ。

そんな引つ張り強度が天井にあるとも思えないが。

「ではではっ、ハーちゃんはこちらの壁を頂きますね、つてー!」

ソロモンの悪魔ハゲンティこと、ハーちゃんが俺の部屋で唯一、開けていてポスター

なんかを貼ってあった壁面に座る。

俺の某カロイドのポスターが……

ハーちゃんは器用に(?)壁に向かって垂直に正座して座った。

「重力とは何だったのか。見ているこつちがおかしくなりそうだ」

「マサトさんもこつちに座りましょう、って!」

神や悪魔の所業には付いて行けないな。

「重力操作か慣性制御が出来るようになったらお邪魔するよ」

「でしたら今なら毛根1万本で!」

余裕の無視。

壁に座るために全頭皮の8%を捧げられるか!

「好きに使って良いけど、両親の前ではなるべく大人しくしてくれよー。どんなバグり方するか分からないからな」

「了解です、って! ハーちゃんはマサトさんのお姉さんですね、って!」

あれ?

妙に釈然としない。

外見は完熟ナイスバディの金髪美女ではあるが、中身はアホの子だからな。



姉と言われると妙な違和感を覚える。

ぼふんっ

振り返ると、デスノが俺のベッドに飛び込んでいた。

シーツを引つpegして、それにくるまったぞ。

「これがマサトの匂い……すうっ」

明らかにこちらダメな子でした。

俺よりレベル高いな、デスノ。

やるなどは言わないから、せめて本人の居ない所でやれ。

懸命に呼吸を繰り返して顔を赤らめている。

モジモジと足をくねらせるその姿は……

何だろう、目の毒だ。

「夢にまで見た光景。今、ワタシはマサトに包まれている」

「本人が目前に居るんだけどな」

そこへスクルドが割り込む。

手をかざして念力つぽい何かでデスノをくるんでいたシーツを剥がした。

「ええい、ベッドの上はワシの聖域なのじゃー。自重せい、死神」

「誰かと思えば北欧の。久しい」

「今更気づいたのかえ……」

「ワタシのシャツ返して」

俺のです。俺の。

「ほら、デスノ。せつかくの服がしわくちやになるぞ。着替えた方が良いんじゃないか」

「降臨したばかりだから服はこれしか無い」

「デスノとハーちゃん服も買わなきやならんなー。やれやれ、金がかかる」

「マサト優しい。好き」

すっかり元の無表情に戻って真顔で言ってくる。

そういう言葉は照れながら言ってください。

「やはりデスノも自分じゃ服を作れないんだろ？」

スクルドが以前、そう言ってた気がするし。

「作れる。材料さえあれば」

「材料って？」

「人の魂」

「ダメなやつだこれ」

「死神だし」

「ですよねー」

服ひとつ作り出す度に人死に出してらんないしなー。

「マサト好みの服を一着作る。どんなのが好き？」

「どんなのって……そりゃあやつぱり露出多くて大事な所だけギリギリ隠した……強いと言うなら」

「下着」

「うん。我がならダメな人間だと思った」

「分かった。下着作る」

「いやちよと待て。その手に持つてるのは何だ!?!」

気が付くとデスノが手の平に青白く燃えてる火の玉みたいのを持っていた。

「魂。借りた」

「誰の!?!」

デスノが窓の向こうを指差す。

修理中の壁の隙間から、タクシーが止まっているのが見える。

そのボンネットに突っ伏すように人影が。

例のタクシーのおっさん、暮井寺宅志くれいじ たくしさんだ!

「おっ、おっさああああああん!」

「おう、呼んだか兄ちゃん」

「部屋の中からおっさんの声が!？」

「目の前にいるだろお？」

「火の玉がしゃべった！」

「召還されたり、魂抜かれたり、俺の人生も忙しいったらありやしねえ！」

「なんで嬉しそうに言うんだ」

「で、どうすんだ！」

「どうすんだ、って……」

「黒のレースがいいのか！ ピンクのフリフリが良いのかって事だあよ！」

「おっさんが変化するのかと思うと、どちらもゴメン被りたいよ」

この期に及んで変身する気でいやがる……

これだからファンタジー風にバグらせるのはダメなんだ。

「デスノ、ちゃんと返しなさい。キャッチ・アンド・リリース」

「分かった」

無造作に魂をおっさんの体に向かって放り投げた。

ガチャン！

「窓ガラスが割れた！」

「魂が強いと物質に影響を与える事がある」

やる前に教えて欲しかった。

タクシーのおっさんは起き上がると、こちらに向かつてピースサインをした。

そのまま何事も無かったように車内に戻る。

帰らないのか……売り上げ大丈夫？

「ちくしょー、ガラスの交換代はデスノもちだからな」

「分かった。お金持ってないから働く」

「神様が働くのか……どんな仕事できるの？」

「暗殺者」

「やめなさい」

「分かった」

ダメだ。

神様に労働とか金稼ぎをさせてはならない。

ハーちゃんが勢い良く手を上げて言ってくる。

壁に垂直に座ってるから、俺の頬を手刀のようにかすめて危ない。

デビルチョップは毛根死滅。

「はいはいっ！ ハーちゃんなら錬金術で金とか銀とか作れちゃいます、って！」  
「その度に俺の毛根が消え去っていく訳だが」

ガツクリと倒れ込み、床に手を付くハーちゃん。

だがそこは床ではなく壁なので、俺から見たらハイハイで壁を登っているようにしか見えない。

ファルフナーズが部屋に戻ってきた。

静かだと思ってたから退出してたのか。

「夕飯の用意が出来たのですわ。皆様、食堂へ」

「おー」

出来たメイドさんだ。

現役のお姫様なのに、とても甲斐甲斐しい。

「……で、これは何だ」

「プリン・ディナーですわ！」

訂正。

ダメなメイドでした。

ダメイド・プリンセス。

目の前には皿に盛られたプリンと彩りのサラダ。

それにご飯とお味噌汁。

「ご飯でプリンが食べられる訳ないだろ！」

「私は平気ですのに」

「今日もコンビニ飯だな」

「では、責任を持つてこれは私が」

あつ、このお姫様。

ひよつとして、最初からそこを狙ったな!?

「くそー、出費がかさむ。明日はダンジョンでバリバリ稼いでやる」

「マサト様がやる気になってくださって、何よりなのですわ」

ファルフナーズが手の平を合わせてキヤツキヤと喜んだ。

明日はお前にも滅茶苦茶働いてもらうからな!

同じ手を使われないように、プリンをデザート以外で出す事を固く禁じた。

その隙に……

「これとっても美味しい、ですって！」

「美味。御代わり」

ハーちゃんとデスノがプリン・デイナーを平らげていた。  
5人分全部。

「わ、私のプリンが……」

「好評で良かったじゃないか。策士策に溺れる、だな」

夕飯おあずけプリンセス。

そこには、泣きながらコンビニへと走るお姫様の姿があった。

帰りには甘い物満載のビニール袋を引っさげてご満悦でしたが。

「で、俺の弁当は？」

「——あっ」

お姫様を一人でお使いに出してはいけない。



## #56 「労働にはちゃんと対価が支払われないとな」

「よし、今日はダンジョンでガッツリ稼ぐぞ！」

「マサト様、その意気でございますわ」

食い扶持が増えたからな。

後ろを振り返るとファルフナーズの後ろに3人の神様が。

彼女達を食わせてやらねばならぬのだ。

「おーし、じゃあまずはフスマを」

スラリ

「こわっ！ 大量の西洋人形が！」

「スプラッター・ドール！ レベル80の群体ですわ！」

扉の向こうを埋め尽くす大量の西洋ドールがいつせいに振り向く。

パタン！

あー心臓がバクバクいつてる。

気を取り直して、リビングの扉をカチャ

「巨大な足だ」

「タイタン。レベル推定140ですわ。身長57m——」  
バタン。

無理無理。

無理とか言う前に入る隙間も無い。

トイレのドアをガチャ

「お、静かなダンジョンだ」

「モンスターは見当たらないようですわ」

よし、突入してみよう。

「いつもの石壁通路だな。両側に伸びている」

「どんなモンスターが待ち受けているのでしょうか」

慎重に辺りを見回す。

松明が壁にかかっている以外に何も無い。

長年放置されたような埃っぽさがある。

「ハーちゃんも頑張りますって！」

「マサトの敵はワタシが全て倒す」

「……」

「……」

「なぜ入って来た？」

神様達は俺とファルフナーズのダンジョン探索を手伝ってはいけないルールなのだ。

そうでないと、招かれる神から外宇宙からの侵略者になるとか何とか。

「お役立ち、ですって！」

ハーちゃんが勢いよく手を上げて言う。

手を上げるたびに、ぷるんと揺れる豊かな双丘に目を奪われる。

「助太刀無用に願います。部屋で待っていてくれ」

役には立つのは間違いないが……

毛根を塗り取られるか、マツチポンプかに違いなのだ。

大体が触っただけで毛根をドレインしてくるハーちゃんだ。

大立ち回りする隣に置いておけるはずが無い。

「しょもーん……ですって」

肩を落としてすごと部屋に戻っていた。

「デスノ、お前もだ」

「ワタシはマサトと夫婦。いつでも一緒」

意地でも付いていくとばかりに俺の服の裾を掴んで離さない。

「病める時も死んでる時も離れない」

「そこは病める時も健すこやかなる時も、でお願いしたかった」

死神の鑑か、みだね。

見てるだけ、と約束させて同行を許可しておく。

「さて右と左、どちらから行くか」

「マサト様！ 右側からモンスターが来ますわ！」

「ファルフナーズの妖怪センサーが反応したか！」

「そんなものはございませんわ。足音が」

ピンク髪のお姫様は右通路の奥を指差す。

人影のような物が複数、松明の明かりに揺れている。

オゴロロロオー！

獣じみた叫びが響いた。

「なんだあれ、モジャモジャ灰色の毛むくじやら人だ！」

「バグベアですわ！ レベルは15前後、子供をさらって食べてしまう怪物ですわ！」

「じゃあ安心だな」

「なぜでしょう？ お聞きしても？」

「だって俺20歳超えたおっさんだもの」

「別に大人が襲われない訳でもないのですが……」

やっぱり？

「ファルフナーズ。お前は未成年だからさらわれて来い！ その間に少しずつ倒してい

こう」

「バグベアにさらわれる程、子供では無いのですわ！」

ポコポコと背中を叩かれる。

西洋人は未成年扱いを嫌がるってのは本当なんだな

バグベアがどんどん近づいてくる。

しかしこれは、かなり――

「おい、結構デカいぞ!?!」

「2メートルほどの身長でゴブリン族の上位種ですわ」

子供をさらう、なんて言うから小人サイズかと思っただのに！

「つーか、凄えマッチョだ。しかも数が多い！」

「10匹ほどでございますわ！」

金属バットさんを構えて迎撃体制を取る。

「燃えろ金属バットさん！ 奴らの灰色毛玉をこんがり焼いてやれ！」

『応である。久しぶりの出番に武者震いを禁じ得ないのである』

そんなに久々だったかな？

はてさて……

子供用の小さい金属バットさんだが、俺が命じると長さを自在に変える。

1. 2 m程の大きさになり、俺がこの通路で振り回すのに程良い長さに。

更に炎を上げて燃え始める。

素手で攻撃してくる奴らは迂闊にバットに触れやしないだろう。

「ファルフナーズ！ 【魔法の盾】を！ 先手必勝ッ！」

「かしこまりましたわ！」

ファルフナーズが詠唱に入る。

俺が一番先頭のバグベアに向かってフルスイング体制を取る。

引き付けて、引き付けて——今だ！

スパアーン！

「ジャストミートだ！」

『クリティカル・ヒットなのである！』

バグベアの左腰元にヒットして横壁に叩き付けた。骨が碎ける感触だ。

立ち上がれまい！

すぐ後ろのバグベアを巻き込んで壁にぶつかった。殴られたバグベアは全身が炎に包まれる。

「良く燃える体毛のようだな！　ざまあみろ！」

先頭のバグベアを見て、後続の仲間がたじろぐ。

警戒と恨みの混じった唸り声を上げた。

グゴオ……オロロウ

奴らの突撃は完全に止まる。

勢い任せで蹂躪しようだったって、そうは行かないぜ。

「毛充は死ね！」

「毛充、とは何でございましょうっ？」

「毛がふつきふきに充実している奴の事だ」

「バグベアのこれは頭髮ではなくて、体毛だと思うのですわ……」

毛がたくさんあるからケモノって言うんだ。

今やこいつらは俺の天敵だぜ。

『逆恨み補正なのである』

「うっせー。ケモノはいてもN.O毛者になりつつある俺も居る」

自分で言っていてワケが分からなくなってきた。

壁に叩き付けられ燃え上がったバグベアは動かなくなった。

巻き込まれて倒れた一匹に炎が燃え移る。

ラッキー！

だが、体に火が燃え移ったバグベアが狂乱し、転がって俺の前へ！

「うおっ！ く、来るな！」

咄嗟の事で回避し損ねて、足を取られて転んでしまう。

「熱っ！ 離れッ……あーッ！」

これを好機と見た後続のバグベアが、火達磨ひだるまの奴を蹴飛ばして俺の上ののし

かかる！

「マサト様！ 大丈夫ですか！」



返事して余裕も無い！

なにせバグベアが3匹で俺に覆い被さりながら殴る蹴る。  
もみくちゃだ！

このままでは――

「……と、言う程も無いか」

不思議だ。

ファルフナーズの「魔法の盾」のおかげか。

あるいはプロテクターとマスクのおかげか。

見た目は巨大な腕で殴られ、太い足で蹴られているのに。

ダメージはほとんど受けていない！

ならば、あとはタイミングを見て……

「振りほどくッ！」

足がフリーになる一瞬を見計らって、バグベアを蹴り飛ばす。

ガシガシッ！

『ただのヤクザキックである』

「うっせー！ こつちだつて必死なんだ」

何とかバグベア達を蹴飛ばして遠ざける事に成功。

金属バットさんを振り回し、その炎をアピール。

何とか起き上がる事ができた。

「奴らのダメージはシヨボい。体勢さえ崩されなきゃこつちのモンだ」

「一時はどうなる事かと思いましたが」

後ろでファルフナーズが拍手している。

お姫様は敵から認識すらされない無敵状態だから呑気にしていられる。

その代わり2種類の魔法を使う事でしか干渉もできないのだが。

回りこまれる事と、圧のし掛かられる事だけ注意すれば大丈夫だ。

あとは殲滅していくだけ！

黙々とバグベアを倒していく。

残り2匹！

「あー疲れる」

『地のスタミナが無いのである』

無茶言うな。

2 mもある巨体のモンスターを10匹も殴り倒すんだぞ。

息も上がるわ！

「マサト様！ こちらから新たな敵が！」

げっ

敵を牽制しつつ振り返るとファルフナーズが後ろを指差している。

グオロロロー！

「またバグベアか！」

「恐らく10匹程でございますわ！」

まずい……

正直、疲れている。

更に10匹は相手にはいられない。

囲まれて延々ボコられるに違いない。

『我が主よ、ここが踏ん張り所である』

「お断りだね！」

面倒だから使いたくなかったが、おあつらえ向きな状況だ。

仕方無い！

「ファルフナーズ！ あ、デスノも。はひー……脇へ避ける！」

ジーパンのポケットからスマホを取り出す。

良く壊れなかったな、と考えつつ短縮登録してあるそれをタップ！

魔力を込める！

プルルルル……ガチャ

「あ、おっさん？ 来てくれ」

「兄ちゃん、ちゃんと召還しろよな！」

「うっせー、こちとら背中をモンスターにボコられながら電話してんだぞ！」

「3秒で行くぜ！ 目標の正面を向いてな！」

エンジン音がスマホのスピーカーを壊さんばかりに震わす。

「何、あれ？」

「マサト様の召還魔法でございますわ」

デスノがファルフナーズに訊ねている。

昔の神様は知るまい。

現代魔法はスマホで楽々だ。  
格好はイマイチだけどな！

スマホが俺の手を離れクルクルと空中で回転する。

目の前の足元に青白く光る魔法陣が現れた。

俺をボコつていた背後のバグベアが悲鳴を上げて下がる。

結果みたいな効果でもあるのかな？ この魔法陣。

タイミングを合わせて俺も叫ぶ。

「速攻召還！ クレイジータクシー！」

ガツシャーン！

目の前の空間がガラスのように割れた。

そこからタクシーが飛び出す！

「ヤーヤーヤー！ 突貫すつぞおおおーッ！」

タクシーのおっさんが叫びながらバグベアの群れに突っ込んでいった。

ダンジョンの幅ギリギリなのでタクシーは壁に車体を擦こすり火花を上げる！

ドグシャーッ！

タクシーに踏まれ、跳ね飛ばされたバグベア達。

屈強なモンスターなのだろう。

だが、車の重量は約1トン。

鉄の塊であるそれを推定時速100kmで叩き付けられた日には——  
酷い絵面さ。

「ちつ、すまねえ。スペアだぜ！」

ボウリングか！

10匹ほどいたバグベアの後ろ2匹を倒しきれなかった。

と、言いたいののは分かった。

残った2匹のバグベアは通路の奥へ逃げていく。

「さて、残るはこっちの2匹か！」

「あー、疲れた！ 大量の敵を相手にするのは疲れる」

「お疲れ様でございますわ」

その場に胡坐あぐらをかいて座り込む。

目の前のバグベアの死体が消えていく。

「死んだら消える事もあるのか」

「アストラルの生命は、あくまでも仮想ですので……」

意味わからん。

だが、消えたバグベアの後にはいくばくかの銀貨が落ちていた。

「これ、これですよ。労働にはちゃんと対価が支払われないとな」

ホクホク気分で銀貨を拾い集める。

10匹分で銀貨50枚ほどになった。

確か魔法の両替機で1枚1000円くらいになったから……

なかなか旨いぞ、バグベア。

疲れるけどな。

「そうだ、向こうのバグベアの分も——」

振り返ると、タクシーのおっさんが居た。

「なんだ、おっさんまだ居たのか」

おっさんはニヤリと笑った。

「当然だろう？ 労働にはちゃんと対価が支払われないとな。運賃730円な」

そうでした。

デスノが訊たずねてくる。

「マサトの召還魔法はお金がかかるの？」

「必要経費——いや、『触媒』ってヤツかな」

現代魔法も楽じゃない。

触媒、後払い。



#57 「こちらの桜色ドレスを着て頂きましょう！」

「よし、先へ進もう」

「かしこまりましたわ」

タクシーのおっさんを次元の狭間に追い返しつつ考える。

車は本当に自動的に元通りになるんだらうか……

違った。そこじゃない。

右の通路と左の通路、どちらに進むべきか。

「ま、手当たり次第つて事でこのまま右側から行くか」

「迷ったら右、ですわ」

クラピカ理論だろうか。

通路は100mほど真つ直ぐに進み曲がり角になる。

更に100mほど進むと――

「行き止まりだ」

「ただの壁のようですわ」

「何も無い通路でバグベア達は何をしてたんだか」

「マサト様が扉を開けた瞬間に生成されるインスタント・ダンジョンでございますので」  
インスタントって言うけど、3分待たなくていいのかな。

後ろで静かにしていた死神少女デスノも首をかしげている。

言葉はよく理解できないが、俺が扉を開けることで新しいダンジョンが作られるらしい。

きっと風来の不思議な商人みたいな何かなのだ。

ダンジョン入り口を経由して反対側の通路へ。

右側の通路と同じように曲がって100mほど進む。

「扉だ。ボス部屋かな」

「気を引き締めて参りましょう、マサト様」

合点だ。

部屋に切り込む体勢を整えながら、ファルフナーズに扉を開けてもらう。

この獣臭、さつきと同じ——

「ボスもバグベアか!」

やはり10匹のバグベアが一斉にこちらを振り向いた。

もうこいつらのクセは見切った！

囲まれないよう、転ばされないようにすれば楽勝。

疲れるけど。

……

「よし、残るは一匹だけ！」

リーダー格なのか、後ろで控えてたバグベアが居た。

流石に息が上がっているが、俺はそいつに詰め寄る。

「はひー、仕上げだ金属バツトさん！ 派手に燃えろ！」

『今日の我が主は実に勇ましいのである。感涙にむせぶ次第』

大上段から一撃！

「真つ二つだぜ！」

今日一番の快打だ。

『待て、我が主よ。何か変だ。手応えが無さ過ぎるのである』

真つ二つになったバグベアの死体が真つ黒になりドロリと溶ける。

あつという間に黒い塊が人の形になった。

『新手のスライムであるか!?!』

「いや、名探偵コナンの犯人に違いない！」

人型の黒スライムが大きな口でニタニタと笑う。

全身タイツじゃなかったのか……コナン君の犯人の中の人。

「マサト様、お気をつけ下さい！ 変身型のモンスターでございますわ！」

「変身能力か。次は何のモンスターに変身するんだ？」

挑発するように金属バットさんを突きつける。

今のうちに呼吸を整えて、変身する隙を突こう。

と、思ったら一瞬にして別の人型に変身しやがった！

隙をうかがうヒマも無い。

『なんと!!』

「まあっ！」

金属バットさんとお姫様が驚きの声をあげる。

どう見ても、そこらに居る冴えない人間の男姿だが。

ちよつとだけ親近感湧くが……

ファルフナーズに聞いてみる。

「……知り合いか？ このダサイダメ男風モンスター」

「ええ、とても良く存じておりますわ……」

「ははは、ファルフナーズにもこんなシヨボい友人がいるのかー」

お姫様は申し訳なさそうに身じろぎしながら、上目遣いで言葉を紡ぐ。

「その……マサト様のお姿ですわ」

はあ？

「これが、俺？」

「はい、服装まで同じの瓜二つですわ」

右手を上げる。

目の前の男も上げる。

「えー!? 俺、こんな格好かー!?」

「とても勇ましいと思うのですわ」

うん、薄々感付いていたけど。

このお姫様の美的センスは明らかにアウトだ。

「いやいや、いくら俺似でももうちよつと、こう……シユツとしてない?」

「……シユツ、でございますか?」

シャドーボクシングを試してみる。

シユツシユツ!

目の前の男もシユツシユツ!

「……今日から筋トレしよう」

右手の平を前に出す。

目の前の男も出した。

「お手手のシワとシワを合わせて」

【幸せー】

「しゃべった! しゃべったぞコイツ!」

「マサト様の残機、と言うのが増えたのでございますね?」

違うと思うよ。

左手も出して、俺の瓜二つと両手を合わせる。

「これで俺が不思議な力に目覚めたり……しないか」

両手を合わせたまま顔を近づける。

向こうも近づけてくる。

そのまま2人は目を閉じて唇を……

チュッ

おや、唇の感触じゃないぞ。

目を開けると、そこは白い手袋に包まれたお姫様の手だった。

「マサト様、それは、それだけはいけませんわ」

ファルフナーズに真顔で止められてしまった。

「冗談だ、冗談」

首をフルフルと振り続けるファルフナーズに言い訳しておく。

モテない男は一度くらい鏡に向かってやるもんなんだよ。

……やるよね？

突然ファルフナーズが叫ぶ。

「思い……出しましたわ！ これはドツペルゲンガーです！」

「ドツペンゲルガー？」

【ドツフルギャンガフフフフ】

うるさい、俺の偽者は黙れ。

「マサトチョップ！」

べちっ

「ドツペルゲンガーですわ」

「ドツペン……ドツペルゲルガー」

「ゲンガー」

「ガ……ゲンガー」

「その調子ですわ。さあ、もう一度、ドツペルゲンガー」

「ドツペルゲンガー」

「はい。ドツペルゲンガーはあらゆる生物の姿を真似する事が出来る、邪悪なクリーチャーです」



「えっ、コイツ邪悪なの？ 間抜けな顔してるけど」

【お前の顔を真似してるんだが】

うるさいな。

「マサトパンチ！」

ぐっぐっ

「か、顔はともかく——」

「いやそこだけはフォロワーしてくれ。後生だから」

「私は素敵だと思っておりますが」

「あいや、真面目にフォロワーされると恥ずかしい」

【ツンデレ！ ツンデレ!!】

ええい、邪魔臭い。

全然ツンデレの定義から外れている。

「マサトキック！」

バキッ！ カキーン！

【バットで殴るのはキックと言わない……】

「ともかく、人の姿を写し取ってこっそり摩り替わる邪悪なモンスターですわ」

「顔はともかく、行動も間抜けに見えるけどなあ」

【お前にだけは言われたく無い】

いちいち言い返してくるヤツだ。

「マサトアツパー！」

スパーン！

ドシヤツ

【あ、足払い……】

「……」

「弱いな、こいつ」

【真似する対象が悪かった、ぐふう】

余計なお世話だ。

「姿形だけ真似ても無駄なんだ。せめて武器と防具もセットじゃなきゃな」

『お役立ちにごさるのである』

金属バットさん、常に俺より攻撃力高いしな。

「あ、思い出した。後でステータス確認しておこう」

「かしこまりましたわ。最近、確認してませんでしたものね」

ファルフナーズもポンと手を叩いて同意してくれる。

『主！ また奴が姿を変えるのである！』

シユウウウウツ！

【武器は無理だが、防具なら……くくく、これで貴様もお終いだ】

俺と瓜二つの姿の体表面が白くなる！

こ、これは——！

ドツペルゲンガーは新たな防具を纏った。

それは最強最悪の姿だと言わざるを得ない。

「俺の姿で、ファルフナーズの服、だとお!？」

『ミニスカ親父なのである』

きもーい！

我が姿ながらこれはキモい！

いい歳した男が白い超ミニスカ制服風ドレス！

ウサギ耳のヘアバンド！

そして光沢テカテカの白いニーソ！

「あ、悪夢だ……」

「マサト様！ とても勇ましくて可愛らしいお姿ですわ！」

「えっ？」

「えっ？」

「お前はあれが可愛く見えるのか？」

「マサト様はあれが可愛く見えませんか？」

「どう見てもニーソの繊維の隙間からすね毛がコンニチワしてるのだが」

「そこは御愛嬌ですわ。後ほど処理しましょうね」

いや、俺じゃねーから。

俺のドツペルゲンガーだから。

「何でファルフナーズの服なんだ！ 俺の衣装を真似ろ！」

【最強の防具をコピーするのは当たり前、ククク……】  
ある意味最強だ。

「マサトビーム！」

ガツガツガツツ！

『どう見ても突き攻撃なのである』

俺の八つ当たり攻撃を食らったドツペルゲンガーはフラフラとよろめく。

「最強の防具どころかただの服じゃねえか。あつ！ てめえ！ 内股でよろめくな！」  
内股になった俺の女装姿は最高にキモい！

へたり込んだドツペルゲンガーは降参の意を示した。

【も、もう戦えないわ……許して】

「女言葉になるな！　ヨヨヨと泣くな！　ハンカチを出すな——！」

粗悪コピー品にはご注意を。

……

…

「試合に勝って、勝負に負けた。そんな気分だ」

『愉快なものを見たのである』

ちくしよー、自分の姿でやられたら、そんな事言えないんだからな！

へたり込んだ俺と瓜二つの姿は、太ももの付け根から純白レースのパンツが顔を覗かせていた。

夢に出そう。

後ろでファルフナーズとデスノがキャツキャと嬉しそうな声をあげている。

「マサト、とても綺麗だった」

「デスノ様も御目が高いですわ！　戻ったらマサト様に、こちらの桜色ドレスを着て頂きますよう」

うちの女性陣は……

揃いも揃って美的感覚がおかしい。

真顔でしきりに頷くデスノを見ながら、この帰り道が永遠に続けば良いのにと思っていた。

ファッションショーをさせられた。

ファルフナーズの衣装で。

#58 「ふつ、そつちは残像だ！とかやりたいよな」

「よし、ステータス確認だ」

「それよりもマサト様、こちらの衣装を」

「いやそれハイレグ水着だよね!？」

「絶対マサト様に似合うと思うのですわ!」

似合わないよ。

もし似合ったら逆に嫌だよ。

押し切らないとビキニアーマー風ドレスを着せられそうだ。

お姫様が口を尖らせてスネたように言う。

「姫巫女の正装ですのに……」

「その格好で人前に出るのか。ぜひ着て見せてくれ」

「流石に儀式以外で着るのは少々恥ずかしくありますわ。でもマサト様も着てくださいるのでしたら」

腰元のアイテムバッグからもう一着取り出す。



深い絶望感に襲われる。

「2着あるのかー……」

「はい、予備としてもう一着。お揃いにできるのですわ」

お姫様が楽しそうです。何よりです。

でも、そんなのお断りだ。

ハイレグだぞ。

あんなもん男が着た日には……

股間の愚息がOB間違いない無しだな!

お見せできない! お見せできないよ!!

しかもペアルック。

「そ、それよりもスタータス確認をしよう。ダンジョン攻略には大事だ」

「ではこの衣装はその後で」

キャンセルできないのかー

何の罰ゲームだろう。

「私も魂さえあればマサトと同じ服にするのに」

とは、死神少女デスノさんの言。

「では確認致します。マサト様のステータス画面ですが――」  
「よし来た」

「マサト・オコノギ 20歳、身長161cm、体重72kg、童貞」  
「そこは読まなくて良いのに」

「ひんっ、申し訳ありませんですわ」

「このお姫様はまだ童貞の単語の意味を知らない。

一生知らなくて良いと思うよ！

「体重5kgも減ったか……」

「ご無理をなさらないで下さいね」

死ぬたびに減っているんじゃないだろうか。

デス・ダイエット。

「レベル37、ダンジョン・デーパー」

「まともな称号になった気がするな。デーパーって何だろう？」

「この場合は、より深くに潜る者、との意味かと存じますわ」

「なるほど。神様迎えたし、ボスっぽい風の精霊王も倒したしな」

レベルも以前の3倍だ!

確認を怠っていたのはちよつと迂闊だったが。

あれ? ひよつとして……

「俺、意外と頑張ってる?」

「はい、とても素晴らしい成績を残していると思うのですわ」

ファルフナーズが柔らかな笑顔で太鼓判を押してくれた。

元ヒキニートの俺でもやれば結果が出るものなんだなあ。

ちよつとうるつと来た。

【特性】【3柱主天使】【絶対時間軸】【錬金術】【未来視】

【増えたなあ。3柱主天使って何だ?】

「神様は1柱2柱……と数えるのですわ。この場合3つの神様に仕える最も偉い天使、という意味かと」

「ふ、ふくん……仕えてるのか、俺」  
部屋を振り返る。

ベッドの上でドラゴンボールのコミックスを読んでいる、銀髪少女のスクルド。

ノルニル3姉妹という神様らしいが普段はただの10歳児。

未来とか機械っぽいのを何とかする神様らしいが、正体は漫画を読む神様に違いない。

シーツにこぼしたコアラのマーチの食べかすは自分で掃除してもらおう。

壁に垂直に座り、エクササイズで前屈ぜんくつしようとして25度ほどしか傾むかず、痙攣しているのがハーちゃん。

ソロモンの悪魔、ハゲンティという悪魔らしい。

色気満点お触りOKなのに、触ると無意識レベルで俺の毛根をドレインしてくる真の悪魔だ。

泣きぼくろが雰囲気ある金髪美女なのだが、頭の中身はスクルドより幼い。

俺の真後ろ20cmにピッタリくっついて、首元に鼻息を送り込むことに勤いそしんでいるのが死神少女デスノ。

死に戻り能力を持つ俺の魂を送り返す死神なのだが、そこで俺に惚れたとか何とか。ややくセのある青髪がクールな印象を受けるが、中身はただの煩惱少女だ。表情があまり変わらないが、頭の中身は一番忙しそう。

「仕えてるのか……」

「お、御神々の常識は我々人間のそれとは、かけ離れておりますので」  
「ファルフナーズも多少は思う所があるらしい。」

3人の神様達は俺の視線を感じて返事をよこす。

「お世話になってるのじやー」とスクルド。

「いっぱいサービスしちゃいます、ですって!」とハーちゃん。

「夫婦は協力し合うもの。ワタシもマサトの力になる」とデスノ。

「……ま、いつか。全員好意的な神様だし」

「マサト様は御神々に気に入って頂ける才能があるに違いないのですわ」  
嬉しそうにお姫様が言う。

そんな才能あつたらヒキニートになってない気もするけど。

「ともかく続きを頼む。他の3つの特性は？」

「あ、はい。【絶対時間軸】、修正された時間の流れを記憶・知覚できる、とありますわ」  
「何を言ってるかさっぱりだ」

デスノが耳元で囁く。  
くすぐったい。

「それはワタシからのギフト。人間には知覚不可能な時間の流れを感知し、記憶と意識を保持できる」

「OK、ますます分からなくなつた」

人間には知覚不可能って……時間の流れなんて時計を見れば一発で分かるからな。

「次から死んだ時、死に戻るまでのワタシとマサトの、愛の巣での蜜月生活を忘れなくなる」

「そこは忘れておきたい」

::

「ええと、次の【錬金術】ですが——」

「はいはいっ！ それはハーちゃんからのギフト、ですって！ 物の形や材質を自在に操れる、ですって！」

ハーちゃんがファルファナーズに割り込んで説明してくれる。  
それは良いんだが、代償が常に俺の毛根なのが使い辛い。

「で、最後の【未来視】って何?」

「はい。【未来視】、限定的な運命線線感知により回避・命中にボーナス、だそうですわ」

「そりやワシからのギフトなのじゃー! ありがたく使うのじゃー!」

「うわっ、食べかす飛ばすな! 食べてる時にしゃべるなって」

(そりや済まなかつたのじゃー)

(頭の中に直接語り掛けないでください)

「さあ次、次」

「かしこまりましたわ、ええと……命中点52+114 (金属バット、詳細略): 銀戦士級」

「銀戦士?」

「はい、トリピュロン王国の神話で世界最初の王に仕えてた戦士の一団ですわ」

「ふふふ、この俺も神話級に手が届いたというわけか」

「ただ、その、どちらかというと端役はやくでして……」

「だめじゃん」

「申し訳ございません」

言葉を慎んではいたが、要は雑魚なんだろうな

恐らく、金の戦士の引き立て役ポジションなのだろう。

「ええと、打撃点52+114（金属バット、詳細略）：銀戦士級」

「常に金属バットさんには2倍の差があるな」

「次に回避点52+0：スーパーマウス級」

「結局ネズミじゃねえか。しかも敵の攻撃を回避した試しあったっけ？」

『思うに回避しようとしなければ無理なのではないだろうか』

「スツ、馬鹿め、そっちは残像だ。とか、やりにーな」

「……」

俺と金属バットさんの言葉を聞いたファルフナースが作り笑顔で無言になっている。

言いたい事は分かった。

俺が回避すると自分に攻撃がー、とか考えてる顔だ。

「そして防衛点59+32（鉄壁のプロテクター）+17（鉄壁のマスクとレガース）+

10（高級な浮遊靴）：ダイヤモンド級」

「おお、ダイヤモンド級とは！ 世界で一番硬い物質だな」



「マサト様の世界ではそうなのですか？」

「お前の世界違うの!？」

「ええ、ミスリルやアダマンチウムとか」

「ミスリルは聞いた事あるな。実在するののか」

「私のこのテイアラの装飾にも……ほら、ここの」

「ふーん……銀と同じに見える。あつ、銀より良い匂いがする？」

「ちつ、違いますわ! それは私の使っている香水の香りで……」

「へえ……シャンプーも換えた？」

「あつ、はい。お母様が私用にと素敵なお物を」

「あーっ! マー君がドサクサに紛れて姫を口説いておるのじゃー! スケコマシなのじゃー」

「ちやつ、ちやうわい!」

なんだか妙な空気はスクルドによって中断された。

助かったのか残念だったのか。

俺も妙な空気に尻のあたりが妙にむずがゆい気がしてたけど。

お姫様も鼻先でピンクの髪を指にくるくると絡めてモジモジしている。

「コホン、と咳払いでファルフナースが仕切りなおした。

「で、ではお次に体力点120：伝説のサンドバッグ級」

「お前の世界にはサンドバッグにどんな伝説があるんだ」

「さあ……」

「トレーニング好きの暑苦しい勇者でもいたんだろうな」

「幸運値：99＋（極上人生）」

「カンストの上って事だろうか」

「カンスト、でございますか？」

「カウンター・ストップの略な。計測の上限を越えたってことだ」

「なるほどでございますわ」

「この値だけは俺のステータスの中で唯一のオアシスだ」

「そして最後に魔力点45でございますわ」

「タクシーのおっさん呼び放題だな」

「あ、呪文一覧のページに新たな呪文が追加されておりますわ！」

「マジか! どんなのだ!」

「魔扉、と書いてあります」

「まっぴび……? 変な名前だな。効果は?」

「手を触れずに、離れた所の扉の開閉を自在に行える。同時に開閉する扉一つにつき魔力点2を使用する。単純な物理錠であれば解除される、とありますわ」

「なるほど、風の精霊王をこっちの世界に逃がした時みたいなミスを防げるかもしれない魔法か」

「地味に見えますが、応用の利きそうな呪文なのですわ」

「ようやく呪文らしい呪文をゲットしたぜ」

「どれどれ……魔っ扉ー!」

自室のドアに向かって手をかざし魔力を込める!

バタン!

「……」

「……扉の向こうは宇宙だった」

暗黒の空間にきらめく星が無数に見える。

「コズミック・ダンジョンですわ」

「これもダンジョンなのかー」

「無数の小さな光の1つ1つが大地なのだそうで」

「うん、知ってる。でも宇宙旅行はゴメンだ」

再び魔扉を使つて閉める。

「結局俺が使うとダンジョンを開くだけか。閉じる用途にしか使えないな」

まあ嘆く事も無いか。

上位互換の呪文とか出てくるかも知れないし。

∴

「以上でマサト様のステータス確認終了ですわ」

「わかった。ありがとうファルフナーズ」

「では、労ねぎらいのお言葉も頂きましたので、お楽しみのカチャの時間なのですわ」

「待って待って、待って。どこでそんな話になった?!」

「マサト様が頑張つてたくさんレベルアップしてくださいましたので、半額特典でたくさん回せるのですわー」

「ファルフナーズ、落ち着こう。落ち着いてその指を下に降ろすんだ」

気分は凶器を振り回す犯人と警察官だ。

あながち間違っていない。

お姫様があの指を前に押し出すだけで、俺の大事な毛根達が150本ずつ天に召される。

阻止せねば!

「喉が渴いたなー。ファルフナーズ、お茶を淹れてくれないか」

「……」

お姫様がジト目になる。

「きよ、今日は暖かい紅茶が飲みたいな〜」

「……」

お姫様の唇が尖って頬をふくらませている。

「い、1回だけな?」

「……30回は回せるはずなのにー」

と、言いつつもファルフナーズの口元にへらと笑みになる。

「必ず良い物を引き当てるのですわ! とおおおう!」

プチプチプチイ!

くううう!

さらばマイ毛根達！

空中にドラムリールが出現して回る。

ドウルルルル、デデドン！

『アンコモン』

魔法の巻物、一枚ふわりん

「また武器強化の巻物かー」

「残念ですわ。では次を」

「一回だけ、って言ったよな」

「でもでも！ もう一回だけ回したいのですわ！」

ファルフナーズがいつものように俺をポコポコ殴ろうとする。

——今だ！

回避発動ッ！

スッ

「ふっ、馬鹿め。そっちは残像だ」

スカッ

お姫様の手は空を切った。

「やったぜ、回避能力はこのためにあったのだ」

正直、叩かれても肩叩きにするならならぬくらいお姫様の力は弱いのだが。  
一度やってみたかった。

夢が叶うって素晴らしい!

「私のストレスを受け止めてくださらないのですねーっ」

挑戦精神的な所を刺激されたのか、ファルフナーズがドヤ顔で腕まくり。  
追いかけてきて再度ポコポコしようど……

スッ

「ははは、残像だよファルフナーズ君」

これは良い気分。

「マサト様ーっ」

「あははっ、捕まえてごらん」

ポコツ、スウツ、スカツ

ポコツ、スウツ、スカツ

「きやつきやつ」

「ふふっ」

……

∴

「また珍しいイチャつき方しとるのー」

「うらやましい。ワタシもやりたい」

「ハーちゃんの四次元重力殺法で捕まえてみせます、ですって！」

神々も黄昏たそがれるほどのバカっぽい遊びを堪能した。

でも追加で3回ガチャされた。

計マイナス600本。



## #59 「すっかり私のトリコなのですわ」

「よし、マサト様こちらへ！」

「なんだなんだ？」

ファルフナーズが正座して自分の膝をポンポンと叩く。

その手には耳かき棒が。

「先日お話した耳かきプリンセスの異名、披露させて頂くのですわ」

「うん、いきなり身の危険を感じるよ？」

「大丈夫なのですわ！ ご信頼くださいませ」

「毛根だけでなく、俺の穴という穴全てを駆逐するつもりか!？」

「何か言い方がいやらしいのですわ」

「気のせいだ」

ともかく逃げ出さなければ。

俺の本能が命の危機を告げている。

俺の背中を指でツツとするのに勤しむ死神少女デスノに合図を送る。

(デスノ、扉を開けて退路を確保してくれ！)

デスノはいつもの無表情のまま領きを返してきた。  
助かる。

持つべきものは物分りの良い死神だ。

シユルシユル……

「誰が服を脱いでと言ったかな!？」

「ワタシに夜伽を命じたのかと」

くっ、この娘は色々手遅れだ!

お姫様が耳かき棒を片手に手招きをしている。

あれはきつと耳かき棒ではなく、拷問道具に違いない。

前門の拷問吏ごうもんり、後門の死神。

「別に取って食べようと言うのではごさいませんのに」

「お前の国は人を食べるのか!？」

「まさか、うふふっ」と笑うお姫様。

「耳しか食べないのですわ」

「や、やはり……ッ!」

サア—ッ!

血の気が引く音。

「冗談なのですわ。ささ、早く」

「なんだ……冗談か。脅かすなよ」

胸を撫で下ろし、促うながされるままお姫様の太ももへ。

「——はっ?! しまった! 勢いで、つい」

「マサト様もお人が良すぎなのですわ」

王族こわい。

流れるように自分のペースに引き込んでくる。

くっ、ファルフナーズの左手が俺の頭をロックする。

覚悟を決めるしかないのか!

せめて容赦を乞う事しか出来ない俺だった。

「や、優しくして……」

「もちろんなのですわ。先つちよ、先つちよだけですわ」

会話がおかしい。

ああ神よ、俺を救いたまえ。

「マサト、準備と覚悟はできた」

俺の呼びかけに応えたのは死神だった。

しかも下着姿で。

「これが俺の遺言になるかも知れない……デスノ、風邪をひく前に服を着なさい」  
「くびゅんっ」

可愛いクシャミの音と同時に、地獄の耳かき棒が侵略を開始した。

……

…

「こ、こんなの初めて……」

「ふふふっ、マサト様もすっかり私のトリコなのですわ」

「耳が幸せ〜」

「ここですか、ここが良いんですか。えいつ、えいつ」

「あっあっあっ……」

人に耳かきをしてもらうのがこんなにも幸福だったとは。

「はいーいマサト様、もうちよつと首を前へ傾けてくださいませ〜」

「ん〜……」

「よろしよし、コーリコリ、か〜りかり」

「はひい〜」

変な声、出まくり。

脳みそがとろける〜

「あつ、動かないでくださいませ〜、ちようど大きいのが」

「ゴロゴロ音が聞こえる〜」

「はいっ、できました。お粗末様なのですわ」

「ふー、ありがとう。気持ち良かった」

「うふふっ」

「認めよう。ファルフナーズは一流耳かき姫だと」

「お褒めにあずかり、光栄なのですわ」

「耳かき姫の野望、大志」

すつかり満足して起き上がる。

「あつ、マサト様お待ちくださいませ」

「ん？」

「まだ反対側が残っておりますわ。さあ今度は左耳を」

「おお、スマンな。頼むよ」

頭の向きを逆に、再びお姫様の太ももへゴロン。

下はニーソ越しの太もも、上は耳かき、これぞ極楽。

しかも体の位置を反対側に変えるのではなくて、頭を逆向きにしただけだから……

今度は太ももとスカートとの境界が目の前に。

目を凝らせばその奥の白い生地、魅惑の雪原とも言うべき――

「もうっ、マサト様ったら、どこを見ようとされてるのですか！ めっ」

「い、いやあく、首の座りを最適な位置に」

見え見えのウソで誤魔化したりして。

スカートの裾を直されてしまった。

俺の頭が乗ったままなのに、器用な事だ。

「さあ、参りますよ」

だが、デスノがここで横槍を入れた。

「待って。姫が両耳ともやるのはズルい。マサトの左耳はワタシのもの」

「今日のマサト様のお世話当番はこの私、ファルフナースなのですわ」

そんなローテーション組んでたの？

本人、初耳なんですが。

耳かきだけに。

「耳かきはまた別。片方ずつ、今日の左耳はワタシがやる」

「そ、そんなあゝ」

デスノが手をかざすと、俺の体と耳かき棒が引つ張られる。

正座するデスノの太ももの上にすっぽりと俺の頭が納まった。

「私のマサト様の耳がゝ」

耳限定なのか。

だが、年下過ぎる2人とは言え、2人とも超をつけてもまだ不足なくらいの美少女。その2人に取り合いされるのは悪い気がしない。

ヒキニートだったついこの間に比べれば大出世だ。

……と、ニヤけた思考になっていたのが運の尽き。

ドシユツ！

「!?」

「!?」

キーン……

「……」

「……」

ツーン！

「ぎゃあああああああ！」

「マサト、動くと危ない」



「危ないどころか！ 既に大事故だ！」

「事後、だなんて……マサトいやらしい」

「血が！ 血があああ〜！」

「初めての時は良く出るって聞いた」

何の話だ！

左耳を抑えながら部屋を駆けまわった。

……

…

左耳はティツシユを詰めるハメになった。

明日、耳鼻科にでも行くべきか。

「マサト、ごめんなさい」

「つ、次から気をつけような」

無言で頷くデスノ。

常に無表情なデスノがしょんぼり顔になっていると、流石に怒れない。

「鼓膜じゃなくて本当に良かったよ……」

胸を撫で下ろしながらベッドに腰掛けてつぶやいた。

だが、俺の目の前に立ちはだかる金髪の美女。

ソロモンの悪魔ことハゲンテイ、通称ハーちゃんだ。

「ならばお次はこのハーちゃんの出番、ですって！」

「ちよ、待つ……」

言葉を失う。

ハーちゃんの右手には不定形な、動く銀色の耳かき棒らしきものが！

「錬金術は水銀が重要な触媒、ですって！ それで耳かき棒を練成しました、ですって

！」

「落ち着くんだ、ハーちゃん。水銀は確か人体に有害で……」

「ハーちゃんの異名もフルメタル・耳かきスト、だったんですって！」

「わけがわからないよ！」

後ずさりしてハーちゃんから逃れようとする。

背中に柔らかな感触がぶち当たる。

振り返るとそこには銀髪少女の女神スクルドが！

しまった！ 囲まれた！

「ならば先にワシの番なのじゃー」

その右手にはブリキと木で出来た、からくり仕掛けの謎の物体。尖った先端はスプーン状になっている――

キュイイイイイン！

「耳かき棒が出して良い音じゃねえ！」

「ワシの権能で作り出した、時計仕掛けのクロックワーク耳かき棒なのじゃー！」  
どうみてもただのドリルです。

「さあマー君、観念するのじゃー」

「ああああー……ッ！」

……

…

世界に静寂が訪れた。

正確には、俺から見た世界は無音になった。

難聴系主人公（物理）

ファルフナーズが何か言っている……

「え？ 何だって？」

申し訳なさそうに頭を下げる3柱の女神。

結果、ギフトとして特性「悪魔の聴力」を授けられた。

地獄耳になった。

「別に、死に戻りすれば回復するだろうから、いらなかったのに」

「わ、悪ノリし過ぎたお詫びなのじゃ……許して欲しいのじゃ」

ファルフナーズが胸を撫で下ろしながら言う。

「マサト様の広いお心に感謝するのですわ。スクルド様方は私がキツク叱っておきますので」

3 柱の神達が震え上がる。

叱られゴツド。

## #60 「俺の知ってるツンデレと違う」

「よし、今日もダンジョンで稼ぐぜ」

「頑張つて参りましょうね、マサト様」

バリバリ稼がないとな！

神様3人——3柱か——を食わせるのも大変だ。

ファルフナーズに取り出してもらった「どこでも扉」をオープン！

いざ、ダンジョンへダイブ！

「おや、凄い広い……これは、舞台？」

「マサト様、これは神殿でございます」

神殿なのか。

何か巨大なピラミッドのてっぺんを切り取ったような。

やたら真つ白な階段と舞台が目立っている。

「北斗の拳であった聖帝十字陵を真つ白にしたみたいだ」

「ほく……？ 何でございましょう、それは？」

お姫様はマンガに興味を示さない。  
読み方知らないだけかな？

俺の後ろから三者三様の声が。

「ほう」とスクルドの声。

「ですつてー」とハーちゃん。

「マサト、これは……」とデスノ。

何だ何だ？

神様お三方が一斉に声をあげたぞ。

「ここに何かスペシャルなイベントでもあるの？」

問いかけると、女神達は互いの顔を見合わせている。

ひよつとすると、また新しい神様でも出てくるのだろうか。

スクルドが俺の肩に手をポンと置いた。

「マー君、ここは頑張りどころなのじゃー」

多くは語らない。

だが、スクルドの表情は固くはない。

自然なで優しい笑顔だ。

と、なれば風の精霊王ほどの危機でない事は容易に想像できる。でも何かしらの運命の分かれ道に差し掛かったんだろう。

「マサト様、一体ここに何があるのでしょうか」

ファルフナーズが不安げに問いかけてくる。

仕方無い、少し安心させてやるか。

「大丈夫だ。せいぜいファルフナーズが1ヶ月プリンを我慢する程度の試練さ」

一瞬、きよとんとした表情になるお姫様。

だがすぐに苦笑を漏らす。

「もう、マサト様つてばこんな時に」

「ははは、まあ任せておけて」

緊張と不安は解きほぐせたようだ。



「——いえ、やはりプリンケーキ月は死活問題なのですわー!」

ダメだ、この食いしんぼプリンセス。

ふんすふんすと鼻息を荒くしている。

斜め下に食い気スイッチ・オン。

巨大な白い神殿の階段を昇っていく。

「何十段あるんだ。昇るだけで疲れるなー」

「マサト様、私を置いてマサト様だけでも先へ……」

ファルフナーズがへたり込んでしまう。

「諦めたらそこで探索終了だよ」

「マサト様あ……」

感動のあまり俺に尊敬の眼差しを向けるピンク髪のお姫様。

なんだこれ。

俺もそうだが、ファルフナーズは特に体力が無い。休み休みしながら、100段以上の階段を昇りきった。

そこは——だだっ広いだけの広間だった。

「何も無いなこれ」

「はひはひ……いえ、マサト様、はふはふ……」

「呼吸を整えてからで良いぞ」

あんなに甘い物を毎日食べてるくせに。

その栄養はどこへ……

考えるまでも無かった。

呼吸で上下する小柄な体に半テンポ遅れて動く双丘だ。

平たく言えばおっぱい。

丸いけど。

ありや中身はプリンだな。

食べさせろ。

「マサト様から邪よこしまな視線を感じるのですわ」

「い、いやらしい事なんて考えてないぞ！」

ちよつとしか。

「どちらかと言えば、頓狂とんきような事を……」

「お前、本当に俺の心が見えてるんじゃないだろうな!？」

「もうっ、どんな事を考えていたのでございますかー」

「そりゃあ、将来はファルフナーズの胸を下から支える仕事に就きたいと——」

しまった、口が滑った。

お姫様の視線が痛い。

ぶいっ

サササッ！

顔を背けても回り込んでくる。

ごめんなさいするまで許してくれなかった。

∴

「で、何があるって?！」

「そうでございました。あちらに人影が」

「そりや悪い事したなあ……待たせちやって」

「確かに。申し訳ないのですわ」

「だがほぼ確実に敵だろうし、むしろ焦らし効果があつたかも知れん」

「ものは考えよう、ですわね」

慎重に人影のある方へ近づいていく。

「どうやら2人だな」

「とても長身の男性と、小柄な女性のようにすわ」

小柄な女性のほうが声を張り上げた。

「よく来たわね！　ここは姫巫女の決闘場よ！」

「何だって!?!　決闘!?!」

「まあ！　そんな試練まであるのですか」

だが同時に納得もした。

確かに運命の分かれ道っぽい。

背の高い男が気合の叫びを上げ、前に進み出てくる。

前置きもロクに無しでいきなりバトルかよ！

無茶苦茶マッチョで上半身はベルトのような物を巻いただけの半裸。

巨大で分厚い剣を軽そうに振り回している。

ぶっちゃけ顔が怖い。

目が赤く光ってるし。

無理だな。

絶対勝てないやつだこれ。

「あたくしの戦士はレベル256よ！ 貴女の戦士はおいくつかしら!？」

小柄な女性が叫んでいる。

かなり若いようで少女っぽい。

逆光のせいで良くは見えないが、ファルフナーズの服に似た赤いドレス・アーマーを

着ているようだ。

「私の戦士は……ええと、レベル37ですわ！」

うちのお姫様も言い返す。

気のせいかな？

レベルの桁が違うよ？

『我が主よ、戦闘態勢を』

「大丈夫だ。負ける準備は万全だ」

『負け前提とは……』

「見た目的にもレベルも、桁違いだからなあ」

だが、赤いドレス・アーマーの少女が言葉を続けて事情が変わった。

「あたくしが勝ったら貴方のその魔法の服をもらうわ！ 白い姫巫女さん！」

「なっ——!?! ファアルフナーズの服!?!」

思わず振り返る。

ファアルフナーズの表情が真剣なものに変わる。

「どうやら相手の何かを奪えるルールのようなですわ。ステータスの画面にそう文字が出ました」

「つまり負けたら、ファアルフナーズがこの場で……脱ぐ!?!」

「……」

「……」

「もうっ！ マサト様ったら、こんな時にまで！」

「い、いや、別にわざと負けようとかしてないよ!？」

でも結果的に負けちゃうんじゃないよね！

「ひーん、金属バット様、マサト様を何とかやる気にさせてくださいまし」

『応。我に秘策有りだ、姫よ』

おお？

この俺を説得するつもりか？

腐っても元ヒキニート。

動かざる事山の如しだぜ？

『我が主よ……こう考えるのだ。姫の着替えはまたいつでもチャンスがある、と』

「……なるほどー！」

「何が『なるほど』でございますかーっ！」

ファルフナースが俺の背中をぺちぺちと引つ叩く。

相変わらず力が弱すぎるので、むしろ撫でられている感じしかない。

「理解した。向こうの姫巫女の着替えは今この場限りのチャンスだと」

『然り、である』

「マサト様のふしだら！ ふしだらさんっ！」  
ちよつと可愛い言い方してる。

面白い罵声を背に赤の姫巫女の方へ向かう。  
その容姿とスタイルを確認せねば！

「ちよつと！ そつちの要求がまだじゃない!？」

赤の姫巫女が非難するが知ったこつちやない。

だが、向こうの戦士とやらが俺の前に立ちはだかつて赤の姫巫女をかばった。  
赤の姫巫女が叫ぶ。

「やつちやえ！ バサーカーー!」

バサーカーと呼ばれた勇者が俺に巨大剣を振り下ろす！

だが、遅い。

煩惱は俺の思考と行動を加速する。

今の俺に攻撃を当てなければ、視界に入る前に攻撃するべきだった。

「回避発動、アンド【未来視】！」

やつの動きは見切った。



しかも予測できる。

最小限の動きで剣の軌道を回避、バサーカーの背後に立つ。もちろん、あえて背を向けて。

腕組み直立、肩越しに振り返る。

「馬鹿め、そつちは残像だ」

残像無いけど。

次から意味も無く赤か黄色の長いスカーフを装備しよう。

「又ウツ!？」

巨大剣を地面に叩き付けたまま呻き声をあげるバサーカー。

案外ノリのいいヤツだな。

目の前にいる赤の姫巫女も驚きの声をあげる。

「は、早い……残像すら見えなかったわ!」

残像無いしね。

この子もノリが良いな。

根が素直な少女に違いない。

「あれ？」

この赤の姫巫女の少女、どこかで見たことが――

振り返って確認。

お姫様に問いかける。

「なーあー、お前って結婚してて娘とかいるー？」

「マサト様ー、何でございますかー」

ファルフナーズがトコトコと走ってくる。

とつとこプリンセス。

相変わらず足が遅い。

しかし……この距離を俺は回避しつつ一瞬で詰め寄ったのか。

凄いな、俺の煩惱。

ファルフナーズが近寄ってくると、案の定赤の姫巫女が驚きの声をあげる。

「ファル姉様!」

「まあシャフルナーズですよの!？」

駆け寄って抱き合う2人。

やはり家族だったか。

姉姉妹、感動の再会――

ゴツ！

「いってえ！」

振り返ると、バサカーの剣で頭を殴られていた。

くそつ、コイツ空気を読まないタイプだな。

無言で更に巨大剣を振りかぶり、攻撃を続けてきた。

「ちよつ、待ってっ！ 今あの姉妹が再会の喜びを分かち合ってるシーンなんだからさ  
！」

「フンヌツ！」

ファルフナーズ達は抱きしめ合って喜んでいる。

「ふあ、ファルフナーズさーん！ 助けてー！ 【魔法の盾】使ってー！」

「セイッ！」

こっちの様子は目に入っていない。

感動の涙を流し、互いに拭きあっている。

「ファルフナーズーッ！ 早く来てくれーッ！」

「ハアッ！」

手に手を取ってピョンピョンと飛び上がって喜んでいる。

「ファルフナーズ様ーッ！ お助けー！」

「ゴアッ！」

あつ、座り込んで話し始めた！

「ちくしょー！ 俺がピンチだつてのに！」

『いや、主よ。どうやら思ったほどピンチでも無いようだ』

「なんでさ!？」

『先程、頭にもろ一撃入ったのに、主は平然としてるではないか  
そう言えば……せいぜいコブが出来るくらいかな。』

いや、コブが出来るってのは十分痛いけど。

「良く分からないが、レベルの差ほど強くは無いつて事だな！」

『そのようである』

「ならば次の攻撃を——回避発動アンド【未来視】！ 馬鹿めそれは、ええい！ 省略！」

盛大に空振りしてバランスを崩した所を狙う！

「燃えろツ金属バットさん！」

『応ッ！』

「マサト・スマツシユ！」

『口で言ってるだけである』

カツキーン！

「グアアアアアアーツ！」

叫び声をあげながらバサーカーは吹き飛んでいった。

床にバウンドして、またバウンドして、もう一回。

転がって転がって……

「あ、階段から落ちてった」

『追加ダメージである』

ふう。

理由は分からないが、とにかく大した敵じゃなくて良かった。

「あら、マサト様。お疲れ様なのでございますわ」

「今頃気づいたのかよ！」

ファルフナーズが気付いて立ち上がった。

長生きするよ、このお姫様。

「マサト様、紹介するのですわ」

「お、おう」

ファルフナーズは赤い姫巫女の肩を抱いて笑顔になる。

赤く長い髪が鮮やかでドレス・アーマーと合っていた。

切れ長のつり目がちな赤い瞳が印象的だ。

「私の妹、シャフルナーズですわ」

「ふんっ！ あたくしの事はシャフリンと呼んでもいいのよ！」

わあ……ツンデレっばい。

と思ったが前言撤回。

いきなり俺に抱き付いてきて頭をぐりぐりと擦り付けてきた。

「お、おい……?」

「申し訳ありません。マサト様の国の言葉でツンデレとか言う性格でして」  
「俺の知ってるツンデレと違う」

めっちゃハグしてくるツンデレなんて存在しない。

唇から八重歯がコンニチワしてるけど。

「お義兄ちゃんって呼んであげてもいいんだからね!」

んんー!?

どこかで扉が閉まり、鍵のかかる音が聞こえた気がする。

俺に頬ずりしてくるシャフルナーズの柔らかさを感じながら、その言葉の意味を考え  
まいとした。

お義兄ちゃん……?」

## #61 「お前が。パパになるんだよ！」

「よし、聞かなかった事にしよう」

「何を聞かなかったの？ お義兄ちゃん！」

シャフルナーズが俺の背中に抱き付いてくる。

姉のファルフナーズとは違って、距離感が近い。

物理的に。

「しや、シャフルナーズさん」

「もうっ！ シャフリーンで愛称で呼んでいいのよ、って言ったじゃない！」

「そう、それだ。シャフリーン、俺も愛称で呼んで欲しい」

「えーっ、お義兄ちゃんて呼びたいのにー！」

その呼び方は何か将来を縛られる気分になる。

ぜひ変えてもらおう。

「うーん、お義兄様？」

「ノーさすおに、ノー」



「義兄上様？」

「増えそうなのでチェンジ」

「おにー様？」

「うーん、チェンジ」

「兄ちやま？」

「戻った」

…

「もーっ！　じゃあ何てよべば良いのかしらっ？」

「もうちよつとこう、フレンドリーかつフランクに」

「……にーに？」

「それだ！」

　シャフリーンと抱き合って喜びを分かち合う。

　謎の感動。

「にーに！」　「シャフリーン！」

「にーにっ！」　「シャツフリーンッ！」

「あははっ！ にーにー！」 「ははは！ シャフリん！」  
謎のくるくるダンス。

ダンジョンを出るまでのわずかの間とは言え、心臓に悪いからな。  
俺にじゃれ付くシャフリーンを見て、お姫様がふふつと笑う。

「さっそく仲良しさんなのですわ」

「顔立ちはそっくりなのに、距離感がえらく違う姉妹だなー」

「あら、むしろ私がシャフリーンくらいの頃はもつと甘えん坊なのでしたわ」

「マジか。さあ、甘えて来い！」

両手を広げておいでおいでの体勢。

でも手をわきわき。

「大変な身の危険を感じるのですわ……」

「どうした！ 恥じらいなんか捨ててかかってこい！」

乗ってこなかった。

当たり前か。

：

「さあ、ひと戦闘して疲れたし、ひとまず帰るかー」  
「かしこまりましたわ」

白い神殿を後にした。

しかしファルフナーズに妹が居たとは。

妙に甲斐甲斐しかったりするのは妹が居たからだだったんだな。

顔立ちは本当にそっくりだ。

年齢が3つ4つ下で、目元が切れ長で活力にあふれている印象だった。ファルフナーズはやや垂れ目気味のおっとりした雰囲気なのに。

まあ胸は年相応と言うか……日本人から見たらスーパーモデル級だが、わずか数年でファルフナーズ並みの大きさになるのか。

何て素晴らしい事だろう。

次に会う時はどのくらい大きくなっているのか。

トリピュロン王国で再会するのが楽しみだな。

パタン。

背後で【どこでも扉】が閉まる音がして、部屋に戻ったのだと気付いた。  
いかんいかん。

モンスターが出ない階層のようだったから良かったけど。  
あまり気を抜き過ぎるもんじゃないな―

部屋でくつろいでた3柱の女神達に挨拶をする。

「ただいま―」

「おかえり、マサト」とデスノ。

「やっぱりこうなりました、ですって!」とハーちゃん。

んん……?」

「おかえりなのじゃ、マー君。色々大変じゃろうが、頑張るのじゃぞ」とスクルド。

おかしい。

彼女達が何を言ってるのか分からない。

そう思ったのは、わずか一瞬だった。

俺の目の前に翻る、赤いドレス。

「わー！ にーにの世界はあたくし達の世界と全然違うのね！」

「……」

「……なによ？」

「待て、なぜシャルりんがここに居る!？」

「……はっ!? 言われてみればそうだったわ！」

慌てて「どこでも扉」をオープン！

うーん、普通のダンジョン。

「ダメだ。もう別の階層だ」

「帰れなくなっちゃったねえ」

「……」

「……なによー？」

「元の世界に戻れなくなった割に落ち着いてるなあ」

「うーん、あそこの世界、何か原始的で好きになれなかったわ！」

そうですか。

確かに元の世界と言っても、あのバサーカーという戦士の世界だ。

シヤフリんの故郷じゃないからなあ。

「こつちならファル姉様もにーにもいるし！ 今日からここで暮らすわ！」

「いやいや、そうは言ってもウチの家計にも事情がね？」

「……」

「……」

「……うっ、ぐすん。」

しまったあああああ！

泣かれたあああああ！

涙をぼろぼろこぼし始めたシヤルりんをファルフナーズが抱き止めて慰める。

「マサト様、ご迷惑にならぬよう私が厳しく躰けますので、どうか……どうか寛大な処遇を」

「あたくしは……ぐすう、ファル姉様と、にーにと一緒に……居たいです……ぐしゅ」

「も、もちろんだ！ 俺だってシャルリんと一緒に居たいぞ！」

「ほんとうにいい……？ ぐしゅん」

「当たり前だ！ 可愛い妹が出来て嬉しいなー！」

「にーに、優しい。大好き……」

抱き付いてくるシャルリんの頭を撫でてやりながら天井を仰いだ。

生活費と居住スペース、どうしよう……

『明日からダンジョン探索に励むしか無いのである』

俺の心を察した金属バットさんが小さく呟いた。

それしか無いよなー

んん……？

そうだったのか！

物凄い勢いでスクルドのほうへ振り返る。

「そう言う事じゃ」

「スクルド……この結果を最初から知ってたな!?!」  
思い出した。

出発前にスクルドに声をかけられた時のあの笑顔。

あれは優しい笑顔じゃあ無かった。

ある種の諦め、労いたわりの笑顔だった……

「確率的に最大というだけで、必然的な結果では無かったのじゃ」

「さっぱり分からん!」

「この現状になる確率は100%のうち、わずか25%。その他5%の確率で姫が直前で気付いた。5%の確率で赤い姫の戦士が呼び止めた。5%の確率で扉を閉める前にマー君自身が気付いた。5%の確率で再度開けた扉が同じ場所に繋がった。5%の確率でマー君が赤い姫を拒絶し——」

「あ、もういいです。すんませんした」

「なんじゃー、ここからが本番だったのに」

何? 本番で。

もつと酷い展開があつたのか!?

恐ろしくて聞きたくも無いな。



「もう少し分かりやすくヒントをくれても良かったのに」  
思わず愚痴がこぼれる。

スクルドがニヤリと笑って返す。

「神たるもの、受けた恩と仕打ちは絶対に忘れぬのじゃ」  
その手元には進撃のコミックス5巻目。

バレてましたか。

触らぬ神に祟りなし。

ハーちゃんがトドメの一言。

「家族が増えるよ、やったねマサトさん、ですって！」

俺がパパになるんだよ。

にーにだけどね！

＃62 「これはスライムですか？はいそれはスライムです」

「よし、マサト様、お風呂が沸きましたわ」

「おう、サンキュ。さっそく頂くとするか」

一戦、いや一発で倒したとは言え、一応強敵だった。

だから疲れても許される、はず。

「マサト様、お召し物を」

「頼むー」

ファルフナーズが俺のシャツのボタンを外し始める。

ピンクの髪に包まれた頭が、俺の顔の前で揺れてくすぐったい。

いや！

これは決していやらしい事ではない！

ダンジョン・オープナーの能力のせいなんだ。

俺が開いた、開けたものは全てダンジョンに繋がってしまおうから。

扉だけに限らず、ファスナー、瓶、弁当の蓋、はては便座カバーまでがダンジョンの入り口となる。

だから危険を避けるために、着替えなどはファルフナーズに手伝ってもらうのだ。えっ、服は「脱ぐ」ものだから大丈夫だって？

……。

こまけーこたーいーんだよ。

万が一って事もあるしね！

実際、シャワーの蛇口がダンジョンの入り口になった事もあった。

蛇口は開けると言うより「ひねる」ものなのに。

用心しておくに如くはない。

まあ、厳しい戦いの日々、ひとつくらい楽しみがあっても良いじゃないか。

と、自分の心に言い訳をしておく。

「だが待つて欲しい」

「どうかされましたか？ マサト様」

ファルフナーズが俺のジーパンに手をかけた所で止まって訊ねた。

「あれは何だ」

「何だと申されましても……ご存知の通り、私の妹シャフルナースでございますわ」

「そんな事は分かってる。どうしてシャフリんがここに居るんだ」

「それはもちろん、マサト様のお背中を流させて頂くためでございますわ」

シャフルナース、通称シャフリん。

12・3歳のファルファナーズの妹。

鮮やかな赤い長髪と切れ長の目が魅力的な女の子だ。

それがバスタオル一枚、体に巻いただけの姿で立っている。

ドヤ顔で腰に手を当てる。

「今日からお世話になるのだから、背中くらい流してあげてもいいのよ！」  
くっ

そこは姉のほうでお願いしたかった。

胸の装甲厚が段違いだ。

チエンジ効かないかなー

別におっぱいで洗ってもらうわけじゃないが……

だが、シャフリんの好意を無下むげにも出来ない。

今日の所はシャフリンドのバスタイムを楽しむとしようか。

カラララ……

「……」

「……」

「バスタブが！ バスタブが、ピンクの液体に満たされているぞ！」  
「落ち着いてにーに！ あれは入浴剤よ」

ボコン

コポオ……

「大きな泡が浮いてきてるんだけど！」

「そういう種類なのよ！」

ヌラア……

「縦に伸び上がってるんだけど！」

「平気！ 平気だから！」

「……」

「……」

「シャフリん、いやシャフルナーズさん」

「はい」

「あれはスライムですか？」

「はい、あれはスライムです」

「……」

「……」

「ファルフナーズ！ 風呂にスライムが！ 風呂にスライムがー！」

「落ち着いてにーに！ あれは安全！ 安全なスライムなのー！」

プルプルプル

『ボク、悪いスライムじゃないよ』

「キエエー！ シャーベッターー！」

……

…

「……な、なるほど。人間に有益なスライムもいるつて事か」

「ええ、あれは弱酸性スライムといって、人に危害を加える能力もないのよ」

「体とか溶かされて同化しないの？」

「消化力が弱いのだよ。角質や垢、人の体の余分な老廃物だけを食べてくれます。お肌ツヤツヤ、保湿成分も分泌してくれて髪の毛しっとりです。花の香りをコピーする能力があつて、この子はローズマリーの香りを出します。泡立ちも良くてソフトな感触。水切れが良く洗い流しもスツキリです」

「なんで営業口調になるんだ」

「にーにローズマリオの良さを分かってほしくて」

「何だそのローズマリオって。名前か」

「そう。あたくし専用のバブル・バス・スライムよ！」

マリオって事か男なんだろうが……

異世界人の感性には付いて行けないな。

「口も脳も無いけど、どこで考えてしゃべってるんだろう」

「そこは割りと根性で」

「根性かー」

「はいー」

なら仕方ないね。

カラカラッ

「マサト様、どうかされましたか？ 大声で呼ばれた気がしたのですが」

「ああ、ファルフナーズ。この弱酸性スラ——ガボゴボガッ！」

頭からスライムをぶっ掛けられた。



「な、何でも無いのよ、ファル姉様！ にーにがこの入浴剤を珍しがって、飛び上がって喜んでただけよ」

「まあ、マサト様のお気に召したようで何よりですわ。では、ごゆっくり」

カラララツ、パタン

「……」

「……」

「ゲホツ、少し飲んだぞ！」

「大丈夫よにーに。オーガニックな成分だから、むしろ健康に良いのよ！」

オーガニック（有機）というよりレア（生）だよね。

『ポツ……ポク、お兄さんとひとつに』

「そういう言い方はやめて。マジほんとに」

「にーに、ファル姉様はモンスターが苦手だから、この子はただの入浴剤としか教えてないの」

「あいつのモンスター嫌いは生まれつきだったのか」

「うん。だからこの子にもファル姉様の前ではしゃべったり動いたりしないように躰をつけてあるから」

「なるほど……」

シヤフリんが洗面器で弱酸性スライムを浴槽からひとすくい。

ぬぼんっ

「粘り気あるんだけど……」

「ふふっ、この子もにーにが気に入ったみたい。つつい力が入って粘っちゃうのね」  
嬉しくないよ？

シヤフリんが命じるとサラサラの液体になった。

「にーにはきつと人外に好かれる才能があるのよ。神様もたくさん居たし」  
「神様はともかく、モンスターに好かれてもなあ」

シヤカシヤカ……

「……」

「……」

あれえ？

目の前で膝立ちになって、洗面器の中で薄いピンクの液体をかき回すシャフリん。何だかイケない事をさせている気分になってきたよ？

「こう見えてもファル姉様やお母様の背中を流して、いつも褒められてるのよ！」  
「へえ、偉いな。家族孝行とは、良い姫様になるだろうなー」

よし、会話と思考を普通の方角に戻したぞ。

これで穏やかなバスタイムを――

「2人から泡姫と呼ばれてるんだから！」

「うん、ダメなやつだそれ」

風呂から上がったらファルフナーズに良く言い聞かせなければ！

外出中にうっかり口を滑らした日には、社会的に終わりそうだ。

「さあにーに！ 洗って差し上げるわ！」

「背中だけで良いよ。後は自分で」

その両手に盛ったピンクのスライムの山はちよつと。

少しずつ自分で使って試したい所だ。

「もー！ にーには怖がりさんね！ やっちゃえ、ローズマリオ！」

『来て！ お兄さん、ボクのナカに』

バスタブのスライムがせり上がって俺を包む！

「うわあああ！ やめろオ！」

「ローズマリオ！ 泡立ち攻撃よ！」

「今、攻撃って言った！ 攻撃って！」

『お兄さんを、ボクのナカの奥まで！』

「そうよ！ にーにをソープに沈めるのよ！」

それは色々間違っている！

## # 6 3 「タクシー乗るだけでレベルアップ」

「よし、今日から荒稼ぎだ！」

「その意気ですわ、マサトさ——くちゅんっ！」

ファルフナーズが可愛らしいクシャミをひとつ。

「お大事に」

「申し訳ありませんですわ」

「昨日は風呂場で大変だったから……」

「ええ……重ね重ね申し訳ございません……」

「今日は休んでもいいよ？」

「そんな訳にも参りません！ マサト様ばかりにご負担をかけるだなんて」

別に良いのに、とつぶやいたものの、お姫様は案外頑固。

風邪の原因が妹のシャフリンだし。

ダンジョンへ稼ぎに行くのも、増大した生活費に充あてるといふ目的がある。

要は気負ってるんだな。

程好くモンスターを狩って、疲れたと言って早めに戻る事にしよう。

ファルフナーズから【どこでも扉】を受け取り、代わりにティッシュ箱を携帯させる。

「このティッシュと言う品は本当に素晴らしいものですわ」

「ただの紙だよ？」

「とんでもございません！ これほど肌に優しく、清潔で、軽くて、しかも安価な——つ  
くちゅん！」

「お大事に。喉と鼻、労いたわらないと。しゃべるのは最低限にな」

「はひ。申し訳ありませんわ。ティッシュの素晴らしさについては、また後日」

えらくティッシュが気に入ったみたいだな。

風邪が治ったらティッシュ姫と呼んでやろう。

…

「さあ入場だ」

「はひ」

「……」

「……」

「ファルフナーズが鼻声になると、何か面白い声になるな」

「もーっ！ マサト様ってばデリカシーが無いのですわ！ もーっ！」

もふん、もふん

使い終わって丸めたティツシユを投げつけるのは止めてください。  
ともかく【どこでも扉】をガチャツ

「夜の森だ」

「はひ」

「ダンジョンですら無いな。見ろ、夜空に大きな満月だ」

『否。自然の地形にしては木の生え方が極端なのである』

金属バットさんが異を唱えた。

「確かに、道が真っ直ぐになるように木が覆い茂るなんて不自然すぎるな」

『しかも直角の曲がり角まで有るのである』

無いアルよ。

「要は森っぽいダンジョンって事だな」

「はひ。……つくちっ」

「お大事に」

ティツシユ、もう一箱持つてこようかな？

アオーンッ……

「犬の鳴き声が聞こえる」

『あれは遠吠えと言うのである』

道の……いや、通路の曲がり角から3つの黒い影が。

「犬だ！」

『あれは狼である』

どっちでもいーです。

「グレイ・ウフフ。レベル5でふわ！」

完全に鼻声だなー

まーレベル5なら苦戦するまい。

「飛び掛ってきたところをカウンターだ」

が、3匹のグレイ・ウルフは金属バットさんが届かない距離で止まる。

グルルルウ………！

「おっ、威嚇か!?! だが、お前らの実力なんざ見切ったぜ」

ファルフナーズがね。

鼻声でね。



「どしたどしたア！ かかってこい！」

挑発してもダメだった。

『我が主よ！ 敵の増援である』

えっ

グレイ・ウルフ達の後ろの曲がり角から更に3匹の仲間が飛び出してきた。

「厄介だな。どんどん増えるかも知れない」

『先手必勝なのである』

しかしこちらが前へ出ると、向こうがその分下がる。

威嚇の声がいや増していく。

「ちっ、囲んで磨すり潰そうってハラカ」

『群狼戦術ウルフ・パックという』

「だが囲んだくらいで倒されてやるマサト様じゃないぜ」

『向こうは警戒して、こちらの間合いに踏み込んで来ないのである』

ならば、こうだ。

いつも通り、野球のスイングの構え。

もちろんこれでは狼達に届かない。

「だが、俺のスイングは伸びる！」

金属バットさんは「伸縮自在」の能力がある。  
振りながら伸ばせば――

ブオンッ！

バキヤキヤキヤッ！

ギャワワンッ！

「一網打尽ってワケだ！」

横薙ぎに振られた金属バットさんは伸びながら狼の群れを蹂躪した。  
魔法で伸びるその軌道には対応できないのだ。

『我が主とは思えぬ智と勇の冴え！』

「素直にほめろー」

『マジ最高、超クールなのである』

まとめて3匹、ぶっ倒してやったぜ。

次の3匹も同じ要領で一網打尽。

倒した狼は牙と毛皮を残して光となつて消える。

これを後で両替機で換金しろつて事だろうな。

毛皮とつておいて、いつかの日に備えてフード付きの服を作ろうか。

などとドロップ品を拾いながら余計な事を考えていた。

アオオーンッ！

「マサトひやま！ 新手の狼でふわ！」

「分かった！ いや、良く分からんけど！」

鼻声がどンドン酷くなるな。

ドロップ品がいくらになるか分からないけど、これ倒したら帰ろうか。

突然金属バットさんが叫んで警告してくる。

『主！ 倒した敵が復活するのである！』

振り返ると、俺とファルフナーズの間には半透明の狼が6匹。

ちようど倒したまま転がってた場所のあたりだ。

「うわ面倒臭い。敵も死に戻りかよ」

『むしろその場復活なのである』

「なお悪い。少なくとも倒したら即その場を離れないと危険だな」

『恐らく、あの遠吠えが復活の合図かタイマーなのである』  
なるほど。

「立ち止まってないでザクザク進むしかないか」

ぱつと走り出すも、はつと気付いて立ち止まる。

振り返るとスローモーションのように走るお姫様の姿が。

ファルフナーズは走るのが異様に遅いんだつた。

お姫様に追いつがろうとする狼6匹を、先ほどの要領で一気に倒す。

返す刀で前から来る3匹も瞬殺。

「これ、最後は物量で押し潰されるパターンだな」

『数で押されては打つ手無しなのである』

ファルフナーズを進ませつつ、後ろから短時間で復活する狼をなぎ倒す。

その復活間隔は10分も無い。

「マサトひやま！ 分かれ道はどちらへ」

「えーと、えーと……右！ 右だ！」

『主よ、再び狼が追ってくるのである』

えーい、忙しいダンジョンだ！

……

…

退きながら戦い続けて結構な距離と時間を費やした。

正直へとへとだ！

「まひやとひやま！ まはひひほはりでふわ！」（訳注：マサト様！ また行き止まりですわ！）

「もはやファルフナーズの言葉が意味不明になってきた」

鼻かみ過ぎだ。

風邪薬と鼻炎薬を買ってやらないとな。

『ジリ貧になってきたのである』

「ここまで進んでダメでした、なんて御免だぜ」

なにせ途中からドロップ品を拾っていない。

狼がどんどん増えるから、拾っている時間も惜しくなった。

このままじゃ、精神的に赤字だ。

『もはやこれまで』

「景気悪い事ばかり言うんじゃねー！」

くそー、この不況の中、金を稼ぐのも楽じゃない。ダンジョンに不況は関係ないか。

だが先日また壊したシャワーのカランと鏡の修理代はもぎとってやる。そう言えばスマホの料金も払わねば。

ヒキニートだった最近までは気にしてなかったが。

今では俺にとってスマホは——スマホ、料金……！

——そうだ！

『いよいよもって年貢の納め時』

「それでも無いさ。要は移動と攻撃を同時にできれば良いんだから——」

『そんな手が!?』

「あるんだぜ！」

スマホを取り出して魔力を込める！

「速攻召還！ クレイジータクシー！」

ガッシャーン！

パパーンツ！

木々の壁がある空間を割って、タクシーが飛び出してきた。

今の状況にこれほどうってつけの物もあるまい。

「兄ちゃん、呼んだか！」

「おう、ちよつとボス部屋まで頼むぜ！」

ファルフナーズを押し込むようにしてタクシーに乗せる。

おっさんの運転でトラウマになっているが、流石にこの状況ではお姫様も文句は言わない。

狼を蹴散らしながら俺もタクシーへ飛び込んだ。

「何だよい！ 兄ちゃんは屋根じゃないのか！」

「どこの珍走団だ！」

「ま、仕方ねえやな。トゲ付きのジャケットも着てねえし」

「そつちか……」

いつぞやの妄想が現実になってしまった。

タクシーが狼の群れを跳ね飛ばしながら森のダンジョンをかつ飛ばす。

「どけどけい！ ワン公ども！」

「こりゃいいや。どんどん狼を倒してくれ」

「タクシー乗るだけでレベルアップってか？ チートだな、兄ちゃん！」

「どこぞのラノベか！」

『ただし有料なのである』

金で経験値買ってるようなもんだな。

『しかしトゲ付きとは良いアイデアなのである』

「金属バットさんが次なる進化を模索し始めた」

生やすのか……トゲ。

ますます絵面が酷くなるな、俺の装備。

「もはや金属バットというより鬼の金棒だな」

『それはそれで』

いいのか。

タクシーのおっさんがクラクションを連打しながら叫ぶ。



「馬鹿野郎い！ バットに生やすのは釘って相場が決まってるだろオ？」

そんな進化、全力でキャンセルだ。

## #64 「ティツシユもっふん、もふんふん」

「よし、あれがボス部屋に違いないぜ、兄ちゃん」

「一気にボスを撃破してやるぜ」

おっさんのタクシーで森道ダンジョンを移動中。

襲い掛かってくる狼を跳ね飛ばしながらの爆走だ。

正面に蔓草に覆われた門が見えてきている。

「オーケー！ ぶち破るぜ！ 掴まってな！」

「えっ!? いや、門を破れって意味じゃない！ 待っ——」

ガシャアーン！

「イーヤツフーウ！ ボスあどこだあー！」

「っ痛え！ おっさん落ち着けーっ！」

危うく事故だ！

門と衝突した衝撃でタクシーが跳ねて、車の屋根に頭をぶつけた。

タンコブーっ獲得。

ダンジョンでタクシーなんかに乗るもんじゃないな！

ボス部屋は開けた丘のような地形になっていた。

「いたぜ兄ちゃん！ あれがボスに違えねえ！」

「移動に突破に攻撃に、おまけにナビまでついてる召還魔法とはな」

「便利だろお？」

「自分で言うな」

丘の上に大きな獣の影が見える。

「丁度、満月を背負って凄味のあるシルエットだ。勝てるかなあ」

「任せな！」

えっ

ガアアアアアーツ！

タクシーが加速して丘を駆け上っていく。

このおっさん……ボスにまでぶち当たる気だ！

「おっさん無理すんな！」

「タクシーの真価！ 見せてやんぜーッ！」

タクシーの真価は輸送だと思えます。

ボスに先制攻撃を仕掛ける事じゃないと思うよ！

「やはり……ボスは巨大な狼だ！ タクシーより大きいぞ！」

「異世界までひっ飛ばえーッ！」

狼を異世界転生させるのか。

ガアアン！

巨大狼はタクシーの突撃をこらえた！

異世界転生、失敗。

「この獣野郎ッ！ 受け止めやがったア!?!」

「おっさん、一人で盛り上がってんなー」

『暮井寺くれないじ氏が楽しそうで何よりである』

金属バットさんが冷静な感想を漏らす。

「目の前に巨大な狼の顔があつて、めっちゃ怖いんだけど……」

「デカいだけのワン公に100馬力のタクシーが負けるかかってんだ！」

おっさんがアクセルを踏み込んで巨大狼と力比べを始める。

ギアアアアアア！

キュルルルッ!

アクセルを全開にするおっさん。

一歩も引かない巨大狼。

力と力が均衡し――

「うおおおー!」

「グルルルッ!」

勝手に盛り上がっていたのだった。

「……」

「……」

「じゃあ今のうちに……」

『うむ』

ガチャッ よいしょ

トコトコトコ。

うん。このへんでいいかな。

タクシーを降りて巨大狼の脇腹に狙いを定める。

「せーのっ！」

マサトスマツシユ！

ドゴォ！

巨大狼が犬のようにキャウンと悲鳴をあげ、丘を転げ落ちていった。

「あああっ！ 俺の見せ場が！」

「むしろこの上無く役に立ってくれたぞ」

タクシーのおっさんは車を降りると、むくれ顔でボンネットに肘をついた。

ふくれっ面でこちらにもう片方の手を差し出す。

「んっ！」

『タクシー代を要求しているようである』

仕方なく万札をポケットから取り出して渡す。

代金払わないと帰ってくれないからな。

お釣りを受け取りながら、巨大狼が転げ落ちていった方向を眺めつつ訊ねる。

「ファルフナーズは大丈夫か？ 怪我とか気分悪いとかない？」

「はひ。はいりよーふなのれすわ」

酔っ払ってるみたいな声になってきたな。

お姫様の顔は、鼻をかみすぎたせいで赤味がさしている。

「……真っ赤なお鼻のプリンセス」

「もーっ！ もーっ！ マサト様ってばっ！」

赤鼻のトナカイかと思っただら牛でした。

もふぶん もつぶんもつぶん。

お姫様のティッシュ攻撃。

使用済み。

ガアアオオオアッ！

「うわっ!? 新手か!？」

「まらはおへへはいのへふは!」（訳注：まだ倒せてないのですわ!）

「何を言ってるか分からんが、とにかく【魔法の盾】を頼む!」

「はひほはひはひはは！」（訳注：かしこまりましたわ！）  
さっぱり分かん！

ファルフナーズから魔力が飛んでくる。

「【あほーのはて】！」

「誰がアホの果てだ！」

もややくん

ぱちんっ

いつものように青白い膜が俺を覆ったかと思ったら弾けて消えた。

「お姫様、魔法失敗してるぞ」

「はひ……」

ああっ、しょんぼりさせてしまった。

フォローを……してるヒマが無い。

巨大狼が丘を駆け上がってきた！

しかも後ろ足だけで走ってくる！

ウオオン！



「待て、お前の走り方はおかしい！」

『綺麗なランニング・フォームなのである』

「畜生！ これだからファンタジーは嫌なんだ！ ハーちゃんの時といい、常識を平気で無視しやがる！」

「まひやほはま！ はれはぱいぱんふろーふへほはいはふは！」

（訳注：マサト様！ あれはライカンスロープでございますわ！）

バキバキと骨がきしむような、折れるような音を立てながら巨大狼の体に変化していく。

あつという間に狼の顔をした毛むくじやら人間になった。

「狼男だったのか！」

『姫がそのように言ったであろう』

分かん分かん、聞き取れん。

あれを解読できるのは金属バットさんだけだよ。

再び巨大狼男が遠吠えをすると、急激に空気が冷えてきた。

『我が主よ、どうやら奴は冷気の属性。見よ、口元から吹雪のブレスを吐くのである』

「よし、来ると分かればタイミングを合わせて——」

今だ！

回避発動アンド【未来視】！

スススッ

「馬鹿め、そつちは残像——」

「ひゃああああああんっ！」

俺の真後ろにはピンクの髪のお姫様が居たんだった……

ファルフナーズがもろに吹雪を浴びた。

「ひくちっ！ ふえぶしゅっん！」

「お大事に」

ファルフナーズが涙目で俺を見つめながら鼻をかむ。

その目が「誰のせいで吹雪を浴びたのか」と語っているのは分かる。

ごめんで。

ともかく、ファルフナーズが風邪をこじらせないうちに倒してしまわねば！

「食らえ！ ファルフナーズの仇！」

金属バットさんを最大化し、炎を吹き上げてのフルパワー攻撃！

バギヤツ！

「これはファルフナーズの分！」

ドゴオ！

「これがファルフナーズの鼻の分！」

バギョツ！

『なぜそこで鼻つ!?!』

「そしてこれが……ファルフナーズの鼻水の分だあーッ！」

ドグシヤアッ！

渾身の一撃が頭部に命中し、巨大狼男はその場に崩れ落ちた。

「ちつとも嬉しくないのですわ……」

「ティッシュの分、の方が良かったかな？」

炎に巻かれて燃えていく狼男が光を放って消えた。

グレイ・ウルフと同じように牙と毛皮がドロップ品として残る。

ファルフナーズの丸めたティッシュ攻撃を受けながらドロップ品を拾う。

よくもまあ、それだけティツシユを使ったものだ。

そういえば前に鼻水姫ってあだ名を勝手につけたっけ。

お姫様、イメージダウンだな。　ははは。

「さ、階層突破ボーナスを受け取って帰ろう」

「かしこまりましたわ」

「あれ、ファルフナーズ鼻声が治ったな」

「あらっ？　確かに、言われてみればそうですね」

「吹雪攻撃を食らったのが良かったのかな」

「その件については後ほどお話があるのですわ」

ヤブヘビだ。

第一、無敵なんだから良いじゃないかー

ファルフナーズが奥にあった扉に触れると、双子天使が天から降りてきた。きやつきやと笑いながら大きな茶色い箱を投げつけてくる。

回避アンド【未来視】　ッ！

「もう貴様らの攻撃は食らわないぜ」

「……チッ」

いくらなんでも、天使が舌打ちしたらダメだと思おうよ!?

「で、ポーナスアイテムは何だった?」

「はい……ええと、まあ! これはとても助かりますわ!」

おお? そんな凄いアイテムなのか!

「箱になんて書いてある?」

ファルフナーズが美声で読み上げる。

「ティッシュ10年分、ですわ!」

「……」

いらねええええ!

お姫様はホクホク顔で腰元のアイテムバッグにティッシュをしまい込む。

それ以上鼻が赤くなっても知らないからなー

そこでファルフナーズが突然ハツとして声をあげた。

「そう言えば困ったのですわ」

「何が?」

「車でここまで来たので、帰り道が分からないのですわ」

「何だ、そんな事か。大丈夫だ」

「何か帰り道を探るアテでもおありですか？」

「ああ、ほら。狼をたくさん倒してきたからな」

ドロップ品が通った道にはたくさん転がっているのさ。

拾って帰らないと赤字だし。

「途中からはファルフナーズの捨てたティッシュもあるしな」

『とんだヘンゼルとグレーテルである』

そんな童話もあったね。

「じゃあ回収しながら帰るかー」

「はい、かしこまりましたワン！」

「……」

『……』

「えっ？ 何だって？」

冗談を言ってるのかと思って振り返ってみる。

ファルフナーズのそのピンクの髪の毛の頭に――

大きな犬の耳が

生えて……いる!?

## #65 「これを勝利の方程式と名付けよう」

「よし、見間違いで聞き間違い、だと言う事にしよう」

「何がでございますかワン？」

てか今時、語尾にワンて……

いや、突っ込まない。突っ込まないぞ！

「あつ、こちらにも牙が落ちているのですワン」

「……」

前屈みになりドロップ品を集めるお姫様。

その光沢のあるニーソとドレス・アーマーの絶対領域の間に……

ふりふりとリズムカルに揺れるそれが。

ああ

ピンクのふわふわ尻尾だ。



「突っ込まない。突っ込まないが……」

『よせ主、それは——!』

いや、限界だ。

触るねツ!

にぎっ

「——ッひゃうんっ!?!」

空気が凍った。

「……」

「……」

ファルフナーズがわなわなと震えながらゆっくり振り向く。

羞恥で真っ赤な顔を見せつつ口を開いた。

絹を裂くような悲鳴が響く。

「きやあああああ！ マサト様のちかーん！」

「痴漢呼ばわりは酷すぎるだろお!?!」

「どこがでございますワン！ 私の大事なしっ——」

「しっ?」

頭のピンクの毛に覆われた大きな耳がぴくぴくと動いてる。

「……」

「……」

「……なぜ私に尻尾が!?!」

「ようやく気付いたか」

「ええええええーっ!?!」

動転して頭を抱えるファルフナーズ。

その手に大きな犬っぽい耳が触れる。

その感触に驚いて飛び跳ねる。

「みっ、みみみみみみみっ!」

「犬耳だな」

「マサト様、私は一体どうしてしまったのでしょうか!? あ、ワン!」  
「今絶対、無理矢理ワンってつけたよね!」

驚きの余りか、ピンクの尻尾がピーンと張った。

大きな犬耳もぴくぴく動いて緊張が伝わってくる。

「体調が良くないとか熱っぽいとかダルいとかは……?」

「いえ、むしろ飛び跳ねて走り回りたい程に好調なのですワン」

俺の頭の中で公式が瞬時に組みあがった。

短いスカートの上のドレスアーマー

+

大きくふわっふわなピンクの尻尾

×

犬の走り方

||

パンツが見える!

チーン！

完璧な数式だ！

これを勝利の方程式と名付けよう！

「どうぞ、どうぞどうぞ。好きナだけ走り回って？」

「わぁーい！ なのですワーン」

わくわく

「……」

トットトットト……

「いつものお姫様走りだな」

『何を考えていたのかは想像に難くないのである』

「しかもいつも通り足が遅い」

『野性味ゼロなのである』

お姫様は嬉しそうに手を振ってくる。

「マサト様ーっ！ うふふっ、ですワン！」

あっ、転んだ。

てへぺろっとかやってる。

ちくしよー、可愛いな。

あっ、また走り出した。

「何か意外と大丈夫そうだな」

『うむ、帰って神々に相談するのである』

そうしよう。

……

ドロップ品の牙と毛皮を拾い集めながらダンジョンを後にした。えらい時間がかかった。

なぜなら、ファルファーズが1個1個拾っては俺の元に持ってきたからだ。1つ拾っては俺に渡し、次を拾いに行く。

別に俺が投げて、取って来いしてるわけじゃないんだがなーというか完全に犬の習性だ。

大人しいおっとり姫様も、犬耳さえ生えれば狩人。

いや、あの調子では子猫一匹捕まえられまい。

拾ってくるのを待っている間に両替機で換金しつつ戻った。

本日の収穫、18万7280円也。

かなり美味しい結果となったな。

これならシャルリンの身の回りの品もそろえてやれるだろう。

「ただいまー」

「ただいまなのですワン」

そんな事を考えつつダンジョンを無事退去。

シャルリンが赤い髪を揺らして俺の腹めがけて抱き付いてきた。

「にーにー！ ファル姉様おかえりーっ！」

ドゴオ

ぐへー

明らかに狼に噛まれるより痛いんだこれが。

「おかえりなのじゃ」とスクルド。

「おかえりなさい、ですって！」とハーちゃん。

「無事で良かった。死に戻りしてもいいけど」と死神のデスノ。

シャルりんにお腹をグリグリされて、やや気持ち悪くなりながら挨拶を返す。

「お土産はこちらでございます」

ファルフナーズの肩を掴んでみんなの前に差し出す。

犬耳あたりに手を添えて。

ふるふるっ、とお姫様のピンク耳が震えた。

シャルりんが驚きの声をあげる。

「ファル姉様に耳が！」

「お、おほほほ……」

……  
……

スクルドがしきりに頷きながら言葉を紡ぎだす。

自分自身を納得させながらしゃべっている感じだ。

「——つまり、その吹雪のプレスに混じって変身病に感染してしまったのじゃな」

「変身病？ 狼男じゃなくて？」

「獣人化病ライカンスローパイ、通称変身病は狼男に限らぬのじゃー」

「へー。じゃあファルフナーズも全身毛むくじやらになるの？」

「それは絶対に嫌なのですワン！」と叫んで枕を頭に被るお姫様。

それ俺の枕なんだけど。

「そのダンジョンで満月が出ていたのじゃろう？ ならばピークが今の状態じゃろう  
てー」

「つまりこれ以上もつさり生えないのか」

「なんじゃ？ まるでマー君はもつとモジャモジャになって欲しいように聞こえるの  
う」

「いや、だって。全身毛むくじやらなら頭の毛根も……」



「なるほど。でも抜けてしまった毛根には影響せんのかならうか」

「禿げ散らかした狼男とか、最悪だな……」

夢に出そう。

頭をしきりに振って切ない妄想を追い払った。

「ま、ともかくじや。姫の体調不良とシステムの不具合が重なった偶然の出来事じや」

「狂犬病とかじやなければいいや。別に耳がどんな形してようとファルフナーズはファルフナーズだ」

「しばらくすればシステムが姫の体内の獣人ウイルス？ とやらを駆逐するじやろうてー」

「どのくらいだろう？ 1時間くらい？ それとも1日？」

「さー、どうかのー そのシステムはワシが関与してるものじやないからのー」

「流星の神様でもそこまでは無理か」

ほっと胸を撫で下ろすファルフナーズを横目に、ベッドに寝転がる。

手に握っていた金属バットを手放し、床に転がす。

『たまには手入れをして欲しいものである』

するとファルフナーズが金属バットさんを拾い上げ、俺に手渡してくる。

「お、おう……そこに置いて」

「かしこまりましたワン」

「……」

「……」

「な、何かな？ お姫様」

「いえ、私、今日はいっぱい拾いましたので」

「そうね」

「……」

何かを期待するように正座して俺を見つめている。

今の犬っぼいお姫様は……

やはりご褒美が欲しいのだろうか。

「ナ、ナデナデですか？」

「はい、ナデナデなのですワン」

ほっ、ナデナデで良かった。

甘い物を大量に要求されたらどうしようかと思っただぜ。

ファルフナーズの頭を優しく撫でる。



ここは上手くファルフナーズと2人きりになる口実を作って……

「あー、疲れたから風呂入りたくなってきたなー」

「はふうう。かしこまりましたワン。ではお風呂を沸かして参りますワン」

よし来た！

魅惑のバスタイム2、はじまるんだぜ！

## # 6 6 「ここだけツンデレ地帯よ！」

「よし、風呂でも入ってくるかな」

「それならまた、あたくしのバブルバス・スラ——入浴剤を！」

シャフリんがいきりたつ。

だがそこはキャンセルしなければ！

「あれはダメ。また風呂が破壊される」

そうだ、計画を実行に移すためにもシャフリんを足止めしなくては。

でないともた俺の背中を流す、と言って乱入してくるに違いない。

手はある。

シャフリんはファルフナーズの妹。

つまり甘いものには弱いのだ。

昨日も2人でプリンと一緒に喜んで食べてたし。

「シャフリん。実は君にまだ教えていない、禁断のお菓子があるのだが」

「!! 食べたい! にーに! どこにあるのかしらっ!?」  
食いつき完璧。

シャフリんが俺の腕にしがみついてグイグイ引っ張る。

その名をアイスクリームと言う。コンビニで売っているのだが、買いに——  
「いっ! うー!」

よしよし。

計画通り。

ニヤリ

シャフリんを襲う甘美な罠だぜ。

「……で、いつの間にファルフナーズが」

玄関で靴を履こうとした時には既に俺の右後ろに居た。

風呂場に居たはずなのに。

って言うか、足遅いんじゃないか? つけ?

「マサト様とシャフリーンが甘味屋に向かうと聞きました。ワン」

「犬耳の効果か……」

玄関に風が吹いた。

まだドア開けてないのに。

パタパタパタ

うん、ファルファーズの尻尾だ。

「澄ました顔しても、尻尾が全てを物語っているぞ」

「べ、別にお散歩とかプリンとか、そんな事は考えていないのですワン！」

「シヤフリん、お前の姉はウソが下手だぞ」

「そこがファル姉様の素敵な所よ！」

さいですか。

うわ、ぞろぞろと神と悪魔の連合軍まで玄関に。

「ワシもアイスとやらを所望するのじゃー」とスクルド。

「ハーちゃんも食べてみたい、ですって！」とハーちゃん。

「妻であるワタシはマサトと同じ物を食す」とデスノ。

「待って待って、そんなに大勢でコンビニに押しかけるもんじゃない。みんなの分もちゃんと買ってくるから」





ペットシヨップ。

店先のウインドウ越しに犬と猫が見える。

なるほど……

み〜い、み〜い

くう〜ん……

「いや、待て待て。そこに居るの、全部子猫と子犬だぞ」

「怖いのですワン！ 勝てる気がしませんのですワン……」

子猫に負けるのか。

むしろどうやって負けるのか。

敗北を知りたい。

流石にウインドウ越しなら安全だと気付いたようで落ち着いてくれた。

知能まで犬並みになったのかと思っただけ。

：

コンビニに辿り着くとシャフリんが黄色い声で叫んだ。

「何て素敵なの、にーにー！ これが全部甘い物だなんて！」

「全部じゃないぞ。雑貨とか普通の食品もあるぞ」

「こんなにくさん食べきれないわ！」

「買うのは1つだけだぞー」

シャフリンの表情が消えた。

目の光も。

魂も。

「これだから王族のお姫様は！ 仕方無い、食べられる分だけを選びなさい」

シャフリンにとびきりの笑顔が戻った。

涙をこぼしながら俺に抱きつきタツクル。

「にーに！ 大好きッ！」

稼いだばかりの18万円が……

ま、元からシャフリンの身の回りの品に使うつもりだったから良いか。

この後のお楽しみタイムへの投資、と割り切れるし。

キヨロキヨロと周囲の柵に目移りするシャフリンをアイスの冷凍ショーケースに誘導する。

「凄い！ ここだけツンデレ地帯よ！」

ツンドラね。ツンドラ。

でも何でツンドラって言うんだろ？

ツンツンしたドラゴンが意地悪で氷の吐息を吐いたとかの昔話とかかな。

結局好きだけアイスを選ばせてしまう。

うーむ、俺は妹に甘いタイプだったのか……？

しかし好意を示されて甘えられると、どうにも頬も財布の紐も緩む。

「あつ、にーに！ これも食べたいわ！ 小さいけど茶色くて高級そうなハー……」

「それはいけない」

名前に不吉な言葉が含まれている。

俺から遠ざけるべきだ。

決して高いからでは無い。

くわばらくわばら。

「……で、ファルフナーズさんの両手にあるものは？」

「プリンですワン！」

「今日はアイスの方をだな……」

「プ、プリンも欲しいのですワン」

くそっ

ヤツの別腹は底なしか！

だが——この後の事を考えれば仕方無い。

お詫びにプリンを振舞う事になりそうだからな—

これも必要経費だ。

くうくん、と謎の鳴き声を漏らして上目遣いのファルフナーズ。

ぐぬぬ……可愛いじゃないか。

押し倒したいほどに。

だが、まだだ。

「3セットも手に持って……この、いやしんぼめ—」

「み、皆様の分も、なのですワン……きゆうん」

くうううっ！

：

ピッ

「欲望まみれの代償プリン、3点ですね。50ターンで溶けてしまいます」

やかましい。

軽くバグった店員のレジ打ちを軽くスルーだ。

夕飯の弁当やら何やらで、結局コンビニ袋をいくつもパンパンに膨らませて店を出る。

ファルフナーズにまともな料理を覚えてもらわないと食費も馬鹿にならないな。

食材の買出し問題は残るもの……

ん？

ファルフナーズがさっきのペットショップの前で足を止めた。

じっと見つめている目線の先にあるのは――

店先のワゴンに積まれた、投売り品のドッグフードと……首輪。

……欲しいのか。

欲しいとして、どっちだ!?

どっちを買ってやるべきなんだ。

考えろ!

正解はただひとつ――

でもないか。

両方買っちゃえ。

でもドツグフードって人間が食べたらお腹下すんじゃないやなかつたつけ。

いや違う。確かあれは――

思い……出した!

『ヒューマングレード』だ!

人間と同じ安全基準で作られているという証、それがヒューマングレード。

この記述があれば人間が食べても安全なはずだ!

店内に入って、ウエットタイプの高級品を買った。  
そして首輪。

首輪……

お姫様にドッグフードとか首輪とか、大丈夫か？

向こうの世界に着いてから罰せられたりしないかな。

本人が欲しがっているのだから仕方なかった、と言いつつ訳をして押し通そう。

アイスを楽しむにはしやぐシヤフリん。

それをよそに、俺とファルフナーズは何となく無言で帰宅した。

：

「た、ただいまーって、スクールド、ずっと玄関で待ってたのか」

「お帰りなさいなのじゃ。さ、早ようアイスを食べしてみようぞー」

どんだけ楽しみだったんだ。

テーブルを囲んでのアイス品評会が始まった。

女性陣のきやあきやあと楽しげな声が家を包んだ。

さてと……

作戦スタート！

わざとらしく大仰に席を立つ。

「あら？ マサト様、召し上がらないのですか？ ワン」

「ああ、先に風呂に入っちゃおうかと」

かしまりました、とファルフナーズも席を立つ。

俺の服を脱がせるのはメイドとしてこの家にいるファルフナーズの役目だ。

風呂場へと移動する。

先ほど買った品も持ってだ。

「じゃあ、よろしく」

と、いつものように狭い脱衣所に2人で入ると俺は両手を上げる。



お姫様はやや顔を赤らめながら、俺のシャツのボタンに手を掛けた。流石に慣れてきたもので、すみやかに俺の服が脱がされていく。期待に胸が躍る。

あつという間に俺は腰にタオル一枚巻いただけの姿になった。

「ファルフナーズは今日も色々頑張ってくれてるな」

「そ、そんな事ございませんワン」

ピンクの髪の間から生えてる耳がピンと立って反応した。

ご褒美を期待したのはバレバレだ。

もちろんだ。

いっぱいご褒美ナデナデをしてやるぜ！

だが

ナデナデが頭だけで終わるかな？

#67 「お嫁に行けない体にされてしまったのですわ」

「よし、じゃあご褒美にまたナデナデしてやろう」

「はい……はいですワン」

ファルフナーズが頬を赤く染める。

だがその視線はあくまで熱っぽく。

さわっ

優しくお姫様のピンク髪に触れる。

ふるるっ

ピンクの髪の間から伸びている大きな犬耳が小刻みに震えた。

丁寧に撫で付けてやると、お姫様は目を細めてうっとりとしてきた。

「わふう……はう〜」

ご満悦の声が漏れ出ている。

「よろしよし、ファルフナーズはえらいなー。頑張ってるなー」

「はふ……マサト様にお世話になってる身としては、ふにやあ……当然ですワン」

にやあなのか、ワンなのか。

ちよいちよいブレるな。

だがご褒美ナデナデなので突っ込まない。  
がつつりナデナデだ。

ナデナデ。

ナ〜デナデ。

「ん〜、ファルフナーズは良い子だな〜」

「はうう……い、妹のシャフルナーズもお世話になっているものですから。ワン」

ナデナデ。

ナデナデ〜

「ファルフナーズは良い子だから、耳の所も撫でてあげよう」

「ひゃんっ!? 耳は……耳は少々デリケートなのですワン」

ほう、そうなのか。

だが拒む事も嫌がる素振りも無い。  
むしろ……

では一際優しく、指先で。

さわ……

さわわ……

「ぎゅううう」

鳴き声じみた声を漏らしてきた。

目をきゅつと細める。

口も小さくすぼめて……

声が漏れるのを我慢しているような感じだ。

フレーメン現象かな？

耳と髪の毛の境目辺りをナデナデ。

「くうくん……ま、マサト様あ」

「んん？ どうしたー？」

唇が艶を帯びて来ている。

いつもの瑞々しさが更に熱を帯びて更に湿つてきているような耳の周りを集中して撫で付けている。

すると徐々に耳が柔らかさを増し、ぺたりと垂れてしまった。

垂れ耳、かわいいじゃないか。

「凄くたくさんナデナデして頂いたのですワン……」

「ははは、何を言う。まだこれからが本番だ」

「えっ……こ、これ以上ナデナデされてしまうのですか？ ワン」

「俺はまだ片手。そう、片手しか使っていないんだぜ！」

ここまでファルフナーズの髪と耳を撫でていたのは右手。

まだ左手はフリーハンドだったのだ。

「りよっ、両手でナデナデされてしまったら私は……私は」

ファルフナーズは言葉を続けられずに飲み込んだ。

聞く必要なんて無い。

これから存分に見せてもらおうのだ。

さあ第2ラウンドだ。

ナデナデ。

ダブル・ナデナデ

「ひゃふうく……っん」

お姫様の目が潤んでくる。

頭を右手で撫でつつ、左手で耳をこしよこしよと。

「んんうっ！ 耳と髪を同時はく……あっ」

声がちよつとすねた様な、それでいて甘えているような声になる。

犬耳なのに猫なで声。

「耳と髪、同時はダメか。ならば——」

左右両手でファルフナーズの両方の犬耳を攻め始める。

ナデナデ。

ダブルお耳ナデナデ

「——っひゃうんっ！ みみっ、耳わっ……きゆうん！」

「耳は？ どうなんだ？」

「マサト様の……意地悪う」

潤んで目尻に涙をたたえた瞳で見つめられる。

上目遣いがとても可愛らしい。

ビクツと体を震わせ、綺麗な眉を歪ませた。

「ひゃあああつ」

よし、良い調子だ。

このままもつと……

あれ？

ひよつとして、ファルフナーズって……

凄く美人なんじゃね？

「ああつ！ マサト……様つ……お手が、首すじにい……」

いやいや、そんなはずはない。

確かに地球でなら一番の美少女だろうけども。

まだ16歳の子供のはずだ。

でもこの潤んだ瞳が……

かなり大人びていて。

「んんっ……そ、そんなに首を撫で……撫でてはあ……」

いやいやいや

と、とにかくナデナデだ！

ナデナデにかけろ！

ナデナデ。

ダブルハンド・ナデナデ

「んんう……い、いやあ。マサト様あ……」

無心でお姫様のピンク髪と耳を撫でつける。



そうだ。

ファルフナーズはナデナデで喜ぶ犬耳少女なのだ。

ちよつとイタズラしたくらいで心を動かしてはイカンのだ。

あれ？

でも俺って、前は割と年下もストライク・ゾーンだったんじゃない？

ナデナデ。

全力でソフト・ナデナデ

「マ……マサト様っ……お手が、お手がドレスの中につ……ひゃあんっ！」

俺も20歳になったせいかな、年下を勝手に切り捨てていた気がする。

いや、むしろそれはファルフナーズが家に来たからか？

ナデナデナデ。

「お手が、私の……あつ、そこはダメえ……」

つまり、俺はファルフナーズを意識すまいと……  
俺自身が無意識でブレーキをかけていたのか。

ふにふに。

「あんつ、あつ！ マサト様んつ！ 揉んで、揉んでしまっているのですわ……」

でも意識してしまっても良いんじゃないか？

ファルフナーズだって悪い気はしてないような素振りが……

結構あつた気が。

俺の気のせいだろうか。

ふにふにっ。

「あつあつあつ！ んつ、くう……ん。も、もう私もおかしく……」

でも俺の思い違いで、変に意識してしまつても。

何かこれ以降の生活が気まづくなりそうだし。

むによんむによん。

「やつやつ……んっ！ マサトひやまあくも、もうファルフナーズは……」

こうなつてはもう意識せざるを得ない。

しないようにと思つても、ファルフナーズを一人の女性として。

ふにむに。

両指で挟みっ

くりくりりっ

「きゆううううんっ！ んっんっ！ 先っぼらめえく！」

くりくり……

ん？

くりくり？

俺は一体何を触ってる？

「も、もう体の力抜け……腰が……」

ガクン

ファルフナーズが膝を付いて床に崩れ落ちた。

「はっ!? どうしたファルフナーズ!」

ようやく我に返った。

深く考え込みすぎて、ナデナデ中だったのを忘れてた――

って!

いつの間にこんな事になっていた!?

脱衣所で四つん這いに倒れこんだファルフナーズ。

俺は倒れこんだファルフナーズに釣られて、覆い被さるような格好だ。

そして彼女の頭をナデナデしていたはずの俺の両手は……

ファルフナーズのドレスの中で、その豊穣な胸を揉みしだいていた!

「い、これは一体何がどうなったんだ……」

肩越しに振り返ったファルフナーズの瞳が涙で潤んでいる。紅潮した頬と目尻が少し緩んで、いつもの朗らかさが無い。変わりに眠たげな表情にも似た色香が漂っている。

「マサト様あ……私はもう……はあッ！」

ふるるっ！

ファルフナーズがきゅつと目を瞑り体を震わせる。

こ、これは……！

貴方は犬を飼った事があるだろうか？

厳しい上下の社会性を持つ彼らは特にボス・主人への忠義に厚い。

そして主人が彼らの忠義に十分報いた時に、犬の興奮は最高潮に達する。ついには最高の悦びを表すためか、あるいは興奮で緊張が緩むのか……

いたすのだ。  
粗相を。

おしっこを。

「あつあつ……あーッ！」

シヤアアア……!!

それは音になりきらない音でファルフナーズの太ももを濡らしていく。

暖かく、わずかの湯気を立てるそれが、彼女に密着している俺のジーパンをも濡らした。

凄い絵面になった。

四つん這いでお漏らしをする、お姫様ドレスのファルフナーズ。

それに覆い被さり、お姫様のドレスに両手を突っ込み胸をまさぐる俺。

「マサト様の……マサト様のバカあ……」

ナデナデして気の緩んだ隙にちよつとおっぱいをツンツン、のつもりが……  
大惨事になっているぞこれ。

「……までされてしまいますと、私……」

「あ……うん。はい」

市中引き回しの上、磔くらは覚悟しよう。

死に戻り可能なうちにやってくれと有り難い。

……

……

無言で後片付けを終えたお姫様が、俺のほうをチラチラと見る。

かと思うと顔はそむけて、髪を撫でたり手をモジモジと組んでみたり。

まあ、そりや気まずいよな。

あんな事までされたものだから。

「その、マサト様……」

「あ、はい」

「こうなってしまうては……その」

「はい……」

死の予感。

さらばだ今生こんじょう。

すぐ復活するけど。

「その、責任を取って欲しいのですわ」

「分かってる。どんな仕打ちも覚悟の上だ」

「仕打ちだなんて。まずはお父様達に顔を」

「分かった。首を差し出すんだな？ それとも顔の皮を……」

「えっ？」

「えっ？」

ファルフナーズが首をかしげて言い直す。

「その、責任を取って私と結婚して頂かねば、と申しておりますのですが」

「あーうん、結婚ね。結婚」



……!?

ええええ!?

「おまつ、それでいいのか!？」

「もうマサト様の手で……お、お嫁に行けないカラダにされてしまったのですわ  
そりや、凄いい事をやらかしたけど。」

最後までしたわけでもないし……

だが、拒否はできまい。

いくら俺がヒキニートでも、そこまで男は下げられない。

むしろ玉の輿でしか無い。

「お、俺としてはその責任、絶対に取るが……ファルフナーズさえ嫌じゃなければ  
「そんな、嫌だなんて事は……」

モジモジしながら押し黙ってしまう。

「少しでも嫌なら、無かった事にしても良いんだぞ？ 絶対秘密は守る」

「そんなに嫌では……もう！ 恥ずかしいのですわーっ!」

恥じらいながら脱衣所から飛び出して行ってしまった。

手に持っていた、おしっこに濡れたニーソで顔を覆いながら。

パタン。

「——つて！ 扉を閉めていくなーッ！ おーい！ ファルフナーズッ！」

たっぷりー時間放置された。

ガチャリ。

シャフリんが扉を開けて助けてくれた。

「にーに？ まだお風呂入り終わってないの？」

「脱衣所で閉じ込められてな。風呂場の方も開けられないし」

「本当に厄介な能力ね！ ダンジョン・オープンナーって！」

「全くだ……——ツクシユンツ！」

風邪を引いてしまいそうだ。

何せ濡れた服を脱いでパンツ一丁だったから。

……

…

その晩はファルフナーズが照れて、一言も口をきいてくれなかった。

「なんじゃー？ マー君と姫はケンカでもしたんかいのー？」

スクルドが訝いぶかしむのも無理はない。

気まずい雰囲気は早く払拭しなければ。

…

「つぶえつくしゅーい！」

クシヤミと共に目が覚める。

あー、何か頭とか尻がムズムズする。

昨日は気まずいからさっさと寝てしまったんだっけ。

「マサト様、お早うございますですわ。お風邪を召したようで……」

ファルフナーズが起こしに来てくれた。

「まあっ！ マサト様も！」

「えっ？ 何？」

ふるるっ

耳を震わせて毛づくろいをする。

どうも今日は尻尾の据わりが良くないなあ……

「って!? 俺にも犬耳と尻尾が!？」

「うふふっ、マサト様とお揃いになったのですわ」

どうやら俺にもライカンスロープ病が移ってしまっただけぞ。

だが、おかげでファルフナーズがご機嫌になった。

いい笑顔。

気ままずかった雰囲気も吹き飛んで——

「待て、ファルフナーズ。その笑顔は何だ!? お姫様たるものニタリと言う笑いは……」  
「昨晚はいっぱいナデナデされて、乙女の最も恥ずかしい姿を見られたのですわ」

「落ち着けお姫様。そのワキワキという手の動きはダメだ！」

「お返しにたっぷりナデナデして差し上げますのですわー」

「やめっ！ ちよっ！ ダメッ！」

あああああーっーっーッ！

布団に七つの海が。

世界地図が出来た。

20歳でおもらしニート。

#68 「今度は限定ガチャだそうですね！」

「よし！ マサト様、ガチャを回してもよろしいですね？ ナデナデ」

「おまつ！ それは卑怯くくううん。らめえ。いいけどらめえ」

ビクンビクン。

「このままではファルフナーズのやりたいだけガチャを回さしてしまう」

「うふふつ、昨晚のお返しなのですわく えいっえいっ」

あっあっあっ

また漏れちゃう。

「わっ、分かった。回していいから、マジやめて！ いや、やめないで」

……

…

「や、やっと治まった……嬉し死にするかと思ったぜ……」

「お粗末様なのですわ」

お粗末様、じゃない！

ツツコミたかったが、またナデナデされたらたまらん。  
犬耳は危険過ぎた。

ファルフナーズにも犬耳があるから、お返しにナデナデ地獄をリベンジ返ししてもいいが……

きつと復讐は何も生まない。

「では早速! とおとおおう、ですわー!」

久しぶりのガチャに変なテンションの上がり方を見せてるな。

空中に向かってお姫様の華奢な指が突き出された。

ビリリッ!

後頭部に痺れるような痛み!

いや、もうここ、後頭部と言える場所か……?!

俺の毛根と引き換えに、空中にドラム・リールが出現し回転を始める。

ドウルルルル……デーン!

『スーパー・レア』

「き……ッ！ キマシタワ―！」

「やったぜ！」

いきなり最高レアを引き当てた！

「……」

「……」

「で、アタリは何だったっけ？」

「確か……はて、私も失念してしまいましたわ」

スーパー・レアの文字が消えると後光と共にアイテムが降りてきた。

「ああ、思い出した。箆手だ箆手。確か多機能何とか」

「そうでございましたわ」

銀色の金属板を重ね合わせた、重厚な感じの箆手が俺の手元に納まった。

感動だ。

まともな装備を手に入れたのが無限ソード以来の気がする。

「で、どんな機能があるんだろう？ 無限ソードみたいにしょっぱい性能ってオチはご

免だぜ」



「では確認しましょう。ええと、多機能ガントレット・覇者の箆手の性能ですが……」

「ファルフナーズは空中に向かってパントマイムのように手を動かす。

お姫様にだけ見える、謎のステータス・ウィンドウがあるらしい。

「まずは命中点+30、打撃点+30、防御点+30」

「よしよし、なかなかの装備値だな。確かな満足」

「装備効果【豪腕】重量物を持ち上げたり動かす事が出来る」

「割と普通だな。力持ちになるって事だな」

「試してみるか。」

俺の後ろから、ツルツルになった後頭部を撫でるのに夢中な死神少女デスノの腰を掴む。

「マサト大胆。でも2人きりになれる場所ですて」

「何をかな?」

「気にせず……ひよい。」

「おお、軽い! デスノくらいなら重さを感じないほどだ!」

「こうなると、限界を試してみたくなるな。」

「ファルフナーズ、部屋と玄関の扉を開けてくれ」

「かしこまりましたわ。ご褒美に例の甘味屋でございますね?」

「ないわー。ガチャ回してご褒美とかないわー。ちよつとおっさんの車でも、と」

「残念ですわ。頑張りましたのに」

頑張ったのは俺の毛根達だよ？

玄関から表に出ると………いたいた。

「おっさん………仕事は大丈夫なのか」

「おう兄ちゃん！ 乗るのか！ ガチャやってたつて事は強化に行くのか？ それとも

合成か？」

「強化と合成つて何か違うの？」

「そんな事も知らねえのか！」

知ってるわけが無い。

言葉で大体想像がつくけど。

「装備を鍛えるのが強化。合成は装備と装備を1つの装備にして便利にするぜ。ニコイ

チつてヤツだな！」

「ニコイチはまた別の言葉だと思う」

そんな事が出来たとは。

「そう言えば無限ソードを持って余しているな」

『ぜびニコイチして欲しいのである』

合成ね、合成。

金属バットさんが悪い言葉を覚えた。

「ともかく、車でチャレンジだ」

タクシーの下に手を入れて……

ぐっ

おっ、何か力が車全体に均一にかかる不思議な感じ。

「ふんぬっ!」

「凄いのですわ! マサト様がタクシーという鉄の荷車を!」

お姫様が拍手して賞賛してくれる。

「正直っ、タクシーでっ、ギリギリって、感じだなあっ!」

腕がプルプル震えてきた。

壊さないようにゆっくりタクシーを下ろす。

「あーこりや、明日は絶対筋肉痛だな」

しかしこれは凄い。

1トンほどもある重量物を持ち上げられるとは!

怪力ニート。

また以前の鉄の像みたいなのが出てきたら、このパワーで無理矢理どかす事もできるかも知れない。

単純な能力だけに用途は多いに違いない。

満足しながら自室に戻る。

「で、次の装備効果でございますが【手首回転】手首を回す事が出来る、だそうですわ」「なんだか当たり前のような……ほいっと——うわっ！ キモい！」

ぐりゅん！

手首をひねると綺麗に一回転して元に戻った！

「同じ方向に手首が無限に回せるぞ！ これはキモい！」

「便利なような、無意味なような効果ですわ」

「……冷静に考えるとそうだな」

「あつ、申し訳ありません。失言でしたわ」

いや、確かに。

手首が回るからといって役に立つ事なんて、ぱつと思ひ浮かばない。

関節技をかけられたら、これを利用して抜けられるかも知れないが。

あまり回転早くないし、回してる間は力もあまり入れられないし。

「あら、追加表記で、魔力を込める事によって回転力を高める事ができるそうですわ」

「ほほー、どれどれ」

魔力オン、手首へゴー。

キシユイイーーン!

「ますますキモい! だが面白いなこれ!」

足元にあつた雑誌、週間ジャンプに指を当てて……

キシユイイーイー!

「わはは! おもしろー、穴が——開い……たッ!」

やらかした!

俺が何かを「開け」たら、そこはダンジョンへ繋がる!

ヒュゴオオーツ!

慌てて指を引っこ抜いた瞬間、暴風が起きて穴に引っ張られた!

キュポン

俺の指が再び雑誌の穴に吸い込まれて納まった。

「どうしよう……めっちゃ吸い付かれてる」

「いきなり突風が吹き荒れたのですわ!」

部屋の中が滅茶苦茶だ。

本やら布団やら、神様やらが散乱してしまった。

「なんじゃなんじゃ。何が起きたのじゃー」

俺の布団の上で二度寝をしていたスクルドが起き出す。

「マサトさんが真空ダンジョンを開けちゃった、ですつて!」

「何と。はた迷惑なダンジョンを作ったものよのー」

ハーちゃんが畳から起き上がり、顔面スライディングを決めて赤くなった鼻を撫でながら言った。

「作りたくて作ったわけじゃないんだが。とりあえず指を迂闊に抜けない」

「なんじゃー、そんなモン。別のダンジョンに捨ててまえばよからうもん」

「……それもそうだな」

どこでも扉でダンジョンを開いて……

ポイツ!

ヒュゴオオオ!

バタン。

吸い込まれる空気の勢いで扉が閉まり一件落着した。

「ふう、助かった」

「はっ!? しまったのじゃ。これも探索の手伝いをしてしまった事になるんかいの」

神様は招待される立場なので、俺達のダンジョン探索を手伝ってはいけないルールらしい。

「えー、こーゆーのくらい、いいんじゃないの?」

「念の為、代金としてお菓子を所望するのじゃー。貸しだけに菓子なのじゃ」

ぐぬぬ

そう言われては断れまい。

「またサクサクしたヤツが食べたいのじゃ」

「スクルドの正体はお菓子を消滅させる、限定的破壊神に違いない」

「マー君は失礼じやのー。こうなったらマー君の耳を食ってやるのじゃ」

「北欧の。ワタシは右耳をもらう」

スクルドとデスノ。

神様2柱に両耳をはむはむされる。

「やめっ！ くすぐつたい。デスノも舐めるな、舐めるな！」

今の俺は犬耳。

耳が弱点なのだ。

「くっ！ そつちがその気なら、新しくゲットしたこの籠手で耳かきのお礼をしちやうぜ」

キュイイイーン！

「ぴぎやー！ マー君に耳を犯されるのじやー！」

スクルドはキャツキャと喜びながら布団にくるまって逃げるフリ。

デスノは目を潤ませながら俺の膝に飛び込んで来る。

「マサト。先に耳からだなんて意外とヘンタイ」

「ええーい、話が進まん！ ファルフナーズ、次だ、次！」

「えっ？ あつ、はい」

お姫様はさっきの真空で散らばった部屋を片付けていた。

マメだなあ。



ステータス・ウインドウを操作しながら

「家具の隙間のホコリも掃除できたのですわ」

と、つぶやいていた。

ポジティブ思考プリンセスだな。

「ええと、最後の装備効果が【防護膜】飛来・射出・放出型の攻撃を緩和する盾状の力場を作る。10秒で魔力を1消費する。だそうですわ」

「マジか。凄い直球でまともな効果だ!」

手の平を前に突き出して魔力を込める!

シユパンツ!

ほぼ透明なレンズみたいな何かが確かに出た。

「こりゃいいや。視界も遮らないし。多機能の名に相応しい」

『強力なライバルの出現に我の立場も揺らぎつつあるのである』

そんな大げさな。

金属バットさんは心配性。

∴

「霸王の籠手の装備効果は以上ですわ」

「ありがとう。いや、これは良いものだ」

「次の景品が楽しみなのですわ」

「これだけ最高レアを引き当てればもう十分だろー」

「えー、なのですわ」

お姫様は口を尖らせながらパントマイムでウインドウを脇へ。

「まあ、マサト様！ 今度は限定ガチャだそうですわ！」

「ほーん……」

ちっ

限定という言葉に人間は弱い。

実に弱い。

非常に弱い。

案の定、ファルフナーズの目がららんと輝き始める。

あの手この手でガチャさせようとしてくるな、このステータスの中の人。  
人が居るのか居ないのか知らんが。

「賞品入れ替えまであと3日、だそうですわ！ 今すぐ回しましょう！」

「いやいやいや。勘弁してくれ！」

聞いても無いのに、ガチャの項目を読み上げ始めやがった。

何が何でも阻止せねば!

「今回はランダム部位ガチャだそうですわ」

「へー」

気の無い返事で軽くスルー。

寝つ転がつて無視無視。

「そしてスーパー・レアの品が……状態異常に強力な耐性が付く珊瑚サンゴの首輪、だそうですわ!」

「ふーん」

全力スルー!

鼻をホジホジ。

「様々な状態異常を軽減してくれるのだそうで……ええと、毒、睡眠、麻痺、石化、魅了、死の光線、変身、獣化——」

ピクッ

このライカンスロープ病も治るのか。

いや、ダメだ。

それにどうせ、死に戻りすれば犬耳も解除されるに違いない。

「——そして継続ドレインに耐性」

「ツ!？」

ドレインだつて!？

ガバツ

起き上がつてソロモンの悪魔ハゲンテイことハーちゃんを凝視する。

あの人間の限界ギリギリを極めた超巨乳。

目の前にあるのに触ることすら叶わぬのは、ひとえに——

ハーちゃんが自動で毛根をドレインしてくる悪魔だからだ。

だがドレイン耐性が付けば……!!

俺の熱視線に恥らうハーちゃんが身をよじる。

たゆんたゆん……

誘っている。誘われている。

酸っぱいブドウが今……

完熟!

「ファルフナーズ」

「は、はいっ!?!」

「ゴード! 俺は毛根を賭けるツ!」

「……マサト様からとてつもない邪気を感じるのですわ」

呆れ顔のスクルドがため息を漏らす。

「神々もびつくりの手のひら返しなのじゃー」

「その為の【手首回転】機能だ!」

キュイイーン!

手の平返し放題。

## #69 「賭けましよう！ 私の毛根を！」

「よし、限定ガチャだ！」

「マサト様の覚悟、しかと受け止めましたわ！」

ファルフナーズの目がらんと輝く。

水を得た魚のようだ。

ガチャを得たお姫様。

「はーあああッ、ですわーっ！」

良く分からない気合を込めてタメを作っている。

それで何か変わるものかね。

だがこの際、気合でもジンクスでも神頼みでもいい。

毛根への被害が最小限で済むのならね。

チラッと横目で部屋の住人、いや、住神魔達を振り返る。

うん、ダメだな。

神頼みは。

絶対アテにならない。

「今、マー君が大変無礼な事を考えたのじゃ」

スクルドが何かを悟った。

くっ、見た目は銀髪10歳児のくせに鋭いな。

「とぉーっ！ ですわっ！」

ファルフナーズが指を前に突き出した。

俺の頬を掠めて尻尾がピンと逆立つ。

突き出す方向にもう少し気をつけてくれ！

ドゥルルルルル……

「あれ？ ドラム・リールが2つ出たぞ」

「1度に2つ賞品が出るのでございましょうか？  
んな馬鹿な。」

デアドン！

1つ目のドラム・リールが先に停止する。

『姫巫女』

「えっ？」

「えっ？」

ファルフナーズが賞品なのか？

新しい姫巫女でも出現するのかも知れない。

「デアドン！」

『コモン』

「きゃあっ！」

ドラム・リールの2つ目が停止すると同時にファルフナーズが悲鳴をあげた。

「どうした！」

「ひ、額にチクチクとした痛みが……」

「見せてみる。ライカンスロープ病でも悪化——」

ぶふっ！

こ、こらえろ。

笑ったら終わりだ。

「マサト様……？ 傷口は酷いでしょうか……？」



「い、いや。深刻なような、そうでもないような」

フアルフナーズが怪訝げげんそうな表情で腰元のアイテム・バッグから手鏡を取り出した。

見てしまった。

己の身に降りかかった災厄を。

ガチャの代償として捧げられ、完全に失われた――

左の眉を。

「マ、マサト様。わたくし……私の左眉が……？」

プルプルと震えながら俺の方へゆっくり振り向く。

目線が泳いでぐるぐる目みたいになっている。

パタッ

糸の切れた操り人形みたいに、お姫様が気を失った。

……

…

「気が付いたか、ファルフナーズ」

ベッドの上で目を覚ますお姫様の顔を覗きこむ。

眠り姫ならぬ気絶姫。

「あ……悪い夢を見ておりましたわ。私の左肩が……」

「残念だが、それは——」

俺の隣にいたシャフリンが元気良く手鏡を突き出す。

「大丈夫よファルフナーズ！ あたくしが綺麗に引いておいたわ！」

「や、やはり現実だったのですね」

ファルフナーズが肩を落とす。

これは深刻なダメージだな。

シャフリンの化粧スキルが高かったおかげで、完璧に綺麗な眉が描かれているが。

「地球には良いメイク道具がいっぱいあるから心配すんな」

慰めになるような、ならないような言葉を投げ掛けておく。

「マサト様は毎回、これだけ辛い思いをされていたのですね」

「あ、ああ。だが、流星に今回ののはヘビー過ぎるな。限定は惜しいが、ここまでに——」

「いいえっ！ なればこそ、ですわ！」

「えっ!？」

あれえ？

ここでガチャの恐ろしさを知って、もう控えようねって流れに持っていきたいのに。ヤバい感じにスイッチが入ってしまったようだぞ。

「マサト様が覚悟されているのに、私だけ甘えている訳には参りませんわ！」

「えっ、いや、別にそこまでの事じゃあ……」

元はスケベ心から決めたガチャだし。

「ゴーなのですわ！ 賭けましょう！ 私の毛根を！」

「ええええ……」

そりや状態異常耐性のアイテムはダンジョン探索にとっても役立つだろうけども。

眉毛落としてまで欲しいものじゃあ無いぞ。

「いやあ、やはり毛根は一生ものだよ？ 特に女性にとっては」

「お気遣いは無用なのでございますわ！ スーパー・レアを引き当てるまで回す覚悟ですわ！」

わー

出るまで回す理論、出ちやつたよ。

沼る、ってヤツだぞこれ。

「眉は化粧で何とでもなるのですわー！」

化粧もそこまで万能じゃないぞ。

マスカラやブローペンは眉毛を濃く塗るものであつて、地肌を塗るものではない。

完全に無くなった眉の跡地にかくのは、やはり少々違和感が出る。

……むしろ子供っぽさが抜けて、美人度が増した気もするが。

シャフリんの化粧術が凄すぎるだけだ、と思ひ込みたい。

プリンセス・パワーメイクアップ

祈ろう。

トリピュロン王国が月面にありませんように。

「いきますわー！ とおおうっ！」

「マジかー！」

ドラム・リールが2つ出る。

デアドン！

『ダンジョン・オープナー』

俺だ！ くそっ！

ここでスーパァ・レアを出してくれ！

デデドン！

『コモン』

「あぁーっ！ 脇が脇がーっ！」

右脇が燃えるように熱い！

寝巻き代わりのトレーナーをまくって脇を確認！

「腋毛が……消えた」

「まあ、ご愁傷様なのでございますわ。どうか気を落とさずに」

「これで一生腋毛を見れなく……いや、考えたら別に腋毛なんて無くていいな」

実質ノーダメージだ。

助かった。

足元に小瓶が転がり落ちた。

「そういえば、さつきも小瓶だったな」

「魔法の回復薬ですわ」

「……」

「……どうかされてます？ マサト様」

「これで犬耳病、治るかなって」

「あっ！」

「よし、丁度一本ずつある。飲んでみよう」

「かしこまりましたわ！」

キュポン

「あっ」

「あっ」

植物つぼいトゲ付きの茎がニユルニユル

やらかした……

「トリフィド、20レベルですわ。ご愁傷様なのですわ……」

「くうつ、バタバタしてたせいで、すっかり気を抜いていたぜ。同じミスを2度してしま  
うとは」

「マサト様、こちらを……どうぞですわ」

ファルフナーズが自分の分をそつと差し出してくれる。

「いや、いいよ。ファルフナーズが飲みな。どうせまた出るだろうし、死に戻りすればいいでに治るだろうし」

「マサト様には少しでも良い状態で居て頂かないとですわ。こう見えても、私はマサト様のメイドなのですから」

ファルフナーズ……

「そ、それに将来を、その……」

そ、その件はまだみんなには内緒だ！

誤魔化すために大げさに小瓶を受け取る。

「ありがとう！ ファルフナーズの気持ち受け取ったぜ！」

一気に回復薬を飲み干す。

今回のはリポビタミンDみたいな味だな。

炭酸無いけど。

耳がムズムズして、元の位置の元の耳に戻っていく。

ピュツと尻尾が引つ込む感覚はちよつと忘れられないな。

「どうだ？ 完全に元通りになったかな？」

「はい。元通りの凛々しいお姿に」

相変わらずこのお姫様の美的センスはダメだ。

どうも同情やお世辞ではなく、本当にそう思っているフシがある。

…

「さあ、3度目の正直、ですわ！」

「何でも良いけど、日本の慣用句とか良く知ってるな」

「気にはいいけませんわ！ とおおおーうッ！」

ドウルルルル……デデドンドン！

『姫巫女』『コモン』

「ぎゃあっ！」

「大丈夫かっ!？」

ファルフナーズが顔を押しさえてうずくまる。

「今度は右の眉でしたわ」

「お、おう」

スチャッ！

シャフリんがドヤ顔で立ち上がった。

両の指いっぱい無数の化粧道具を挟んで手をクロスさせている。

デキるオンナ風だ。



可愛い唇から八重歯がコンニチワしてなければね。

「ファル姉様！ あたくしに任せて頂戴」

「せっかくだけどシャフリーン、私自身でやっても良いかしら？」

今後のためだから、とシャフリーンを説き伏せた。

シヨンポリ顔で納得するシャフリーン。

甘えたがりの性格で、眉を描くファルフナーズにまわりついている。

「うふふつ、シャフリーン。手元が狂うからそんなに揺らしちゃダメですわ」

——ズバツ

「あつ」

「あつ」

太目のブローペンシルがファルフナーズの右眉を横に、一閃。

こ、これは……堪えきれない！

「わはは！ 超目力！ 右眉が！ 右眉だけで怒ってるぜ！ わははは！」

「もっ、もーっ！ マサト様ってば！ ひどいですわ！ ひどいですわ！」  
右目だけ超怒ってる。

左目は普通なのに。

しかもごん太眉で。

「笑うのでしたら、せめて最初の時に笑ってくださいまし！」

「わはははっ！ 怒るな怒るな……右目だけで。ぶふーっ！」

右目と眉で俺を笑い死にさせるプリンセス。

ビーム出そう。

## #70 「回せ! コマネズミのように!」

「よし、気を取り直して4回目ですわ!」

「まだ心折れないのかー」

「まだ、まだ終わらないのですわ。たかがメイン眉を持つていかれただけなのですわ」  
「エゴだよそれは」

良く分からない方向に燃えているお姫様だ。

綺麗に描き直した両眉が意志の強さを物語っている。

ちよつと吊り気味の眉に憧れていたのかな。

普段のゆるふわお姫様眉のほうが良いと思うんだがなー

「ま、一押し二金とも言おうしな。条件はイーブンだ。やるなら俺は止めないぜ」  
「流石はマサト様ですわ! 二度ある事は三度あるのですわ! とおおう!」

それはダメな方の諺じゃないかな。

ドラム・リールが出現し運命が回り始める。

ドウルルル……デアドンドン!

『ダンジョン・オープナー』『アンコモン』

くっ、俺か！

左足にプチプチと痒かゆい様な刺激！

「やられた！ 左足（の毛根）を持っていかれた！」

「足（の毛）なんて飾りですわ！」

偉い人が言うんだから間違いないね。

足元に転がってくるキレニウムと言う強化素材。

ジーパンの裾をまくってスネを確認する。

うーん……つるつる！

「これでマサト様もタイツを履くのに相応しい足になったのですわ」

「左足だけな……いや、履かんけど」

「えー、なのですわ。スネ毛を処理したら履いてくださるとおっしゃってましたのに」

「うん？ 言っていないよね？」

「では右足の毛も無くなれば観念するに違いないのですわ」

「朝三暮四だな。つてか、どんだけ俺にタイツ履かせたいんだよ」

「四の五の言っても無駄なのですわ！ とおおう！」

「うわっ、唐突に回すな!」

テンションがおかしくなっているな、このお姫様。  
腹を括った王族は恐ろしい。

ドウルルル……デドンドン!

『姫巫女』『アンコモン』

よしっ、セイフテイ!

「いやああんっ!」

ファルフナーズがなぜか黄色い悲鳴をあげる。

悲鳴姫。

どうした、と聞くまでも無い。

左脇押さえてるし。

「腋毛を持っていかれたかー」

「ひ、姫巫女には腋毛なんて生えないのですわ」

おや? 西洋人は腋毛を気にしないと聞いていたが。

異世界西洋人はそうでもないのだろうか。

「まあ、きわどい衣装着るしな」

「何の事をおっしゃっているのか、さっぱりなのデスワ」

「毛根が無くなる辛さが五臓六腑に染み渡るだろう」

「ですが、ここで退く訳には参りません！」

ぐぬぬ…やはり頭髮が逝かないとダメか。

足元に転がってきた強化素材、キレニウムを拾いながら考えた。

また金属バットさんが強化されまくるな。

「六……六と七の諺が無いのですわ」

「ですよねー」

気にしないで回そう。

ロクでもない、このガチャを。

名も無き毛根を捧げて。

「七難八苦を乗り越えて、必ずやスーパー・レアを獲得してみせる所存ですわ！」

「頑張りどころの方向音痴め……」

だが受けて立つしかない。

俺にとってはリスク2分の1状態。

しかも頭髮以外の毛根ならダメージも少ない。

ここでファルフナーズのカチャ欲を存分に満たすしか無いぜ。

辛い事を分かち合つてこそ、ふう……いや、何でもない。

「ファルフナーズ、回せッ! コマネズミのようにッ!」

「かしこまりましたわー! くるりんっ、とおおおう!」

照れ隠しの勢いで回させてしまった。

お姫様がその場でスカートを広げて一回転しつつ指を突き出す。

メゲてる様子が微塵も無い。

頼もしいやら怖いやら。

ドウルルルル……デデドンドン!

『姫巫女』『アンコモン』

ナムサン、ナムサン。

「ひゃあああ!」

「余りはしたくない声をあげるなよー」

心のこもつてない声で注意する。

右脇も逝つたようだ……

「こ、これで釣り合いが取れたというもの! ですわ」

「メンタルだけは王侯貴族の名に恥じないな」

願望達成のためには困難も何のその。

ガチャを回す事自体が願望だから達成も何も無いか。

しかし――

これは実質ボーナスステージだ。

なぜなら、ここまでお互いに頭髪が持っていない。

「よし、確信した」

「何をでございますか？」

「この部位ランダムガチャは頭髪が含まれてないか、極端に低いかのどちらかだ」

「まあ……」

「十中八九そうだ。その代わりなのか、部位丸ごと持っていないか」

「そう言えば……確かに」

おっと、十まで含んでしまったな。

「確か人間の片眉は700本くらいだ。これまで1回300本の頭髪比べて代償が大き

いだろう」

「なるほどでございますわ」

しかしさっきの光景を思い出したが……

眉を引く時って何で鼻の下を伸ばすんだろうな。



お姫様がいかに美少女だろうと、少々面白い表情になつていたぞ。言つたら根に持たれそうだから黙つておこう……

「そうと分かれば遠慮は無用なのですわ!」

「しまった。そう来たか!」

迂闊な発言だった事を後悔してしまふ。

そう、女性にとつて大事な毛根は頭髮と眉。

眉は既に落ちたファルフナーズにとつて、もはや失うモノが無い状態だ。

まつ毛とか鼻毛も逝くのかな……

流石に日常生活に支障が出過ぎるので、そこは無い気もするが。

「つまり、今の私とマサト様は無敵なのですわね!」

「え、いや、それはファルフナーズだけの話で……」

「とおおおおう!」

「人の話を聞け!」

ドウルルルル……デデドンドン!

『姫巫女』『レア』

「それ見た事か」

「ひやいいいんっ！」

体をすぼめて右足を押さえるお姫様。

「これでファルフナーズもタイツからすね毛がコンニチワしなくなったわけだな」

「元からそんなに濃く生えていないのですわ！」

本当かな？

実はこっさり処理してるんじゃないかなー

ゴッ

「いてっ」

「マサト様の頭に大きな金の鍵が……ですわ」

「どんな効果の鍵だ？ マスターキーか？」

「ええと、はい。【スケルトン・キー】という名称で、所持していると【どこでも扉】の機能と性能を強化拡張する、とありますわ」

「なんで金で出来てるのにスケルトンなんだろう？」

「説明が少々長くなりますが、よろしいですか？」

「あ、いえ。長いならいいです」

「左様でございますか」

実際に使う鍵じゃなくて、ただの強化アイテムだし。

「で、どう強化・拡張されるんだ?」

「はい。以下の行為がマサト様自身にしかできません。扉の設置、扉自体の移動や拡張縮小。そして扉の開け方が引き戸・押し戸・上下左右スライドが任意にできるようになる、のだそうですわ」

「ふーん……風の精霊王の時みたいなミスは防ぎやすくなるけど、地味だなあ。【魔扉】の魔法で十分な気がするぜ」

「そうですわね……」

「第一、設置なんて誰でも……ははあ、分かったぞ。ファルフナーズ、どこでも扉を一つ出してくれ」

「かしこまりましたわ。ただ今」

受け取ったどこでも扉を空中で水平に倒して……

「ここに設置」

宣言して、どこでも扉から手を離す!

「この通りだ!」

「まあ、どこでも扉が空中に浮いているのですわ!」

「扉の強度次第だが、足場にもなるし物も置けるって訳だな」

「これでバグベアーや狼との戦闘のように、挟撃を防ぐ事もできるわけですね」

「そこまでは思いつかなかったが、確かにそうだな。扉が破壊されるまで時間を稼ぐ事ができる」

「とても心強いアイテムなのですわ」

地味な割りに使えそうな気はしてきたな。

レアなだけはあったか。

「せいぜい有効に使わせてもらおう。何せファルフナーズの眉と腋毛で作られた鍵だ」  
「そつ、その鍵が私の毛で編まれている訳ではないのですわ！」

「ははは」

笑いながら鍵をこしょこしょ

「もーっ！ マサト様ってば！ 鍵をくすぐっても私は何ともないのですわってば」  
「ははは。万が一、と思つてのイタズラだ。許せ許せ」

「天罰で次の部位ガチャはきつとマサト様が対象になるのですわー」

「お、おい。まだやるのか!?!」

「もちろんなのですわ。スーパー・レアを手にするまで、くじける事はありませんわ！」

「最高レアなんてそうそう出るもんじゃないんだがなあ」

今度はどこの毛を持っていかれる事やら。

リスク低めのお姫様は気楽なもんだ。

まあ俺もだが。

ん、何か引つかかるな……何だろう。

一瞬だけ嫌な予感が脳裏をかすめた。

その予感をかき消すファルフナーズの気合の入った声。

「参りますわ! とおとおおう!」

「やれやれ、禿げる前に白髪になってしまいそうだぜ」

「白髪は九十九髪つくもがみとも言うのだそうですわ」

「無駄な知識があるな。そんなマイナーな日本語までインプットされてるとは」

禿げるのと白髪になるの、どちらが早いかな……

ドラム・リールの回転を眺めながらそう思った。

# #特別編 「決戦！ 銀世界のトナカイ・レインジャーズ

！」

「よし！ クリスマス仕様ダンジョンへ行くぜ！」

「はて、クリスマスと言うのは何でございましょう？」

「おや？」

「お姫様はクリスマスをご存知無い？」

「キリストという聖人の誕生を祝う行事なんだが、トリピュロン王国には無いのかー」  
「日本の固有の聖人なのですね」

「日本の聖人じゃないんだが。」

「来た事があるとしても、せいぜい青森くらいじゃないかな？」

「ケーキ食べたり、プレゼントを贈ったりする楽しいイベントだぞ」

「ケーキ！ こっちの世界にもケーキがあるのね！ にーに！ あたくしも食べたいわ  
！」

「ファルフナーズの妹姫、シャフリンが飛び上がって反応して俺に抱き付いてきた。」

「もちろんだ。だが、少し懐が寂しくてな。ダンジョンで稼いでからな」

「分かったわ! あたくしが全力でサポートするわ!」

……

…

どこでも扉を据えつけて……ガチャツ

「おあー、雪国だ」

「一面の銀世界だわ!」

「……」

「……」

「なぜシャフリん?」

「なによー?」

「いや、ダンジョンはファルフナーズとペアで……」

「クリスマスだから気にしないのよ!」

「いやいや、シャフリんと潜れるようになるのは、まだ先の話で」

「メタな台詞はダメよ!」

シャフリんが俺の背中を勢い良くはたく。

メメタア

「仕方無いな……まあお祭りみたいなもんだし、今回はいつか」

「ケーキのために全力でサポートするのだわ！」

「サポートって何ができるの？」

「……お、応援とか？」

「チェンジで」

「仕方無いじゃない！ まだ作者が決めてないんだから！」

メタな台詞はダメなんじゃなかったっけ。

ただ無敵なだけの12歳児を引き連れてダンジョンかー

変な敵が出てこないといいなあ。

「やはり雪はいいもんじゃのー このくらいが快適つてもんじやてー」

「あれ、スクルド。お前もダンジョンに落ちやあダメじゃないか」

「いいのじゃ。個人的な恨みがあるからのー」

「恨み？」

「ワシらはこやつらキリスト勢に駆逐されて地球を追い出されたようなもんじやか  
らー」

「あー…俺の知らない過去の怨恨を持ち込まないように」

「わかっておる。アストラルの仮想ダンジョンでくらい、憂さを晴らしたいってだけ



「じゃー」

「まあヤブヘビにならないよう、それ以上は突っ込まないでおこう」

雑談じみた事を話しながら雪原を踏み進めていく。

あたりは夜だが、満月と星明りでもとても明るい。

「雪がわずかな明かりも乱反射するからの。晴れてれば夜でも案外明るいんじゃない」

「へー……あれ? シャフリん?」

静かだと思つて後ろを振り返ると……

シャフリんの手だけが!

雪に沈んで埋もれてるー!?

「大丈夫か!」

慌ててシャフリんの腕を掴んでゴボウ抜き。

スポン

「ぴゃーっ! た、助かったわ、にーに!」

「新雪は侮れないな。子供くらいすぐに埋もれてしまう」

かく言う俺も膝上まで埋もれてる。

濡れた足が凍えそうだな。

「こんな時の浮遊靴だ。シャフリんはおぶっていこう」

「にーに大好き！」

「敵が来たら雪に放り投げるけどね」

「にーにのバカー」

分かり易いな。

「でも背負ってたら手が使えないし」

「根性でしがみつくわ！」

流石シャフリん。

割と何でも根性で済ますタイプだな。

ヒュンツ！

凄まじい一陣の風が俺達の側を通り抜けた。

だが俺には見えた！

あれは風じゃない！ 敵だ！

「マー君、トナカイのモンスターじゃ！」

「おいでなすった！」

気が付いた時には囲まれていた。

トナカイ達に。

「8匹いる。なんて動きの早いモンスターだ」

「レインジャー・レインディアーよ! レベルは30!」

シャフリんが俺の首につかまりがら叫んだ。

耳がキンキンするので、もう少し小声でお願いします。

って言うか、向こうにもいるモンスターなのか。

「赤く光る鼻を持つトナカイで8匹一チームで行動する、森の狩人よ!」

「ふ、ふーん……」

『ククク、ここから先は通さないぜ。俺はダツシャー!』

「こいつらしゃべったぞ!」

トナカイ達は次々と名乗ってきた。

聞いてないのに。

残りはダンサー・プランサー・ヴィクセン・ドンナー・プリッツェン・キューピッド・

コメット、だそうだ。

「シャフリん、戦い辛いから降りて降りて」

「雪が冷たいから嫌よ！」

シャフリんは長く細い足で、器用にも俺の腹をホールドしてきた。

やりづらくてたまらないな。

『おのれダンジョン・オープナー、子供を盾にするとは！』

「背中にいるのに盾も何も。そもそも姫巫女の姿が見えるとは」

『そこらの邪悪なモンスターと一緒にしてくれるなよ？ これでも神の眷属だ』

「また変なのを引き当てたのか……」

「またとは何じゃ、またとは」

スクルド様がお怒りだ。

「我が神スクルド様が怒り心頭。ぶんぶん丸だぞー 邪教のシモベたちよー」

「マー君に対して言っただんじやがのー 余計な軋轢を生むものではないぞえー」

あつ、そうだった。

「悪い悪い。じゃあそつちはそつちでヨロシクやってくれ。こつちはこつちで……」

『今更はいそうですかと退けるものか！ やれ！ ドンナー！ コメット！』

ヒュンッ！

「は、早いッ！」

あつという間に背後を取られた。

振り向く間もなく攻撃を――

「きゃー! にーにー! 助けて!」

「お、おいよせ! シャフリんに手を出すのは反則だろツ!」

2匹のトナカイが2足で立ち上がって――どこかで見た光景だな――前足でシャフリンを俺から引き剥がそうとしている。

『ふんっ! ハナから貴様なんぞ相手にしておらぬわ! 我らの目的はその姫巫女のみよ!』

バランスを崩したシャフリんの両手をそれぞれ引つ張るトナカイのモンスター、ドンナーとコメット。

体を反転させ、シャフリんの足を掴んで引き寄せる俺。

謎の綱引きバトル状態だ。

「くっ! 離せゲテモノのトナカイめっ!」

『貴様こそ離せ! ロリコン・ヒキニート!』

ろろっ、ロリコンちやうわ!

「にーにー! 何だかえっちだわ!」

“!?”

……確かに、気が付けば。

背中にしがみついていたシャフリンを、振り返って足を引つ張っている状態だ。

トナカイに渡すまいとシャフリンの大きく開かれた足を引つ張って……

股間が……いや、体が密着しているこのポーズはちよつとエロい。

「楽しんでいる場合かーッ！」

意識させるな！

このままでは本当にロリコンになってしまう！

「スクールド！ 援護を！」

「こつちも手一杯じゃー」

見るとスクールドも他のトナカイと肉弾戦を繰り広げている。

直接ゴッド・パワーを使わないのは、やはり本気で戦うと軋轢とやらが生まれてしま

うからだろうな。

見た目通り、きつとプロレス的なルールありきドラマ優先の戦いなんだろう。

チヨップとかジャンプキックで戦い合ってるし。

まあ押さえ込んでくれるだけでも有り難いというもの。

「にーに……ちよつと、流石に痛くなってきたのだわ……」

「くつ、もう少しだから我慢して——」

また台詞が何かエロい……じゃない。

仕方無い。

手を離そう。

手と足を力の限り引つ張られるなんて拷問だからな。

シヤフリんは姫巫女だから無敵だけど。

それでも痛くなってきたっていうのだから、今かかっている力は並みの人間なら体が千切れてもおかしくない程のはずだ。

手を離れた途端、2匹のトナカイの力で10m以上もすっ飛んでいき2匹と1人は雪の中に転がった。

『そこまでだッ! 双方、手を止めよ!』

新たなるトナカイがそこに立っていた。

光って輝いている。

——赤く。

鼻が燃えるように光っているトナカイが2本足で立って腕、もとい前足を組んでい  
る。

ガйна立ちってヤツだ……

8匹のトナカイ達はその場で伏せた。

と言ってもトナカイなので座っているようにしか見えないが。

『ルツ、ルドルフ様!』

「……わけがわからないよ?」

『私の名は〃赤鼻の〃ルドルフ。ダンジョン・オープナーよ、貴様の行い、しかと見せてもらったぞ』

「何で上から目線なの?」

8匹のトナカイが口々に申し立てる。

『ルドルフ様! 我々はいたいけな子供を邪悪なダンジョン・オープナーの手から救い出そうと……』

「滅茶苦茶言つてやがる。シャフリンは俺の仲間だぞ」

「むしろ義妹よ!」

ああ……そういうえば、危惧していた事は本当になってしまったなあ。

シャフリんはこのままいけば、俺の義妹になるのだ。

しみじみ。

『ルドルフ様! 正義は我らにこそ在り! 姫巫女は我々が保護するべきです!』

『ええいッ! 黙れッ! この私には一目瞭然ッ! 姫巫女はダンジョン・オープナー



のものだ!』

ものとか言うな、失礼な。

そもそも最初から一緒に行動してたんだし。

『なぜですルドルフ様! 姫巫女を勝ち取ったのは我々ですぞ!』

『愚か者どもめ……なればこそ、だ!』

あ、もう分かった。

『姫巫女が痛みを訴えた時、ダンジョン・オープナーは即座に手を離れた。これこそ家族の情愛!』

『そ、そんな……ルドルフ様』

『我らトナカイは子供の味方。子供の痛みを無視して己が功を誇るなど、トナカイの風上にも置けぬ! 去れいッ!』

『へ、へへーッ!』

8匹のトナカイは方々に逃げ散っていった。

『これでトナカイ裁き。これにて一件落着ッ!』

「するか!」

金属バットさんでパッカーン!

『痛い……せつかく綺麗にまとめたのに』

「うっせー、クリスマスだクリスマス！ 時代劇やりに来たんじゃねえぞ！」

脇腹を金属バットさんでド突かれたルドルフと名乗った赤鼻のトナカイが謝罪した。

『許せダンジョン・オープナー。我らトナカイは子供を守りたいという本能が働いてしまふのだ』

「どう見ても拉致しようとしてたよね」

『すまぬ……近頃の子供は夢が無くて……久々のえも——良き子供の来訪に浮かれていたのだ』

「今、獲物って言いかけたよね？」

『この先にボス部屋がある。これは褒賞として受け取ってくれ』

ブチイッ！

赤い鼻が差し出された。

「それ、取れるんだ!？」

『ランク・ベリーレア相当のアイテムです。持っているると防寒保温、永久光源、冷氣・氷耐性が獲得できます』

また営業口調だ！

「凄いわにーに！ トナカイをやっつけたわ！」

「やっつけたのかな……？ 勝手に芝居打ってただけのような」

逃げ去ったトナカイ達の後には金貨がそれぞれ落ちていた。

計9枚、赤鼻の光に反射して見つけられた。

「よし、なかなか美味しいな。じゃあボス部屋へ向かうか」

「ケーキまで、あと少しよ!」

再びシャフリンを背負って歩き続ける。

「わあ……にーに、見て! 雪が降ってきたわ!」

「はは、ホワイト・クリスマスだな」

満点の星空なのに、雪が降ってきている。

遠くに見える山から風で運ばれてきたのだろうか。

……いや、そもそも仮想空間みたいなダンジョンだし、そこらへんの理屈は適当なんじゃないだろうか。

まあでもシャフリンが喜んでいるから良いか。

スクールも飛び回って雪と戯れている。

雪やこんこ、神は喜びダンジョン飛び回る。

楽しそうで何よりです。

平原に登りのなだらか丘になってきて、その上に一軒の小さな家が見えてきた。

窓からは明かりが漏れていて、煙突から煙が立ち上っている。

「あれがボス部屋に違いない」

ヒュウウウウウウ！

突風が吹き荒れ、途端に吹雪き始めた。

「にーに、視界が悪くなるわ！ 早く家に入りましょう！」

「同感だ！ いきなりボスが居るかもしれないから気をつけるよ！」

玄関のポーチで体に積もった雪を払い落とす。

「シャフリん、扉を開けてくれ」

「わかったわ！ あたくしに任せて！」

シャフリんが扉を開けると、扉の内側に付けられていたらしいドアベルが大きな音を

立てた。

カラコロコローン

音に釣られて扉の上を見ると、扉の上には看板がかかっていた事に気付く。

「ようこそ、ペンション・シユプールへ」

何でペンションなんだろう？

そう思いながらも、俺達はペンション風ボス部屋へと足を踏み入れていった。

「クローズド・サークルじゃな……」

つぶやいたスクルドの言葉がなぜか俺を不安な気持ちにさせた。